
風車は力強く回転を繰り返し規格外の強風は坂を駆け抜けてゆく

クロードニュースキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風車は力強く回転を繰り返し規格外の強風は坂を駆け抜けてゆく

【Nコード】

N6926W

【作者名】

クロードニユウスキー

【あらすじ】

すり鉢状の地形の中にあるいつも強い風が一方方向に吹く町は、掃き溜めのような場所であった。これは、その町にある学園で繰り広げられ、誰かの納得がいく時まで繰り返される話である。

序章「1

耳の奥で鳴り続ける叫びのような火炎の音、誰かが手を叩いているようなパチパチという音、時折響く何か大きなものが倒れるような音。

明日香がゆつくりと目を開くと、燃えさかる炎が視界いっぱいに広がっていた。

ゆらゆらと揺れながら、全てを焼いたり溶かしたりしている。

樹木が燃えていた。土も燃えていた。坂を炎がのぼっていった。ひどい火事だった。火の海というのは、こういうことをいうのかと思った。

ただ、火炎の中に居るはずなのに、自分自身は熱さをまるで感じなかった。

夢だからかもしれない。でも、夢じゃないかもしれない。夢だという確証がない。

よくわからない紅蓮の世界に身を置きながら、強い風に吹かれていた。

見上げた視界。大きな白い三枚羽の風車は、熱風を浴びて火炎のオレンジに染められながら回転を続けていたが、やがて蠟燭でできているかのようにドロドロに溶け出した。中には倒れていく風車もあった。何かが倒れるような音の多くは、風車が倒れていく音だったようだ。

地獄に落ちたんだろうかと不安になった。

そんなに悪いことをしたわけではない。

せいぜい家出を繰り返したくらいだ。あとは遅刻を少々と、買い食いをしたくらいだ。真面目で正義感もあると自負していて、こんな火炎地獄に落とされるのは納得がいかない。

その時、すぐ近くで風車の根元が溶けて、折れた。

折れた風車の巨大な柱は、まっすぐ明日香の方へと向かってくる。

明日香は近付いてくる塊に恐怖し、目を閉じて腕で防御しようとした。

そこで目が覚めた。

夢だった。悪夢だった。六月の蒸し暑さも手伝って寝汗びっしょりだった。

紅野明日香はカーテンの赤色の影響を受けて赤みがあった朝日を浴びて、自室のベッドで目を開いた後、しばらく天井に視線を向けて固まっていた。

やがて額に手の甲を押し当て、天井に取り付けられた円い照明を見つめながら夢の内容を思い出す。

燃え盛る炎と、倒れてくる柱。夢の中の自分は、きつと下敷きになっただろう。

自分の体の上にあるのが、しわくちやのタオルケット一枚であることに限りない安堵を抱きつつ、ようやく体を動かし、腹筋を使って起き上がり、周囲を見渡すと自分の部屋だった。

自分の部屋とはいっても、女子寮にある一室だが。

もう、この町に来てから一週間ほど経つというのに、まだ一箱しか荷を解いていなくて、残り四つのダンボール箱がガムテープで封印された状態で部屋の中央に詰まれっ放しで、ほとんど何も無い殺風景な部屋だった。

床はフローリングの八畳間ワンルーム。大きな窓がありベランダつき。さらに風呂トイレ付き。家具はベッドと勉強道具が散乱した茶色い勉強机だけ。収納スペースも多くて使いやすく、広々としていた。

部屋だけ見れば環境は悪くないのだが、紅野明日香は、

「いやな夢だわ。これストレスかな。うん、やっぱりストレスだ」などと呟いた。ストレスを抱えている自覚があるらしい。

そして明日香はベッドのすぐ横に置いてある、開いたダンボール

からはみ出たバスタオルとダンボール内にあつた新品の白い下着を手にとると、赤いカーテンの掛けられた大きな窓に背を向けて、歩き出す。

部屋を出て、右側にトイレがあり、左側に風呂場がある。正面に行けばすぐに玄関となる。

明日香が向かったのは、まずはトイレ。バスタオルおよび下着を抱えたまま用を足してから、すぐに向かいにある風呂へ。

バスタオルを金属製の網棚の上に置き、脱衣所で服を全て脱ぎ、風呂場に足を踏み入れ、曇りガラスの戸を閉めた。

シャワーを浴び始める。

なお、脱いだ服は真新しいピンク色のプラスチック籠に投入した。洗濯物はこの籠に入れて寮長に渡すと、洗濯と乾燥をして返してくれるのだが、明日香はまだ一度も洗濯物を渡したことが無かった。いつも裸で過ごしているというわけではなく、ちゃんと服着て生活しているのだ。何故かと言えば、単純な話。遠慮である。この町に来るまでは、明日香の洗濯物は両親が全て洗って干して畳んでくれていたのだが、それは両親だから押し付けても平気だったわけではなく、知らない他人に洗濯物を洗ってもらって、乾かしてもらって、畳んでもらうことに対して抵抗があった。

だが寮長が毎日やっていることなのだから、洗濯物を溜め込むのはより迷惑だと思われる。思われるというのに、明日香はどうも太陽光線を過信しているようで、洗わずとも干しとけば大丈夫などと考えて窓際に洗っていない服を干して満足気な顔をしたりする。季節は梅雨であり、前日も干しっぱなしだったものだから、明日香と同じくらいの年齢の若い女寮長はそろそろ服がカビるんじゃないかと心配していた。

ちなみに、決して明日香が汚い女というわけではない。本質的にはキレイ好きである。ただ洗濯をやったことが無いだけであり、親にまかせっきりのそれをしなかった時にどうなるか、というのが想像できないのだ。要は経験値が足りないのでレベルが上がらないの

である。

と、その時だった。

明日香は誰かに見られているような気がして、風呂の換気扇を見上げた後、背後を振り返る。

誰かにじつと見つめられている気がして、気持ちの悪さを感じて顔をしかめるが、それらしい人物は見当たらなかった。

「この町に来てから、何だか妙な視線を感じるのよね。これもストレスかしら」

呟いて、シャワーを止め、シャワーヘッドを頭上に置く。

何でもかんでもストレスのせいにしたいたい明日香は水滴のついた鏡を見つめて無理矢理笑うと、「よし、学校だ！」

元気良く叫んで拳を突き上げたところ、シャワーヘッドを殴ってしまい、「ふあああつ」と思わず声を漏らすほどに痛かった。

しばらくその場にしゃがみこみ、ぶつけた右手をさすっていたが、やがて痛みが引くと脱衣所へ出てバスタオルで体を拭く。白の下着を上、下の順に装着して、そのままの姿で廊下に出る。寝ていた部屋に戻り、壁際ハンガーに掛けられたセーラー服に手を伸ばした。

風車並木が力強く回転を繰り返す風景が広がる街に来た明日香は、町に入っただけに誰かから監視されている嫌な視線を感じ取った。

つい前日まで居た町でも同様の視線のようなものを感じていたが、町に入った途端にそれまでよりも強く、しつこくなっている気がした。

——どうして私は、こんな所に居るんだろう。普通に暮らしたいだけ。父親がいて、母親がいて、普通の女の子の暮らしがしたいだけ。

——どうして私は監視されているの？

そう思った明日香は視線からひたすら逃げた。逃げても逃げても

嫌な視線はなくなかった。

そして何日か過ぎ、いよいよ転校初日となった日のことである。紅野明日香は、屋上に居た。あるうことか、HR開始のチャイムを無視し、職員室にも行かずに強風ふきすさぶ屋上の給水塔のある一段高い場所に寝転がって、高速に流れる雲を見つめていた。

明日香は憂鬱の極みに居た。透明な巨人の手に驚づかみされているような、圧迫感のある嫌な視線はもとより、自分がこの町で過ごすことに納得がいかなかったからである。

視線から逃れるように坂を駆け上がり、学校に着いた。まずは一番高いところに登りたくて屋上まで駆け上った。更に、上へ登れるハシゴのようなものがあつたので、それに掴まって、給水塔等のある屋根の上に登った。屋上よりも高い場所。

山の上に居るみたいな強い風が、心中のモヤモヤを吹き飛ばしてくれる気がして、それは爽快だった。

明日香は、パタリと仰向けに寝転がって、青い青い空を見た。雲が高速で流れていく。

綺麗だと思った。でも、また誰かから見られている気配がした。

——どうして私は、誰かに追われているんだろう。この高速流動する白い雲たちのように、駆け逃げ続けなくてはならないんじゃないか。一体誰なんだろう。でも、このじつとりとした視線は。この街に来てから、少し視線の質が変わったような気がする。

と、その時だった。紅野明日香は、校内放送で呼び出された。

『本日転入予定の紅野明日香さん。職員室に来てください』

逃げたいと思った。逃げようと思った。

起き上がった。

目の前に、見覚えのある女が居た。それは、前日にこの町へ入っただけに出会った女。町の入り口である裂けた崖のあたりで、『紅野明日香さん』という文字が刻まれた白い立て札を持って手を振っていた女であり、女子寮に案内してくれた寮長であつた。短い髪をした美人さんで、明日香と同じくらいの背丈の女子。名前を伊勢崎

志夏といった。

志夏とは裂けた崖から寮までを並んで歩きながら少しだけ話したのだが、軽く自己紹介を済ませた後に「どこから来たの？」と訊かれて「都会」と返したくらいで、その他の会話といったら寮で暮らす上でのルールが主で、特に「朝ごはんは絶対に寮の食堂で食べないと退寮になる」というのを何回か念押しされた。

明日香は、自分をストーカーしていたのはこの伊勢崎志夏かな、などと思ったけれど、何だか違うような気がした。

志夏は明日香の横に座りながら優しい口調で語りかける。

「紅野明日香さん、呼び出しだよ」

すると明日香は厳しい口調で、

「何よ、わざわざ迎えに来てくれたわけ？」

「まあ、そんなところかしら」

「てか、あんた何者よ。どうして私がここに居るってわかったの？」

「だってほら、私さ、神だし」

嗚呼やつぱりこんな町は最悪だ、と明日香は絶望する。

自らを神と呼称する頭のおかしな人が寮長をやってるような、はきだめの町で暮らすなんて。ここで異常な人たちと一緒に過ごすことになるなんて。

「紅野さん、一つだけ、忘れないで欲しいことがあるんだけど」

「何よ」

「そんな陰しい顔してないで、真面目に聞いてよ」

真面目に聞けるわけがないと思う。だって、そのくらい頭のおかしい言動しているから。

紅野明日香は後頭部を手に乗せて、もう一度仰向けに寝転がり、青い空を眺め出す。まともに取り合っていないと思ったからだ。しかし志夏は構わず続けた。

「私はね、あなたの味方よ。何があってもね。それは絶対だから、どうか、忘れないで欲しい」

「ん？ 何よ、そんなにヤバイ子がいるわけ？ 私があんたを頼ん

なくちゃならないくらいに」

しかし、既にその場に伊勢崎志夏は居なかった。忽然と姿を消していた。

「味方……か」

言葉に出したら何だか恥ずかしくなつて、ほころぶ顔を誤魔化すように強い風の中、三メートル下へと飛び降りた。

明日香は見事に軽い着地を決めて、体を天空に伸ばすストレッチをしてから、言う。

「ふう、行くか、職員室」

職員室で担任教師と合流した明日香は、そのまま教師と一緒にこれから過ごすことになる教室へと向かう。先に教師が教室に入っていて、後から、「紅野さん、入ってきて」という声が引き戸の向こうから響いた。

明日香は頷き、引き戸を開け、室内に足を踏み入れる。戸を開け放ったまま教卓の横へと俯き加減で歩を進める。

教室は、とても静かだった。まるで怯えているように静まり返っている。

「えー、本日転校してきた、紅野明日香さんです。では、自己紹介を」

教師は目配せすると、それに気付いた明日香が小さくお辞儀をして、顔を上げる。

明日香は、男子生徒たちの好奇心な目とか、一部の生徒の怯えた拳動とか、ぱらぱらとある空席とかが気になった。見た感じでは、さほど荒れているようにも思えなかったが、この場に居ない連中がヤバイ奴らなのかもしれない。ここは不良や落ちこぼれが集まる学校なのだから。

とにかく、挨拶する。

「紅野明日香です。よろしくお願いします」

控えめな拍手が響く。

大人しいクラスメイトたちは特に何の質問をすることなく、明日香から視線を逸らしている。

何となく居心地が悪いと感じた。

ふと明日香の目が、教室中央あたりの席に座る伊勢崎志夏の姿をとらえた。

——同じクラスだったのか。

そう思い視線を送ると、志夏はまるで心を読んだかのように頷いてみせる。それで明日香は少し安心した。

教師は窓際の空席二つを指差し、「紅野の席は、あの窓際の好きな方を使うといい」と指示したので、明日香は指示に従い、窓際の席に就く。

窓の外では、大きな風車が回転を続けていて、その向こうには風車並木と呼んでもいい坂と、商店街と、湖があつて、さらに遠く霞んで見えるのは裂けた崖とその隙間から覗く海。

その景色をしばらく眺めているうちに、教師は朝のHRを終えて、「紅野明日香と仲良くするように」と言い残して去っていった。

そこで明日香は立ち上がる。

と、明日香が立ちあがった途端に教室がざわめき、そして静かになる。静まり返った世界に首を傾げながらも、明日香は教室中央の志夏の席へと向かった。

背後から話しかける。

「あの、伊勢崎、さん」

振り返りつつ立ち上がった志夏は、明日香をより安心させるように笑顔を見せながら、

「志夏で良いわよ、紅野さん」

「あ、うん」

「それで、何か用？」

「いや、用ってほどでも無いんだけど、同じクラスだったんだねって」

「そうね、何か困ったことがあったら、何でも相談してちょうだい。私は寮長でもあるけど級長でもあるし、この町のほぼ全てのことを知ってると言っても過言ではないから」

「ええっ？ 級長までやってたの？」

「そうよ。ついでに生徒会長でもあるから、だいたいのことはどうにかできる権力があるわ」

「そうなんだ、すごい」

このとき、明日香は失礼なことを自覚しつつも、自分のことを「神」だなんて称しちゃう人が生徒会長になってるなんて、やっぱりこの町おかしいわ。と思っていた。

この町は、掃き溜めである。都会の学校で普通の枠からはみ出してしまった生徒を更生させるために生まれた学校。言ってしまうえば牢獄みたいなものだ。電車なども走っておらず、町の外に出る公的交通手段としては船と飛行機しか無い上に、この学校に飛ばされてきた学生には何か特別な事情で許可されたり、更生が認められない限り、その船や飛行機に乗る権利が無い。この町に来る生徒なんてのは、だいたいの場合、何かとんでもないことをやらかしている生徒である。言ってしまうえば、不良の更生施設とは名ばかりの、収容施設である。だから、掃き溜め。

いつも強い風が吹いている過酷な環境、すり鉢状の地形の中に町があり、周囲を囲む絶壁の山々は脱走を許さない。

更生が認められれば元の町に帰れるとはいえ、それを誰が決めるんだかも明日香にとっては不明であるし、明日香としてはこんな町で過ごすことに対しては不安しか無かった。

そんな明日香の心を見透かしたように、志夏は言う。

「まあ、この学校はおかしな生徒が多いからね、本当に何かあったら言って欲しいわ」

「うん、ありがとう志夏」

すると志夏は、廊下側の空席をチラ見しつつ、

「特に、風紀委員を名乗る人に注意してね」

そう言つと、微笑を浮かべて明日香に手を振り、「それじゃあね」と教室の外へと歩き出す。どうやら多忙の身らしい。

神を自称するわけのわからなさはあるけれど、頼もしくて優しくてマトモな人が味方になってくれたと感じ、明日香は嬉しかった。

授業中のことである。

紅野明日香は、困っていた。

教師は授業を進めているが、全く何をやっているかチンプンカンブンなのだ。頭が悪いわけではない。教師が渡し忘れたため、教科書が無いのである。

変な目立ち方をしたくない明日香は、教科書が無いことを言い出せない。何とも言えない寂しさを感じた。

——遠くへ行きたいって思ってた。でも、こんなところには、来たくなかった。

目に涙が溜まってしまつて、急いで拭う。両腕でゴシゴシと。と、その時だった。

ガララツと引き戸が開き、背の高い女が入ってきた。身長百七十以上はあるんじゃないだろうか。女子としては高い方だ。

女は息を切らしながら、

「はあ、はあっ、えっと、ギリギリセーフだよな？」

などと男っぽくて不良っぽい口調で近くに居た女子に訊いた。

「いや、まつりさん。もう授業中」

というわけで、まったく間に合つておらず、教師は呆れつつも怯えながら、

「また遅刻か上井草。いい加減にしろ」

「ちい、間に合わずか。あたしの体力無駄になつちまつたじゃねえか」

教師は、「いいからさっさと着席しろ」と言い、上井草と呼ばれた女は、「へいへい」と軽い返事をしながら廊下側の空席のうちの

一つに座ろうとカバンを置く。

遅刻しておいて悪びれる様子もなかったので、明日香は関わりたくないと思底思ったのだが、その時、まつりは明日香の姿に気付く、授業中にも関わらずツカツカと明日香に歩み寄ると、座る明日香の目の前でほの寂しい胸を張り、腕組をしながら、こう言った。

「新しく入ってきた子よね。あたしは、風紀委員の上井草まつり。よろしく！」

いい笑顔だったが、この時、明日香の脳裏には志夏の言葉が再生されていた。

『特に、風紀委員を名乗る人に注意してね』

まさに目の前で偉そうにしている女が、風紀委員を名乗る女だった。

それでも、ナメられてしまったらイジメの対象になるのではないかと危惧した明日香は立ち上がり、

「紅野明日香です」

と勇気を出して堂々と名乗る。

「ほうほう、明日香ね。よろしく！」

差し出された女性としては大きな手を掴む。

そこでようやく教師が、

「こら、上井草。授業中だと何度言えばわかる」

と、若干の怯えを混ぜつつそう言った。

上井草まつりは小さく舌打ちした後、自分の席へと戻っていく。

結局、明日香は教科書が手元に無いことを言い出せなかった。何でも相談してくれと志夏に言われたものの、新しい環境に心を許せず、遠慮しっ放しだったのである。

振り返ると、寮長で級長で生徒会長の伊勢崎志夏が居た。

「あ、おはよう、志夏」

と、まずは挨拶。

「おはよう」

と笑顔と共に返ってくる。

小走りで駆け寄って、横に並んだ短い髪の美人さんは、何となくよそよそしい様子のままゆっくりと歩く明日香に向かって、

「紅野さん、何か心配なこととか不便なこととかない？ 寮のお風呂の浴槽が小さいとか、畳に虫わいたとか」

「え、いいお風呂だし、そもそも畳じゃないし」

「ふふ、実はね、男子寮は古い畳だったんだけどね、去年虫が発生したから昔ながらのイグサとか稲藁の畳じゃなくてね、何とかボードとか合成繊維とか使ったやつに変えたの。あと、お風呂が小さいのも男子寮だけだし、特に男子トイレの共同トイレの汚さといったらもう。女子寮は全体的に立派で、すごくキレイでしょ。毎日私が掃除してるのよ」

「そうなんだ。すごくキレイだけど、生徒会長とかで忙しいのに、すごいね」

「神だから」

また、すぐそれだと半ば呆れ気味の明日香。

「まあ、とにかく寮とかで困ったことは今のところ無いかな。まだ入寮してから一週間も過ぎないからっていうのもあるけど」

すると志夏は、

「女子寮で多い苦情っていうと、あれかしら。ベランダ開けたら貼ってあったポスター全部剥がれたとか、葉っぱが入ってきて掃除が大変だとか」

「いや、そんなこともないけど」

でも、ベランダを開けるのは注意しようと思った。明日香はその時まで運良く風が弱まっている時にしか開けたことは無かったから、そんな事態になっていなかった。もしも三階にある明日香の部屋の

東側のベランダを風が強いときに開けようものなら、あまりの強風に驚いたことだろう。

いかれた卓越風が吹くこの町は、いつも東から吹く風によって毎日が強風だった。今、緩やかな坂を下る明日香と志夏も、強い向かい風に吹かれている。今は風速は四メートルほどだろうか。

基本的に高い場所に行けば行くほど風が強まるので、大きな山を背負った一番の高台にある学校の屋上なんてのは、常時風速二十メートルほどで、手すりなしでは立っているのも大変な風である。うっかり屋上で傘でも広げようものなら、そのまま上昇気流に乗って山の方に飛んで行けそうなくらいの。とはいえ、最も風の強い場所は屋上ではない。二番目に高い場所にある病院でもないし、三番目に高い場所にある図書館でもない。どこかと言えば、裂けた崖である。崖の裂け目は町の東の端にある。

ちょうど明日香が町の真ん中と言っても過言ではない十字路に差し掛かった。引き返せば寮と図書館、真っ直ぐ行けばショッピングセンターと病院、左に行くと湖と呼ばれている事実上の池や件の崖があり、右に向かえば商店街と風車並木の奥に学校がある。

崖の上に顔を出した朝日を浴びながら、明日香と志夏は歩いていく。

「紅野さん。もうここの暮らしには慣れた？」

「いや、やっぱり、まだね、そんな簡単に慣れるもんじゃないわよ」「そうかもね。まあ、慣れたくもないって気持ちもわかるけどね」

明日香は頷きながら、学校へ行くために十字路を右に曲がった。両側に寂れ気味ではあるが、いくつかの商店が並んでいる。その商店街にも何基かの白い風車があるが、商店街の奥には風車が立ち並ぶ草原、通称風車並木があつて、学校はその向こうにある。

と、その時、明日香は困っていることがあつたのを思い出した。

「そういえば志夏」

「何かしら」

「私、教科書まだもらってないんだけど」

しかし志夏は驚くべき言葉を返してきた。

「ああ、そんなのどうだっていいわよ。そのうち授業なんてなくなつて全部自習になるから。授業やるのなんて、転校生が入つて数日くらいのもので、教師が授業態度を軽くチェックして二重丸をつけるだけなんだから。はつきり言つて、居眠りしても×とかつかないから安心していいわよ。欠席さえしなければ更生してなくても更生してるつてことにされるから」

「そ、そんないい加減でいいの？」

「まあ、マトモにやるには教師が足りないしね。仕方ないと思うわよ。紅野さんが真面目に勉強する気があるんなら、図書館に行けば古今東西の教科書くらいはバッチリ揃つて、簡単に借りられるから、行つてみるても良いかもね」

「あのさ、志夏、更生つて、一体何なのかな」

「さあ、それは私に聞かれてもねえ」

「誰が決めてるのよ、『この人は更生した』とか『この人はまだダメ』とか、そういうの」

「さあねえ」

「あと、誰かに監視されている気がするんだけど、この私の心の中を探ろうとするような視線は誰のものなの？ まさか、更生してるかどうか判断するために、本当に監視してるのか、ないわよね」

「さあねえ」

何でも聞いてくれという割には、頼りにならないように感じた。

志夏は遠く風車並木の向こうの学校を見上げ、追い風に吹かれて乱れた髪を耳にかける。

「あ、そうだ。紅野さん、一つだけ言っておくけれどね」

「何よ」

「上井草さんとケンカしちゃダメよ。何があつてもね」

「どうして？」

「元の町に帰りにくくなるからね」

「そうなんだ」

しかし、やるなと言われればやりたくなくなってしまるのが人間というものであるのかもしれない。その日、自習中の教室の中で、紅野明日香は上井草まつりとケンカしてしまった。

元の町に帰れなくなるのが、気に入らないことは気に入らないのだ。それは、出さなくていい勇気だったかもしれないが、とにかく明日香は、上井草まつりを許せなかった。

その日、まつりが何をしたかと言うと、クラスメイトへの嫌がらせである。

同級生にして幼馴染である笠原みどりという少女の髪の毛を突然バサバサと何度もまくり上げ、泣かせていた。まつりは、「モイスト！ モイスト」などという謎の叫び声を上げていて、引つ張られる笠原みどりは、時折髪を引つ張られるのが痛いらしく涙目で、「やめ、やめてよ、まつりちゃん」などと言いなから嫌がっていた。

紅野明日香は、そこそこ正義心の強い女子である。知り合いが犯罪行為をしていたら説得して止めようとするし、イジメられている女子が居ればイジメられる側に大きな非がなければ庇ってみるし、電車でヘッドホンから音楽を漏らしている人を見れば軽くならみつけてみたりして相手の男に「あれこの女子、俺のこと好きなんじゃないか」とか誤解されたり、とにかく髪の毛をバサバサとされている大人しそうな可愛い女の子を見て、明日香の正義心に火がついたようだった。

明日香は窓際の席を立ち上がり、上井草まつりをにらみつけながら歩いたかと思えば、イジメっ子とイジメられっ子の横を通り抜け、廊下を走り出した。

目指したのは、職員室。教師を呼んで何とかしてもらおうと考えたのだ。

明日香は、職員室の引き戸をノックすると、すぐに扉を開け、「失礼します」と言っ、何人居るうちから担任教師を探す。担任

教師は優雅にタバコを吸っていたのだが、そこへツカツカと真新しい上履きで床を叩いて入って行き、担任教師のタバコを持ってない暇してる方の腕、その手首あたりを掴んだ。

「な、何だ、紅野。今は授業中のはずだが」

「教室で事件なんです。先生、ちよつと一緒に来てください」

「何？ よしわかった」

教師はタバコを灰皿に押し付けると、立ち上がって明日香に続いて歩き出した。

職員室を出たところで明日香が走ったので、渡り鳥が二十匹くらい教室に飛び込んできて以来の久々の大事件なのかと思い、教師も走る。

階段を駆け上がり、廊下を走り、教室に辿り着くと、教師にとっては普段と変わらない光景が迎えてくれた。

「モイスト！ モイスト！」

ばさつ、ばさつ。

「いやあ、もうやめてってば、まつりちゃん」

上井草まつりが、肩までの髪がキレイと評判の可愛いクラスメイトをいたぶっている。

教師は、他に何か変わったことが無いのかと肩で息しながら周囲を見渡してみるものの、まつりの周辺以外は至って平和という普段通りの光景。

「紅野、何が、大事件なんだ？」

「え？ 見てわかりませんか？ イジメ現行犯じゃないですか」

教師は、どうしたもんかな、などと思いつながら、

「いいか、紅野。あれはな、イジメじゃない。じゃれあっているだけだ」

「え、でも、あの子、嫌がつてるし」

「そういうコミュニケーションの形もあるってことさ」

「でも、明らかに痛そうですね。泣いてるし」

「モイスト！ モイスト！」 「やめってってばあ……ぐすん」

「いやあ、とてもそうは見えないな」

この風上にも置けない先生は目が腐ってるんじゃないかと思う明日香だが、この町に来て日が浅いし、常識外れのこの町のが理解できないということもあるかもしれないと思う。

その時、上井草まつりが教師に厳しい視線を向けた。めんちをきった、と言い換えた方が良いかもしれない。それで教師は男のくせに情けなくも縮み上がり、「そ、そういえばあ、小テストの採点があつたんだつたあ」などと大嘘を残して逃げるように教室を出て行ってしまった。

呆れるほどに全くの効果なしであつたので、明日香は次の手を模索する。

明日香が振り返り、じつと見つめた視線の先には、生徒会長の伊勢崎志夏が居た。

志夏はやれやれといった様子で頭を抱えた後、明日香の視線に頷きで返して、笠原みどりをイジめる上井草まつりの前に歩み出た。

が、その時だった。上井草まつりは志夏を一瞥すると、転校生の紅野明日香へと歩み寄り、思い切り胸倉を掴み上げると、脅すようにこう言った。

「てめえ、何なんだよさつきからよお。教師呼んできたり、志夏に視線送ったりして、あたしが何か悪いことしてるとでも言いたげだなあ！」

そこで、「勘違いよ、ごめんなさい」とでも言えば、まだ丸く収まっただろうが、その時、明日香はこう言った。

「わかってんじゃないの。そのモイストとか叫びながら髪の毛バサバサすんのやめなさいよ」

「いいんだよ。知らないのか？ みどりはこうされるのが好きなんだよ」

「とても、そうは見えないわ」

「じゃあ、あたしに直接そう言えば良かったじゃねえか。何で教師だの志夏だのを介してどうにかしようとしてんだよ」

「とにかく、この手を離さないよ」

「ふんっ」

上井草まつりは突き飛ばすようにして紅野明日香から手を離れた。明日香は尻餅について「あうっ」と苦しげに声を出しながら痛みをゆがめる。

まつりは、ほの寂しい胸を張り、斜めに立って上から威圧的に見下ろしながら、

「あたしは風紀委員なんだからな。何しても許されるんだよ」

その言葉に、明日香は黙っていられなかった。立ち上がって、体についた教室のホコリを払いながら、

「何をバカなこと言ってるのやら。そんなフザケた話、ないわよ」

教室が、ざわついた。教室の生徒は上井草まつりに逆らうとどうなるか、というのは理解しているのである。簡単に言えば、その怪力でもって殴られたり蹴られたりするのだ。つまり、ケン力なんてものとは殆ど縁の無い一人っ子の明日香が、町で最も恐ろしい人間にケン力を売ったのだ。

中には、まつりが暴れると考えたのか、教室の外へと逃げ出す者も居た。

上井草まつりは、不良である。体当たりすれば風車も折れるという噂もあるし、スタンガンなど効かないという噂もあるし、鉄を素手で自在に変形させるなどという噂もある。もちろん全て噂であり、大いなる誇張なのであるが、そんなデマが生まれるほどに凶悪なのである。

と、そんな時、伊勢崎志夏が教室を出て行ってしまつのが視界に入ってきて、明日香は心中で、「ええええっ」と叫ぶ。

味方になってくれるはずの級長にして生徒会長が、目の前の戦闘準備区域みたいな雰囲気を見て仕切るでもなく教室の外に逃げてしまったと思い、絶望に近い感情を抱いた。

それでも、何とか説得して、いじめをやめさせたい明日香は、できるだけ優しく語り掛ける。

「上井草まつり、とかいったわね」

「そうだよ、てめえは紅野明日香だよな」

「ええ。転校したばかりだけどね、悪いものは悪いから言わせてもらうけどね、あなたのやってるソレは、イジメよ」

「は？ ちげえよ」

するとその時、イジメられていた女子生徒、笠原みどりがこう言った。

「そ、そう、紅野さん。違うんですよ。これは別にイジメじゃなくてですね、何ていうか、ネコのじゃれ合いみたいなものなんです」
「獰猛なネコ科肉食獣がカバを襲ってるようにしか見えないんですけど」

するとまつりは、

「は？ てめえ、知らねえのか？ カバってのはな、超獰猛な生き物なんだよ！」

すると明日香はまつりに向かってビシリと指差しながら、

「じゃあ、ベンガルトラに襲われるカピバラ」

「てめえ、可愛い喻えしてんじゃねえよ。殴るぞ」

すると、イジメられっ子の笠原みどりが落ち込みながら、

「あたし、そこまで顎のライン丸くないのに……」

などと呟いた。

と、険しい雰囲気の中で繰り広げられた平和的な会話を遮ったのは、校内放送だった。

マイクが入ったような小さなノイズの音がして、そこから伊勢崎志夏の声がした。

『えー、おはようございます。生徒会長の伊勢崎志夏です』

それでにらみ合いは一時解消され、明日香とまつりだけでなく、全校生徒の視線が四角いスピーカーに集中する。

そして志夏は、学園のそれなりな平和に巨大な岩の塊を投じる言葉を繰り出したのだ。

『突然ですが、人事を発表します。適格者が皆無であるということ

で、長いこと、空席となっていた風紀委員のポストですが、この度、正式に風紀委員を公的な活動であると認めたいと思います。つまり、風紀委員を新設し、その役職に三年二組の、転校生、紅野明日香さんを起用いたします。これは決定ですが、異論のある方は、生徒会室までお越しください』

上井草まつりは、混乱した。

「ええっ！？　ちょ、志夏！？　え、風紀委員は、あたし……。え、あれ、一体何が、どうなってんのこれ……」

「何、今の」と明日香。

上井草まつりは取り乱しながら、大きな身振りで、

「てめえ、ちよつと此処で待ってやがれ！　志夏にハナシつけてくる！」

まつりは叫ぶと、転びそうになりながら廊下に駆け出て行った。

「私が、風紀委員って言ったよね、今」

すると、イジメられっ子の笠原みどりが答えてくれた。

「そうですね、そう聴こえましたけど……何のつもりだろう、級長

……」

他のクラスメイトたちは皆、目を真ん丸くしていた。

生徒会室。

自称風紀委員という無法者の上井草まつりは片手で丈夫で大きなデスクを叩きつつ、もう片方の手で教室上部に設置されたスピーカーを指差しながら、

「何なの、あれ！」

と叫んでいた。

自分が法律であり、支配者であると自負していた上井草まつりにしてみれば、紅野明日香を正式に風紀委員と認めるなどということには到底認められるものではない。

確かに転校してきたばかりで、どんな人間かも定かではない明日

香に風紀委員をさせるなんて意味不明にも程がある。特に最古参の上井草まつりは納得がいかない。いつだって自分が中心で、いつも自分と共に学園の歴史はあったのだから、プライドというものがある。風紀委員といえは自分しか居ない、と。

しかし、志夏の意志は固かった。

「上井草さんには、紅野さんのサポートに回ってもらうわ」

「なあっ!? 何言ってるんだ。それって、あたしに風紀委員補佐やれってことか!? そんなの屈辱じゃねえかよ! 何であたしが、そんなポジションやんなきゃいけないんだよ!」

「黙って従いなさい。あなたみたいな人に風紀委員と名のつくものやらせるなんて、こちらとしては最大級の譲歩なのよ? 率先して風紀を乱してるじゃないの」

しかし、まつりは駄々をこねた。

「やだ、やだよ!」

志夏はフウと一つ溜息を吐くと、デスクに備え付けてあったマイクスタンドを手に取り、全校生徒に伝わるようにマイクのスイッチを入れると、

『上井草まつりさん、二日間の自宅謹慎ね』

「お、おい、何だよソレ。ありえねえだろ!」

机をバンバンと叩きながら抗議する上井草まつり。

すると伊勢崎志夏は笑みを浮かべながら、こう言った。

「生徒会長に逆らうの?」

「うっ、こ、こんちくしょう!」

まつりは叫びを残して開いていた扉から外に出て、快足をとばして生徒会室から遠ざかって行った。

一人残された志夏は窓の外、風車並木が回転する風景を見つめながら呟く。

「さて、これで、どうなるかしら」

『上井草まつりさん、二日間の自宅謹慎ね』

そんな校内放送が流れた時、教室では紅野明日香と笠原みどりが会話を交わしていた。

「何だかよくわかんないけど、私、風紀委員になっちゃったみたいだから、これからは私が笠原さんを守るからね」

「えっと、はい。でも、気をつけて下さいね」

「何が？」

「えっと、うんーと、うまく言えないんですけど、風紀委員って、危ないんで」

「そうなんだ」

こうして、紅野明日香は風紀委員となった。

「あの、ところで紅野さん。質問していいですか？」

「何？」

「あの、嫌だったら答えなくても良いんですけど、一応、あたし皆に聞くことにしてるんだけどね」

「だから、何」

「えっと、つまりね、紅野さんは、一体、何をやらかして、この町に来ちゃったんですか？」

「なんだ、そのことか。私は、家出を繰り返したのが原因らしいわよ。この学校に転入して来た時に、先生がそう言ってた。『家出常習の紅野明日香だな』って言われたから、それが理由なんじゃないかな」

「そうなんですか。じゃあ、悪い人じゃなさそうですね」

「やっぱり悪い人とかも来るんだ。噂通り」

すると笠原みどりはコクコクと頷き、

「暴力振るったっていう人も多いから、夜道の一人歩きとか絶対やめた方がいいですよ」

「そりゃそうね。気を付けるわ」

「でも、家出くらいでここに飛ばされてくるなんて、あまり聞いた事ないですけど、もしかして、紅野さん、すごく運が悪いんじゃないか」

…」

「あー、まあ、運じゃないと思うよ。実は親にここに放り込まれた形なのよね。運がいいとか悪いとかそういうことじゃなくてね、母親と父親がここに私を入れたっていうことなんだから、仕方ないよね」

「そう、なんですか」

笠原みどりはそう言うのと、何となく言葉が見つからないようで視線を虚空に漂わせていた。

「そりゃね、遠くに行きたいって、家を出て一人で生きたいって思ったよ。でも、それはこんな掃き溜めに来ることじゃなくて、自分の望む場所で自分の力を発揮するってことで。何でこんなことになっちゃってんのかな」

「紅野さんは、この町が嫌いですか？」

「いや、嫌いってんじゃないのよ。でも、うん。そうねえ、好きになれないっていうか、好きになりたくないっていうのが、本音かな」

伊勢崎志夏は教室に戻ってくるなり、「そういうことだから、よろしくね」と明日香の肩に手を置いて言った。

紅野明日香は、「風紀委員って何をすれば良いのよ」と至極当然の疑問をぶつけてみたのだが、志夏は「別に何もなくてもいいわよ。上井草さんへの嫌がらせだから」などと、とても生徒会長とは思えない発言を返してきた。

困った明日香は、風紀委員を名乗っていた上井草まつりが何をしていたのかを参考にしようと、志夏に聞いてみたのだが、「彼女はひたすら風紀を乱すことしかしなかったから、参考にしちゃダメよ」と返ってきた。ますますどうすれば良いのかわからなくなったが、志夏は最終的に、「何もなくていいわ。なるようにしかならないし。というかむしろ何もしない方がいいわ。余計なことすると騒ぎ出す人が居るかもだし」という言葉を残して再び生徒会室へと去っ

ていった。

校内放送で大々的に発表されたのだから、何か行動で示したいところだったが、学校のことも町のこともよく知らない転入したての明日香にできることなど何も無く、ただ不良が妙に多いことと、普通の町とは違って教師が頼りにならないことが理解できるくらいだった。

本当に自分にできることなんて何も無いように思えて、一つ息を吐く。

紅野明日香は何が何だかよく解らないまま風紀委員のポストに就いた。

その頃、坂の中腹にある電気屋の二階で、上井草まつりは枕を濡らしていた。

明日香がこの町に着てから一週間目を迎えていた。

すっかり制服をバッチリ装備した後に気付いたのだが、この日は土曜日であり、学校が休みだったので、明日香は頭をかいた後、「あぶなかった」と呟き、再び部屋着に着替えながら、何をしようかと考える。

ふと、積みまっていたダンボール四つが目に入る。

——— そういえば、越してきて一週間経つのに殺風景な部屋のままだった。何とかしなくては。

ここ一週間で新しく部屋に増えたものといえば、ハンガーが無くなってしまったため窓際に無造作に詰められたカビ発生寸前の大量の洗濯物や、暇つぶしのためにショッピングセンターで買った雑誌とか、同じくショッピングセンターで買い占めたバナナとかくらのものだ。

いい加減、一週間経つわけだし、風紀委員などという重要っぽいポストを与えられてしまったのですぐに元の町に戻れそうにもないし、荷解きをしてこの一室を自分の部屋らしくしようと決意した。

ちなみに、風紀委員として一週間を過ごしたわけだが、特に大きな事件も無く、上井草まつりが自宅謹慎期間を終えても引き籠もって登校していないのが気にかかるくらいだ。

明日香としては、別にまつりの役職を奪い取るつもりは無かったし——とはいえ、元々風紀委員などという役職はなく、まつりが勝手に名乗っていただけなのだが——それに、風紀委員らしいことはこの先もできそうになかった。休みが明けたら、風紀委員の地位を返上しようとさえ思っていた。

いじめっ子である上井草まつりが元気になる一方でシャクではあるが、いじめられっ子の笠原みどりが言うには、風紀委員は危険な仕事とのことだから、荷が重いと志夏に相談しようと考えていた。

と、ちょうど志夏のことを考えていたら、志夏がノックもせずドアノブを回し、明日香の部屋の扉を開けた。

「え？ 何？」

突然の出来事に面食らった明日香であるが、突然の寮長の出現に反射的に姿勢を正す。

伊勢崎志夏はこう言った。

「いい加減にしなさい、紅野さん」

明日香としてはわけがわからない。風紀委員として何もしていないことを責められているのかと頭をよぎったが、何もなくていいと言ったのは志夏だ。

「え？ え？ 何なの？」

すると志夏は言うのだ。

「紅野さんが洗濯物を溜め込んでるのくらいわかるのよ。今何月だと思ってるの。腐るから出しなさい」

この町の気候はいつも強い風が吹いていることもあり、さほどジメジメしているというわけでもなかったが、それでも部屋の中で洗

濯物を発酵させるだけの環境は存在するわけだ。

というわけで、紅野明日香は叱られていた。

「洗濯物は出しなさいと言ったでしょう。普通一週間も部屋に置いておくなんて常識は、この町の人間でもしないわよ。何で出さないの」

「う、ごめんなさい」

「あなたも風紀委員になったんだからね、部屋を清潔に保つくらいしなさい」

そう言われて、明日香は風紀委員を返上することを切り出そうと考えた。

「あの、志夏。そのことなんだけどね——」

しかし伊勢崎志夏はそれを遮るように、

「口答えはいいの。さっさと洗濯物出しなさい」

「は、はい」

その時、明日香の脳裏にあることが思い浮かんだ。

——でも、どうして私が洗濯物を溜め込んでいることがバレたんだろう。もしかして、私のことを前にいた町からずっと監視していたのは、この志夏なんじゃないのか。なんとなく違う感じがするけれど、私の勘なんてアテにならない。私の勘じゃこの町に飛ばされるのは隣のクラスに居る万引き常習犯の男子だったのに、結局私がこの町に来ることになっちゃたくらいだし。

明日香は洗っていない洗濯物に愛着が湧いたわけではないのだが、何となく名残惜しそうに窓際と風呂の脱衣所に置いてあった洗濯物を回収すると、ピンク色のプラスチック籠にまとめて志夏に手渡した。「ごめんなさい」と謝罪しながら。

「風紀委員としての自覚を持ちなさい、紅野さん」

「いや、あの志夏。そのことなんだけどね——」

「それじゃあ、私は忙しいから、何か用があつたら一階の寮長室にあるメモ帳に伝言でも置いておいて」

結局遮られて大事なことを言い出せないまま、明日香はダンボー

ル前に座り込み、荷解きにかかった。

窓の外では、東の海上にたちこめた暗雲が近付いてきていた。

その頃、紅野明日香にとって大変まずいことが進行していた。

上井草まつりは、もう風紀委員の立場を奪われてから何日も経つというのに、未だに自室に引き籠もって落ち込んでいたのだが、そんなことはどうだって良いのだ。明日香にとっての大変なことは、上井草まつりのところではなく、もっと別のところで進行していた。明日香から見えない、水面下で。

町の南側に大型ショッピングセンターがある。その一階のレストラン街に中華料理屋があり、そこでは朝早くから営業していて、朝食をそこで食べる者も多い。その油で少し床がベタベタする店内で、いかにも不良な風貌の男が二人、喧騒の中でお冷を手話をしていた。

一人はいかにも番長風な学ランに屈強な体つきの男で、もう一人はチャラい感じの金髪サングラス男だった。

金髪の方が、番長に話しかける。

「Aさん、今日あたり、いいんじゃないっすか」

威圧感を感じるほど体のかいムキムキの番長は答える。

「ついに我らが覇権をとる千載一遇のチャンスが来たというわけだな」

「はい、Aさん。ついに待ちに待ったこの時ですよ。上井草まつりは強すぎて勝てないけれど、上井草まつりが失脚した今、転校生のナントカってヤツなら皆でかかれば絶対に何とかなるっす。その勢いでもって生徒会も打破して、新秩序を作るんすよ。それは今しかムリです」

「とはいえ、あの生徒会長が選んだ人間だからな。油断はできん」
「だから、今まで様子を見てきたわけじゃないっすか。その新しい風紀委員は、これまで何も目立った動きをしていないし、Aさんな

「絶対には勝てますって」

「む、そうか？ まあBがそう言っただったら、そうするか」

不良Aは小さく見えるグラスを手にすると、中に入っていた水を一気に飲み干す。

「それじゃ、オレ、人集めてくるっす！」

しかし不良Aは引き止める。

「まあ待て、B」

「え、何すか」

「朝メシがまだだろう。おごってやるから、何でも好きなものを頼むがいい」

不良Aが手を挙げて、愛想の無い女性店員が気付いて歩み寄ってくる。

「Aさん！！」

不良Bは感激したように叫んだ。

不良たちの背後の席で、不良たちの会話を、豚まんを食いながら聞いていた男が居た。

周囲から「Dくん」というあだ名で呼ばれている男である。

彼は不良たちの会話を耳にして、風紀委員に就任したばかりの女の子を何らかの方法で攻撃しようと考えていると結論づけた。

短髪のツンツンした黒髪で、シャツのボタン開けすぎであったりと、彼も十分不良っぽい格好をしているのだが、彼が不良たちと違うのは更生して元の町に帰ろうとしていることである。というわけで、この掃き溜めの町に着いてから手にした正義心に火がつき、彼は自身が師匠と慕う中華料理屋の女性店員を呼んだ。

愛想が無いと評判の店員は、早歩きで寄って来ると、首を傾げながら、

「なに、注文？」

「いえ、違います師匠。それよりも師匠、聞きましたか。今の不良

たちの会話」

こくりと頷く店員。

「あれは、あれですよ。襲う気っすよ。新しく風紀委員になった、あの、えっと……」

「紅野明日香」

「そう、それ。その人を」

「でも、それはDに関係あることなの？」

「え、でも、放っておくわけにもいかないじゃないっすか。女の子を大勢で襲おうとしてるんすよ？」

「Dは、それで故郷に帰れなくなってもいいの？ また事件を起こしたら、帰れなくなるよ」

「それは……そうっすけど、でも、じゃあオレ、どうしたら……」

「わかった。じゃあ、わたしが何とかするから、Dは余計な手出ししないで」

「すみません、師匠」

と、その時、別の席から、「おい、おねえさん！ 注文ー！」「という大声が響いてきた。

「それじゃ、勝手に手出しちゃ、ダメ。わかった？」

「はい、師匠」

そして女子店員は表情なく頷くと、店員を呼ぶ声に応えようと歩き出した。

そして数分後、中華料理屋の店員ちゃんはレストラン街のトイレ前にある公衆電話に居た。受話器を耳に押し当て、偽造テレカを使用して、そこから電話を掛けている。

『はい、伊勢崎志夏ですけど』

電話の相手は、伊勢崎志夏だった。そして中華店員ちゃんは、言う。

「紅野明日香さんをお願いします」

『紅野さん？ ちょっと待っててね』
すると公衆電話の受話器からは軽快なメロディが流れ始めた。

雨が降り始めた。しかし、六月らしい雨とは言えないような、台風のごとき暴風雨だった。

紅野明日香は窓の外を眺めながらバナナを食っていた。いわゆる休憩中というやつである。掃除および荷物整理の合間のバナナ休憩というわけだ。

スコールのような豪雨は風に乗ってベランダや窓を叩き、暴風雨のビュウウンというような音が響く。おまけにゴロゴロと雷まで鳴り響き始めた。

「うあ、やばあ……」

明日香は食べ終わったバナナの皮を持ったまま、廊下へと歩を進めた。できるだけ窓から遠ざかりたかったからだ。

紅野明日香は雷が苦手だった。幼少期、既に亡き祖母の知り合いに雷に打たれて死んだ人が居るという話を何度も聞かされたからだ。少なくとも、明日香自身はそれが原因だと思っている。だが原因がわかったからといって、すぐに解決できるわけではないのが幼少期のトラウマというやつで、明日香はゴロゴロピシヤンと鳴り響くたびに悲鳴を上げながら何かにしがみついてしまう癖があった。

この時も、その癖が顔を出したのだった。

それは、同時にやってきた。

ノックなしで開かれた背後のドアと、激しいゴロゴロピシヤン。

明日香は小さな悲鳴を上げながらバナナの皮を放り投げ、電話の子機を持ってやって来た志夏に抱きついた。

「何してるの、紅野さん」

温度の低い声が明日香の耳元で放たれるが、明日香はただ強く目を閉じつつ、志夏に抱きつきながら雷の恐怖に耐えていた。

志夏の背中に腕を回して強くハグする明日香は志夏の動きを奪っ

ていたが、やがて自分のおかしな行動に気付いて、はつとした表情。そして離れる。

「ご、ごめん志夏。雷が、こわくて」

「そう。意外ね」

「ところでさ、雨降ってるけど、私の洗濯物、大丈夫なの？」

「ああ、それは大丈夫よ。だって私は神だから」

すると明日香は、「はいはい、そうですか」と言った。もうマトモに取り合う気も失せて露骨にバカにした態度だった。しかし、志夏は呆れてみせる明日香の態度を気にすることなく、「それよりも紅野さんに電話入ってるわよ」と言つて、明日香に子機を手渡した。

——あれ、でもこの寮には乾燥機が無いのに、どうやって乾かしているのか謎だな。もしかしたら男子寮の方にあるのかも。って、待つて。そんなことよりも電話が来たって方が重要だ。

「え？ 電話つて誰から？」

「さあ。若い女の人だったけれど」

「へえ、誰だろ」

「じゃあ、電話終わったら寮長室に持つてきてね」

志夏はそう言い残して扉を閉めた。

明日香は白い子機を見つめつつ、女の人とは誰だろうかと首を傾げる。前の学校に居た時の知り合い以外に、心当たりが無かった。上井草まつりや笠原みどりなら、志夏は「女の人」などという言い方をしないだろうし。

とりあえず、受話器を受け取り、『保留』と書かれたボタンを押してみる。通話した。

「はいもしもし、紅野です」

すると電話は、数秒の沈黙の後、いきなり、こんな言葉を伝えてきた。

『外に出ないで』

意味がわからなかった。

「はい？」

『今日は、絶対に、外に出てはダメ』

「いや、えっと、誰？」

しかし電話の主は質問に答えず、

『外に出たら、ひどいことをされる。寮なら大丈夫。そこは安全』

「どういうこと？」

何から何まで、わからなかった。

『絶対に、ダメ』

相手がそう言い残して、通話は終了した。

電話後に雷の音が鳴り響いたが、それどころではない明日香は癖である悲鳴を上げることはなかった。それほどまでに不審な電話だったのである。

それはそうだろう。いきなり電話を掛けてきた名乗りもしない知らない誰かから、「外に出るな、絶対」なんて言われて、一方的に切られたのだから。

一体誰だったんだろうかと考える。

——もしかして、ストーカーみたいなものかもしれない。思えば、前の町に居た時から誰かに監視されてるような感覚があったし、私の勘はあまり当たらないけれど、これは勘とかじゃなくて、感覚の話だ。もしも私の感覚が的外れで、誰からも監視されていなくて、単なる被害妄想だったら、それが一番喜ばしいんだけど、こうして変な電話が来てしまった。この電話の主は誰だったんだろうか。自分の感覚を信じた上で推測するならば、色んな可能性が考えられる。

——この町に来てから出会った誰かに嫌がらせされるとしたら、思い当たる節が無いでもない。たとえば上井草まつりを失脚させたのが自分の風紀委員就任だと考えることもできるわけで、まつりがそれに恨みを持ってイタ電してきた可能性がある。そして、笠原みどりが言っていた、風紀委員は危険だっていう話も気になるところだ。

——でも、この間まで住んでいた町でも同様の嫌な気配、見られる感じがすることが多々あったことを考えると、やっぱりストーカー

ー、もしくはストーカー集団の可能性の方があると思う。まつりの声じゃなかったし、まつりは明らかに不良だけどそんなことするような子じゃないと感じるし、いじめられっ子の笠原みどりや伊勢崎志夏も、もちろんそう。

ストーカー。その存在を意識した途端に、粘つくような視線が自分を見ている気がして、明日香は圧迫感で苦しくなる。そしてもう、雷に恐怖している場合でもなかった。ストーカーの方がこわい。このところ風紀委員になってしまって、思考がそっちにばかり引っぱられ、嫌な視線について考える余裕が無かったこともあって、ほとんど気にしていなかったのだが、この電話をきっかけにまた嫌な視線を感じるようになってしまった。

自分をつけ回して監視して、怪しい電話までしてくるのは誰なのか。本当に女なのか、女の声だったけど実は男なのか。何もかもがわからなくて、おそろしかった。

そして明日香は決意する。

——相手が「外に出るな」と言うのなら、何が何でも外に出てやる。

彼女の反抗的なところが顔を出した。

明日香は服を着替えることにした。いくら緊急時だからといって、お世辞にも普通の域に達してるとも言いがたいダサイ部屋着のまま外に出るわけにはいかないと思ったからだ。かといって、明日香の持ってきた服は今、志夏の手の中にある。仕方なく、明日香は制服に手を伸ばした。

そして制服に着替えた明日香は志夏に電話の子機を返すことすら忘れ、ダンボールから外履きを取り出して窓を開けて外に出た。

いつの間にか雨が止んでいて、ただ強い風が明日香の前髪の上に弾き飛ばそうとしていた。

チャンスだと思った。またいつ雨が降り出すかわからない。そうなれば、脱出のリスクは高まっていく。

大きな窓を閉め、ベランダから身を乗り出し、十二メートルほど

下にある地上を確認する。何とかいけそうだと考える。錆びた鉄柵を乗り越えて、強度に不安のある地面まで縦に伸びる雨に濡れて滑るプラスチック雨樋にしっかりとしがみつきながら、慎重にそれを伝って降りていく。残り二メートルくらいのところで手足を滑らせて自由落下し、危ない思いをしたが、しっかりとぬかるみに着地を決めた。明日香は自分で家出スキルはプロになれるレベルだと思っているくらいだから、雨の後という悪条件であっても、それくらいは何とかこなす。

水をゴポゴポと排水する雨樋の終点と、その下の水たまりを一瞥した後、走り出した。

部屋を脱走した。電話で言われたことに逆らえば、嫌な視線を感じることもないと思ったからだ。

事実、部屋を出た途端に、その嫌な視線は消えたような気がした。稲妻が光る。また雨が降り始める。

序章「3

脱走したは良いが、行くアテが無かった。

移動する場所によつては、また嫌な視線を向けている誰かに見つかつてしまう可能性だってある。それはそれで、誰が自分を監視しているのかの手掛かりくらいにはなるのだろうが、正体を突き止めることよりも、少しでも視線を感じたくないと思っていた。

女子寮を出て、坂を下りていく。十字路に差し掛かった。

引き返して図書館にでも行くか、まっすぐ行ってショッピングセンターや病院に行くか、右に行つて学校に行くか、左に行つて湖に行くのか。

どうしようかとあれこれ考えた結果、湖方面に行くことにした。

湖と言つても、実際は池なのだが、人々が湖と呼ぶのだから湖なのだろう。

湖畔は、公園のように整備されていて、見通しが良く、広い。このなら怪しいストーカーに狙われることもないだろうと、胸を撫で下ろしたのだが、その時だった。

「へへへ、ようやく見つけたぜ」

背後から、そんな声がした。振り返ると、不良が群れをなしてそこに居た。その数、八人。

ひどいものである。要は八人で一人の女の子を襲おうというのである。

「紅野明日香だな」

そして明日香が、「何よ、あんた達」と言おうとして、「何よ——」と言つたところで、一番体の大きな不良の手が伸びてきた。回避しようにも囲まれているので、逃げられず、髪の毛を掴まれる。そのまま引つ張られる。

「つう、い、痛いっ！」

明日香は不良の腕を小さな手で掴んで抵抗を試みるも、明日香は

上井草まつりとは違って女性らしく非力なため、どうにもならない。不良は、いやらしい笑いを浮かべながら、

「へっへへへ。何だ、大したことねえじゃん、新しい風紀委員爆誕っつーから期待してたんだけどなア」

周囲の不良どもが、その言葉に反応するように笑った。

その頃、ショッピングセンターの中華料理屋では、明日香に電話した無愛想な店員ちゃんは何事もなかったかのように働いていたのだが、重要なのはそこではなく、湖畔を散歩していた男子生徒Dだった。

Dが湖畔を歩いていたら、馴染みのある連中が、まるで円陣を組んでいるが如く群れているのが見えた。中にはDとそこそこの良い男も居たものだから、何の集まりなのかと気になって近寄ってみる。

すると、その円陣の真ん中に居るのが、休日だというのに制服を着た女の子だというのがわかった。今朝の中華料理屋での会話が思い出され、その女の子が風紀委員の紅野明日香だと確信する。

紅野明日香が、さほど長くない髪の毛を引っ張られたり、地面にたたきつけられて顔を強打したりしていた。

気丈にも泣いたり喚いたりはしていなかったが、それがかえって痛々しかった。

紅野明日香が襲われてるのは自分のせいだと思った。

「師匠、何とかしてくれるって言ったのに」

と呟きながらも、走り出し、できるだけ低い声で叫ぶ。

「てめえら、何してんだ！」

故郷に帰れなくなることがDの脳裏をよぎらなかったわけではない。ケンカなどの問題行動を起こせば、どんどん故郷から遠ざかるのは理解していた。それでも、襲撃されている女の子を見て、見て見ぬフリなどできなかった。

たとえ屈強な男たちが相手でも、堂々と戦う自信があった。

——こいつらが束になっても、上井草まつりよりも、だいぶ弱いし、師匠にも全然劣るのだから。

男子生徒Dは、今が師匠との修行の成果を見せる時だ、と思った。本来なら上井草まつりを倒すことでそれを証明したかったが、まつりは別格。女性を襲う何人も男だつて十分に強敵で、この町に来る前の自分には勝てる相手ではなかったのだから、成長を実感するには十分な相手だ。

紅野明日香は自らの痛めた箇所、顔面、膝、左腕をさすりながら、Dの方を見た。助けを求める目ではなかった。不信の目だった。まるで、「あんたもこいつらの仲間なんでしょ」とでも言いそうな、誰も信じない、信じることができないような。

腹が立った。

女の子を、そんな絶望的な状況に追い詰めた連中は、万死に値すると思った。その追い詰めた連中の中には、紅野明日香を襲う計画を知りながら何もできなかった自分も含まれる。

「てめえら、ダセエことしてんじゃねえ！」

太く、強く、声を張る。一番有名な不良Aという男に向かって。すると、金髪の不良が、Dの至近に寄って、息がかかるくらいの近さで、にらみつけながら

「あア？ 誰だ、お前」

さらに別のモヒカン頭の不良が、

「おうおう、あんだお前、ナメた口ききやがつて。この方は高校生でありながら銃刀法違反で逮捕されたこともある、Aさんだぞ」

しかしDは怯まない。

「そうか。それが、どうした。犯罪自慢なら町の外でやれ。ここは人が更生する場所だ。それから上井草まつりが支配者じゃなくなつたからって、その途端に大人数で女子を襲う？ 腐つたこととしてんじゃねえよ！」

Dはそう言つと、不良の真ん中を歩いていき、紅野明日香に手を

差し伸べた。

「あ、え、あ、ありがとう」

そう言った明日香は、差し伸べられた手を掴み、立ち上がると、Dにやや乱暴に思えるくらい力強く引つ張られてベンチへと座らされる。

Dは言う。

「少し、待っていてくださいっす。あいつら倒してやりますから」
こくりと頷く明日香。

Dは、負ける気がしなかった。それだけの修行を、師匠の下でやってきたという自負があるから。Dは存分に拳で語らおうと身構える。その上半身の姿勢のまま走って、八人の不良集団の中心に突っ込んでいく。

「うおおおお——！！」

などと雄たけびを上げながら。

腕に自信ありげなりーゼントヘアの暴走族風の不良が、「ここは自分が」と不良Aに告げて前に出る。そして、こう言った。

「よう、お前、Dって呼ばれるんだってな。実は、何を隠そう、このオレも不良Dと呼ばれてるのさ。Dの名を持つもの同士——」

しかし男子生徒Dは、不良Dの言葉などまるで無視して頭突きを見舞うと、不良Dは沈黙せざるをえなかった。自信満々に歩み出て来たわりにはあっけないやられ方である。それだけ男子生徒Dが強いということ。

「やりやがったな！」

だとか、

「おらあ！」

だとか騒ぎながら暴れて無茶苦茶に襲ってくる不良どもだったが、Dは師匠譲りの冷静さで的確に相手の大味な攻撃を避けながら、効果的なカウンターアタックを仕掛けたり、先制攻撃で肘を入れたりといった、乱暴行為で傷を負った明日香の仇を討っているようだった。

明日香と男子生徒Dに格別な関係など皆無である。つい今さつき初めて顔を合わせたばかりである。だがDは女の子を集団で襲う行為に対して限らない怒りを抱いたのだ。被害者が紅野明日香でなくとも、同じように動いただろう。たとえそれが、自分よりも圧倒的に実力が上の相手だったとしても。

もちろん一方的な展開というわけではない。相手は八人居るわけである。時には殴られ蹴られ、苦しげに膝をつく姿も見せることもあった。

戦闘中に、水を差すように雨が降ってきたが、降雨コールドもなかったし、中断もなかった。

雨風の中、殴る蹴る。明日香が手の平で口元を覆うような野蛮な行為を繰り返し、Dと不良の戦いは、Dの消耗が激しいものの、Dがやや優勢といった感じで進んで行ったが、通りがかった女子生徒が悲鳴を撒き散らしながら傘を放り投げて学校方面へ逃げたことにより、不良どもが焦った。

騒ぎになって困るのは、不良連中も同じである。彼らだって罰としての独房入り等はしたくない。不良たちの半分は、「ちくしょうおぼえてやがれ！」などというザコっぽい捨て台詞をそろった声で残して逃げて行き、もう半分は無言で走り去っていった。もちろんケンカ騒ぎを起こしたとあっては明日香が元の町へ簡単に戻れなくなることをも意味していたのだが、目の前で繰り広げられた本物の乱闘に啞然とした明日香はそれに気付かず居た。

不良たちの背中を見送って、整った顔や締まった体に多くの傷やアザをつけられたDは、その場に大の字に寝転んで雨に打たれていた。明日香はそれを見て、まるで捨てられた家電みたいだと思った。

紅野明日香としては、「ありがとう、大丈夫ですか？」とでも声を掛けようかと思ったのだが、それよりも先にDに駆け寄った女が居て、何となく邪魔してはいけない雰囲気を感じ取った明日香は、ベンチに座りなおし、二人のやり取りを見守っていた。

正義の大暴れを果たしたDのもとに駆け寄ったのは、中華料理屋の無愛想な店員ちゃんであった。彼女はDの師匠でもあるので、戦いの途中に駆けつけて雨の中、傘も差さずにその姿を見守った後、こうして駆けつけたのだ。

男子生徒Dは照れたように笑いながら言う。

「すみません。やっちゃいました。師匠」

すると中華料理屋の店員ちゃんは、雨に濡れた紙袋から冷めた豚まんを取り出し、無理矢理口になじ込んだ。

口の中を切っていて痛むのか、苦しそうな顔をした。しかし、それに気付きながらも中華店員は拷問でも仕掛けるかのようにグイグイと押し込む。

「ふふあいつふ、ふいふあー」

うまいっす、師匠。と言ったつもりなのだが、言えてなかった。

「あたりまえ」

しかし通じていた。さすが師弟である。

この時、中華店員はかなり責任を感じていた。紅野明日香の件は自分が何とかしようと考えて、「絶対に外に出てはダメ」ということを告げただけで大丈夫だろうとタカをくくったため、弟子を暴れさせる結果になったのだと。これで不良たちが「Dにやられた」とかチクることがあれば、Dは故郷に帰るのが遅れるわけで、そうなれば中華店員ちゃんにしたら悲しくもあり嬉しくもあるという複雑な心境。ともあれ、全く責めてこない弟子のせいで、何となく謝ることのできない中華店員ちゃんは、弟子の好物である豚まんを押し込むという行動しかできなかった。

中華店員ちゃんは、豚まんをもぐもぐしている泥まみれのDを、腕を引っ張って立たせると、脈絡なくビンタした。零れ落ちてDの代わりとばかりに泥まみれになる豚まん。そして表情なく言うのだ。

「ばか」

わけがわからないが、これが、この師弟のコミュニケーションなのだろう。

「いたくないっす」

「痛くないようにやった」

「これで、しばらく帰れなくなっちまったっすかね」

「ばか」

そんな会話を交わしながら、明日香の存在なんて忘れてショッピングセンターの方へと歩き去っていく。

「師匠、もうちょっとよろしくっす」

「ばか」

「すみません、師匠。カッコわるくて」

「ばか」

雨風の中、湖畔のベンチに制服姿で一人残された紅野明日香は、何が何だかわからないまま呆然と座り続けているしかなかった。

紅野明日香は風に吹かれ雨に打たれながら混乱していた。肌にはベッタリとはりついた制服の不快感を気にする余裕も無かった。

結局、自分を監視したり狙ったりしていたのは不良たちだったのかと言えば、そんなことも無いと思う。上井草まつりは風紀委員失格の烙印を押されたと感じて依然落ち込み中であり、そんなことをする余裕は無かったし、志夏でもない。

一体、誰が明日香を監視していたのか。

ここで、ものすごい唐突ではあるが、その明日香にとって嫌な視線の主が姿を表した。

誰も居なくなった雨の湖で、突然現れた女が、紅野明日香に銃を向けていた。

銃口をまっすぐ、確かに明日香に向けていた。

長身で髪は短く、紫のブラウス、黒のタイトなジーンズを穿いていた。まるで着衣水泳していたかのようにずぶぬれで、傘も差さず、雨に打たれながら、親指で力チリと回転式拳銃の撃鉄を起こす。シングルアクション。拳銃から水が滴る。距離は五メートル。照準は

真つ直ぐベンチに座る紅野明日香の眉間。あとは引き金を引くだけだった。

紅野明日香は動けなかった。へびににらまれたカエルっていうのはこういふことなのかな、なんて、思ったりしていた。とにかく意味がわからなかったのだ。

『絶対に、外に出てはダメ』

寮で受けた電話が思い出された。

あの電話の主の言うことを聞いておくべきだったと思う。外に出たら大勢の男たちに囲まれて、今度は知らない女に銃を向けられている。

——でもだって、仕方がないじゃん。こんなことになるなんて思わなかったし、電話そのものだって、ストーカーみたいで怪しかったんだから。

場違いに心の中で言い訳を展開しながら、これがドッキリ企画みたいなものだと思いたがる。疑う心がこの事態を招いたのだとしても、誰が明日香を責められるだろうか。

明日香の目の前に立つ女は真剣だった。演技のにおいなんて欠片も感じられない。もしもこれが演技だったとしたら、テレビに出る女優の演技がリアリティを求めているものだってことを差し引いてもナンバーワン女優の名を欲しいままにできるように思えた。

結論から言えば、演技などではないので、演技のにおいを感じられないのは当然である。

紫の服着た女は言った。

「ごめんなさいね、世界の、ためなの」

風の音が響く。稲妻が走って空が光る。雨音が響く。いくつもの雨が湖に飛び込み、水面が沸騰しているみたいだった。

地獄みたいな世界の中で、肌寒さと、体の中から生まれ出る妙な熱さを感じながら、明日香は涙を流す。恐怖から出た涙かどうかすらわからない。突然の出来事すぎて何が何だかわからない。何もかもがわからない。

目の前の紫色の女が、悔しそうに呟く。

「本当は、こんなことしたくないんだけど。ごめん。ごめんね」

引き金が引かれる。弾丸が飛び出す。雨も風も、音の壁も切り裂いて、明日香の目の前まで。

しかし、その時、信じられないことが起きた。

明日香も目の前で銃を構える女のことをわけがわからないと思っていたが、それ以上に、わけのわからない現象だった。

それは、本当に普通では考えられない出来事だった。

恐怖に見開いた目の先で、銃弾は溶け落ちた。

瞬時に溶け落ちて、勢いを失って地面を焦がし、雨を蒸発させた。「なっ、何ですって……」

明日香の体が異常な熱を帯びたわけではなかった。しかし、熱の原因は明日香にあった。

本来なら明日香の額を打ち抜いていたはずの弾丸が急に溶け落ちたのは、明日香の中にある明日香を守ろうと備わる力。人が本来持つていても発現させることが困難な力。

そのような力を、人は超能力と呼ぶ。

発火能力。

前触れなんて無かった。明日香自身、そんな力があるなんてことは幼少期から逐一記憶を掘り返してみても思い当たらなかった。強いて言うなら、炎に包まれる夢を何度か見たことがあるくらいだった。もしかしたら、それが前触れみたいなものだったのかもしれない。

明日香に銃を向けていた女は早く殺さなければと再度親指で撃鉄を起こし、弾丸を発射したが、今度は明日香の目の前に到達するまでもなく溶け落ち、銃自体も砲身から溶け出し、危険を感じた女は悲鳴を上げつつ手放した。銃の形を何とか留めた鉄の塊は地面にくっついて同化すると、雨を受けたり濡れた地面に触れたりして白い煙が立ち上る。

女は言う。全てを理解し諦めたような口調で、

「パイロキネシスですって。そんなまさか。でも、道理で……」
明日香は目を閉じた。まぶたの裏が、焼けるように熱かった。
目を開いた。

視界の大半が、燃えた。

超能力の暴走だった。湖から火柱が立った。風車が溶け落ちた。
炎が湖全体を覆った。水があるところなら、炎は出にくいはずである。
にもかかわらず、炎が立ち上った。

視線が全てを焼き尽くす。摩擦によって発火する。

銃を捨てた女は背後を振り返る。立ち上る巨大な火柱が見えて、
もう逃げ場なんて無いことを知る。

真紅の世界の中で、自分自身の選択の愚かさを悔やんでいた。町
を救えなかったことを嘆いて、自分を責めていた。頭を振り、下を
向く。

明日香は周囲をキョロキョロと見回している。自分が原因で発生
した炎に恐怖と戸惑いを感じながら、涙を止められないでいた。

——これ、夢だよ。

夢だと思いたがる明日香だったが、夢ではなかった。

炎にまみれた世界で、明日香自身が全く熱を感じていなくても、
目の前の光景が到底信じられない異常な地獄の光景であっても、そ
れは夢ではなかった。

立ち込めていた暗雲も、赤く染まる。

先ほどまで明日香に銃を向けていた女は、はっとする。諦めてい
る場合ではなかった。町を何とか守らなくては、と思う。

女は紅野明日香に歩み寄り、両肩に手を置いて揺すると、叫んだ。
「止めて！ この炎を止めて！ 早く！ 早くしないと取り返しの
つかないことになる！」

明日香がまばたきをした。女の、既に乾いていた紫の服、その袖
に火が点いた。雨に打たれても、その炎は消えない。

「どうということ？ あんた誰？ この炎は何？」

「あなたのせいなの。紅野明日香。あなたがこの炎を！」

その時、女は自分の腕が燃えていることに気付く。服の袖をビリビリと破いて投げ捨てる。

町には、いつも強い風が吹いている。

裂け目で増幅された強風が、燃える湖から町へと吹き上げていく。つまり、早く消火しなければ、町へと燃え広がってしまう。

高温、高熱。喉が焼けるように痛くても、女は必死の形相で明日香を揺すって炎の音に負けないように大声を出す。

「止めて！ 止めてよ、炎を！」

しかし、明日香には止め方なんてわからない。その前に現実だと信じられない。信じたくない。

女は、紅野明日香が炎を止められると思っていた。しかし、それは不可能である。

明日香の能力は、炎を生み出すことであって、炎を自在に操ることではない。それも、それは安定的にコントロールしているわけではなく暴走している。

巨大な火炎を消すには、巨大な水の塊が必要であるが、この町に降るスコールの雨であっても、地上から立ち上る強すぎる火勢を抑えることすらできない。

ただ、時間だけが過ぎていく。炎が広がっていく。

明日香から生まれた炎は、町の全ての酸素や水素等を飲み干すように巨大化を続けていく。町の南の方ではショッピングセンター近くで管理されていたガソリンに引火したようで、大きな爆炎が上がる。

雨の中で燃える町。雨で徹底的に濡れていたはずの町が、徹底的に炎に包まれる。まるで、降ったのが雨ではなく油だったかのように。もちろん油が降ったわけではない。水だったはずだ。ただ、それ以上に炎に勢いがあったということ。連鎖的に爆発するように広がり、多くの人々が暮らす町を数秒のうちに炎で包んでしまった。

あっという間。坂を駆け上がる強風にあおられ、町の至るところに火が点いた。家、森林、寮、商店街、草原、学校、そして風車。

全てが燃え落ちていく。翼を広げた鳥のように、町の道路をつたって燃え広がる。

飛び交う悲鳴。叫び声。声を上げる間もない者も居る。

白い風車は熱風を浴びて火炎に赤く染められながら回転を続けていたが、やがてドロドロに溶け出した。中には倒れてゆく風車もあった。

明日香は、場違いに笑う。

信じられなくて笑う。涙を流しながら笑う。目の前の炎まみれの光景が意味不明すぎて笑う。信じられなくて笑う。

——何がどうしてこんなこと。何のためにこんなこと。わからない。何一つわからない。

そんな明日香を、目の前の女が殴ろうとする。拳を振り上げる。身構えた。

次の瞬間には居なかった。

跡形も無かった。まばたきしたら居なかった。灰も残さず蒸発した。嫌な臭いがする。

——夢のような気がする。夢で見た気がする。夢では、この後、風車が倒れてくるんだ。

振り返る。本当に風車が倒れて来ていた。悲鳴を上げた。

でも無事だった。風車の方が跡形もなく蒸発した。

まるで違う世界に消えるように、プラスチックが焼けるような臭いを残して。

意味がわからなかった。キョトンとした。燃え盛る炎の中、自分だけが無事な意味がわからない。何かの冗談かと思う。吐き気がする。

見上げた町が燃えている。爆発もしている。白い煙や黒い煙を上げている。

町の方から、誰かが歩いてきた。

明日香はその燃え盛る火と煙の海の中に浮かんだ少しずつ近付いてくるシルエットを注視する。

志夏。伊勢崎志夏だった。生徒会長にして寮長、そして級長。ゆっくり歩み寄って来た。

明日香は、知っている者が居ることに安心した。それに、彼女なら何かを知っているかもしれないと思った。これは夢なのよと言ってくれるかもしれないと思った。

「あの、志夏。これは、何？」

しかし、伊勢崎志夏は質問には答えずに、こう言った。

「まさか、こんなことになるなんてね」

何かを知っている風だった。

ベンチから立ち上がった明日香は、震えてうわずった声で、視線をグラグラと揺らしながら言う。

「どういうこと？ 何なの？ よくわかんないけど、女の人は私のせいって言った。何から何まで、何が何なのか、全然よくわかんないよ」

すると志夏は冷静にこう言った。

「元々、そういう素質はあったんでしょね。エンジンである紅野さんの中には、それほどのエネルギーが秘められていたということ。それが、今回はこういう形で発露しただけ」

「何？ じゃあこれ、やっぱ、私が……？」

伊勢崎志夏はこくりと頷く。

明日香の中で、どす黒い絶望が渦を巻いた。

まだ世界は燃え続けている。町の全てを焼き尽くすまで、焼き尽くしてもしばらくは、消えないだろう。

明日香は膝をつき、両手で顔を覆った。半袖のセーラー服は、炎の熱によって乾いていた。髪も乾いていた。海からの風が、髪や服を揺らす。明日香の周辺に降る雨は瞬時に溶けて水蒸気になわって見えなくなる。

そして、気付きたくもなかった事の重大さに気付き、またしても涙を流す。

——町の人は、どうなった。

土下座するように地面に手をつき、かすれた声で呟くように、
「私さえ、此処に来なければ」

しかし志夏はこう言った。

「いいえ、それは違うわ、紅野さん」

「何が、何が違うのよ」

伊勢崎志夏は、燃えさかる面影なき町を見上げながら、
「すべては、これから始まるんだもの」

時は繰り返し回り続ける。私が望む終わりが、訪れるまで。

俺は、まだ何も始まっていけないにもかかわらず疲労していた。

「あー、サボリてえー……」

そんな無気力な呟きも漏れてしまうほどに。

朝、険しい坂の道を登る。登っても登っても、学校に辿り着かない。

くるくる反時計回りの三枚風車の羽が回転し、重たそうにこすれ合う鈍めの音を立てている。

進む俺の両側をゆつくりと流れる景色は、草原と真っ白で質素な風車の円柱ばかり。いったい、どれほどの風車を追い越せば、あの白い建物にたどり着くのだろうか。

そろそろ俺の足も疲労が限界だ。この坂を登らないと学校に辿り着けないなんて、なるほど、引越す前に居た学校のクラスメイトに同情されるわけだ。

この街は、街の外の人間からしてみたら、牢獄みたいなものだそう。都会と比較すればそこそこに開放感のある景色と、絶え間なく吹く強い風からは考えられないが、なんでも俺のようなプチ不良を更生させるために、この険しい山に囲まれた街に強制転校させる制度が生まれたという。そしてその制度の網に見事に引っ掛かる形で俺はやって来た。つまり、俺はプチ不良。

周囲を絶壁の山々に囲まれているが、一箇所だけ開けていて、その隙間から海からの強風が吹き入っている。地図で見ると、ちょうどアルファベットの「C」のような形に見える感じがした。

入ってきた風は山の斜面を駆け昇り、斜面に並木のように並べられた風車の羽根をくるくる回す。風車は全て同じ方角に向いていて、常に一定方向に風が吹いているのだという。

つまり「C」の隙間部分から規格外の強風が入り、山肌を撫でるように進み、坂を登って山の向こうやら山の上へと吹き抜けていく

わけだ。

風を受けて夜も休まず回転を続ける風車群から付いた俗称は、
『かざぐるまシティ』

だが、そんなことよりも今は、俺の背中を押してくれる追い風がうれしい。

アスファルトの足元を見た後に顔を上げると、俺が今日から通う学校が見えた。そして次の瞬間、チャイムが鳴った。

「げえ、やべえ、初日から遅刻ってベタすぎるだろ、俺……」

というか、道理で周囲に学生服を着た生徒の姿が無いわけだ。

まさか見えている場所に登校するのに、これほど時間が掛かるとはな……。

完全なる計算ミスで記念すべき初遅刻を記録することになりそうだ。まあ、俺くらいのプチ不良ともなれば、遅刻なんてお手の物だぜ。って、威張って言う事じゃないんだけどな。

あれだ、人並みの人間である俺は、転校初日の緊張に震え上がりそうなんだ。だから空威張りしたい気分になった、とそんなところだ。

さて、遅刻した自分を正当化し納得させたところで、ようやく学校の門の前に辿り着いた。見上げれば、白ペンキを塗ったような真っ白な校舎が見えるが、どうしようか……。

もう遅刻は確実なのだが。

校門を通り抜けながら、考え、決めた。

そうだ、屋上へ行こう。

うむ。やはり、高いところに登って、この街を見渡してみるべきだろう。全く論理的ではないが、俺は残念ながら論理的思考だとか秩序という言葉とはよく対立するようなアレな人間なのさ。

で、コソコソと人目につかないように中庭を遠回りして、昇降口へ。

閑散として静まり返った昇降口でスニーカーを脱いで放置した。靴下のまま階段を登り、登り、登り、登って、辿り着いた屋上。引き戸は既に開いていた。

「さて、どんな景色かな、と」

ポケットに手をつ込んだままトントン、つま先歩きで外に出ると、

「うおっと」

いきなりの強風が俺を襲った。

びゅうびゅう吹いとる。

もしも俺が三歳くらいの子供だったら吹き飛ばされてしまうような、

そしてフェンスに打ちつけられて、「フェンスがなければ即死だった」とか言うような。

——って三歳の子供そんなこと言わねえだろ。

自分でツツコミを入れてみる。

「つはあ。果たして、この学校でツツコミ入れ合ったりできる関係築けるかなあ……」

不安だ。

だがまあ、それにしても、これは、良い景色だ。

この街で最も高いところにある学校の屋上からは、街全体が一望できる。フェンスも低くて視界を遮ることもなく、素晴らしい風景が見渡せた。

坂の途中には、いくつもの風車が太陽を向いて咲いている向日葵みたいに一定方向を向いて並んでいて、そして、坂の麓には商店街。高低差の少ない平らかな場所には、背の低い建物が並んでいる。あれは住宅街だろう。

で、住宅街の中心に広がる浮島が二つある湖と、その先には、強風を生んでいる隙間。直線的な長方形の裂け目があった。裂け目はまるで窓枠のように綺麗な直線で、昇りはじめた太陽と、それに照らされて光る海を切り取っていた。

本当に綺麗だった。

ここをお気に入りの場所にしようと思った。

ただ、風が容赦なく俺の目とかを襲うので、それが難点だ。大きすぎる難点かもしれない。目が乾いて、しばしばするう。涙出そう。と、その時、

『本日転校してきた戸部達矢くん、紅野明日香さん。ここのあすか登校してしましたら、至急職員室まで来てください』

いきなり校内放送で呼び出したよ。

確かに今、戸部達矢という俺の名が呼ばれたよな。

初日から遅刻で、初日から呼び出しくらうとか、何かの主人公が俺は。これで見ず知らずのパンくわえた女の子と衝突したりしたら完璧な朝だな。

とか考えた、まさにその時！

「きゃっ」

どくしゃっ。

「はうあっ！」

突然の頭頂部への衝撃に俺はうつ伏せに倒れ、額をコンクリに強打した。

何事だ。痛い。何事だこれ！

頭上から声がした。

「あやあ、ごめんなさい。まさか下に人が居るとは思わなくて」

女の子の声だった。

「いててて……な、何が起きた……？」

俺はぶつけた額を押さえながら立ち上がり前を見た。涙で掠れた視界に制服姿の女子が居た。どうやら、その女子が少し高い所から降って来たらしい。おそらく、給水塔のある屋根部分からジャンプしたのだろう。ちなみに、パンはくわえていなかった。

その女子は、

「にしても、しょっぱなから呼び出しか……参ったな」

風に短めの髪をなびかせながら言った。

「……………」

じつと見つめてみる。

そこそこ可愛いじゃないか。

いや、風に吹かれているから可愛く見えるのかも知れないが。風に吹かれている女子は二割り増しくらいで可愛いく見えるからな。

「……何見てんのよ。ていうか、あんた誰？」

他人の上に落下しておいてケロっとしているだと？

なんつー不良だ。

「俺は、今日転入してきた戸部達矢だ」

名乗った。

「へえ、じゃあ今呼び出しくらった不良？ やだこわい。近付かないでよ」

「お前も今、『呼び出しか』』とか言ってたじゃねえか。お前も転入生なのか？」

「ん、うん。そうだけどね。紅野明日香っての」

「紅野明日香……」

何だろう、妙に馴染みがあるような気がする名だった。

「呼び出しなんてかつたるいわー。私は逃げるけど、あんたどうする？」

「何だと！」

教師陣からの呼び出しから逃げる？

そんな思想を展開させるほどの豪の者なのか、この女。

俺は、不良とはいえプチが付くほどの可愛い不良。だから、今までの人生で呼び出しにはちゃんと応じてきたぞ。すっぽかしたことなど一度も無い。もしや、この学校には、コイツみたいな突き抜けた不良が、うじゃうじゃなのか？

これからの学校生活が不安で仕方ないぞ！

いや、だが、待て。よく考えてみるんだ。

俺がこの学校に来た理由は、更生してプチ不良を脱却するため。となれば、目の前に居るコイツも不良を治すために島流しにされ

て来たに違いない。

コソコソ登校していきなり屋上まで来てしまった俺が言えることでもないだろうが、目の前の非行を見逃すわけにはいかないっ！

俺は、彼女の腕を掴んだ。

「ちょ、ちよつと、何よ急に」

「何って、お前を職員室に連れて行くんだよ」

「あ、そうやって一人で抜け駆けする気なんだ。教師の前に私を突き出して、『この女が逃げようとしたので捕まえていたら遅刻してしまいました』とか言って深々と頭を下げた拳句に熱された鉄板上で土下座までするつもりなんだ」

そんなヤバイ土下座するつもりはねえよ。

っていうか、そうか、こいつを突き出せば遅刻の罪が軽くなる可能性もあるのか。

コイツ、不良のくせに頭いいじゃねえか。

「いいから行くぞ」

「どこにつ？」

「だから職員室に」

「やあだあ！ やめてえ！ 離してえ！」

「ええい、静まれ。紅野明日香！」

「あ、気安く名前呼んでんじゃないわよ！」

「はいはい……」

何だか、初めて会った気がしない。彼女の近くは妙に居心地が良かった。

「いきなりサボリなんて、ダメなんだぜ！」

「それ、いきなり屋上に来たあんたが言うことなの？」

「いやまあ、細かいことは気にすんなよ」

「……………」

顔は見えないが、なんか不満そうにしてる感じの無言を返してきた。

で、ちよつと迷った末に職員室前に来た。俺は紅野の手をしっかりと

り掴んで放さず、引っ張ってきた。

「もう、逃げないから離してよ」

不満そうに声を出す紅野。

「あいにく、俺はよく知らない人間を簡単に信用するほど優しくないんでな。それはできない相談だ」

そしてその時、職員室の引き戸が開いた。

俺が開けたわけではなく、教師が中から出てきたようだ。

「……………お前ら、何で手つないでんだ？」

教師に指摘された刹那、紅野は無理矢理俺の手を振り払った。ちよつと痛い。

「……………で、戸部達矢と紅野明日香だな」

俺たちは揃ってごくごく頷いた。

「転校初日から堂々遅刻とは前評判通りだ。ついて来い。教室はこっちだ」

「はい」「はい」

揃って、良い返事をした。

紅野明日香の章「1 - 2

で、しばらく歩き、教室の前に到着し、教師は言った。

「呼ばれるまで待っている」

と。そして、教師が教室内に入っていく。

今頃教室内では、教師が「転校生が来ました」とかで歓声が上がったりしているのだろうか。

しかし、それにしても廊下は水を打ったように静まり返っていて、俺と紅野明日香の間には無言空間が流れた。

「……………」

「あんた、何か言いなさいよ」

「何でだよ」

「退屈だからよ」

「何で俺がお前の退屈を埋めなくちゃなんのだ」

「この私の手を握ったんだから、そのくらいのことするのが当然でしょ？」

どういう論理だ。

俺もたいがい非論理的だが、この女ほど支離滅裂ではない。あの意味、マトモさに自信を持てるような気がしてきた。引越す前の学校では、遅刻を繰り返しただけで異端児扱いされていたからな。この学校に変な奴しか居なければ、俺のマトモさが際立つというものだ。

そんな時、

「紅野、戸部。入って来い」

教室内から、教師の声。

「はいっ」「はいっ」

またしても揃っていい返事をして、紅野、俺、の順に教室に入る。
「……………」

教室は、水を打ったように静まり返っていた。

あれ、何か変だな。

俺の想像の中では、転校生の登場に湧いてワイワイしてるものだとばかり思っていたのだが、あれはフィクション世界だけの出来事なのか。

ともかく、俺と紅野は前に立たされて自己紹介をさせられることになるそうだ。

教師は、黒板に俺の戸部達矢という名と紅野明日香という名を並べて白いチョークで書きながら、言う。

「えー、本日転校してきた、紅野明日香さんと、戸部達矢くんです。では、二人に自己紹介してもらいます」

教師は目配せすると、それに気付いた紅野が、クラス全体に向けたおじぎをした。言った。

「紅野明日香です。よろしくお願いします」

まるで猫をかぶっているように丁寧な挨拶。

控えめな拍手が響く。

きっと初対面の奴は、可愛い子だと勘違いするに違いない。実際は他人に蹴りをかましても反省しないような悪い奴なのに。

というか、大人しいクラスメイトたちだな。

普通、こういうケースでは、彼氏いますかー、とか何とか質問が飛んでいてもおかしくないように思えるが……。まあいいか。

さて、次は俺の番だな。

「戸部達矢です。よろし——」

言い掛けた時、気付く。

笑ってやがる。何がつて、隣に立っている女が、だ。

「くつくく……」

笑いを堪えようとして堪えきれていない。

一体何がそんなに面白いんだ。

「おい、どうしたんだ」

すると、

「あっはっはは！ あっふあ、何？ 何、戸部達矢って……飛べっ、

達矢とか、犬に命令するみたいな名前ね……くくく」

お前は今、世界中の戸部さんを敵に回した。

ついでに言うと、多くの達矢さんを敵に回したぞ。

これは反撃するしかない。自己紹介どころではないぜ。

「おいこら、他人の名前を馬鹿にすることの危険性をわからせてやるのか？」

「なによ。暴力でも振るう気？　ここ学校だよ。いかなる暴力にも罰が下るような場所だよ？」

じゃあ、お前がさつき俺にかました頭上からジャンプキックの罰はいつ下るんだろうな。

どうせ「故意じゃないから」とか言って言い逃れるんだろうが。ていうか、俺は暴力を振るう気なんてさらさら無いぞ。

俺が用意した反撃は、これだっ！

「紅野明日香って、何回も繰り返し言うって、卓球してる時の効果音みたいに聴こえてくるよな」

言うって紅野は、

「紅野明日香　紅野明日香　紅野明日香……（中略）……紅野……たしかに」

呟き頷いた。

納得されてしまっただけは、反撃にならないんだが。

「で？　それが何？　面白いけど、何が言いたいのか？」

「何でもないです」

すると紅野明日香は、窓の方を指差して、言った。

「よし、飛べっ！　達矢！」

「死ぬだろ、飛んだら」

すると教師が、

「ほら、アホな会話はそれくらいにして、さっさと席につけ。一番後ろの窓際だ」

見ると、教師が指差した先には二つの空席。窓際最後尾の席が隣同士に空いていた。

「あんたのことだから、どうせ窓際が良いとかって言い出すんですよ？」

まるで俺とお前が昔からの知り合いであるかのような口ぶりだが、あいにく、つい先刻知り合ったばかりだ。そんなに簡単に性格を把握されては。たまらないぜ。

だが、しかし、当たっていた。窓際は大好きである。

「こういう場合……早い者勝ちだ！」

俺は言って、駆け出した。が、その刹那、
びたーん。「はうあっ！」

足を引っ掛けられて転ばされた。今度は床に額を強打する。

視界に星が舞った。走ってる足引っ掛けるとか、あぶなすぎるだろうが。

「ふん、あんたの単純な行動パターンなんて、この数分で把握できたわ」

何度も俺に痛みを与える忌々しい美脚が憎い。

「窓際の席はいただきよっ！」

勝ち誇ったような声が響く。

「卑怯だぞ！」

「椅子取り合戦に卑怯とか無いから！」

あるだろう。

「てか、あんた裸足？ 上履きはどうしたのよ」

どこにあるんだ、そんなもの。

まだ受け取ってねえぞ。

何せこの街に来たのは昨日だからな。

寝泊りする寮に着いた頃にはもう夜だったし。

そして、紅野明日香が、窓際の席に座った。

俺の敗北を意味するのは言うまでもない。

「ちつくしよー」

それが、俺と紅野明日香との出会いだった。

こうして、頭部の痛みと共に、俺の転校挨拶は終了した。

紅野明日香の章「1 - 3

授業が始まる前の時間。

「何見てるのよ」

新しく決まった自分の席に座って、窓の外の風景を見ていたところ、話しかけられた。

「窓の外」

答える。

窓の外では、大きな風車が羽根を回転させていた。

「嘘、視線を感じた。私の横顔見てたでしょ？ 何で？」

「お前の顔見ても面白くねえっての。回転を続ける珍しい巨大風車を見てた方がずっとエキサイティングだ」

「ふん、確かに、あんた風車とか好きそうよね」

鼻で笑うなよ。折角そこそこ可愛いのに。

と、その時、

「あの、二人とも、少しいいかしら」

女子の声がした。

見上げると、髪の毛の短い美人が立っていた。

「私は、伊勢崎志夏^{いせざきしなつ}。このクラスの級長なの。よろしくね」

「級長って、あれね。委員長みたいなやつね」

と紅野。

委員長みたい……というか、学級委員とほぼ同じ意味だ。

「で、その級長さんが俺たちに一体何の用だ？」

ん？

ちよつと待て、俺。何だ今の口調は。何で俺は不良の下っ端みたいなこと言ってるんだ。

「やめな、達矢」

そして何故コイツも不良の親玉みたいな口調なんだ。すると志夏は驚いたような顔でこう言った。

「……お二人は知り合いなの？」

「いや、さつき屋上で初めて会ったんだが」

俺は事実を伝える。さつき屋上で蹴られたのが初めての出会いだ。

「そうなの？ 何だか妙に息合ってるわね」

「そうなのよね。何だか初めて会ったって感じがしないのよ」

俺も初めて会った気はしなかったが、記憶を辿ってみても、紅野明日香に出会った記憶は無いので、初対面だろう。だが何となく紅野の横は居心地が良かった。

「そう………」

「それで、用件は？」

「用件という程でもないし、二人はあまり心配しなくて良いみたいだけど、この学校は、少し、何と言うか、おかしい生徒が多いから……ね」

なるほど転校生がイジメの標的にならないように見守ろうというわけか。級長らしく面倒見が良いらしい。

「そんなに治安が悪いのか。このクラスは」

「ちよつとね、一部……ね」

「あ、それじゃあ私たちが風紀委員になって取り締まってあげようか？」

無理だ。

むしろ取り締まれる側じゃねえか。

遅刻するわ、他人の頭を踏み台にするわ、走っている人間の足を引っ掛けて転ばすわ、他人の名前聞いて大笑いするわ。

そんな人間が風紀委員？

クラスが減ぶぞ。

ていうか今「私たち」って言ったか？

ということとは、つまり俺も含まれてるのか？

何で俺既に子分みたいな扱いされてんの？

「風紀委員は、もう別に居るから」

と志夏。

「へえ、どこどこ？」

紅野は、額に手を当てて、キョロキョロと周囲を見渡した。

「まだ、来てないみたいね」

何い。つまり風紀委員のくせに遅刻してるってのか。自分の立場をわかっていないとんでもない不良だな。俺が言う事でもないんだろが。

「根は良い子なんだけど、ちょっと、性格に難があるというか……素直じゃないというか……とにかく、困ったことがあったら、何でも私に相談してね」

「うん。わざわざありがとう」

微笑を浮かべて応える紅野明日香。

「それじゃあね」

伊勢崎志夏は、言うど、颯爽と教室を出て、廊下に出て行った。

「優しそうな人だったね」

何故俺に同意を求める。だがまあ、

「この学校にもマトモな人間は居るってことだな」

俺は言った。

「そうね、私たちだけじゃなくね」

「お前、自分がマトモだとしても？」

「その言葉、そのままあんたに返すわ」

「……………」

「……………」

で、授業中。

「ねえねえ、達矢」

「何だ、またお前か」

隣の席の紅野明日香が、授業中だというのに話しかけてきた。

「ねえ、ちよつと……困ったことになったんだけど……」

「どうした、何だ、困ったことって」

「てか、あんたは何も困ってないの？」

「困る？ 別に。その前に、今は授業中だぞ、私語は慎め。教師のチヨークが飛んでくるぞ」

すると紅野は言うのだ。

「ねえ、私、先生の言ってる事わからなくて授業についていけないんだけど」

「何だ、やはり不良らしく頭は悪いのか」

「不良じゃないし……」

不良だろう。

転校初日に遅刻して屋上に居るような奴が不良でなくて何だと言
うんだ。

「教科書が無くて、何を言ってるんだかさっぱりで……。達矢は、教科書持ってる？」

「いや、全く」

教科書が無いことに、今言われて気付いた。

「何で先生の言ってることわかるの？」

「いや、そもそも授業なんぞ聞いていないっ！」

「……不良はあんたじゃないの」

「勉強なんて子守歌でしかないぜ」

俺は言っちゃった。

「何ていうか、最低」

と、その時、

「こらあ！ 転校生二人！ うるさいぞ！」

ひゅーん。

俺に向かつて白チヨークが飛んできた！

何故俺に！

おでこ直撃コースだ。

どうやら、今日は俺の額が狙われているらしい。

すでに、今日二度強打している。

三度目の危機！ 三度目の正直？ 二度あることは三度ある？

ていうか何度も言うが、何故俺なんだ。

話しかけてきたのは紅野明日香だぞ！

「うおお！」

ひゅおおっ！ ガンっ！

何とかギリギリで避けて、教室後方のロッカーにぶつかったチヨークは折れて地に落ちた。

「何だ、質問があるのなら聞いてやる。言ってみろ」

教師は言った。

「特に無いです」

「——あるでしょうが！」

「あ、あるそうです」

「何だ、紅野。言ってみろ」

「あの、教科書が無いんですけど。どうすれば良いですか」

「あああ、そうか。そういうえばそうだな。言うの忘れていた。教科

書は、職員室に二人分届けられているはずだ。ちょっと待ってる。

今取ってきてやる」

「あ、あと、戸部達矢くんの上履きは……」

おお、気が利くじゃないか。わざわざ俺が裸足なのを気にかけてくれるとは。

思ったよりちゃんとした子なのかもしれない。

「何？ 上履きは、昨日のうちに麓の商店街で受け取れと言ってあ

「つたろう」

確かに、そう聞いた。寮のおっちゃんがそう言ってた。

だが、俺がこの街に来たのは昨晚のことだ。夜。店は閉まってた。既に商店街はシャッターが下ろされていたし、上履きを手に入れることなんて、できるはずがなかった。

「仕方ないな。スリッパも持ってきてやるから、大人しく待っていろ」

「はい、すみません、先生！」

教師が教室を出て行くと、すぐに教室はガヤガヤと喧騒に包まれた。

「ありがとな。紅野。わざわざ上履きのことまで」

「まあね。子分の面倒くらいちゃんと見られるようにありたいわよね」

「そうだな……」

って待て。今、子分とか言わなかったか？

やっぱり俺は既に紅野の下に位置づけられてしまったのだろうか。この女。ちよっとくらい可愛いからって調子に乗りやがって。

俺だって男だ。

女子の子分なんてプライドが許さない。

ここは一つ、叱ってやろうかどうしようか。しかし、その時、ガララッ！

引き戸が勢いよく開いて、教師が戻ってきたのかと思い、紅野から目を逸らして戸の方に目をやると、

「はあ、はあっ、間に合った！」

いや、誰だ？

背の高い女だった。

ていうか、間に合ってたねえぞ。大遅刻だ。

「先生まだ来て無えよな。な？」

背の高い女は、まるで不良みたいな口調で、近くに居た女子に訊いた。

「もう授業中だよ、まつりさん」

「うっそ。あたしのダッシュ実らず？」

「そ、そうね……」

女子は、まつりという女からさりげなく距離を取った。まるで逃げるように。

「あああ……あたしの体力返せええ！」

遅刻しておいて、何を言っているんだ、あの女。

と、その女に接近したのは、

「上井草さん、風紀委員なのに遅刻ってどういうこと。毎度のことながら呆れさせられるわ」

先刻、話しかけてきた優しい級長だった。

って、あれが噂の風紀委員だというのか。遅刻してやって来て悪びれる様子もない。

やはり不良か？

「あはは、ごめんごめん、志夏。次から気をつけるからさ」

「まあいいわ。それよりも、今日転入生が来たわよ。挨拶したら？」

女は小声で「へえ、どれどれ……」と言いながら教室をひとしきり見渡した後に「お、あの窓際の二人だな」と言つと、俺と紅野の方に近づいてきた。

大きな歩幅でツカツカと。

そして立ち止まり、ほの寂しい胸を張り、その胸に右手を当てて言うのだ。

「あたしは、このクラスの風紀委員。上井草まつり。よろしくっ！」

いい笑顔で。親指を立てながら。

そこで、俺と紅野明日香も立ち上がり、

「戸部達矢です。よろしく」

「紅野明日香です」

名乗った。

「ほうほうほう、明日香に達矢ね……下の名前で呼んでいい？」

「どうぞお好きに」

と紅野。

「まあ、構わないぜ」

俺は言った。

「ようし、それじゃあ二人は我が三年二組の仲間だつ！ 大丈夫、おかしいことをしなければすぐに馴染めるわよ！」

それが、自称風紀委員、上井草まつりとの出会いだった。

そして、ガララ、と引き戸が開いて、

「戸部、紅野。教科書とスリッパを持って来た。前に取りに来い。あと上井草、また遅刻か」

「はい！ 余裕で遅刻っす！」

いい返事だった。

俺は、教科書たちを抱えた後、スリッパを履いた。

「ありがとうございます」

俺は教師に言う。

「ん、ああ。明日には、ちゃんと上履きを受け取っておけよ」

「はい」

「よし！ それじゃあ授業を続けるぞ。席つけ席」

ガタガタとクラスの皆が移動し、先刻までの喧騒が嘘のように静まり返った。不良ばかりの学校とは思えない優等生ぶりだ。もしかしたら、俺や紅野明日香も、この学校で少し学べば品行方正になれるのかもしれない。何せプチ不良が更生のために飛ばされて来るような街だからな。

しかしその時、

「……気に入らないわね」

席に着いた紅野明日香は突然言った。

「何がだ」

「色々」

「そうかい」

まあ、深く詮索しないでおこう。

どうせ紅野にとって、世の中は気に入らないことだらけなんだろう

う。

そのくらいのことは想像できる。

「で、えーと、どこまで説明したかな……」

そして、授業が再開される。

真新しい教科書を開いた。

紅野明日香の章「1 - 5

チャイムが鳴った。

放課後になったのだ。

教師が既に帰りのホームルームを終わらせて職員室に去り、チャイムが鳴ったら帰って良いと言いつ残していた。

「ふぁ……あ」

俺が大きく欠伸をすると、

「だらしない顔」

また紅野明日香だ。

一体、何で俺にこんなに構ってくるんだ。そんなに腕を引っ張って連れて来たことを根に持っているんだろうか。そういやさっき屋上では呼び出しから逃げるみたいなのを言ってたからな。捕まえて連れて来た俺への復讐の時節を窺っているのかもしれない。

視線に気付いた紅野は「あたしの顔に何かついてる？」とか言つて、顔をしかめた。

可愛い顔が台無しだぜ。

「別に何も」

「まあいいわ。あんた、寮よね。一緒に帰ろうよ」

「ああ？ 寮だったって、俺は男子寮だぞ。お前、男だったのか？」

「あんま下らないこと言ってるよと膝の皿割るよ？」

「リアルに痛そうなこと言わんで下さい」

「いい？ 男子寮と女子寮は、隣り合って建ってるの。だから、同じ方向。わかる？」

「なるほど。納得した」

「さあ、ほら、帰るわよ」

「ああ」

二人で教室を後にして、階段を下り、四階から昇降口のある一階へ。

そして、そこで靴を――。

靴を？

靴が…………。

「ん？ どうしたの、達矢」

「……靴がない」

ゆえに履けない。

「あれ、でも下駄箱はあつちよ？」

「いや、朝、ここに脱ぎ捨てて、それつきり……」

と、そこへ、一人の女が颯爽と現れた。

「ああ、そこにあつた靴ね。それなら、さっきあたしが登校した時に焼却炉に投げ込んでおいたわ」

風紀委員の上井草まつりだった。

つて、ちよつと待て。今上井草まつりは何と言った？

焼却炉に？ 投げ込んだ？

「何でっ！」

力いっぱい訊くと、

「そりやだつて、下駄箱に靴入れないなんてルール違反っ！ 風紀委員の仕事をしたまですよっ！」

「だからつて、捨てることはねえだろ！」

「ちなみに、昼休みには焼却炉に入れたゴミは燃やされるから、もうあの靴は灰になつてゐるだろうけど……………何よ。文句あげな顔してるわね。やるつてんなら相手になるけど？」

まつりは、腕をまくつて拳法の構えみたいなポーズをした。

俺は紳士っぽく「はっはは」と笑った。そして言うのだ。

「あいにく俺は、女子に暴力を振るうような安い男ではないぜ」

「それは、あたしに喧嘩売つてると捉えていいのかな？」

「ええ？ 何故に？」

「この男女平等の風潮の中で、今、キミは女性を差別する発言したよね。女子が男子に腕力で劣るという意味の発言をしたよね」

何だこの面倒くさい女は。

「謝罪して訂正するなら今よ。さもないと、あたしはキミで血祭りを開催しなければならないわ」

どうすべきだろうか。

女子に屈するわけにはいかないとは思うが。

いや、しかしいきなり風紀委員と問題を起こしても良いことは少ないだろう。

「すみません、風紀委員さん。以後気をつけます」

俺は謝ることを選択した。

「ふふっ、わかればいいのよ。大丈夫、達矢ならすぐにこの学校に慣れるわ」

勝ち誇った顔で言う上井草まつり。

「そうですか」

「ええ。それじゃあ、また明日」

まつりは言って、大きな歩幅で颯爽と去っていった。

それを見送ってすぐ、隣の紅野明日香は言う。

「気に入らんなあ……」

紅野明日香は、上井草まつりにマイナスの感情を抱いているらしかった。

にしても、どうしようか。靴が無ければ、アスファルトを歩くのはきつい。もしもガラス片とかが落ちていたら筆舌に尽くしがたいレベルの痛いことになりかねない。

「仕方ない。こうなれば——」

「——他人の下駄箱から靴泥棒は許さないよ？」

「なっ！」

心が、読まれたたと……。

「やっぱりそういうことする気だったんだ。この不良っ！ ちよつとそこで待ってなさい。私が何とかしてあげる」

「お、おう……」

紅野明日香は、廊下を走り、階段を上って見えなくなった。で、すぐに、

「やつ、おまたせ」

戻ってきた。

その手には大人用の、割と大き目の革靴。俺のサイズよりも大きいやつだ。

「どうしたんだ、それ」

「先生に相談したら貸してくれた」

「そしたら、先生はどうやって帰るんだ？」

「ほんの短時間だけよ。先生が言うには、『麓の商店街のお店まで行って、上履きを受け取るついでに新しい靴も買って戻って来るべし』だってさ」

「あの急勾配でクソ長い坂を往復しろと？ 憂鬱すぎるだろそんなの」

「まあ、仕方ないんじゃない。私は風紀委員じゃないけど、ルール違反の代償としては安いものだと思うわよ」

「なあ、紅野……先生の靴なんて借りなくていいからさ、紅野が……靴買ってきてくれない？」

「は？ 私をパシらせようっての？ いい度胸ね。親知らず抜くわよ？」

「痛い、それ痛い。たぶん」

「てか、元と言えば、あんたがこんな所に靴ぬぎっぱにしていたのが悪いんでしょ？ 自分の責任くらい果たしなさいよ」

「不良らしからぬ正論だ」

「不良じゃないっての」

しかし、考えてみたら確かに、俺の責任のような気もする。仕方ないか。

「まあ、じゃあ行ってくるぜ」

「私はここで待っててあげるわ」

そんな恩着せがましく言われてもな。別に待っててくれなくても良いんだが。

「お店の名前は『笠原商店』だからねっ。わかった？」

「お、おう、わかった」

「いつてらっしゃい」

手を振る紅野。

「いつてきます」

軽く、手を振り返した。俺は彼女が借りて来てくれたブカブカの靴を履き、昇降口を出て、中庭に出た。中庭を越えて、門を出ると、急勾配の下り坂。顔を、強風が襲う。目がしばしばする。涙出そう。周囲にあるのは、下校する生徒の姿と、草原と、風車たち。背中を向けてギィギィ回転する風車並木が、山の稜線に差し掛かった沈みかけの太陽の光を受けてオレンジ色に光っていた。

紅野明日香の章「1 - 6

で、急な坂を下ると、坂が坂だとは思えないくらいに緩やかになり、そこにあるのが商店街。事前に調べた情報によれば、電車もバスも走っていないこの街において、この麓の商店街が最も多くの商店が密集した場所らしい。わかりやすく言えば、この街で最も栄えている場所だつて話だ。ただ、シャッターが下ろされてるところも多いから、これで最も栄えてるつてのはちよいと疑わしいが。

さて、目的地の『笠原商店』つてのも、多く軒を連ねる店の一つである。

それにしても、今日は覚え切れないくらいの色んな出会いをしたな。

屋上で俺を踏みつけた紅野明日香。

優しそうな級長、伊勢崎志夏。

いまいちキャラが不明な風紀委員、上井草まつり。

三人を覚えるだけで俺の容量の少ない脳みそは今にも悲鳴を上げようとしている。嘆かわしい事だ。かわいそうな俺の脳みそ。

と、そんな事を考えている間に、目的地に到着。

色あせた看板に大きな文字で『笠原商店』と書いてある。

躊躇わず引き戸をガラガラつと開けると、

視界には、文房具とか、お菓子とか、生活消耗品とか、飲み物等、幅広いジャンルの商品が並べられていた。CDやゲーム機とかまである。

所謂、何でも屋みたいな店なのかな。

そして、

「あ、戸部達矢くん……」

俺の名を知ってる人が立っていた。

俺と同じ位の年齢の女子で、制服の上にアイボリーカラーのエプロンを着けていた。

どうやら、店員さんのようだ。肩くらいまでのキレイな髪した可愛い女子だ。

「何故、俺の名前を？」

素朴な疑問をぶつけてみる。

「あの、あたし、同じクラス……」

なるほど。しかし、ろくな自己紹介も受けていないクラスの人々の名前を一日で記憶できるほど俺の頭は聖徳太子的ではない。いま俺の脳みそは、四人目の特定女子の出現にキィキィと悲鳴を上げているぞ！

「すまん、名前憶えてないんだが」

「あつ、いいのいいの。今日引越して来たばかりで、いきなりクラス皆の名前憶えるなんて、離れ業だもんね」

そして、彼女は名乗った。

「あたしは、笠原みどり」

笠原。そしてこの店は笠原商店。

「つまり、看板娘というやつか！」

「えっと、そういうことになるかな……」

「憶えやすい属性が付いていると助かる」

「へ？」

「ああ、いや。こっちの話だ。それで、受け取りに来たんだが」

俺がそう言うと、

「上履きね。はい、これ」

まるで事前に用意されていたかのように、一瞬で差し出してきた。

「お、おお。サンキュ」

そして笠原みどりは俺の足を指差しながら、

「あと、その靴」

「ああ、これは借り物だからな」

「だよ。学校指定の革靴があるから、ちょっと待ってね」

言って、笠原みどりは店の奥で何やらガサゴソした後戻ってきて、
「はい、これ」

手渡してきた。

「サイズ大丈夫？ 履いて確認してみて」

俺は、言われた通りに確認する。

ピッタシだった。

「大丈夫そうね」

「何から何まで、ありがとな」

「どういたしまして。でも、上履きも革靴も、お金は受け取ってるし、仕事だから……」

「そうか、しっかりしてるんだな」

俺がそう言ったところ、

「……………」

笠原みどりは、目を閉じ、首をぶんぶん横に振った。

そして、泣きそうな声で言うのだ。

「全然っ……全然だよっ！」

「え」

ちよっとびつくりした。

「あっ、ごめんなさい。つい……。えと、他に何か買って行きますか？」

うーむ、どうしようか。所持金は財布に約三千円程度。頼んでいないとはいえ、俺を待っていてくれる紅野には何かお礼をしなければならんだろう。

飲み物の一つでも持っていてやるべきだ。うん。

さて、何が良いだろうか。

と、その時、目を引いたのは……プロテイン入りの飲料。

これを持っていけば、何かツツコミを入れてくれるんじゃないか。俺は女の子にツツコミを入れてもらいたがる悪癖を持っているので、ついついこういう変なものを購入してしまう男なのだ。

「これ下さい」

「お、男らしい……感じだね」

「まあな。男なら、プロテインだ」

びしつと親指を突きたててみる。

「そ、そう……じゃあ、350円——」

「高っ！ 普通150円位じゃねえのか、このサイズの飲み物って！」

「でも、ほら、値札……」

確かに。

『350』と雑な字で書かれたシールが貼ってある。

高い。正直言って、後悔した。

「だが……だが俺は、一度決めたことは貫くぜ。もってけ、350円っ！」

俺は言って、みどりの手に小銭を置いた。

「えっと……ひいふうみい……ちようどお預かりします」

笠原みどりはそう言って、エプロンのポケットに小銭を投入した。

「じゃあ、色々サンキュな」

「はい、あ、いえ。ありがとうございました」

みどりは、深々と頭を下げた後、俺を見送った。

俺の手が、引き戸を開けて閉めた。

さあ、これからまた坂を登って学校へ戻らねばならない。

本日二度目の急な坂道のぼり。坂道を登るとかそんなレベルじゃないような気もする。ここまですれば、軽い登山だ。

西日がまぶしい。

体力にはそこその自信があるのだが、急勾配の坂道を登り続ける筋肉なんて普段使わないからな。きっと明日は両の脚が軋むように痛むに違いない。

紅野明日香の章「1 - 7

で、学校に戻ってきた。

海の香りがする追い風に吹かれながら二度目の登校を果たすと、宣言通りに紅野明日香が待っていた。

「よう、お待たせ」

「なかなか早かったわね」

「あまり女の子待たすわけにもいかないからな」

「へえ、良い心がけじゃない」

「まあな。女の子には優しくする主義なんだ。俺は」

「見直したわ。さ、帰りましょ」

「おう」

言って、紅野が下駄箱に向かう。俺もその後についていく。

三年二組の下駄箱には、ちゃんと俺の名前が入った場所があった。もちろん紅野の名前の領域も。

「俺の下駄箱も、用意されてたんだな……」

呟くと、呆れたような、可哀想なものを見るような目で俺を見ている女子が一人。

「あつたり前でしょう……？」

そして、何かに気付いたようにハツとした表情をして、

「あつ、そうだ。先生に靴返さなきゃ」

「お、おう、そうだな」

「行って来るね」

紅野は俺から借り物の靴を奪い去ると、階段を走って上っていった。

で、戻ってきた紅野と二人で、本日、二度目の坂下りを終えた。そして今、麓の商店街を歩いている。

東側以外が険しくて高い山に囲まれているため、太陽が沈むのが早いこの街は、当然のように昼が短く夜が長い。午後四時半には、もう太陽が見えなくなる。

病院とかによくある心電図が刻んだ波みたいな形……いや、削られた鉛筆の先つちよの形って言った方がわかりやすいか。よく言われる奇岩というものだろう。まあ、とにかく、そんなギザギザ尖った形をした山々の陰に太陽が隠れてしまうわけだ。

事前に調べては来たのだが、まさか本当にこんな時間に暗くなるとは思わなかった。

と、その時、俺は思い出した。

待っていてくれた紅野にお礼の品を買っておいたんだった。

何故急に思い出したかと言えば、何のことはない。たった今、この飲み物を買った『笠原商店』の前を通り過ぎたからだ。

「そうだ、紅野。お前に渡したいものがある」

「何？ 引導？」

「いや、そんなクライマックスじゃねえだろうっていうか、引導じゃなくて、これだ」

俺は言って、鞆から先刻、笠原商店で購入したモノを取り出して掲げた。

「なにそれ」

「いや、喉渴いてるんじゃないかって」

「まあ、気が利く！ うれしい！ ありがとう！」

紅野は、俺の手からドリンクを取り上げると、

「ちようどサースティだったのよ！」

何故か英語を混ぜてそう言って、ペットボトルのフタを回し開けて、口にあて、それを、飲んだ。

「ゴク…ゴク…ゴク——ブハッ！」

ビシヤア。

アスファルトを、濡らした。噴き出していた。

「まっず！ ちょ……何これ……」

驚いた顔で、俺とペットボトルを交互に見る。

「ちゃんと店に売られていた商品だぞ。安心しろ。絶対に体に良い飲料だ」

紅野明日香は、賞味期限やら、成分やらを確かめようとしたのか、ペットボトルのラベルとにらめっこしていた。

「ねえ、達矢……プロテインって……何かな？」

「さあな、何だろうな」

しらばっくれてみる。筋力を増強する成分というイメージがあるけどな。

「あんた、私にどうなって欲しいのよ。もっと強くなれみたいなメッセージ？」

どうやらプロテインがどういうものか、知っているらしかった。

「まて、俺は別にお前にムキムキになって欲しいわけではない」

「じゃあ、何でこんなもの……」

「わるふざけた」

「肋骨結ぶよ？」

「どんな現象だ、それ」

「何でスポーツもしてない私がプロテイン摂取しなきゃなんないのよ！」

「いや待て。実はな、プロテインは、ダイエットにも使えるらしいぞ。効果的だそうだ」

「え？ そうなの？」

「ああ。そうなんだ。プロテインを摂取するだろ？ そして運動すると筋肉量が増える筋肉量が増えれば代謝が上がる。となれば、必然的に痩せる……という仕組みだ」

「てことは何？ 私にデブだから痩せろっていうメッセージを込めたの？」

何故そんな風に解釈する？

ていうか、ただの悪ふざけであってメッセージなんて別に込めてねえ！

「違う違う！ 紅野は太つてもいなければ、筋力トレーニングが必要なほどの筋力低下をしているわけでもない。ていうか何で俺はこんなに責められてる？」

「こんな不味いもん飲まされて怒らない人がいる？」

「待つんだ。それは他の飲料よりもむしろ値段が高かったんだぞ。そしたら美味しいものなんだなって思うだろう！」

まあ、嘘だが。十人に飲ませたら七人が不味いつて言うくらいに不味いつて知ってたが……。

「こんなもの返すっ」

フタを固く固く閉めて、突き返してきた。

仕方なく受け取る。

紅野明日香は可愛い顔台無しの苦虫潰しフェイスをしていた。

やっべえ、怒ってる。謝らなければ。

「ごめんなさい」

すると、フウと一つ溜息の後、

「いいわよ、もう」

口を尖らせながらも、許してくれた。

というか、何で俺は紅野明日香と一緒に下校なんてしてるんだろ
うか。

今日会ったばかりなのにな。何だか不思議な感覚だった。

「なあ、紅野」

「何よ」

怒ったような口調。許したと見せかけてまだ完全に怒りが抜け切れては居ないようだった。それで俺は多少萎縮したのだが、紅野明日香はそんなに暴力振るう子じゃないと判断し、気を取り直して質問する。

「紅野は、何でこの街に来たんだ？」

「不良だったからじゃないわよ」

「……………」

「ちよつと。『嘔吐くなよ』みたいな顔するよやめなさいよ」

「だってなあ……」

「『屋上で校内放送の呼び出しから逃げようとしたじゃねえか』とかまだ言うの？ しつこいわね」

言いたいことを寸分違わぬ形で先に言われた。こやつ心が読めるのか？

「すまん……」

何となく謝った。

「あんたも知ってると思うけどさ、この街ってさ、外からの評判悪いじゃない？」

「まあ、そうだな。問題児ばかりだって噂だ」

「そう、それよ。問題児ばかりのクラスなんて、嫌じゃない。そこに何で自分が入れられなくちゃならないのって思わない？」

なるほど、確かにその部分は俺も同じように思ってたから、この街に来ることになって、かなり憂鬱だった。ただ、今日、登校した感じだと、そうだった問題児は少ないように感じたが。それに、紅野明日香だって、転校初日に明らかな問題行動していただじゃないか。そこで俺はこう言った。

「いや、遅刻して屋上に行くんざ十分問題児だろうが」

「前の学校では品行方正だったのよ。なのに、何で私が……だいた問題児ばかりを集めて、まとめて更生させようっていう精神性っていうかな、計画そのものが気に入らない！」

「そ、そうか」

「おかしいの。あの学校がおかしいの。私はおかしくなんかないのに、おかしい奴呼ばわりして！」

声を荒げて憤りを直球で。

「そういうの、ばつくれるなくなる私の気持ち、わからない？ 達矢だって、同じように思って屋上にいたんでしょ？」

厳密に言つと違う。というか全然違う。

俺の場合は、ばつくれるなんて考えもしなかった。もっと消極的な理由で、教師に叱られる瞬間を先延ばしにしたいとか、そういう

割とヘタレた理由で屋上に行つたんだが。

俺は紅野の目を見て言った。

「とりあえず、落ち着け」

「落ち着いてるわよ！」

「どこがだ」

「だって、本当に、私何も悪いことしてないし、何で『かざぐるま行き』にされたのか、わかんないんだもん」

今度は、一転して泣きそうになった。女の子らしい声が、俺の耳朶を打つたりして、何だかドキドキする。

ちなみに、この街に飛ばされることを、俗に『かざぐるま行き』

と言う。そんな言葉が生まれるくらいに、この街は他の世界から隔絶された異常世界だと思われているのだ。普通を求める、普通を自負する人間にとっては最も遠い街。それが、

『かざぐるまシティ』

本当の街の名前は知らない。

多少の沈黙の後に、俺は言う。

「紅野は、普通の女の子なんだな」

「……………普通って何？」

わからんけど。

「……………」

「……………」

しばらく二人、無言で歩き、寮の前に辿り着いた。

「そついや達矢さあ、手前が男子寮、奥が女子寮になってるって、昨日説明受けなかった？」

「ああ、そつえば、あんま真面目に聞いていなかったから忘れてたが言っていた気もするな。寮長を名乗る頭にタオル巻いた大工みたいなオッサンが」

「あら、女子寮の寮長は女の人だったわよ。美人の」

「まじでっ？」

「何興奮してんの……」

「年上の女・寮長・美人」

「だから何？」

「イコール浪漫」

そう、男の浪漫である。

じとつとした目で見ないでいただきたい。

「知ってるか？ 美人が嫌いな男なんて、ほとんどいないんだぜ？」

紅野明日香は溜息混じりに、

「そうらしいわね」

「寮長かあ、どんなだろうな」

「まあ、そのうち会えるんじゃない？」

「ああ、楽しみだぜ！」

そして紅野明日香は、一つ大きく息を吐くと、

「それじゃ、ここで」

「おう」

「また明日ねっ」と手を振って、

「ああ。おやすみ」と返してやる。

紅野明日香はふふと笑い、機嫌良さそうに女子寮があるらしい方向に走って消えた。

「さて」

俺は寮の玄関先で、固く閉められたプロテイン入りドリンクの入ったペットボトルのフタを開けて、中身を飲んだ。

「まっず」

戦慄の不味さ。

しかし、350円をムダにするわけにはいかない。俺はそれを飲み干し、後、自分の部屋に向かった。

——夢を見た。

その世界は、暗くて、その暗さが、かえって彼女の白い肌を眩しく見せた。

揺れる視界。走っている。何度も振り返りながら。

俺の吐く息の音だけが、妙に大きな音で、他の音を全てかき消していた。

彼女が何か叫んでいる。

叫んでいる彼女を見たわけではないし、何も聴こえないけれど、そういう振動が……わけのわからないリアルな感覚を持って伝わってくる。

彼女は——誰？

誰だ……。

目が覚めたのは、午前五時半。早朝だった。

遅刻にならないギリギリの時間が八時半、学校までの所要時間が三十分。なので、これは超早起きだ。やはり、日が沈むのが早いと街が眠るのも早い。そうなると俺の寝る時間も早まるというものだ。紅野明日香と別れた後に、部屋に戻って、娯楽品とか何も無いので、所在無くゴロゴロしているうちに意識を失っていた。

布団も出さずに眠ってしまったので、眠ったのは六畳敷かれた畳の上。そして起きて、今は部屋に備え付けられたバスルームでシャワーを浴びている。所謂お色気シーンというやつか。

俺は男だが。

ところで、何か夢を見ていたような気がする。

だが、どんな夢だったか思い出せない。

モヤモヤする。湯気並にモヤモヤだ。思いついたダジャレをメモする前に忘れてしまった時と同じくらいにモヤモヤする現象だが、どう頑張っても、俺が忘却した夢を思い出すことはない。何せ、自慢できるくらいの低スペック脳みそだからな。諦めるしかないだろう。

「よし」

俺はお湯を止めて、風呂場を後にする。

部屋に出て、開いていたカーテンから外を見る。

少し明るくなってきた世界。

風車の町。

坂を駆け上っていく風が、もう風車を回している。というか、一日中、風車が回っているんだっただな。

一日一度きり、少しだけ風が弱まる時間帯があつて、その時に飛行機が離着陸したり、船が停まったりして、人や物資が出入りするらしい。

俺も、一昨日の夜にその人や物の出入りに乗っかって、この街に来た。

この街と外を結ぶ唯一の公的な交通機関である船を利用した。

街の東側にある隙間の崖。

ランドルト環（視力検査とかでよく見るC字のアレ）みたいな地形の隙間に接岸して、すぐに下船。急かされながら街へと続く道を歩いた。この時、誰かが吹き飛ばされないように、下船した二十人くらいで手を繋ぎながら進むという、妙なシチュエーションがあったりする。

この時、妙な団結が生まれたり、生まれなかったり。

で、その街へと続く道は、両側の崖がどんどん迫ってくるみたいな感じで進むほど狭くなっていて、少し怖かった。

逆に言うと海側に向かって少しずつ道幅が広がっている形で、

その街に入る者には圧倒的な圧迫感を与える仕様だ。

そして、圧迫感だけではない。

強風も襲ってきた。

船に同乗し、街の入口で別れた気の良さそうなおっちゃんの話だと、風が弱まった状態であの風らしい。それは、もう、何かに掴まっ
ていないとあっさりと吹っ飛ばされそうなほどの風。

強い追い風でなびいた俺の短い髪に引っ張られた毛根が悲鳴を上げるくらいの風だった。あれで、まだ弱い方だというのだから、強い風が吹いている時にあの場所に行ったらどうなってしまうのだろうか。おそろしい場所である。

風速は、何メートルくらいだろ。

だいたい秒速三十メートルくらいだろうか。

よくわからんが、とにかく直立姿勢を保てないほどの風だった。

そうだな、紅野明日香と出会った時の屋上で吹いていた風よりも二割増しくらいの強さだ。

俺がウサギだったら、耳で羽ばたいて空を飛べそうな感じのな。

——って俺ウサギじゃねえし、つかウサギでも飛べるかつ。

自分の心の中でツツコミを入れて虚しくなった。

朝食。

食堂はガヤガヤと喧騒に包まれている。

寮の全ての人間が、朝食を食べに来ているのだ。

長いテーブルが規則的に並べられていて、調味料も並んでいる。

大人数での賑やかな朝食。

だが、一昨日引越して来たばかりの俺には仲の良い友達とか居るはずもないので、一人での朝食だ。

「いただきますっ」

俺は言った。

寮長の話では、「この寮に暮らすならば、必ず朝食を摂らなければならぬ」という絶対のルールがある」のだそうだ。

元々、俺は朝食は摂る派なので、全く困らない。というか黙ってても朝食が出てくる環境なんて、前の学校に居た時よりもむしろ素晴らしい。自分で作ったり買ったりしなくて良いなんて、そんな贅沢して良いのって感じた。肩幅くらいの盆に載ったバランスの良いジャパニーズブレックファーストがまぶしい。キラキラしてる。

ごはん、ワカメ入りみそスープ、魚の干物、冷奴、刻まれたキャベツたち。そしてイチゴが、ごとりと二つ。

「嗚呼、この街は、天国だぜ……」

牢獄だと言った前の学校の連中に反論したいぜ。

確かに、物資が乏しかったり、不自由なことはあるが、もうこの朝ごはんだけで、この街の評価急上昇。

昨日は初日だったから、たまたまの素敵朝ごはんかと疑ったが、二日続けば、もう本物。きっとバランス良好な朝餉が毎日振舞われるのだろう。

素敵だ。素敵以外の何者でもない。最高だ。

ただ、何故か俺は他の寮生たちに避けられているような気がして

ならないんだが、どうだろう。食堂全体で見れば、そこそこ混んでいるのに、俺の座っているテーブル周辺だけ、寂しい。周りに誰も居ない。

まるで、ミステリーサークルの中に一人置き去りにされた宇宙人のようだ。

たとえば、ずっと誰とも仲良くなれないまま、この街で日々を送ることを考えれば、なるほどソレは牢獄だ。俺は立ち上がり、適当な誰かに話しかけることを決意した。

少しでも気さくな人間であることをアピールして、一刻も早く馴染み、溶け込まなければなるまい。人間社会に溶け込むのは宇宙人にとっては、実に初歩的なこと。

——って、俺は宇宙人じゃねえだろ！

俺は少し歩き、一番近くに居た寮生に話しかけようとした。

「あのっ」

すると、

ササササッ！

あからさまに避けられたぞ……。

何故だ。

「あ、おい、そのの」

「ヒィ——！」

サササササッ！

ええ？ 何これ。

俺が宇宙人であることが見破られ——って、だから宇宙人じゃねえよ。

「……………」

静かだった。

どうしよう、寂しい。何で俺避けられてるんだ。そんな悪いことしたんだろうか。普通、転校生とかには、皆もつと優しく話しかけたりしてくれるはずじゃないのか。何なんだ、この現象は。

頭の上にクエスチョンマークが浮いてるぜ！

俺は席に戻り、残された朝ごはんを食べ終わると、

「ごちそうさま……」

ぼそりと呟き、食べ終わった食器を片付けようとトレイを持って席を立った。

と、その時、一瞬、食堂が静まり返る。

何なんだ、一体！

俺が何をしたっ！

さて、気を取り直して、今日も登校。今日も今日とて風が強い。空飛んで行きてえ、とか思う。

「はあ……」

急な坂道手前の、緩やかな坂道に並ぶ商店街から、坂を見上げて思わず溜息。

転校初日の昨日は、ついつい前の学校の時の習慣があふれ出してしまい、十五分前に寮を出たのだった。

それじゃあ当然間に合わない。学校まで三十分はかかる。

坂道ダツシュなんて拷問的な登校をする気はさらさら無い俺は、時間に余裕を持って出ることになろう。

遅刻魔でサボり魔だった俺は、生まれ変わるんだ。更生して、この街から元の街に戻って、平和に暮らすんだ。そのためには、一日の積み重ねが大切なのは、もはや火を見るより明らか。

初日はいきなり遅刻をしてしまったが、あれは故意ではないのだ。とにかく早々に教師陣に更生をアピールして、仲の良い友達でいっぱいなの前の学校に戻りたい。朝ごはんが出てくるシステムだけテクアウトできたら言うことないんだけどな。

と、その時だった。

「……あ、達矢くん」

「ん？」

名前を呼ばれたので、声のした方へ振り向くと、

「やつぽー」

女子が手を振っていた。

「えっと、級長だ」

視界の中心に居る女の子は、こくりと頷いた。

そう。伊勢崎志夏。美人な級長さんだ。

「おはよう」

「おはよ。よかった。憶えててくれて」
歩きながら、話す。

「いや、俺もついつい『級長』って言うてしまったことを後悔している」

「え？ 何だよ」

「何かボケればよかったかなって」

俺は女子にツツコミを入れてもらいたがる悪癖を持っているので、級長のツツコミスキルを計ろう、なんて思っていたのだが……。

「ボケる？ どんな？」

おお、降って湧いたようにツツコミスキルの計測チャンス。

「ほら、級長じゃなくて、モンシロチョウとか」

「ん、他は？」

うえい、厳しい子！

ツツコミを入れるに値しないと判断されただ！

さすがだ。さすが肩書きに「長」という字を持つだけのことはある！

「九官鳥とか」

「なるほど。人でないのに、人を模倣しようとする存在、か。さすがね。他には？」

いや、頼むからツツコミを入れてください。頷きとかいらんいで。俺はツツコミが無いと生きていけない人なんです。ツツコミという名の水を下さい。

「手帳とつてちょー……とか」

「……………」

首をかしげてらっしゃる！

わざとか？ ダジャレには冷たい扱いを運動を推進する委員会か？
そして俺はボソリと、

「……早朝」

「ハズレ」

ハズレって何だよ。

「盲腸」

「それも違う」

「じゃあ、級長じゃなくて寮長」

「ハズレ……だけどある意味正解」

「え？ どういうことだ？」

「私、女子寮の寮長もやってるのよ。だから、まあ正解よ」

何だと。じゃあ、昨日別れ際に紅野明日香が言っていた美人な寮長ってのは、志夏のことだったのか！

既に会ってるんじゃないか、あの性悪女めっ。何が「そのうち会えるかもね」だ。俺はてつきり、美人で年上でグラマラスな姐さんだとばかり思っていたのにつ！

「どうしたの？ 険しい顔して」

「いや、ちよつとな。それよりも、何が正解だったのか教えて欲しいんだが」

すると志夏は、

「ああ、えーとね。私が想像したのは、ロココ調って言葉なんだけど」

とか言った。

「そんなの当てろって方が無理だろ。っていうかロココって、この国の何だよ」

「十八世紀のフランス等の建築様式よ」

真面目に答えるんかい。

有名なハワイの料理よ ↓ それロコモコやーんとか言いたいのに！。

「あ、はい。知ってます。ロココ」

「そう」

ツツコミスキルは、未知数だった。

というか、そもそも、ツツコミという概念が彼女の中に存在しているのかも疑問だ。見たところ真面目そうだからな。あまり一緒にふざけてくれなさそうだ。

「ところで達矢くん」

「何です？」

「寮とか学校には、もう慣れた？」

「劇的な環境の変化に一日で適応できるような奴がいるなら、そいつは生身で宇宙空間を飛び回って小惑星でキャッチボールくらいはできるだろうな」

その時、級長センサーにビビビと来たらしい。

志夏はピンと背筋を伸ばして立ち止まり、俺を指差した。

「つまり、問題を抱えているのねっ」

そして同時に通り過ぎる強風。短めの髪が揺れて何だか格好良い瞬間だ。

「まあ、そうだな。問題というか……」

「何？　いくらでも相談に乗るわよ？」

「と、とりあえず、歩きながら話そうぜ。遅刻しちまう」

「あ、うん」

二人、並んで歩き出す。

「それで、何？　問題って」

「実はな」

「うんうん」

「何故か、俺は皆に避けられているみたいなんだ」

「ああ、まあ、そうねえ……」

「そうねえって、何か知ってるのか？」

「そりゃね、普通に考えれば、転校初日にいきなり呼び出しくらつて、風紀委員と火花散らしたら、そりゃ皆怖がって近づけないわね」

「え？　ってことは……」

そういうことか。俺はとんでもない不良だと思われていたのか！

「昨日の朝、放送で呼び出された後、何言われてたの？」

「いや、単純に遅刻して屋上にいたら校内放送で呼び出されて、すぐに教室に向かって……」

「じゃあ、風紀委員との話は？ あ、風紀委員って、上井草さんのことよ？ わかる？」

「そりゃ、わかるけども……」

「聞いた話によると、昇降口で火花散らして睨み合って、あの上井草さんを退けたって。しかもを戦わずして退けたって……。本当なの？」

「んん？ 何となくニュアンスが違う気がするぞ。俺はへこへこ謝っただけだ。どこからどうなって武勇伝に昇華した？」

「確かに、昇降口で少しだけ言い争って、戦わずに終わったけど、そんな格好の良いものじゃない」

俺は説明した。

「そっか。でも、まあ、皆が達矢くんを避けてるのは、達矢くんが上井草さんと互角に渡り合ったってという情報が流れてるからっていうのが大きいと思うわ」

なるほど。

「なあ、級長」

「何？」

「どうすれば、皆が俺を避けなくなりますか？」

「そうねえ。上井草さんに明らかかな形でボロボロに負かされるのが、近道だと思うわ」

「上井草さんって、一体、何者なの？」

「そうね、神話とかで言うところの……」

「言うところの？」

「冥界の支配者……かな」

「ハデスみたいなもんか」

要するに、恐怖の番長みたいなものだろう。

「あら、詳しいの？ 神さまのこと」

「かじったくらいだが、割と神さまとか好きだぞ」
すると嬉しそうに、彼女は言った。

「そっ、良い友達になれそうだわ」

「そうつすか……」

さて、所変わって、教室。

級長は教室前で「がんばってね」という言葉を残して廊下を颯爽と歩き去って行った。朝のホームルームの前に職員室に寄る用事があるんだそうだ。

で、級長のことは置いておいてだ。

俺の目下の目的はというと、「いかに負け犬になるか」ということなわけ。どういうことかといえば、上井草まつりと対等だと周囲に思われているらしく、それはつまり、とんでもない不良だと思われるということと同じだというのだ。

あるいは、俺が上井草まつりに目を付けられているという事実だけで、俺に近付くことはすなわち風紀委員と敵対するに等しいというところかもしれない。

いずれにせよ、上井草まつりという女子に、ボロボロに負かされることで、寮生やクラスメイトとの距離が限りなく小さくなるという計算式が成り立つ。

だが待て。

女子にボロボロに負かされる？

そんなものを俺のプライドが許すとても？

確かに昨日は面倒だからヘコヘコと頭を下げた。しかしながら、それは争うのが面倒だったからであって、心から屈したわけではない。

そもそも、俺のお気に入りの靴を、こともあるうに焼却炉に投げ入れた女だぞ。女子に暴力ダメ・ゼツタイの旗印を掲げたがる俺ではあるが、上井草まつりという女子に対する憎しみに似た感情は既に鍋を焦がすレベルで煮えている。

だいたい、上井草まつりが、番長として君臨してさえないなければ、俺がクラスメイトや同じ寮の皆から避けられることもなかったんだ。

そう、それが憎い。ならば、そうだ。答えは出ているじゃないか。上井草まつりを今の地位から引きずり降ろせば良い。

フッフ。我ながら名案だぜ。
と、その時だった。

「ね、ねえ。何か、怒ってる？」

窓際の席の椅子を引きながら、挨拶もせず紅野明日香は訊いてきた。どうやら思考が顔に出てしまっていたようだ。

「あ、よう、おはよう。紅野」
挨拶。

「う、うん。おはよ」

「怒り……そう、怒りに近い何かがそこにはあった。しかし、それはもう、崇高なる目的に向かう熱き情熱となりて——」

「日本語しゃべってよ」

「日本語だろうが」

「要するに何なの？」

「このクラスで幅を利かす、風紀委員が気に入らない」

「上井草まつりのことね」

「そうだ。ハデスだ」

「あ、そっぴや達矢、昨日靴焼かれてたもんね。仕返しするの？
手伝うよ？」

「仕返し……そうか、仕返しか。だがお前も知ってる通り、俺は頭が悪い」

「そっなの？ 悪いの？」

「ああ。悪いんだ。そこで、仕返しの方法を一緒に考えてくれまいか」

「ふふつ、そんなのお安い御用——」
ばしんつ。

不意に音がして、俺の座っている机が揺れた。
前を向くと、視界いっぱい風紀委員の顔。
超にらんでいた。

修羅のごとき瞳で。

「転校生二人で何の相談かしら？　ゼーんぶ丸ぎこえだっただけど。共謀罪でしょっぴくわよ？」

「そうか。聞かれていたか。ならば、話は早い」

「何よ」

「風紀委員は、何をされるのが一番嫌がる？」

俺は、風紀委員にそう訊いた。

「それを、あたしに訊くの？　馬鹿？」

「あいにく、俺は遠回りや隠し事や変化球が苦手だな
実は苦手じゃないけどな。」

「あら、奇遇ね、あたしもそうよ」と、まつり。

「あ、私も私も」

紅野明日香は割とオールマイティに打ち返すと思う。何となく。

「どう？　ここは、転校生とあたし、どちらが上位の存在なのか、さつさとハッキリさせたくない？」

「暴力以外でなら、構わんぞ」

すると上井草まつりは、

「ならば……」

「ならば？」

「野球で勝負！」

上井草まつりはそう言って、俺をまつすぐ指差した。
えっと、野球？

全校、一時間目が中止された。三人で行う運動会が始まるらしい。何でこんなことになってんだ。

「……………」

無言で準備運動を終わらせた選手三人……。

体育着に着替え済み。

まつりの左手にはグローブ。右手に軟球。

紅野は両手でバットを握っている。

……どうなの、これ。

風紀委員の上井草まつりは、普段どれだけヤンチャやってるんだ。普通に考えて、どうやれば授業中に私用で校庭を使用する許可が下りるんだろつか。普通じゃない。マトモじゃない。何者なんだ、上井草まつり！

「そろそろ始めるわよ」

まつりは半袖体育着の袖をまくりながら言った。

ていうか、三人でどうやって野球するんだよ。

「ルールを説明するわね」

「おう、頼む」と俺。

「わかりやすくお願いね」と紅野。

上井草まつりは、「コホン」と一ツ咳払いして、続けた。

「種目は野球。あたしがピッチャーで、二人には一打席ずつ打ってもらうわ。ヒット一本でも打てればキミたちの勝ちで良いわよ」

紅野明日香は、

「それで、こっちが勝ったら？」

すると上井草まつりは、

「あたしが負けるわけないわ。だから、何でも良いわよ。何でも、いくらでも言うこときくわ」

とか言った。自信があるようだ。

「手下になるってことね。燃えるじゃない」

「逆に、キミたちが負けたら、あたしの手下になってもらうけど」
「いいわよ」

紅野明日香も自信ありげに返した。

「自信ありげね。楽しみだわ」

二人の背景に、ゴオと炎が燃え上がった気がした。

そして、上井草まつりは、早歩きでマウンドに上がり、キャッチャーを座らせて投球練習を開始した。

ダイナミックなフォームから剛球が繰り出される。長身を生かしたオーバースローで、角度ある直球。というか、

ブビエン！

なんか意味不明な擬音が聴こえてきた。

ボブウシュレ！

球威が、半端ではないぞ……。

何者だ、上井草まつり！

「さあ、もう肩はあつたまったわ。敗北したい方からバッターボックスに入りなさい！」

すると、紅野明日香が命令してきた。

「達矢、あんたから行きなさいよ」

「うええ？ 何で……」

「私が出るまでもないわ。あんなヘナチョコストレート、あつさり弾き返してやりなさい」

「はっ！ 言ってくれるじゃない。ただ、勘違いしてもらっては困るわ。あたしが投球練習で本気を出すとしても？」

マウンドからそんな言葉を発していた。

「だそうです」

「いいから、さっさと行きなさいよ」

「はい……」

俺は手渡されたバットを握って、バッターボックスへと向かう。マウンドには、上井草まつり。

他に、守備に就いているのはキャッチャーだけ。

まるで死刑台とかに向かっているような錯覚を感じるんだが、気のせいだろうか。

「直球三球で終わらせてあげるわ!」

上井草まつりは、俺にボールを握った右手を伸ばし、挑発的な姿勢。

俺も黙って右打席に入り、バットを持った左手で外野を指し示した。

ホームラン予告だ。

そして言うのだ。叫ぶように。自分を鼓舞するように。

「……………こいッ!」

上井草まつりは大きく振りかぶる。

そして、体を大きく捻って……。捻って、捻って……。?
捻りすぎだろう……。

かつてメジャーで活躍した某日本人投手のようなフォーム。
所謂、トルネード投法!

「っはっ!」

息を吐いて、一気に溜め込んだパワーを開放し投球した。次の瞬間っ!

ひゅーん。

目の前を、何かが通り過ぎていった。そして、強風。後、轟音。
ビュエン!

ボールがミットを叩く音である。

「は?」

思わずそんな声が漏れる。

何これ。打てるわけないんだけど。

ていうか、今、たぶん、目の前通り過ぎたよね。危険球だよね、これ。

「チィ、惜しい」

惜しいって、あれっすか。俺に当てる気でしたか?

逃げたい。恐ろしい。

「ワンボール」

捕手の男がカウントをコールする。

「……………」

言葉が出ない俺。

おそろしくって、おそろしくって……………言葉に、できない。

「ラーラーラー、ラーラーラー」

調子外れに歌った。

するとマウンド上のまつりは、顔をしかめた。

「……………何よ？ 大丈夫？ 頭」

ダメかもしれない。

で、二球目、三球目。

バシユウエン！

「ストライク」

ドビュツシイ！

「ワンボール、ツーストライク」

あっさりと追い込まれてしまった。ど真ん中のストレート二球で。

「こらあ、達矢！ 振らないとあたんないわよ！」

んなこと言ったって、コイツの球やべえぞ。

体に当たったら骨折れるレベルだ！

マンガみたいな直球持つてやがる！

「行くわよ、最後の一球！」

ダメだ。俺ダメだ。完全に吞まれている。振らなきゃ。とにかく

振らなきゃ、このままじゃ最悪の見逃し三振だ。

まつりは、思い切り腕を振って投球。

投球後、体が一塁側にフラツと流れた。

「てやあ！」

そして俺は、外角クソボールを腰の引けた情けないスイングで振って三振した。

「最っ低……………」

紅野の怒りの色を帯びた眩きが、耳に届いた。

「ふん、百年早いよ、雑魚が！」

上機嫌に言い放つ上井草まつり。

悔しい。だが悔しいが、確かに百年くらいは早かった。

あんなボール打てるものか。俺は、野球なんてやったことないもの。せいぜい友人とキャッチボールしたことがあるくらいのものである。

紅野明日香は、可愛いそうなものを見るような目を向けている。

「いや、お前もバッターボックスに入ってみればわかるぞ。あれは泣きたくなるほどに剛球だ」

「ちなみに達矢、野球の経験は？」

「ほとんど無いです。プロ野球中継とかは見たとあるけど」

「じゃあ、無理ないわね」

「お前は、あるのか？ 経験」

「元・女子ソフトボール部よ」

「それは、期待して良いんだな？」

「当然。子分の尻拭いくらいしてあげるわ」

いや、あの、子分になった記憶は無いんだが。

紅野明日香は俺からバットを取り上げると、それを肩に担ぎ、右打席へと向かった。

そして、バッターボックスをならした後、まつりに向けてバットの先を向けた。

「上井草まつり！」

「何よ。早く構えて。肩が冷めちゃうじゃないのよ」

「あんたの投球フォームには、致命的な欠陥があるわ！ それをこれから教えてあげる！」

「どうせ、ブラフなんですよ。そんなもので、あたしがフォームを乱すとても？ それとも、あたしの肩を冷やしてコントロールを乱させる気？ 卑怯だわ」

「卑怯なことなんてしないわ。与えられたルールの中で、戦う！」

紅野明日香は隙の無さそうな構えを取った。いかにも打ちそうだ。上井草まつりは、ふっと息を吐き、振りかぶり、体を大きく捻る。そして、

「ふっ、それじゃあ、行くわよっ。打てるものなら、打ってみなさいっ！」

投げたッ！

ヒュン！

「ひい」

何故か俺がびびっていた。

バジューン！

軟球がミットに収まる音である。紅野の顔面スレスレを通るピンボール。

しかし紅野は臆してはいなかった。避けようとする素振りも見せなかった。

俺の場合は、ボールの軌道が見えなかったからだだったが、紅野の場合はどうだろうか。

「ボール」

カウントをコールする捕手の男。

「ふんっ、この程度のピッチャーなんて、プロに行けば大勢いるわ」
いや、紅野。お前プロじゃねえだろ。っ！かプロの球打てるのかよ。

「減らず口を……」

そしてまつりは、次の一球を、投げるため、体を大きく捻り、打者に背中を向ける形に。で、溜め込んだ回転力を一気に解放、腰、腕、肘を回転させ、手首、指と力を伝える。

そうして放たれたスピンの掛かった剛速球を、紅野明日香はバットに当てた！

コッソ。

というかバントした。打球は三塁線を転々とする。フェアゾーンを転がる。

その手があつたか！

「え……」

そして、一塁へ全力の猛ダッシュを見せる紅野。守備に就いているのはピッチャーと捕手のみ。

まつりは慌てて捕球して、一塁に投げる素振りを見せたものの、送球する先には無人。ボールを持った右手を力なく垂らした。

ベース上を駆け抜けた紅野明日香は、一塁ベース上に戻り、その上に乗った。そして、まつりを指差して、

「私の勝ちねっ！」

大きな声で言った。さらに続けて、

「あんたのフォームには致命的な欠陥がある！ それは投球後、体が一塁側に完全に流れてしまう事。剛球は投げられるけど、守備への反応が遅れる！ だから、三塁以上にボールを転がせば、この通り。つまり、そのフォームで投げ切るには下半身の力が弱すぎるのよっ！」

とか言いたい放題。

体をわなわなと震わせる上井草まつり。そして、

「卑怯よ！」

叫んだ。

「何が卑怯なの？」

「バントでヒットなんて！」

「バントヒットを狙うのだって立派な戦術でしょ？ 寝ぼけた事言わないで」

「なっ……ず、ずるいつ……」

「ルールを提示してきたのは、風紀委員の方でしょ？ それを卑怯？ ずるい？ 自分で決めた事を守れないような人間に、風紀を守る資格は無いわ！ 今日から私が風紀委員になってあげる！」

一瞬、場が静まり返り、直後ざわざわした。

男子生徒の一人がこう言った。

「おい、風紀委員が負けたぞ。ってことは、新しい風紀委員は、あ

の紅野とかいう転校生？」

ちよつと待て。あれか、風紀委員は国王みたいな立場なのか？

それとも学内最強が風紀委員になるみたいなバトル漫画みたいな伝統でもあるのか。

別の男子生徒も呟く。

「さすが転校初日に呼び出しくらっただけのことはある。こいつらやっぱり、ただものじゃねえ」

もしかして今、俺も周囲をビビらせているのだろうか。

俺は何もしてないんだが。三振しただけなんだが。

「こんな負け、認めない！」

「見苦しいわよ！ 上井草まつり！ いえ、元風紀委員！」

もう風紀委員になったつもりでいやがる。

「くっ、そ、そうだ、そうよ。同じ条件で、勝負。もう一度やるんじゃないわ、今度はあたしが打って……そう、まだ勝負は終わっていないわ！」

「そんな、ジャンケンに負けて『今の練習ね』みたいな小学生的展開が許されると思ってるの？」

「こ、今度は立場を逆転して、あたしがバッターボックスに立つわ！」

「余程悔しかったのね……可哀想に」

「くっ」

屈辱だ、とでも言うように歯を食いしばる。

そして、

「お願い、します……勝負して下さい……」

小さな声で、目を逸らしながら言った。

「だってさ。どうする？ 達矢」

ここで良い笑顔をしながら俺に意見を求めて、再戦を渋るところとか……紅野さんの場面展開力が明らかにいじめっこのソレなんだが、どうしてくれるよう。

俺としては、もう紅野のおかげで靴を捨てられたことの仕返しは

済んだと思うが、まつりが戦いたいと言っているわけで。

それに、俺に断る権利は無い。

個人的な一打席勝負ではボロ負けの情けない三振だったしな。

「やれば良いと思うぜ」

他人事みたいにして言ってみた。

「ありがとう！」

上井草まつりは言って、再び半袖体育着の腕をまくると、バットを握って素振りを始めた。

「二打席勝負でお願い！ 公平にね」

「だそうだ」

俺は紅野に言った。

「そだね、良いんじゃない？」

紅野は他人事みたいにして言った。

「ちなみに、紅野ってピッチャーできるの？」

「嫌よ、ピッチャーなんて。達矢がやるべき」

「え」

「私はピッチャーなんて出来ないから、だから達矢に訊いたのよ？
どうするかって」

「まじ？」

「そりゃそうでしょ。ピッチャーだけはね、選ばれた人にしかできないポジションなのよ。私なんて本職セカンドだし、ピッチャーやってみたことあるけどストライク入んなかったし」

「いやいや、だったらそもそも俺野球未経験だし」

「とにかく期待してるわ。てか大丈夫でしょ、タツヤって名前だもの」

「どういう理屈だ」

「速い球期待してるからね」

紅野は言って、ドン、と強く俺の背中を押した。

あいにく、速球への期待には応えられそうにないぜ。

で、そんなこんなで俺は今、マウンドに立っている。

俺の持ち球は友人とのキャッチボールで身に付けたナマクラカーブと所謂ホームランボールと呼ばれる種類の棒球ストレート。

「さあ、来おい！　っしやああああ！」

視界には、バッターボックスに超ガニ股で構え、バットを立ててくるくる回している女が一人。外人バッターみたいな構えだな。

ちなみに、キャッチャーは先刻まつりの剛球を受けていた男子である。野球部らしい。となれば、ノーサインでも俺のナマクラカーブくらいはあつさりキャッチするだろう。

さらに、俺の予想だと上井草まつりは絶対に変化球とか打てないと思う。そういう痛快な種類の人間のはずだ。そうであつて欲しい。紅野明日香みたいなプチ万能感があつたら、何となくガツカリするぜ。

「頼んだわよ！　達矢！」

紅野の応援。

「おう、任せておけ」

さてどうするか。ま、考えるまでもないな。当然、全部変化球でいくべきだろう。絶対に打たれないという確信がある。

一球目。

俺は振りかぶり、

「それっ！」

掛け声と共に自慢にもならないヘロヘロカーブを投げた。正直、あまり良いフォームではないだろう。

ブン！

空振り。

「ちょ……今、曲がつた！」

そりゃ、カーブだからな。一応。

卑怯だとは言わせないぜ。変化球が卑怯だなんて言ったら、野球の試合が乱打戦ばかりでとてもつまらないものになってしまうだろう。

俺はキャッチャーから返ってきたボールを受けて、すぐに振りかぶる。

そして投げる。

二球目もカーブ。

ブンッ！

空振り。

「何で！ 何で曲がるのっ！」

カーブだからだったの。

三球目。当然カーブ。

「ちょっ……」

ブンッ！

空振り。

まず、一打席目は三振。

「普通最後の一球くらいはストレート投げるもんでしょう！」

そんなのごく少数の人々の常識だ。

「ほらほら、二打席目だ、さっさと構えろ。肩が冷えちまう」

俺は言った。

「こ、こいつ……」

もう完全に、俺のペースだった。そして。

ブン………！

ブン………！

ブン………！

「ストライク、バッターアウトオ！」

勝った。割とあっさり。自分の力で上井草まつりに勝利した。俺のお気に入りの靴を焼却した上井草まつりに。うれしい。

「最低！ バカ！ あたし、変化球苦手だって言ったじゃない！」
まつりは言った。

「現代の戦は情報戦なんだ。そして現代でなくとも、相手の弱点を突くのは兵法の基本！」

「て、ていうか騙したわね。キミ、変化球苦手とか言ってたのに……言ってた……のに……」

地面に両の手と膝をついて、悔しそうに、悲しそうに呟くまつり。そんな彼女に、俺は言ってる。

「戦は、騙し合いだ！」

そしてさらに、

「戦いは、始まる前から始まっていたんだよ！」

「わけわかんないけど、だからこそ更に悔しいっ！」

グラウンドをグーで殴っていた。痛そうだと、そこで紅野が……

「決まったわね。これで私たちが、新しい風紀委員よ！」

高らかに宣言。

後、歓声。

「うおおおおおおお！」

ギャラリ―だった生徒たちの、歓声が響いた。

「圧政はここに終わりを迎えたああ！」

「もう上井草さんに怯えなくて済むんだ！」

「俺たちは、自由だああああ！」

「紅野&戸部のコンビバンザイ！」

「二人ともタダモンじゃねえええええ！」

次々と、紅野と俺を称える声が届いた。

上井草まつりは、

「——くうう！」

などと犬の鳴き声のごとき声を上げ、涙を隠しながら走り去り、勝者である俺たちの周囲には歓喜の輪ができた。解放者、とかそういうことなんだろう。

紅野明日香は大きな声でこう言った。

「この学校の風紀は、私が守るっ！」

こうして、紅野明日香は風紀委員長という名の権力を手に入れたのだった。

「やれやれ、一体何なんだこの学校は……」

俺は呟き、人ごみを抜け出し、人波から離れようと歩き出した。

教室に戻った時、窓から見える校庭では、未だに新たな支配者に湧いている民衆が見えた。だが、それよりも気になったのは、何故か俺の席に誰かが座っていることだ。

背筋がピンと伸びた綺麗なシルエット。それは女子で、髪が短かった。

「あの」

話しかける。すると女子は言った。

「嵐がくるわね」

「は？ 突然何だ。っていうかそこ、俺の席」
知っている女子だった。

立てば寮長、座れば級長、歩く姿は伊勢崎志夏。

志夏は、座ったまま俺をじっと見つめて、

「ほんと、達矢くんって気まぐれなのね」

と、怒ったように呟いた。

一体何なんだ。ていうか、言わせてもらおう。

「気まぐれで何が悪い」

「うつん、褒めてるの」

何い、とてもそうは思えんが。

「ねえ、達矢くん」

「何だよ」

すると彼女は立ち上がり、

「屋上、行かない？」

「何で」

「いいから」

そして、彼女の冷たい手は、俺の手を握った。

屋上は、昨日と同じように、強風が狂ったように吹き荒れていた。

何で俺は、級長に引つ張られて屋上に来てしまったんだろうな。

ただ、断る理由も特に無いし、また、志夏が理由もなく俺を屋上に連れて来るとも思えなかった。志夏がここに俺を連れて来たのには何か理由があるはずだ。ただ、その理由を詮索したとして、彼女は答えてくれるだろうか。

答えてくれる気がしない。

仮に答えてくれたとしても、昨日今日出会ったばかりの俺に、彼女の言うことが理解できると思えなかった。それでも一応、訊ねてみるのが礼儀というか、セオリーみたいなものだと思う。

「で、何で屋上に？」

「まあ、級長としては、早く街のこと知ってもらいたいから、街全体が見渡せる屋上で、この街のことを個人レッスンしようかなって、個人レッスンだと？」

「何だ、その、ドキドキシチュエーションは！」

叫ぶように呟く俺。

「ん？ 何て？ 風の音で聴こえなかった」

「いや、何でもない。こつちの話だ」

「そう」

「まあ、実は昨日既に屋上には来ていてな、だいたいの街の構造は理解してるぜ」

「あ、そうなんだ。でも、一回見たくらいでは、わからないことも結構あると思うから、ね？」

何が何でも説明したいらしい。

「じゃあ、折角だから聞かせてもらおうかな」

「うん、じゃあ、手前からいくよ」

伊勢崎志夏は嬉しそうに言って、説明を始めた。

「学校まで続く坂道には、風車が並んでるのよ」

「見りゃわかります」

「じゃあ、どうして風車が回ってると思う？」

「回りたいからじゃないっすか？」

「ハズレ。風車の意思よりも人の意思の方が強いわ」

「——って風車に意思とかあるのかい」

「実はね、この街は風力発電でこの街全ての電力をまかっているの」

俺の質問、というかツツコミ、スルーですか。

「つまり、どういうことだと思う？」

知らんがな。

「風車が止まれば、街は電力を失い、文化的な都市生活ができなくなるのよ」

「元々この街に文化的都市生活なんてあるのか？」

「え？　ここって文化的じゃないの？」

「まあな。まず車が無い。街の外に出られない。携帯は圏外。それだけで選択肢が限られてしまって、選択肢が著しく限られるってことは文化的でないってことだ」

「で、でも、良い街よ！」

「そうなんだろうけどな」

「つ、次いくわね。次は、麓の商店街！」

「おう」

「どう？　昨日、今日と商店街を歩いてみて、何か感じた事はない？」

「言っちゃ悪いが、ちょい寂れてたな」

「そうよね。でも、それも仕方ないのよ」

「何で」

「何でだと思う？」

何だ、この教師みたいな疎ましい切り返しは。

「……………」

「実はね、最近、街の南側に大型ショッピングセンターができてしまったのよ。一箇所でも揃う上に品質も商店街の品々よりも上。南側を見ると、険しい山を背景に、街一番の巨大な建物が見えた。へえ、大型ショッピングセンターなんて、あるのか。この街のこ

とは事前に調べてきたが、知らなかった。

「それで、お客さんが流れちゃって、商店街全体が大ピンチ。もしかしたら上井草さんが普段より暴れていた遠因かもしれないわね」
「まっつりは、あの商店街の娘なのか？」

「そう。電気屋のね。でも、街の外からやって来たショッピンゲセンターの若い電気屋の方が、圧倒的に腕が良いらしいのよ。それで、色々あって……ね」

「不良化したと」

「いやー、それは元々だったかも」

「そうなのか」

「それで、次ね」

「おう」

「背の低い建物が並んでるところ、見て」

「ああ」

「どうして背の低い建物ばかりなのでしょう」

「風が強いからだろ」

「あ、正解……」

何で落胆したように呟く。どうやら説明したい子らしい。

「じゃあ、何故全部白い家なのでしょう」

「綺麗だからだろ」

「実は、それは私にもわからない」

地中海に浮かぶ白い建物だらけのリゾート島みたいだな。

「……………」

「次、いくわね」

「おう、頼む」

「あ、そうだ。あそこが寮よ。わかる？」

志夏が指差した先には、他の建物よりも大きめの二階建ての建物が並んであった。一つは赤みがかった色、もう一つは薄い水色。他が白い建物なので、よく目立つ。前者が女子寮。後者が男子寮だろう。

「縦長なのは、強風で倒壊しないためで、実は女子寮の方が大きくて、内装も立派だったりするの」

「何だそれは。差別だ!」

「いいえ、違うわ。じゃあ訊くけど、女子が男子トイレの小便器で用を足せるともっ?」

「いや、そんなの、想像させるな」

「いうか、女の子の口からそんなこと聞きたくない。」

「そう、男子用小便器はスペースをとらないからたくさん並べるこ
とができる。でも、個室はどう? 少なくとも小便器よりもス
ペースをとるわ。そうなった時に、トイレを同じ広さで設計したら、
当然、置ける便器の数が変わってくるでしょう?」

「平等にするには、女子の方を広くするしかないでしょう!」
すると、あれか。

女子寮の多くはトイレで出来ているとも言うのか。んなわけね
えだろ。何だか、女子を優遇していることを正当化するためのも
つともな理由のような気がする。まあ、それは別に構わないのだが。

「さ、次いくわよ。次は、湖」

商店街の奥、道が途切れた所には、湖がある。湖にも風車がい
つか並んでいて、水の底に基礎を築いて建てられているらしい。

そして、湖には浮島が二つ。丸と三角の島が横に並んで中央に浮
いていた。

「あの二つの島には、何か意味があるのか?」

俺は訊ねたが、

「知らないわ」

「そうか」

「私にわかるのは、そこに湖があることと、水質が淡水であること
くらい」

「へえ、淡水か。海近いのにな」

「地盤がね、超硬いから」

「なるほど」

「そう、そして、地盤が硬いからこそ、あの裂け目」

志夏が指差す先にあったのは、まるで鋭利な刃物で切り取られたかのような、縦二本の直線。

隙間からは、海が見えた。

「強風や高波にも浸食されずに、真っ直ぐでしょう。綺麗よね」

「ああ、綺麗だな」

「だいたい主だったところはそれくらいかな。他に、気になる所とか、ある？」

「特にないです」

「……そう。それじゃあ、戻りましょうか、教室に」

「ああ」

そして二人、屋上を後にした。

教室。

「あ、達矢。どこ行つてたのよ。あんたも胴上げとかされれば良かったのに」

戻るなり、紅野は嬉しそうにそんなことを言った。

「されたのか、胴上げ」

「うん。楽しかったわよ」

優勝監督が受験合格者か。

「落ちたら危ないから気をつけろよ」

「いやあ、気をつけようがないでしょ。皆に上に投げられてるんだから。正直ね、群衆というものの恐ろしさを垣間見た気がしたわ」

「そうか」

「そうよ。しかも、達矢はいつの間にかどこか行っちゃっててさ、助けを求めることができなくて、楽しかったけど、少し怖かった」

「そうか」

「何よ、その気のない返事。私たちは風紀委員になったのよ？ もっと楽しそうにしないよ」

風紀委員が楽しそうにしないやらならないなんて、初めて聞いたぞ。

「えっとー。まず、何を取り締まるっかな。あ、遅刻者根絶なんてどう？」

「やめてくれ。俺は割とあっさりと遅刻する」

俺は言ったが、

「何ですって！ 風紀委員が遅刻するなんて御法度でしょうが！ 正しなさい。風紀委員で遅刻なんて、あの、上井草まつりとかって女と同類よ？」

「だったら——」

「転校初日の屋上での一連のことは、もう無かった事になったの」

「おいおい」

「たった今、風紀委員の権力でもみ消しました。何か文句ある？」

「こいつつ、上井草まつりと同類の論理展開してんじゃねえのか？」

「過去を見つめることに何の意味も無いわ。私たちは、今と未来を見つめるべきなのよ！」

名言っぽく言ってきた。

「ていうか、思ったんだが、風紀委員を勝手に名乗って良いものなのか？ 何か正式な書類とか、生徒会の承認とか必要なんじゃないか？」

「ああ、それ？ いらないみたいよ？」

承認がいらない？

「どんな学校だ、ここ」

「てか、先生が言ってたんだけど、そもそもこの学校には『風紀委員』なんて役職存在しないんだってさ」

「つまり、あれか。まつりが勝手に風紀委員を自称してて、番長として暴れまわっていたと」

「らしいわよ。ね、志夏」

紅野明日香は、俺の横に立つ志夏に向かって言った。

「ええ。そうね。生徒会でも、手を焼いていたから、助かったわ」

「生徒会？ お前、級長じゃ……」

「生徒会長もやってるのよ」

「ただだけー」。

「すると、立てば寮長、座れば級長、歩く姿は生徒会長ということかっ！」

「何言ってるんだかよくわからないけど、確かに私は寮長で級長で生徒会長の伊勢崎志夏よ」

「別に自己紹介しなさいなんて言っていないぜ！」

「……………」

不思議なものを見るような目で見ないでくれ。

すると紅野が窓を指差し、

「飛べっ、達矢」

「――飛ばねえよ！」

ていうか飛ばねばならん意味がわからんわ。

で、放課後。寮に戻つてくると、

「戸部さんマジばねえっす」

玄関でいきなり話しかけられた。妙にイケメンな男子生徒だった。短髪で不良っぽいが、かなりのイケメンだ。

「何だ、お前」

「オレ、心底惚れたっす」

男に惚れられても嬉しくねえぞ。

「で、何の用だ」

俺が訊くと、

「あの上井草まつりに勝つなんて、オレもう憧れっす！」

「いいから、用件を言えっつの」

「オレ、Dって呼ばれてるんすけど、オレを弟子にしてください！」
何だつて？

「断る！」

「何でっすか？」

男子生徒は悲しそうな目をした。

「弟子は作らない主義だ。というよりも、俺は別にそんな大層な人間じゃない。弟子入りするなら紅野明日香にでも言ってやれ。喜ぶぞ」

「ウッス！ わかったっす！」

いきなり寮の玄関でそんな会話が繰り広げられ、置かれた状況の異常さを認識すると共に、何だか面倒な展開に巻き込まれてるような気がして、

「ふう」

俺は溜息を吐いた。

そうして、転校二日目は終わった。

早寝早起きで目を覚ます。

この街に来たのは登校する前の晩、つまり三日前。

三日。たったの三日だ。そのはずなのに、俺は、何故か学校の番長コンビの一角を担ったりしているらしい。

妙に気の合う女子がいたり、色んなことを説明したがる級長がいたり、かつては威張り散らしていた女子とかと出会って、そこそこに楽しい日々になりそうな予感はあるが、何だか言いようのない不安が襲ったりもする。

忘れてはいけない。

この場所が『かざぐるまシティ』と呼ばれる街であることを。

出会いがあれば、当然別れもあるわけで、更生のためにこの街に來ている人々は、更生を完了すれば、街を出て行くことになるんだ。俺は、迷っていた。出会って、仲良くなるのが怖かった。もしも仲良くなって、それで別れが訪れるのなら、もしも、好きになって別たれるなら、と。それを怖がっていたら、何も始まらないし、始まらなければ終わらない事も理解している。しかしながら、理屈ではない気もしてる。

とにかく、

「なるようになるだろう」

俺は、自分を信じて、その時に最善と思える選択をするだけだ。

人生つてのは、そういうもんだろう。なんて、俺みたいなブチ不良が言っても説得力なんてものは無いだろうが。

で、だ。

昨日と同じようにシャワーを浴びて、朝食。

しかし、昨日と少し違うことがあった。朝食のメニューのバランスが取れているのは昨日と一緒である。そして、俺の近くにミステリーサークルができてるのも昨日と同じ。では何が違うのかとさえ

ば……

「戸部サン！ これどうぞっす！」

昨日の放課後、寮の玄関で話しかけてきた男子——たしか『D』と名乗っていた——が、今度は俺に何かを差し出してきて。黄色くて、曲がったやつだった。

「何だ、これは」

「バナナっす！」

「何で俺にバナナを？」

「尊敬してるからっす！」

やはり問題を持つ者が集められる風車の街。こういう変な奴もいるのだろうか。

「あんな……」

「何っすか？」

「こういうものはだな、紅野明日香にでも与えてやれ。あいつなら喜ぶが、俺はバナナをもらっても喜ばないぞ。俺はバナナ一個で十分だ」

「マジっすか。じゃあ紅野サンにあげるっす」

「ああ、そうしてくれ」

そして、俺は朝食に箸をつけた。

「……………（じーっ）」

なんか、すげえ視線を感じるんだが。しかも男の。そりゃまあ、ここは男子寮だから、男子以外の視線なんてほぼ無いのだが。

「……………（じーっ）」

「あんな、そんなんに見つめられると、落ち着かないんだが」

「あ、すみませんっす！」

「っーか、何で、俺にそう、つきまとうんだ？」

「自分、昔、少年犯罪組織のリーダーやってたんす」

何だと。

割とすさまじい極悪経歴じゃねえか。

さすが風車の街。色んな奴が居る。

「そ、そうなのか」

「ええ、恥ずかしい話ですが。それで、この街に飛ばされて来た時には、『この街をシメてやるう』って野心を抱いてたっす」

「ほうほう、それで？」

「でも、それはできなかったんす」

「そりやまた何で」

「上井草まつりがいたからっす」

「なるほど」

「この学校、いや、この街では、上井草まつりが法律だったんすよ」
「彼女に意見できる人間なんて一人もいなくて、いたとしても、すぐに鎮圧されました」

「風紀委員の名の下に、か」

「ええ。オレもボコボコにされました。そして、圧政の中でオレたちはグループを組んで反抗しようと思いました。でも、それもすぐにボロボロにされちいました」

「そうか」

「オレは、それでグループを抜けて更生することを決めたんす。上井草まつりに完膚なきまでに叩き潰されて、ようやく自分の弱さに気付いたんす」

「なるほど。上井草まつりの存在もプラス方向の影響を与えることも、時にはあるわけか。」

「そんな上井草まつりに、転校してすぐに勝利して、風紀委員の座を奪うなんて、オレみたいな常人にはできないことっす」

「こらこら、まるで人を異常者みたいに言うな」

「すみません。でも――」

「だいたい、俺は何もしていない。ほとんど紅野明日香の功績だ」

「そんなことないっす。あの上井草まつりを連続三振なんて、とんでもないっすよ」

「いや、カーブ投げられれば誰でも三振取れるぞ。」

「それで、そんなオレも、今日の午後には、故郷に帰って出直しっ

す。朝、学校に挨拶しに行った後、風が弱まる時、飛行機で帰ります」

「え？」

「帰る前に、少しだけ心残りがあったんすけど、それは戸部サンが先に果たしてくれました」

「心残り？」

「ええ、上井草まつりに、ちょっと痛い目見せてやりたかったんすけど」

「たぶん、返り討ちに遭ってたと思うがな
何となくだが。」

「オレも、そう思うっす」

「……………」

そして、俺はバナナ以外の朝食を食べ終えた。

「ごちそうさま」

言って、盆を持って立ち上がる。

「オレみたいな男の話きいてもらえて嬉しかったっす。あつぎーした！」

「ああ、もう『かざぐるま行き』にならんように、しっかり生きろよ」

「はいっ！」

俺の右手には部屋で食う予定のバナナ。そして左手にはお盆。

「達者でなー」

男に背を向けて右手に持ったバナナを振って、そう言った。

教室。

俺が品行方正にも席に就いて教師がやって来るのを待っていると、ダダダダダアツと、誰かが廊下を走る足音。後、女子の姿が現れた。

「達矢ああああ！」
「ばこんっ！」

駆け入って来た紅野に、いきなり頭を殴られた。
だが大して痛くない。

何か軟らかいもので殴られたらしい。
一体何だというんだ。

俺は立ち上がり、
「何だよ」

顔を上げると、体を震わせながらバナナを握り締めた紅野明日香の姿。

「なるほど、俺はバナナで殴られたわけか。つーか、何でバナナ持つて震えてんだ、お前」

「バナナをね……」
「ん？」

「渡されたのよ、男子に」
「よかつたじゃねえか」

紅野は何故か怒りの表情を見せながら、俺の短い髪を掴んで軽く引っ張りつつ、

「『これ、どうぞつす。紅野サンがバナナをもらうと喜ぶって戸部サンに言われて』とか言つて渡されたんだけど、どういうこと、かな」

「ああ、あの男子か。責めてやるな。彼は今日、故郷に帰るらしい」
「……私が責めたいのは！ あんたよっ！」

「俺っ？ 何故にっ！」

「なんで、バツナーナもらって私が喜ぶのよ！ そんなわけなし
しょうが！ 私はゴリラじゃないっ！」

「ゴリラか、その発想はなかった」

「チンパンジーでも無いっ！」

「チンとか言うなよ、下品だな」

「肩甲骨割るよ？」

「痛いからやめてくれえ」

「で、どういうつもりなのよ。私にバナナなんてプレゼントして
しかも直接渡せばいいのに、わざわざ間接的に渡すなんて」

「いや、まあ、別にプレゼントじゃなかったんだけどな、まさかあ
の男子が本当に渡すとは思わなかったぜ」

「は？」

「ああ、いや、何でもない。こつちの話だ」

「からかってんの？ 私を」

「違う違う。ほら、あれだ。ダイエット。朝バナナダイエットだ！」

昔、一時期、流行ったよな。

「今度はデブ呼ばわり？ さすがに殴るよ？」

また、何でそういう受け取り方をする。

「違うつての。違うつての。あの、えっと、バナナは体に良いんだ
ぜ。美容にも……はっ」

言いかけて、口を閉じた。両手で口元を押さえた。

このパターンはまずい。そんな気がする。

「は、はははっ。今度はブス呼ばわりとはね！」

やはり、思った通りの反応だ！

乾いた笑いの後に、修羅の顔。その後、紅野明日香は天井に顔を
向けて、

「神様、彼を一発だけぶん殴ることをお許し下さい。このバカは殴
らなきゃ直らないんです」

とか言つと、俺に向けて右平手を繰り出した。

勘違いなのに！

紅野さんは痩せてます。そして、可愛いです。ブスなんかじゃないです。

すれ違ふのって、悲しいっ！

「殴っても直らねえだろって——」

どばしん！

パーでぶん殴られて、

「ハウムラビ！」

わけのわからん奇声を上げた。そんなくらい痛い。まじで。超いたい。まじで。

うつ伏せに倒れた俺の目の前に、上履きを装備した足が落ちてきた。

「何か言う事は？」

「申し訳ありませんでした」

もう紅野明日香がバナナをもらうと喜ぶなんて言わないよ絶対。

「まったく。ちょっと頭冷やしてくる！」

紅野は言って踵を返すと、颯爽と教室を出て行った。

ピシャン、と引き戸が閉められる。

教室の床に顔をつけながら、それを見送って、立ち上がる。

そして、

「やれやれ」

と言って顔やら制服やらに付いた埃を払った時、

「あの、大丈夫ですか？」

どこかで聴いたことあるような女子の声。

「ダメかもしれない」

「あ、えっと……そうですか……」

慌てた様子でそう言った。

どうやら「大丈夫だ」と言われる事しか想定していなかったらしい。

だが、甘いな。あいにく俺は、そんな予想通りの反応をしたがる

男ではないのだ。

「こいつう、ダメだって言われた時の言葉も準備しておくべきだぜ」

ふざけた口調で言ってやった。

「すみません……」

謝っていた。そんなつもりではなく、ふざけ合いの軽い会話がしたいだけだったのだが。まあいいか。

えっと、この子は、確か……。

「誰だっけ」

思い出せなかった。

「あ、笠原みどりです」

「笠原。ああ、看板娘か。商店街の」

「はい」

「心配してくれてありがとな」

「いえ。あ、でも、心配といえば、紅野さんと戸部くんの……お二人のことが心配です」

「え？ 何で」

「風紀委員って、だって、危ないじゃないですか」

「ああ、大丈夫大丈夫。危ない存在なのは上井草まつりって女だけなんだって。俺も紅野も、そんなに危険な人間じゃなくてだな」

「いえ、そういうことではなくてですね……んー、何て言ったら良いんだろ……」

「なんか、まどろっこしいな。ハッキリ言ってくれ」

「あ、はい。すみません。では、ハッキリ言います」

「ははっ、何だい、お嬢さん」

貴族風に言ってみた。

「ふざけないで下さい！ 真面目に話してるんですよ！」

「ああ、すまんすまん。それで、何だ？」

「今までは、まつりちゃんが抑えてた勢力が、目覚めてしまつかもです」

全然ハッキリ言えてねえ。抽象的過ぎてよくわかんねえ。

「つまり、何？」

「まつりちゃんが居たから大人しくしてた生徒たちが、風紀委員の座を奪うために紅野さんや戸部くんを襲うことが、あるかもしれないです！」

「え、それって、危険じゃん。超危険じゃん」

「だから、そう言ってるじゃないですかっ」

「笠原の店でさ、なんか急に強くなる器具とか売ってない？」

「ないです」

「じゃあ薬とかでもいいや。いざという時に飲んで一時的に強くなつて敵を撃退する……」

「ないですってば」

「どこにでも行けるドア！」

「あればあたしが使ってます！」

「ひらりと敵の攻撃をかわすことのできるマント！」

「ございません」

「竹とんぼみたいな形をした空飛ぶ機械！」

「狭いところで襲われたら逃げられないじゃないですか。それに、この街は風が強いから危険です！」

「四次元空間を利用して物質をすり抜けることができる若葉マーク！」

「マイナー道具すぎます！」

「モノを映すと複製品が出てくる鏡！」

「何に使う気ですか！」

「交通安全のお守りB！」

「神社に行ってください。っていうかBって何ですか。Aはどこですか。その前に交通安全のお守りで敵にどう対処するんですか！　ていうかそれ今までの流れと全然違って不思議未来道具じゃないですよね！」

「この街、神社あるの？」

「今は、ないですね。学校の裏庭にそれらしい祠はありますけど」

「他は、じゃあスマイル！」

「無料です！」

ふう、見かけによらず、なかなかのツツコミスキルだ。

ていうか、スマイル無料なのか。

今度笠原の店に入った時には頼んでみよう。

とか、そんなことを考えたその時だった。

突然、事件は起こった。

「何？ あんたら……きゃああ！」

廊下から、紅野の叫び声が届いた。

「な、何だ？」

ただごとでは無さそうだ。

俺は、みどりの横を通り過ぎて走る。

何人かのクラスメイトを押し退けて、廊下へ。

すると、そこには、

「何よ！ あう、い、痛いっ！」

いかにも不良な男に髪の毛を引っ掴まれる紅野明日香の姿。

痛そうに声を裏返して。

そんな紅野を囲む男の数、八人。大人数で、女の子を……っ。な

んて最低の不良どもっ……。

「へっへへ。何だ、大したことねえじゃん、新しい風紀委員爆誕
っっーから期待してたんだけどなア」

と、不良の一人は言った。一番体が大きく、こいつが不良の親玉
だろう。

「こいつっ」

俺はそんな声を発しながら、不良どもの前に出た。

「おっと、お前も風紀委員だっけな。戸部達矢とか言ったか」

その言葉に対し、俺は恐怖を必死におさえつつ、無理矢理に力強い
声を絞り出す。

「お前ら何だ！ 俺たちに何の用だ！」

「だから、アイサツだよ、アイサツ」と、不良の親玉。

「あ、Aさん、あれっすよ。『相手を、殺す』ってのを略して、相殺^{あい}。どうっすか」

金髪をした不良が言った。体のデカイ不良の親玉はAという名らしい。

「てめえ、コノヤロー。今それ、言おうと思っただところなんだよ！」

「あわわわ、すみませんAさん！」

「紅野から手を離せ！」

「へへっ、いいぜ。ほらよっ」

Aが乱暴に手を放す。

「あう……」

ドサリと床にたたきつけられた紅野は、床に顔を打った

「いったあ、い……」

「この野郎……」

女の子をこわい目にあわせた。女の子の髪の毛を引っ張った。女の子の顔に物理的ダメージを与えた。しかも紅野明日香に対してだ。俺は、怒りに震えた。

思い切り敵をにらみつける。

今まで生きてきた中で、最大級の怒り。

と、その時だった。

「てめえら、ダセエことしてんじゃねえ！」

不良集団の向こう側から男の声がした。

太く、強そうな。それは、見覚えのある顔。

「戸部サン、紅野サン、無事っすか？」

今朝、俺にバナナを渡そうとした男子生徒だった。

「痛い……」

顔を抑えながら紅野は言った。

「無事？ どこがだ」

俺は怒りをにじませて言った。

「ですよ。すみません、失言でした」

そうさ。紅野が痛い目に遭って無事なわけがねえだろ。

「あア？ 誰だ、お前」

不良の下っ端のうち一人はその男子の至近に寄って、息がかかるくらいの近さで、にらみつけた。

「おうおう、あんだお前、ナメた口ききやがって。この方は高校生でありながら銃刀法違反で逮捕されかけたこともある、Aさんだぞ」
「そうか。それが、どうした。オレはDだ」

Dくんは名乗った。

「犯罪自慢なら、街の外でやれ。ここは、人が更生する場所だ。それから、上井草まつりが支配者じゃなくなったからって、その途端に大人数で女子を襲う？ 腐ったことしてんじゃねえよ！」

「お前……」

俺は呟く。

「さがって下さい、達矢さん。こいつら全員、オレが引き受けます」

その時、いつの間にか、隣に来ていた紅野が小さな声で、

「バナナの人……」

「大丈夫だったか？ 紅野」

「うん。ちよつと、髪の毛抜けたかも」

「許せねえな……」

不良どもの戦いが始まろうとしている。

「へっ、一人増えたからって、相手は三人だぜ。おれたちは八人。

五人もの戦力差は——」

と、その時だった。

「まちなっ」

不良集団の後ろ側から声がした。

「「「あア？」「」」」

一斉に振り返る八人の不良ども。

「あなたは……」

Dくんが呟く。それは、あの有名な女子。学内で知らない者は居ないほどの、大物。上井草まつり。

「久しぶりね、キミ」

「え……？」

まつりは男子生徒Dくんに向かって言うと、男子生徒を押し退けて胸を張った後、威圧的な腕組をして不良たちの前に立った。

「あたしのクラスの生徒に手を出すっての？ 殺すわよ？」

「へへっ、この人数相手だぜ？ 勝てるわけあるか」

不良の一人は言った。

「加勢します、まつり姐さん！」とDくん。

「阿呆！ やめなさい！」ばしん。

「いっつう」

まつりは、独楽のように回転して、背後にいる彼を手の甲で殴った。

助太刀しようとした男子生徒の頬を、まつりは叩いたのだ。

痛そうに叩かれたところを抑える男子生徒。

「キミ、今日帰るんでしょ！ この騒ぎに関わってると思われたら

どうすんの！」

「姐さん……」

彼が、彼がここで問題を起せば、おそらく故郷に帰るのが延びる。それどころか、『かざぐるまシティ』ですら暴れたという話が故郷の人々の耳に入れば、故郷に恥を持って帰ることになってしまうと、そういうことだろう。

「行きなさい！ はやくっ！」

「でも、姐さん……」

「ほら、さっさと行く！ もう挨拶済ませたんでしょ。あとは帰るだけなんですよ！ 帰れなくなったり、戻ってきたりなんかしたら殺すわよっ！」

「……すみません、まつり姐さん。お世話になりました！」

「じゃあね」

感情の込めないように、低い声で、彼女は言った。

「はいっ！」

男子生徒は言うつと、今度は俺たちの方を向いて、

「戸部サンと紅野サンも、あっざーした！」

そして踵を返して、走り出すのだ。故郷に帰るために。生まれ変わった自分を、故郷の人々に見せるために。

「……………」

彼の足音が無くなった時、まつりは大きく目を開いた。そして、言うのだ。

「血祭りにしてあげるわ！」

そこからはもう、

「……………」

言葉を失うしかなかった。

人を殴る轟音が響く。不良生徒八人を相手に、互角どころか圧倒的な差を見せ付ける上井草まつり。規格外の轟音と共に、無風地帯の廊下に風を起した。

「な！」不良A

「ん！」不良B

「だ！」不良C

「とおお……………」その他の不良ども。

不良、舞う。そして累々と横たわる男達という光景。

「うぐぐぐ……………」

不良どもの呻き声と、一般生徒の沈黙の中で一人、上井草まつりは立っていた。

「この学校で暴れていいのは、あたしだけよ！」

視界にかかる前髪をバサッと払って、上井草まつりは俺たちの方に歩いて来た。

そして、すれ違いざま、紅野に向かって、

「別に、貸してわけじゃないから」

「別に、助けてくれなんて、言つてないけど」

「このっ」

「でも、ありがとう、まつり」

「気安く下の名前で呼ぶな！ 明日香あ！」

お前は呼ぶんだな。

「あんたこそ！」

きつと、きつとこれは、不器用な二人なりの、互いの認め合いなんじゃないかって思う。傍から見ると何だかバカみただけだな。「ふんっ」

その後は、あからさまに機嫌悪そうに、上井草まつりが教室にも入らずに立ち去って、不良集団に絡まれるという騒動は終わりを告げた。

俺たちを囲んでいた人垣も消え、喧騒と共に日常が戻った。倒れる不良たち以外は、だが。

午後の教室。

俺は、窓際の自分の席で、授業を進める教師の話も聞かずに窓の外を眺めた。

朝食のときに話した男子、というか、先刻紅野を助けた男子が言った通り、窓の外を吹く風が弱まっているようだ。風車の回転も、先刻と比べると緩やか。飛行機は、ちゃんと飛び立てただろうか。

廊下側には空席一つ。

転校初日からずっと空席になっている場所、その後ろは上井草まつりの席。

思えば、いつも窓の方ばかり見ていて、教室の様子をよく見渡すのは初めてだったかもな。

教科書の内容を読み上げているだけの教師が呆ける俺を睨んでいて、隣には紅野明日香がいて、先述の通り、廊下側には上井草まつり、中央付近に、温厚な二人組。級長と笠原みどり、

三日目にして、この空間に置かれるのが当り前になりつつあった。妙に居心地が良いからな。何故か。

ところで、考えてみたが、俺の周りは女ばかりだな。男ばかりに群がられるよりは良い、というか女性陣は皆可愛いかったり美人だったりするので全く悪い気はしないが、そろそろ男友達が欲しいところだ。

とても下らない話ができるような。

と、そんなことを考えていたまさにその時だった。ガラガラッ！

授業中だというのに堂々と引き戸が開けられた。

そして入ってきたのは、

青白い肌、細い腕。華奢な体つき。

明らかに軟弱そうな男子がそこにいた。

「す、すみません、遅れました。風間史紘です」

「ああ、風間か。久しぶりだな」

教師は言った。遅刻を咎める様子もなく。

「はい」

俺は思わず隣にいる紅野明日香に話しかける。

「あいつ、遅刻を容認されているだと。もう諦められているのか、それとも札付きの不良なのか。とてもそうは見えないが、人は見かけによらないということか」

「何で、すぐ不良方面に結び付けようとすんの、あんたは」

「だって、遅刻だぞ。反社会的と言われて皆に非難轟々だぞ！」

「あのね、それはあんたのような無断遅刻常習の輩に対する評価。先生の態度を見る限り連絡済みなんですよ」

「だが、俺は電話してわざと遅刻した時も怒られたぞ」

「あんたの場合、わざとつてのがバレバレなんですよに」
「なるほど」

と、そんな風に紅野と不毛な会話を交わしてる間に、風間という男は今まで空席だった所に座っていた。

上井草まつりの前の席。

そして、背後のまつりと少し話していた。

で、その授業後すぐ。

「明日香さんと、達矢さんですか？」

遅刻してきた男が話しかけてきた。

「ああ、遅刻して来た奴か。何の用だ」

「あの、僕、風間史紘です」

「だから、何の用だったの」

「やめな、達矢。怯えているじゃないの」

いや、全然怯えてねえぞ。しかも、俺も別に威圧的に接してるわけじゃない。

「僕は、風紀委員補佐という立場で居たんですが、まつりさんが、

新しい風紀委員に挨拶しろって……」

「そう。じゃあ、まつりを連れてきなさい」

「はい」

風間史紘は返事をして、で、本当に連れて来た。

「何の用？ 明日香」

紅野はまつりに訊く。

「この子、何なの？」

「そんなの自分で訊きなさいよ」

「言われてみれば、そうね。あんた、何なの？」

紅野は風間史紘に訊いた。

「僕は、だから、風紀委員を補佐するわけですよ」

「だから、それが何かって訊いてんの。具体的に、科学的に」

「それは、えっと、何なんですか、まつりさん」

「はあ？ んなもん自分で考えるよ。このすつとこどつこい」

「あ、すみません、わかりません」

何、この不毛すぎる会話。

「ああ、つまり、まつりが風紀委員じゃなくなったから、私の家来になろうっての？」

「……………」

「ええっ？ まつりさんは、もう風紀委員じゃないんですか？」

風間は目を丸くして訊いてくる。

「そもそも最初から風紀委員なんてものが存在しないって噂だぞ」

俺が言つと、

その時、紅野はこう言った。

「そんなことないでしょう、まつりはさっき廊下で、風紀委員の仕事したわ」

なんだ、こいつ、偉そうに。いや、しかしまあ、こいつはこういう奴だ。もう何も言うまい。

「で、結局何なんだ？」

「私が風紀委員長で、達矢とまつりが副委員長。あと、あんた、史

紘とか言ったつけ。あんた書記っぽいから書記ね」

「おい紅野。何だその生徒会みたいな役割分担は。ていうか、書記って、何を書き記すんだ。その前に、何で許可も無くまつりを子分に入れてるんだ」

俺は言ったが、

「……………」

「そりゃ、負けたからに決まってるでしょうが。敗軍の将は、勝者の言う事を何でもきく。それは当然のこと！」

「ええ、そうね」

まつりも納得しているようだった。

「つまり、風紀委員は組織としてレベルアップを果たしたのよ。三人とも、私のために、しっかり働いてね！」

そう言った紅野明日香は、とても良い笑顔をしていた。

「あ、あと今日の放課後、掃除当番代わって欲しいんだけど、いいかな？ まつり」

「くっ…………い、いいけど…………？」

悔しそうだった。

「放課後、何かあるのか？」

「ん、ちよつと買い物にね」

「そうか。付き合うか？」

「来るな。絶対」

何か秘密のブツでも取引するんだろうか。本気で嫌がっているようだ。

「あ、そうっすか」

そして、チャイムが鳴って、休み時間は終了。

また退屈な授業が始まる。

「じゃ、掃除当番の件、よろしくね。まつり」

「わかってんだよ！ サボンねえよ！」

六時限目。

これが、本日最後の授業。

国語の時間が終われば、放課後となる。

なるのだが、とりあえず、その国語の授業風景は異様なものだった。

国語教師が生徒に普通に音読をさせる。そんな当り前の授業内容が、常識が、この学校このクラスでは通用しないらしい。

というか、上井草まつりが常軌を逸するほどの変な女なんじゃないかという疑惑でいっぱいになる光景だった。

「では、次の行から、風間。読んでみる」

「はい！」

ここまでは、何の問題も無かった。だが、

「いまはもう自っ……分は、罪人どっこ……ろではなっく……狂人でし……た」

読みはじめて、途切れ途切れに、苦しそうに声を出す史統。

明らかにおかしかった。病気で発作か何かが出てしまっているのだろうか。

そこで、教科書から目を離し、彼の方に目をやったのだが、そこで俺は目を疑った。

「いいえ、断じて自分は狂ってなどいなかったのです。うつ……一瞬間といえども、狂ったことはないんです。けれども、ああっつく……狂人は、たいてい自分のう……ことをそう言うものだそうで……っす……」

何かの病気？ いや、そうじゃない。原因は背後の席の女にあった。つまり、そう、上井草まつりが原因。

「つまり、この病院にいれたものは気……違い、いれられなかったものはノー……おうマルということになるっ……ようです」

風間史紘は、シャープペンの先でチクチクと背中を刺されていた。それは、あまりにも衝撃的光景。俺は開いた口が塞がらなかった。上井草まつりは、ペン先で風間の背中を刺しながら、彼の体が刺すたびに弓なりに弾けるのが楽しいらしく、クスクス笑いながらプスプス刺していた。

「神に問う。……無抵抗は罪なりやあ！」

それはもう、太宰治の『人間失格』の音読というよりは、風間史紘の魂の叫びだった。

「っふっはは……」

何が面白いんだ。シャープペンで他人の背中を刺してクスクス笑う人間って、どうなんだ。人格を全力で疑いたいぞ。それこそ人間失格の烙印を押してやりたいくらいだ。

だが、不良に囲まれた紅野を助けてもらった恩もあるしな、変な奴ではあるが、悪い人間ではない気もしている。ていうか、まつりは、何でこの街に居るんだろうか。何だか少し気になる。

そこでチャイムが鳴った。

で、さらに何回かチャイムが鳴って、教師が来て、ホームルームをして、放課後になった。

掃除のために、机は全て、後ろに下げられる。

紅野は、先刻言っていた買い物のためか、すぐに教室を出て行き、その紅野に掃除当番を頼まれていた上井草まつりも教室を颯爽と出て行った。不良だ。そして、俺も、

「さて、帰るか——」

「待ってください、達矢さん！」

え、何だろうか、などと心の中で呟きつつ振り向くと、掃除道具を持った風間史紘が居た。

「達矢さんも、掃除当番なわけですよ」

「何だと。今までホームルーム終わったらさっさと帰っていたぞ」

「それはきつと、転入してきたばかりだったからとか、不良だった

からとか、色々理由があるのかもしれませんが」

風間史紘はそう言った。

「ああ、なるほど」

そついや転校初日に呼び出されて以降、規格外の不良だと思われるにいたらしいからな。

「だから、ハイ、今日は逃がさないですよ」

箒を差し出してきた史紘。

「わかったよ。やりやいいんだろ、やりやあ」

俺は言つて、乱暴に箒を受け取った。

「ていうか、まつりはどうしたんだ。紅野から掃除当番代わってくれって頼まれてたろ？」

「僕に代わられて命令して帰りました」

「んーと、お前とまつりつて、何なの？」

「何でそんなこと訊くんですか？」

「そりやまあ、だってなあ、授業中もおかしかったじゃねえか。シヤープペンで背中刺されてさ」

「僕は、まつりさんの下僕らしいです」

「はあ？」

下僕とかつて、何言つてんのこいつ。

「まつりさんは、僕を守ってくれました。だから、僕は、いつかまつりさんのことを守りたいんです。まつりさんが喜ぶことは、してあげたいんです」

「……………」

よくわからんが、何やら色々あるらしい。

「おかしいですか？ 僕ら」

「結構おかしいな」

「ですよね」

そつ言つて、風間史紘は笑った。

で、掃除が終わって、いざ帰ろうとなった時、

「戸部くん」

また誰かに声を掛けられた。

「んあ？」

アホっぽい返事をしながら振り返る。そこに立っていたのは、

「い、一緒に、帰りませんか？」

商店街の看板娘。笠原みどりだった。

「嫌だったら、いいですけど、あの、お願いします……」

可愛い女の子に「お願いします」なんて言われたら、俺は断れません。

「ああ、いいぜ。帰ろう」

「うん」

「じゃあ、またな、史紘」

「ええ、また来週」

そうか、そういえば、明日と明後日は休日だ。

次に会うのは来週ということになる。

「行こう、戸部くん」

「ああ」

俺とみどりは、会話なく風車並木の坂道を下る。

周囲には見晴らしの良い草原。

前を向けば、湖と、地の裂け目と、その向こうの海が僅かに見えていた。

「……………」

にしても、一体何の用事だろうな。ただ俺と一緒にの帰り道を望むわけもあるまい。まして、笠原商店の看板娘、エプロンの似合う可愛いみどりちゃんだ。

で、そのみどりちゃんは、何か言いたげな素振りを見せながらも黙っていて、俺の視線を感じると目を逸らしたりしていた。

「あの、俺に何か言いたいことあるの？」

「な、ないです！」

「え、ないの？」

じゃあ何で、一緒に帰ろうなんて言い出したんだろうか。

「いえ、嘘です。あります、けど……」

何なの、この子。

「……………」

で、押し黙る。もう何が何だか。

「……………」

無言というものは、人を圧倒的に不安にさせるものだ。しかし、俺も引越して来たばかり。あまり会話のタネも無いわけだ。昼間の会話では、そこそこ盛り上がったわけだが、どういうわけか、今はそういう雰囲気ではない。そこで、まあ、真面目な話を振るべきか、軽い話をしてみるか迷った末に、

「店は、どうなんだ？」

何だか中途半端な質問を選択した。

「え、どうって？」

「まあ、その、な。売り上げっての？ 儲かってるか？ すると、

「全然だよ！」

突然、声を荒げる笠原みどり。ちよつとびつくりした。

「そ、そうか」

「そつだよ！ あの突然で来た巨大なショッピングセンターの所為で！」

「あ、ああ、ショッピングセンターな。話に聞いたことはあるぞ。

この町に来てすぐ誰かに聞いたからな」

「行って見てくればわかるよ！ 良い所なの！ 何でも揃ってる！

あんなの、商店街の品揃えの悪いお店が勝てるわけないでしょ！」

「そ、そうか」

「でも、どうしてこんな街に参入してきたのかわからないけど、それで街の人たちが幸せを感じるなら、あたしの家のお店が割を食うのも、仕方ないって。それでも、このままじゃ、お店が潰れちゃうの！ どうすればいいのかわかって、あたしにはわからないよ……」

「そ、そりゃ、大変だな……」

「そうなの。商店街皆、気に入らないって怒ってる。でも、街の幸せを願うなら、怒る事の方が間違ってると思うのよ」

そんな難しい話をされても俺にはよくわからん。葛藤があるってことくらいは伝わったが。

「ホント、何でこんな街に」

笠原みどりはそう言って溜息を吐いた。

掠れて読めない道路表示、曲がって錆びた一時停止の標識。ボロボロのガードレール。見上げた電線の無い空の雲は強い風に流されていた。こんな世界から捨てられたようなボロの街に、何故そんな店がオープンしたのか、なんて、俺が考えたってしょうがないことだ。

例えば、金があっても無人島では何を買うこともできない。モノが無ければ、いくら金銭を持ってもどうしようもない。考えてみれば当り前のことだ。そして、つい最近まで、物資の乏しい街だったということは容易に想像がつく。隔絶された世界にだって、外の世界と同じ水準の生活をする権利があるはずだ。それを実現しているのがみどりの言う大型ショッピングセンターならば、それを否定することは俺にはできないだろうな。

「あつ、ご、ごめんなさい。あたしったら、ついアツくなっちゃって……」

「いや、まあ、な。別に謝らなくてもいいぜ」

「なら、いいけど……」

その時、商店街に差し掛かった。

坂が緩やかになる。

すると、色んな人から話しかけられた。

「あら、みどりちゃん。おかえり」

「あ、こんにちは、穂高さん」

みどりは笑顔で返して、話しかけてきた人の横を通り過ぎた。

「おう、みどりちゃん。彼氏かい？」

「今度はおじさんから。」

「そ、そんなんじゃないです！」

おじさんの横も通り過ぎる。

すると今度は、おじいさんから話しかけられた。

「むむむ、みどりちゃん。何じゃ、その男の子は。ウチの子よりも先に彼氏見つけちゃ困るんじゃないが」

「あ、上井草さん……そんな」

上井草？ どっかで聞いたことあるな。

「まあ、ウチの子に彼氏なんてできっこないんじゃないがね」

「そんなこと」

「いやいや、もうね、笠原さんトコと娘交換したくらいじゃよ」

「そんなことできないです……」

「あつはは、そうじゃね！」

「それじゃあ」

「ああ、またね」

さすが商店街の看板娘だ。

で、挨拶ラッシュが一息ついたところで俺は訊いた。

「みどりは、いつからこの街にいるんだ？」

「いつから……ですか」

「ああ」

するとみどりは、こう言った。

「物心ついた頃から、ずっと」

「え……？」

「あたしは、この街で生まれて。まつりちゃんもそうだし、この街で生まれた人、結構いますよ」

「そう、なのか。知らなかった」

「そうか、まつりも、ずっと掃き溜めで生きて来たのか。」

「うん。そうだよ。街の外から来た人には、わからないよね」

「ああ」

そして、足音と風音に耳の奥が支配された僅かな沈黙の後、笠原みどりは、

「あたしね、お礼が言いたかったの」

そんなことを言った。

「お礼？」

「そう。お礼。戸部くんからね」

「そりやまた何で？」

お礼を言われるようなことをした記憶が無いんだが。

「まつりちゃんと仲良くしてくれて、ありがとう」

「へ？」

「まつりちゃんって、ああいう子でしょ？ 何て言うか……友達が出来にくい子っていうか……対等な立場で話をできる人が少なくていつからか、あたしじゃあ、まつりちゃんの助けになれなくて、支えられなくて……だから、戸部くんや紅野さんが来てくれて、まつりちゃん、楽しそうで、あたしは嬉しい」

それは、本心からの、自然な笑顔で、営業スマイルとは違った、友人を想う幼馴染の顔なのだろうか。

「だから、ありがとう」

笠原みどりは立ち止まって、腰を折った。

「あ、ああ」

その時にはもう、坂もすっかり緩やかになっていた。商店街の端の方。

笠原商店の店の前で、俺に「ありがとう」と言う笠原みどり。

「そんな、俺も、まつりと居るのは楽しいし、お前と話すのだって結構好きなんだぜ」

「え、そ、そんな。あたしと話したって、全然っ、楽しくないって

「いつか……」

「そんなことはないぞ。お前のツッコミスキルはなかなかのものだ」

「え、そうかな……」

「ああ、そうさ」

そして俺は、女の子にツッコミを入れてもらいたがる男なのさ。

「……そっか、うれしいな」

「お世辞ではないぞ」

「うん、ありがとう」

笠原みどりは、営業スマイルで笑うと、

「じゃあ、あたしの家、ここだから。またね」

指差して言っつて、その手を振り、俺とすれ違ふ。

「ああ、また来週」

そして振り返って、

「うん。今日は、帰り道付き合わせちゃって、ごめんね」

と言った。

パタパタと走った笠原みどりの手が、店の引き戸を開けて、閉めた。

「ただいまー」

戸の向こう側から声がした。

「ただいま……か」

いつか、俺も「ただいま」を言う日が来るだろうか。

もう、四日目になったんだな。

そう思いながら、俺は日課になりつつある朝シャンを敢行していた。

潮風が原因なのか水道の質のせいかわからんが、髪がちょっとパリパリになるのは難点だが、三日学校に通ってみて、随分この街を気に入ってきている自分がいて、これからの生活も楽しみだ。

知り合いも結構増えたしな。

一緒に転入した紅野明日香。

女番長の上井草まつり。

級長にして寮長にして生徒会長の伊勢崎志夏。

商店街の看板娘である笠原みどり。

昨日知り合った男子の風間史紘は、まだちょっとよくわからないが。

女の子が多すぎて覚え切れない気がしていたが、親しくなれば当然、憶えられるわけだ。

「たった四日って、気がしねえなあ」

もう皆と、随分長く一緒に居るイメージがある。強烈に。

「しかしまあ、今日はどうしようかな」

特に予定が無い。

以前住んでいた街に居た頃には、休日になると友人と遊び歩いたりしていたのだが、ここでは、そもそも友人というものが居ない。

ゆえに、誰かと遊びに行ったりできない。

「散歩でも行くか」

まだ、この街のことをそれほど知っているわけでもないしな。

よし、そうしよう。

バスルームを後にした俺は、黒い無地の長袖シャツに袖を通した。

で、朝食の後に散歩に出た。

空を見ると、風に整形された雲たちがいくつも浮いていて、それも綺麗だ、とか思った。

しばらく目的地を決めずにブラブラしていると、風の強い開けた場所に辿り着いた。

湖だ。

裂け目の手前にして、学校から続く下り坂の終点。円形と三角形の二つの浮島のある湖。級長いわく、海に近いが淡水であるのとこのとだ。

で、そんな湖に何か用事があるわけではなかったのだが、何故か俺はこの場所に来なければならぬような気がしていた。

だがそこに誰か知り合いが居るわけでもなく、視界にあるのは知らないオッサンが一人で釣りをしているという光景だけだった。釣り、か。何か釣れるのだろうか。

「……………」

まあ、釣りのオッサンなんてどうでもいいか。

この街には、まだ見るべき場所が多くあるんだ。

とりあえず踵を返し――

「よう、ニイちゃん」

げえ、あっちから話しかけて来やがった。

「え」

声を漏らしながら振り返ると、

「暇だなあ、お互い。こんな何も無え所に来るなんてな」

どことなく知的な笑いを浮かべた男に話しかけられていた。明らかに俺に向かって話している。ちなみに、よくよく見てみるとオッサンと言うには少し若いかもしれない。

「はあ」

気の無い返事してみる。

「おれは若山つてんだ。英語で言うと、ヤングマウンテン。お前、名前は？」

「戸部達矢です」

「トベタツヤか。ベタベタしてツヤツヤしてるのか。油みたいな名前だな」

「んなおかしなこと言われたの初めてですけど、とりあえず失礼ですよ？」

「ああ、すまんすまん。クセでな」
「どんなクセだ。」

そして若山という男は、胸ポケットから煙草を取り出し、ライターで火を着けた。煙を吐き出す。

「それじゃあ、俺はこれで」

などと言い残し、俺はその場を去ろうとしたが、

「まてまてまて」

俺の肩は立ち上がった若山に掴まれた。

「何ですかっ！」

「まあまあ、聞いてけ聞いてけ、おれの話を」

若山は、俺の肩をぐいと押さえ込むようにして芝生の上に無理矢理座らせると、自分も座り、火の着いた煙草を、取り出した携帯灰皿に押し付け火を消し、そのまま入れて、携帯灰皿を閉じた。

「それで、何なんですか、一体」

「おれはな、エリートだった」

「は？」

「比較級で言うなら、最上級。エリートテストだ」

「へ？」

「エリート・エリター・エリートテストだ」

何だ、この変な人。

「だが、今、この場所に居る」

「はあ」

「何でおれは今、この場所に居るんだろうな」
「知るものか。」

「おれの居るべき場所とは思えないんだが」

「はあ」

「お前は、何しでかしたんだ？　こんな街に飛ばされて来るってことは何か、やらかしたんだろ？」

「いえ、特には」

「そうか、おれと一緒にだな」

「ただ、遅刻とサボりを繰り返したりはしましたけど」

「何、それだけで？　運悪いなオイ」

「そうなのか。運悪いのか、俺。」

「でもな、おれは遅刻もしてないんだぞ。幼稚園時代から皆勤賞を続け、常にトップを走ってきた。なのに、かざぐるま行きになるってな……世の中狂ってる」

「何もしてなくても、かざぐるま行きになることがあるんですか？」

「上司が行けって言えばな。嫌われてんのかな、上司に」

「ああ、なるほど……」

「『期待の表れだよ』とかつて励まされたが、厄介払いかもしれんやめてえー。マジ会社やめてー」

「若山は溜息交じりに言った。」

「でも、いい街じゃないですか」

「いい街なあ？　都会には、もっと色んなものが揃うだろうが。ここじゃあ最新の電化製品が揃わないんだよ！」

「電化製品、ですか」

「そうだよ！　電化製品。日進月歩の世の中で、その先端を走りたんだ、おれは！　だがそれができない。何故だ！　物資が乏しいからだ！」

「でも、ショッピングセンターが、できたじゃないですか」

「あんなもん、都会の商品展開から三ヶ月は遅れてる」

「そうなんだ。詳しいですね」

「ああ、おれの店だからな」

「え？」

「何でおれが、あの店の店長なんかやらされなきゃならんのだ」

「店長？ あの大型ショッピングセンターの？」

「そうだって言ってるだろうが」

「あれ、でも、今営業中じゃ」

「ああそうだな。休日の、書き入れ時ってやつだ」

「じゃあサボリじゃないですか。サボった事ないって言ってたくせに」

「そうだ。サボりだ。おれは、この街に来た時、不良へ生まれ変わると決めた。煙草にも挑戦した。どうだ、不良へのステップを登っていつているだろう？」

威張って言う事ではないと思う。

「まあ、アレだ。おれが居なくても、店の売り上げは大して変わるん。おれはアイドルでもないしな」

「はあ、そうですね」

もう解放してくれないだろうか。折角の休みの日に、男の愚痴を聞かされ続ける苦痛を考えて欲しい。それはそれは、つらいものだ。可愛い女の子の愚痴ならまだしも。

「なあ、アブラ」

「それまさか、俺のことじゃないですよ。アブラって。ベタベタツヤツヤだからって……」

「じゃあ、アブラハム」

「ちよつと変えても嫌です。やめてください」

「ええい、わがままな奴め」

「何なんですか……」

しかし俺が呆れかけていた時、急に真剣な顔になった若山は、

「……達矢」

「何です？」

「知ってるか？ この街の、抜け出し方」

「え？」

「おれなりに考えてみたんだ。この街の脱出方法をさ」

「脱出……」

考えもしなかったな。脱出なんて。

更生する気満々だったから。というか今だって更生する気にいるぞ。優良な人間になりたいと。それが当然の感情だと思った。でも、――逃げる。

その選択肢も、あるのかもしれない。

「いいか達矢、この街は山に囲まれている。その険しさたるや、想像を絶するほどだ。高圧電流が流れるフェンスがあるなんて噂もある。ただ、そんなフェンスが無かったとしても、とても越えられる山ではない」

「はあ」

「かといって、海から抜け出すには、あの裂け目を通るしかない」

「でも、あそこは――」

「そう、常に強風が吹き荒れているし、観測の名目で監視されている」

「え、そうなんですか？」

「そうだ。と、なれば、残る方法は何だと思う？」

「空か、地下」

俺は答えた。

「その通りだ。風車を回転させた風は、山肌を駆け上り上昇気流となる。その流れに乗ることができれば、街の外へと飛び出せる。ちょい危険だがな」

「地下にはトンネルが……おっと、これは社内秘だった……地下にトンネルがあつて、街の外と繋がっているなんてのはな」

「ええと、社内秘ってことは、社内でさえも秘密なことですよね。」

「思いつき言ってますけど」

「はっ、しまった。つい不良なことをしちまったぜ。おれとしたことが！」

何なんだ、この人。

「こうなれば、お前は、おれの店でバイトするしかない」「は？」

「おれがサボりたいから、仕事を押し付けることのできる誰かを探していたのさ。できるだろ、電化製品の修理くらい」

「いやいやいや、嫌ですよ、そんなの！　ていうか、できないです！」

すると若山は諦めたような口調で、

「はあ……やっぱダメか。そうだな。あーあ、面倒だな、仕事」

「でも、本当なんですか？」

「何がだ」

「地下にトンネルがあつて、街の外に……」

すると若山は、周囲をキョロキョロ見渡して、誰も居ない事を確認した後、小声で、

「本当だ。品物をこの街に運び入れるために、店の南側にある地下のトンネルを利用してるんだ。内緒だぞ」

と言った。そして続けて言うのだ。

「これ、他の人間に喋ったら、ちよつと大変なことになるからな」それを何で初対面の俺にペラペラ喋ってたんだ、この人は！

俺に精神的負担を掛けるのが目的なのか！

何なんだ、この人は！

「おつと、そろそろ雨でも降って来そうだな。戻るとするか……我が店に」

若山は空を見上げながら言うつと、

「よっこらしよ、と」

オッサンのように言つて、立ち上がり、

「んじゃ、またな。アブラハム」

「達矢です！」

俺も立ち上がりながら叫ぶように言った。

「どっちでもいいじゃねえか、名前なんて」

不良だ。名前って大事だろう。

「まあ、そうだな。またな、達矢。バイトする気になったら、いつでもウチの店に来ていいぞ」

「しないでしょ」

「まあまあ、やる気になつたらで良いからな。じゃあな」
言つて、手を振ると、南の方角へと歩き去つた。

「……………」

空を見上げると、確かに空を暗雲が覆い、今にも雨が降り出しそうだった。

さて、これからどうしようかと思つたんだが、まあ、雨が降りそうだからな。帰るか。

で、特にやることもないので、雨が降らないうちに寮に戻ってきた。

自分の部屋に戻ると同時に外は雷雨になった。ゴロゴロと唸り声のような声を上げる空。

雷こわい。

スコールのような大雨。バチバチと料理の時に油が跳ねるような音がする。

外にいらなくて良かったぜ。

「暇だ……そういう暇つぶしできるモノ買いたいと思ってたんだがなあ……」

変な男に掴まらなければ、雨が降る前に買い物に行けたものを。

そんな風に俺が思ったその時、カツと稲光。そして、ゴロゴロ……ピシャアアンという激しい轟音、後、「キャッ」という悲鳴。

って、ちよつと待て。悲鳴？

「な、何だと……？」

しかも女子の声？ この男子寮で？ マジで？

「いや、幻聴？」

ガタタツ。

「物音っ？」

押入れからだったので、しばし押入れを凝視する。幽霊とかだったらどうしよう。

これから何日も幽霊の居る部屋で生活するなんて、超嫌だぞ。ていうか、幽霊じゃなくても、この現象の意味がわからない。何でどこからとも無く女子の声がして、押入れから物音がするんだ！

ゴクリ。俺は嫌な汗をかきつつ、唾を飲み、おそろおそろ押入れに手をかける。ピッタリ閉めたはずの押入れだったのに、僅かに隙間が開いていた。

そして、隙間に指を引つ掛け、思いつき開けた。

「や、やあ、達矢」

何故か、制服姿の紅野が自室の押入れに居た。

まてまてまてい。記憶を辿れ。紅野を此処に招き入れた記憶は無い。断じて無い。別に昨日酒飲み過ぎて記憶が飛んでいるわけではないよな。そうさ、俺は未成年だから酒のめないし、未成年飲酒ダメ・ゼツタイ。

混乱した。思考が乱立した。落ち着け。

お・ち・つ・け、俺。

これから起こる出来事を整理したがる俺の脳みそ。

女子を自室連れ込み↓不純異性交遊疑惑↓不良扱い↓容赦のない
糾弾↓帰れない↓エロ番長のレッテル↓容赦のないイジメ↓絶望――

「――何しとんじゃあああ!」

公衆トイレのラクガキ的な思考を振り払うように、俺は叫んだ。

「しっ! 静かにっ!」

押入れの中で慌てた様子で、口元で人差し指を立てる紅野明日香。

「な、何でお前っ、ここに」

「あの、あんたしか、頼る人いなくて」

「は?」

「あのね、私、誰かに、追われてるみたいなの。それで、助けを求めに来ただけど、あんた居ないし」

「そ、そうか……」

「あやまりなさいよ!」

「いや、何で」

「こわかったんだから」

「はあ、ごめん」

「ったく」

紅野明日香はイライラした様子で言うと、暗い押入れを這い出て

立ち上がった。

と、その時――

ゴロゴロ、ビシャアアン！

稲光と共に轟音が響き、

「キヤアア」

抱きついてきた。

「え……………あの、紅野さん……………？」

「あっ……………！」

バツと離れ、そして、

「あやまりなさいよ！」

「おう……………ごめん」

ん？ 何で俺、謝らなくちゃならないんだ。抱きついてきたのはそっちだろうが。

「お前、雷、こわいの？」

「……………うん」

目を逸らして頷いていた。ちくしうめ、可愛いじゃねえか。

「で、紅野は何でここに来たんだけ？」

「だから、誰かに追われてるの！」

「……………誰に？」

「わからないわよ！」

「上井草まつりとかじゃないか？ 寝首をかこうと虎視眈々かもしれん」

「あの子は、そんなことしないわよ」

「そうなのか」

「そうよ」

「じゃあ誰が」

「知らないってば」

「何でお前は知らない誰かに追われてるんだ？」

「わからないの」

「万引きでもして、店員に追われてるとか」

「殴るよ？」

「すまん」

「私が思うに、不良どもじゃないかと思うの」

「不良？ 不良って言うのと、昨日お前の髪の毛引つ張った末、まっりにシメられてたあの集団のことか？」

「うん。きつと、性懲りも無く恨みを晴らそうとしてさ」

「なるほど」

考えられないこともない話だ。

風紀委員長である紅野を倒して風紀委員という概念を破壊すれば、学校に再び群雄割拠の戦国時代が訪れる……と思う。風紀委員が居なかった頃の学校のことなんてこれっぽっちも知らんが。

しかしまあ、仮にそうなるとして、その政変とも言うべき現象を引き起こしたいがために紅野明日香の身柄を何とかして確保したがる不良がいるのも、頷ける話だ。どうせまつりに蹴散らされると思うがな。

だが不良とは得てして先のことなど考えられないものなのだ。俺もそういう傾向あるしな。まあ俺は不良といってもプチがつくほどの可愛い不良だが。

「ねえ、そう思うでしょ？」

紅野明日香は同意を求めてきた。

だが、違うと思う。

何となくだが。あの不良どもも、そこまでのことはしないような気がする。

「とはいえ、情報が少なすぎて断定する根拠が無いからな」

「じゃあ、説明するね」

そして紅野は説明を始めた。

「あのね、朝、出かけたら、誰かに見られているような気がして、走っただけで、気配が消えなくて……人の多い所に行こうと思っただけで……でも、もしも道行く人が、全員不良で、私に悪意を向けてたりしたらって考えて、こわくて、人の居ない道を走って、

できるだけ広い道を通って寮まで戻ったんだけど、見られてる感じが消えなくて、こわかったからコッソリ抜け出して男子寮に忍び込んだの」

「そしたら気配はどうなった？」

「なくなつたの。たぶん、女子寮を監視してるんだと思う」

「よく、気付かれずに抜け出して来れたな」

「まあ、私、家出のプロだし」

何だそれは。プロなんて無いだろ。

「警戒されている中で隙について親の目を盗むのは、それはそれは難しいもののよ」

「そうなのか。不良だな」

「そうね。でも、その不良さが役に立ったわ」

「ていうか、家出とかしてたのか？」

「うん」

「何で」

「随分踏み込んだ質問するのね」

「そうか？ まあ、そうか」

やや嫌な感じの無言空間があつて、紅野明日香が先に口を開いた。

「まあ、いいわ。教えてあげる」

「ん、ああ」

そして、紅野明日香は言った。

「私は愛されていないのよ」

「愛されていない？」

「そう、親に。信じたくない話なんだけどね、私の『かざぐるま行き』の話を、前の学校の教師の所に提案したの、父と母だつていうんだもん。『明日香のためなんだ』とか言われたけど、もう全く意味がわからないよね」

「それは、あれじゃないか。家出娘を何とか更生させたかったんだろ。それで抜け出すことのできないこの街に――」

「違うっ！ この街は、家出の更生に使われることなんて無いの。」

対象となるのは、学校生活の素行だけのはずなの。そして私は品行方正だった！ 学校では！」

「そうなのか」

「そうよ」

しかし、紅野の価値観と、一般人の価値観がズレている可能性だつてあるからな。何とも言えないところだ。

「私の学校では、『かざぐるま行き』になるのに明確な基準があつて、私はその基準に引つ掛かることなく過ごしてた。なのにつ」

「なるほど。だが、家出するほど、その……ひどい家だったのか？」すると紅野は首を横に振った。

わけがわからん。ひどい家じゃないのに、何で家出するんだ。

「遠くに、行きたかったの」

「それは、あれか、自立したいってことか？」

「かもね」

どうやら、そういう娘らしい。

「だが、この街からは——」

「わかつてる。そう簡単には家出できないよね。だから、せめて少しでも楽しい日々を過ごして、そして家に帰って、また家出したいの」

「そうかい」

どうあつても家出したいらしい。

ただ、もしかしたら……これは推測に過ぎないのだが紅野は両親とのコミュニケーションとして家出を繰り返しているのではないだろうか。だとしたら、なんかとんでもなく不器用だな。

と、その時、またしても、ゴロゴロピシャアアン、と稲妻の轟音。

「きゃああ」

そして、また、ひしつと抱きついてきた。

何でこう、抱きついてくるんだ、この娘は。

「故意ですか」

ここまで来ると、もう疑わしい。こう、スキンシップで俺を籠絡しようとしてるんじゃないかと。ってそんなわけないか。

「故意っ？ 故意じゃない！ 故意じゃ！」

慌てる紅野と、突き飛ばされる俺。散々だぜ。

「あのなあ、雷が鳴る度に抱きつかれてたら、たまらないんだが」
そう、たまらない。色んな意味で。

「でも、だって……」

「あんまり叫ばれると、困るんだが」

「だったら雷鳴ったら私の口塞げばいいでしょ！」

「お前、それ……」

なんだか、すごいことになりそうなシチュエーションっぽいので、ちよつと想像してみた。

ゴロゴロ、ピシャーン！

「キ——むぐ……」

「声を出すな」

紅野はコクコクと頷いている。

俺は、左手で紅野の口を覆い、右手で……

右手で……？

「——って右手で何をする気だーい！」

俺は叫んだ。

「わぁ、何よ、急に」

「いや、口を塞ぐのは良くない」

「そうかもね。考えてみたら、何か嫌だわ」

「たとえばその瞬間に誰かが俺の部屋に来たらどうなる？ ちよつと、大変なことにならないか？」

「そうね……」

と、その時だった——

「戸部くーん」

寮長の声と共に、ガチャリと扉が開けられた。

「やべっ……」

紅野は、大急ぎで押入れの下段に入り、内側からピシヤンと戸を閉めた。

間に合った。

そして部屋の入り口に姿を現した頭にねじったタオルを巻いたオジさん寮長が、

「布団出して、布団。シーツ洗うからさ」

「布団だとうっ!？」

「ん? どうしたの」

まずいぞ。布団は、押入れの中だ。押入れの中にシーツを着けたまま片してある。つまり……ピンチである。押入れの中には、紅野が居るからだ!

「あー、シーツですね、ちょっと待ってください」

平静を、装うっ!

「あ、押入れに? 偉いね、布団たたんで入れてるなんて」

「いや、まあ。その方が部屋広いんで」

ははは、と乾いた笑いをしながら言うと、寮長はうんうん、と頷きながら

「そうだね。正しい。それが正しい」

俺は、一度戸を小さく開け、一拍置いて不自然にならないように全開にした。中途半端にしか開けなかったら、不審に思われると考えたのだ。やはり、男はコソコソせずに正々堂々としなけりやな。

「よつと」

俺は、布団を上段から取り出し、畳の上に置いた。そしてシーツを剥がし、雑にたたみ、手渡そうとする。だが、その時、寮長の視線が押入れ下段方向に向いているのに気付いた。その視線の先を見やると、

——おい!

何で見えるところに紅野の革靴が転がってるの!

「戸部くん、その靴……」
見つかつてるう！

「あ、あア……これはですね……」

女子連れ込み↓発覚↓帰れない――

――それは嫌あ！

「どうして、こんな所に外履きが？」

「ああ、えっと、これはですね……」

どうする？ どう言い逃れれば良い？

明らかに怪しいこの押入れに転がった革靴。しかも女子のもの。
そこに靴が転がってるに足る理由は……！

「あー、実は、この靴、同じクラスの紅野明日香って女のものでして、俺が靴磨きが得意だつて言ったら投げ渡してきやがって……」

割と苦し紛れ。

「なんだ、とんでもない女だな」

通用した。

「ええ、そうなんですよ。もうバリバリの不良娘で――」

と、その時だった。

ゴロゴロ、ビシャアアン！

でかい雷音。まずい。まずいぞ。まずいぞこれは。

パブロフの犬みたいな条件反射的反應で紅野が悲鳴を上げるんじゃないか。そうなれば、いよいよオシマイだ！

「……………あう」

僅かに小声が漏れ聴こえたが、何とか抑えてくれたようだ。さすが紅野さん。風紀委員の精神力に乾杯。

「いやあ、すごい雷だねえ」

寮長の言葉に、

「そ、そうですね」

頷く。冷や汗をダラッダラ流しながら。

「でも、突然の大雨とか雷雨とか。この街は結構多いからね」

「そうなんですか」

「バテてない。よかった。」

「それじゃあ、これ、代わりのシーツ」

「え、ああ。はい」

寮長は言つて、俺にシーツを手渡すと、

「じゃあ」

ボタン、と部屋を後にした。足音が聴こえなくなったのを確認して、

「もう出て良いぞ、紅野」

「……………達矢」

俺の名を口にしながら押入れから這い出た。

「よくぞ耐えてくれた」

俺は褒めたが、紅野明日香は何だか不満そうだった。

「誰が不良娘だって？ しかも私、靴投げついたりしてないっ」

「だが、ああ言う以外に何か言い逃れる方法があったかよ？」

「それは……その靴があんと生き別れた双子の兄弟だったとか？」

「何それ、俺、人じゃないわけ？ 靴と血繋がってんの？」

「あ、じゃあ、実は達矢は四足歩行がデフォで手に靴はめてないと落ち着かないとか」

「俺、人じゃねえの？」

何でこいつ、そんな頭のおかしい言い訳させようとしてんの。

「てか、私に靴磨き頼まれたにしても、投げつけないで手渡されたとかにすれば良いのに」

「それはダメだ。リアリティに欠ける」

「暴言だわ」

「すまん」

「まあ、いいわ。勝手に逃げ込んだのは私だし」

許してくれるか。ありがたい。

というか、まあ、よくよく考えてみれば争っている状況ではない

かもしれん。

「ねえ達矢。どうすれば良いかな、これから」
不安そうだった。

「そうだな。とりあえず、紅野を見張ってる連中の正体を見極めたところだが」

「そんなのこわいよ」

俺だってこわい。いや、俺の方がこわがっていると自信を持って言えるね。

「だが、正体のわからん何かを相手にしていると消耗しちまうだろ」

「そうだけど……」

「お前は、どうしたい？」

すると、紅野明日香は言うのだ。
決意した顔で。

「この街から、抜け出したい」

夜になった。雷はおさまったが、未だ雨は降り続いている。

紅野明日香はまだ俺の部屋の隅っこで膝を抱えていた。いつでも押入れに飛び込める位置で。

きつと、悩んだと思う。まだ、悩んでいると思う。学校に転入して三日ほどしか経っていないが、仲良くなった人々も多い。紅野がこれから仲良くなれると感じている人間も居るだろう。たとえば上井草まつりとか。でも、その蕾のような関係を捨ててでも、彼女は逃げたいと言った。その決断を耳にして、俺はどうするべきなのだろうか。

紅野明日香が気配を感じるとというのが、疑心暗鬼から来る錯覚だという可能性もある。とかまあ、そういったことを考えていた。仰向けに寝転がり、天井から吊り下がるペンダント照明を見つめながらずっと、考えていた。

この街から抜け出す方法……ねえ。

それは、空を飛んで山越えを果たすか、昼間に若山つて男が言っていた言葉を信じてショッピングセンターの地下にある外の世界と繋いでいるトンネルから脱出を試みるか。どちらかを選べと言われれば、

「地下しかないだろうな」

ついつい声に出して呟いた。俺は空の飛び方なんて知らない。

「え？ 今、何て？」

「あ……」

声に出してしまったのを彼女の耳が拾ったらしい。

「もしかして、脱出経路を考えていてくれたの？」

おおう鋭い。見事、考えてることを言い当てやがった。

ツーカーの仲というやつか！

いやまて、俺は紅野の考えてることを読み取れるわけではないか

ら、ツ一の仲になるな。

「いや、まあ……」と口ごもるしかない。

「そうなのね!」

「そうです」

観念した。

「あるの? 逃げる方法」

「無いことはない。けどな、脱出が成功する可能性は極めて低いと思う」

「それでも良いの。可能性があるなら」

「本当に、良いのか?」

「うん。教えて。脱出方法!」

仕方ない。

ここまで言ったら、もう教えてやるしかないだろう。

「実はな、本当か嘘か、定かではないんだが」

「うんうん」

「地下から街の外に続くトンネルがあるらしい」

「どこに?」

「ショッピングセンターだそうだ」

「あつ、そつか。それで商品の補充とかが早いんだ」

納得している。何か心当たりがあるようだ。

「現状、最も可能性があつて、現実的な経路はその見たことも無いトンネルなんだが……」

「ふむ……」

「紅野、確認だ。本当に出るのか、この街を」

「うん。それは、もう決めた」

即答する紅野明日香。

「そつか。決行は、いつにする?」

「今っ」

「今ッ?」

急展開過ぎる!

打ち切りマンガか何かなのか、これは。

「もう、嫌なの。この街には、嫌な感じがするの。何となく」

うーむ。女の勘というやつか、それともただのワガママか。ただ嫌な予感ってのは何となく理解できる。俺もおぼろげにはあるが、感じているからな。

「……お願い」

ああ、もう、可愛い女の子の「お願い」は叶えたくなくなっちまう。

これは男としては当然の感情なので仕方ない。

「よし、わかった。行こう」

「ありがとう！」

寮の玄関まで来た。

「よし、行くぞ……」

「うん」

「監視されてる気配はあるか？」

「今のところは、無いよ」

「そうか」

持ち物は、無い。

二人、寮の門を抜け出た。外は大雨から小雨に変化していた。パラパラと、感じないほどの雨。雷鳴もなくなった。着の身着のまま二人、歩く。手ぶらで。闇に紛れるように黒い服の二人。俺は今朝から黒い服。紅野にも黒い服を渡して押入れの中で着替えを命じたのだ。

まあ、多少ブカブカのようだが、腕まくりで何とか対処しているようだ。制服のままだと目立ちすぎるからな。

あ、これは断じてペアルック目的ではないぞ。

隠密行動＝黒い服。

これはもう、コモンセンス。

透明になれる服とかあれば別だが。

で、早歩きでもなく、遅歩きでもなく、標準速度。怪しまれないスピードを心がけた。正確に言うと、心がけたつもりだった。それでも少し早くなってしまうのは、やはり焦燥感みたいなものを感じているからなのだろうか。

「ちよつと、達矢。はいいよ」

「あ、ああ。すまん」

「……………」

そして、ぺつたりと腕にしがみつきながら身を寄せてきた。しかも震えている。小刻みに。

「寒いのか？」

彼女は小さく首を横に振る。

「じゃあ、見られてる感じか？」

「……」

今度は大きく頷いた。

さて、どうしようか。

まあ、ここは一択だな。これしかない。

「じゃあ、走るぞっ」

「うん、言うと思った！」

手を繋いで、二人、走った。

街の南側を目指して。

シヨッピングセンターの裏側。そこにあるトンネルから、抜け出すために。

走る。手を繋いで。揺れる視界。

何度も振り返りながら。

「達矢！」

「何だよ」

「何でもないっ！」

叫ぶように、わけのわからない会話。

俺たちは、これから、旅に出る。この街を出る。

可愛い子には旅をさせろという言葉もあるしな。

可愛い紅野と二人旅……か。

まあ、悪くない。

なるようになるだろう。

大船に乗った気でいてくれ、なんて気休めを言えたら良いのだが。正直なところ不安で仕方ないっつーか、かざぐるま行きになるような男女二人が、街の外に出たところでマトモに生きられるかと言われると、きついと思う。現実的に。

大船？ 泥舟だろう。どちらかと言えば。

俺たちは、絶望的なまでに子供で、もしも、このまま生きていく

と言つのなら、多少の悪には手を染めてしまいかねない。というか、高確率でやらかす。そのくらい、俺は弱かった。そう、かざぐるまシティ住民相応に。まあ、たいがいに入ってのは弱いけどな。

俺は短絡的で、無軌道で、幼い。救えないバカでもある。これから先、学ばねばならないことが多すぎる。つまり、だから、この街を出ないというのが比較的正しい選択。のはずだ。でも、俺の予感
は告げている。紅野の予感も告げているだろう。

——この街を、出て行かないと何か良くないことが起こる。

漠然とした不安を無理矢理力タチにしたいのかもしれない。それを動機にして、理由にして、逃避したいのかもしれない。現実めいていて、現実感の無いこの街から。

疑惑、舞う。

でも、それ以上に確信めいた何か
が心の中にあつて、俺に紅野との脱出を決断させた。いや、それは後付の理由かもしれない。よくわからない。

でも、感じるんだ。

昔の人は言つた。「考えるな、感じるんだ」と。

なんかアツいセリフだね。

いいじゃないか。こういうのも。

成功するかどうかは不明だが、どう転んでも価値があるんじゃないかって考えよう。

今まで、今までいい加減に生きてきて、更生しようって時に、こんな考えを抱くなんて、俺は心底腐ってるのかもしれないが、何度
も言うように、これは理屈じゃない。

圧倒的な、予感。今の俺を動かす八割は、それだった。動機にしては弱いように思えるが、理屈じゃない。とことんフィーリングに生きるんだ俺は。

とにかく、泥舟でも漕ぎ出せば、沈むとわかっている島に留まるよりは可能性が広がるってことだ。本当に沈む島なんてあるのかどうかは、不明だけどな。

大型ショッピングセンターの裏側に来た。

物陰で、手を繋いだまま立ち止まる。足元は、ぬかるんでいた。

「はあ、はあ……紅野、気配は？」

息を切らしながら、訊くと。

「……なくなった」

紅野は息を整えた後、答えた。

「どうやら撒いたらしい。」

「はあ……そうか」

俺も息を整え、天を仰いだ。

小さな雨粒が、目に入った。

「それで、達矢、トンネルって、もしかして、あれかな」

「ん？」

紅野は、轍の先にある光を指差した。

帯状に奥に向かって断続的に続く光。黄色っぽい、いかにもトン

ネルっぽい光だ。夜の闇に、妙に目立っていた。

轍の先。轍……轍か。それは、車などというものが走ることの無いこの街には、あり得ないものだ。つまり、目指すトンネルは轍の先にあるということ。風が強すぎるこの町では余程のことが無い限り車が使えないから、車があるってことは町の外に繋がっている可能性が高いということ。

紅野の指差す光が、トンネルの入口であるのは間違いなかった。

だが、

「警備員が居るな」

「うん……」

大あくびしてる警備員が一人。気の抜けてる警備員が一人。雑談している警備員が二人。計四人。

まあ、一応、外界とこの街を繋ぐ場所だから、それなりに人員を

割いているようだ。

「死角から回り込んで内部に侵入だな」

「正面突破は？」

「それは今じゃない。街を抜け出したいんならな」

「そう、だね」

「街を抜け出そうとする道の途中で、正面から立ち向かうことになると思うから、その時にとっておけ」

「わかった」

素直だった。

俺たちは接近する。

「ふぁ……あ」

あくびする警備員。

俺と紅野は、スキについてトンネルの右側から内部に侵入した。

幸い、緩慢な警備なんてものはザルそのもので、いとも容易く侵入できた。

トンネル内部には、いくつものトラックが停車していて、それが監視する者——といっても、やっぱり穴だらけだが——の目から隠れる遮蔽物になりえた。

慎重に、慎重に歩を進める。

問題は、トンネルがどれほどの長さで、どこに繋がっているかだ。トンネルを抜けた先が単なる別の街なら良い。危惧するのは、そうでない可能性。

軍事施設とかだったら厳しいな。

そうでなくても何かの監視下とか、見渡す限り何も無い荒野とか、滅亡後の世界とかも嫌だな。アダムとイヴ的な事態になんかなりたくないです。

「……あんだ、こんな時に何呆けてんの？」

「いや、すまん。トンネルの先のことを考えてた。だが、まあ、それは今考えても仕方のないことだ」

「そつか。トンネル抜ければハイ終わりってわけじゃ、ないのか」
「おいおい」

先が思いやられるぞ。
と、その時だった。

「何だ、この足跡」

俺たちが入ってきた入口の方からの声。

「これは……学生用革靴の靴跡……？」
まずい。

「何だつて？ まさか、学生？」

これは、よくない。

「まずい、それはまずいぞ。学生が脱走したら」
気付かれた！

「班長に連絡を、あと隔壁を降ろせ」

「隔壁の準備に五分は掛かります」

「三分で何とかしろ」

「や、やってみます」

警備員たちは、一斉に慌ただしく動き出した。

「まずい、気付かれた。紅野、走るぞ！」

「うそつ、何で！」

「水に濡れた足跡から侵入したこと自体に気付かれた。姿は見つかっていないけども、トンネル内に壁みたいなのが用意されていたら、万事休すだ！」

あるだろう。隔壁が。街の住人を逃がさないために。あの警備員も、それらしいことを言っていた。

「ねえ、『これ』……使えないかな」と紅野明日香。

紅野明日香が「これ」と言ったのは、
「トラックか」

やってみる価値はあるかもしれない。

積荷の載っていないトラックの中は無人。問題は施錠されているかどうか。

扉を開けてみると、簡単に開いた。ラッキーだった。
だが、ピンチに変わりはない。

足跡を辿られれば、すぐだ。すぐに俺たちのところに警備員が来る。捕らえに来る。

俺は、紅野に先に入るように促し、少し高い場所にあるトラックの出入り口から、押し込むようにして中に入れた。

「奥行け、奥」

「あ、うん。助手席に――」

その、瞬間だった。

パーーーーーッ！

高くて大音量のクラクション音が、トンネル内に鳴り響いた。

紅野がハンドルの中央を押し込んでしまつて、鳴つたのだ。

うえい、救いようのないドジっ娘！ 大事な時にっ！

「トラックだ！　トラックにいるぞ！」

「あつ、やつぱ！　早く乗つて、達矢！　助手席に！」

紅野明日香は、助手席には行かず、運転席に座りなおし、俺は紅野の膝の上を飛び越えるように跨いで、助手席に辿り着き、座つた。

このトラック……無用心なことに、キーも刺さつたままだ。

おそろしくなるくらいにラッキーだ。このラッキーが、せめてトンネルを出るまで、もってくれば良いのだが。

紅野がドアをボタンと閉め、素早く椅子を前に引いた。運転しやすいように。

「おい！　いたぞ！　このトラックだ！」

警備員の声でした。

「明日香！　エンジン」

「任せてっ」

クラッチペダルとブレーキペダルを踏みながら差しっぱなしになつていたキーを回した。

ブロロロと音がして、エンジンが掛かった。

ギアを切り替えて、両足を色々動かし、左手でサイドブレーキを

落とし、発進した。

二車線のどこまでも続くような真っ直ぐな道のトンネル内を、ゆったりと発進した。妙に手馴れている。

「あの……紅野さん……」

「何よ」

「もしかして、運転できる人？」

「余計なこと話しかけないで」

「ああ、ハイ」

そこで、ようやく運転席の扉が閉められた。

「正面から、突っ切るわよ！」

めまぐるしく、ギアを切り替える。ペダルを何度も踏む音が響く。何をどうやってこの車を操ってるのか、詳細はわからない。俺には知識が無いから。だが、トラックは発進し、スピードを加速度的に増している。

スピードは、時速四十キロを超えた。その時――

ズン、とすぐ後ろで音がした。

侵入者防止、脱走者防止の隔壁が落とされた音だろう。

時速八十五キロを超えた。更にギアを入れ替える。

前方、視界に機械音と共にねずみ色の巨大な隔壁がゆっくりと降りてくるのが見えた。

「紅野！ 隔壁がつ！」

「見えてるわよ！ 黙って！」

紅野明日香はアクセルを踏んだ。

加速。潜り抜ける。

「私のシートベルト、お願い」

「え？」

「シートベルト！ ハンドル握ってて、自分じゃ掛けられないから！」

「了解」

「あと、あんたもシートベルトして。危ないから！」

「おうよ」

俺は彼女の肩の向こうにあるシートベルトのバックルを右手にと、ハンドルを握る彼女の腕の間を通した後、左手に持ち替えた。そして、カチツとはめるべき場所にはめる。ちよっと、胸に手が触れた。

「ありがと」

しかし、紅野は、そんなことには気を向けず、運転に集中している。

まあ、胸、大きくないしな。

よく見ると、額に汗していた。

「達矢。ベルト」

「おっと」

俺もシートベルトしないとな。

さすがに、このスピードで何かにぶつかったらシャレならん。

シートベルト。しゅるしゅる力チリと着用完了。

「知ってるか？ 今じゃ後部座席もシートベルトしなきゃいけないんだぜ」

「うるさいっ！」

おこられた。かなしい。

しばらく走って、走って、かなり遠くの方で隔壁がゆっくりと降りるのが見えた。これは、潜り抜けられるのだろうか。

「——っ、間に合わないっ！」

そう、明らかに無理だった。

敵も計算してきたのだろう。

思えば、そうだ。

隔壁と隔壁で挟んで閉じ込めてしまえば、袋のネズミ。逃げ場なし。

隔壁に正面から衝突したら、事故って俺たちは死ぬだけだ。

つまり、

——殺しても構わない。

そういつことなのだろう。

キキイ―――！

当然の急ブレーキ。急ハンドル。

視界が高速で流れ、車体は横向きになる。タイヤがロックされ、横滑りする。それでもバランスを失って横転したり、壁や隔壁に激突しないのは紅野の腕前なのだろうか。

ともかく、前につんのめるようにしたところをシートベルトに支えられ、ハイスピードで流れて揺れた視界は止まり、薄暗くて黄色い、トンネル独特の明かりが、そこにあった。

「ふう、シートベルトが無ければ、やばかったな……」

ふざけて言う俺の声など聴こえない様子で、息荒く、汗だくの紅野。

「どうしよう、逃げなきゃ。どこに、ダメだ。トンネル……」

ぶつぶつと、呟く。

まずいな、ハイになりすぎている。正気を失ってるのかもしれない。このままでは、まずい。

「紅野！ 降りるぞ！」

俺は大声で呼びかけ、助手席側の扉を開けてトラックから降りると、素早く反対側に回り、運転席の扉を開けた。

「紅野。ほら、シートベルト外して、歩くんだ。少しでも、遠くに」

「嫌だよ、こんな……」

「明日香っ！」

叫んだ。

「え……あ……」

大声に驚き、正気に戻ったようだ。

そして、降りようとする。

しかし降りられない。シートベルトをしたままだった。

「まだ警備員は来てない。走れば、まだ撒ける可能性は大いにある」
「そう、そうね」

紅野は、息荒いままシートベルトを外し、そのまま、真横に倒れ

る格好で車を降りた。

「つとと……あぶね……」

危ない降り方にも程がある。

俺が抱きかかえなかつたら頭から落ちていたかもしれん。

ていうか、汗びっしょりだが。大丈夫か？

「おい、紅野……紅野？」

呼びかける。

「はい、何ですか、先生」

「先生じゃねえっての」

どうも、混乱しているようだ。

「走れるか？」

首を振った。横に、小さく。

仕方ない。

「しっかり掴まってるよ」

言って俺は汗だくの紅野明日香を背負って走った。

背中 of 彼女は、しがみついていた。しっかりと、強すぎるくらいの力で。

よく見ると、隔壁には小さな扉がある。

それを開ける。開いた。

走る。黄色い明かりの中。二車線の、トンネル内を、全力で。紅野明日香は、よく運転してくれた。今度は俺の番だ。俺が、彼女をこの街から連れ出すために……その為に、できることをするんだ。

ま、頭の悪い俺には走ることもくらいしかできないのだが。

走った。走った。ひたすらに。

けれど、行けども行けども出口は見えない。一体、何十キロ、何百キロ先に出口があるのだろうか。気の遠くなるような旅路に思えた。と、その時だった。

不意に、暗転した。トンネルの天井部分の電灯が、全て消えたのだ。あっさりと、絶望的なまでの闇に包まれる。一切の光が存在しないかのような。

「はあ、はあっ……こっちだ」

それでも、俺は走った。方向感覚を頼りに。

ドン、と壁にぶつかった。全く頼りにならなかった。あっさり壁にぶつかった。闇は、方向感覚さえ奪う。目印が無ければ、人の知覚なんてのは、こんなにも脆いものなのだろうか。それが、何だか悔しい。

「っ……ふう……はあ……」

背中では、紅野が苦しそうにしている。

助けたい。籠の外に、出してやりたい。どうしてもそれが叶わない。もう方角がわからない。どっちに向かえば良いのか、出口がわからない。走るのは危険だと思った。何かにぶつかったり、ぼつかりと地面に開いた穴に落ちるイメージが浮かんだから。

それでも、進まなくてはならないと思う。だから、俺は歩いた。一步一步、確かめるように。

「大丈夫か？　大丈夫か、紅野」

こちらでも、確かめるように。

「ん……うん。でも、何も、見えない」

「トンネルの電気が落ちたんだ。だから、失明とかじゃないから、安心しろ」

「ああ、そうなのか。よかった」

「明日香……」

「何？」

「もう一度訊くぞ」

「……」

「この街を、出たいか？」

「うん」

小さく、軽くて重い、甘い声。

そう、確かに、確かに紅野明日香は望んでいる。

この街を出て行くことを。

なのに、俺にしてやれることの、何と少ないことか。

露呈した。無計画さが。頭の悪さが。他にも、色々……色々……。
つまりは、無力さが。

悲しい。

「こんなの、嫌」

「え？」

「遠くに……」

「明日香？」

「遠くに行きたいって、思ってた。なのに、どうして私は、ここに居るの？」

泣き入りそうな声。

「確かに家からは遠ざかった。でも、どうして私はこんな世界にいるの？ こんな隔絶された狭い世界に！」

今度は、激情を伴って。

「しかも、どうして誰かに狙われるの？ 何なの？ 私が何をしたいっていうのよ！ 私が何をするって言うのよ！」

きつと、泣いてた。

「出させてよ！ この街を！ どうしてそれを許してくれないの！ どうして、どうして抜け出せないの！ 助けて……誰か助けてよ！ こんな世界、こんな街、消えて、消えて無くなっちゃえばいいのに——！」

その言葉と、同時だった。パツと世界が眩しくなった。トンネルの黄色っぽい明かりが復活したのだ。その時、周囲の光景は様変わりしていた。

「なっ」と俺の声。

「うそ、やだ……」と明日香の声。

思わず声が漏れるほどに、嫌な光景。

視界には武装した黒い服の特殊部隊みたいな人々が居て、俺たちを三百六十度囲んでいた。

逃げ場は皆無だった。

「なに、これ……」

紅野の絶望の声と共に……暗転した。
殴られたか、そういう眠らせる薬物が、それ以外の何かが原因な
のか。あるいは、これ、俺、死んだのか。
ああ、でも、もう、どうでも良かった。
逃亡劇は、失敗に終わった。

【つづく】

幕間「01」アンブレラなんて意味ないのよ

教室。

みどり「あ、見てみて、このキレイな傘！ いいでしょ？ 可愛いでしょ？ 花柄だよ！」

まつり「何だ、自慢がこの野郎」

みどり「そ、そうじゃないけど……」

まつり「教室内でアンブレラを広げて見せびらかして何が楽しいんだ、みどり」

みどり「見せびらかしてるとか、そんなんじゃ……」

まつり「あやまれよ！」

教室内は、水を打ったように静まり返った。

みどり「ごめん……」

まつり「だいたいね、この街でアンブレラなんてもんが意味あると思ってるの？ 傘なんて風ですぐに壊れるだろうが！」

みどり「ふふふ」

まつり「何笑ってたんだ、みどり。アンブレラなんて風の弱い日とか風いでの時間帯しか使えないんだからあったって無駄だろうが」

みどり「これはね、丈夫な傘なんだよ。壊れにくい傘で……」

まつり「どれ、貸してみろ」

みどり「……」

まつり「貸せつつってんだろ！」

ばっ！

みどり「あっ……」

まつり「ていつ！」

ばきっ！

みどり「！」

まつり「……ふっ」

みどり「お……おれた……」

まつり「な？ 丈夫なんていっても、こんなもんなんだよ。アンブレラは所詮はアンブレラ。あたしの方が実力は上よ」
みどり「ひ、ひどい……うう……」
まつり「チッ、嘘泣きしやがって、このタヌキ！」
みどり「うぁーん！」
まつり「アンブレラなんて意味ないのよ！」

上井草まつりの章「1・1」

転校一日目。サボろうとした罰でも当たったかのように、俺は、女子に撥ねられた。

うんざりするくらい険しすぎる坂を登り、風車並木を通り過ぎた俺は、転校初日だというのにすっかりサボりたくなって、校内をコソコソと移動して屋上へ向かうことにした。

何故屋上なのかといえば、やっぱり、高いところに登ってこの町を見渡してみるべきだろう。それが、転校生が転校生として最初に行うべきイベントなのではないか。

まったくおかしいな思考だと思うが、俺は残念ながら秩序とか論理的とか、そういったものとは縁遠いアレな人間ってとこだ。

人目につかないようにコソコソと中庭を物陰に隠れながら移動するなどして遠回り。閑散として静まり返った昇降口で靴を脱ぎ捨て放置した。階段を登り、登り、登り、登って辿り着いた屋上。

既に開いていた引き戸から外に出ると、風が強くて、一瞬、とばされそうになる。

もしも俺が三歳くらいの子供だったら吹き飛ばされてしまうような、そしてフェンスに打ちつけられて、「フェンスがなければ即死だった」とか言うような。

——って三歳の子供そんなこと言わねえだろ。

自分でツツコミを入れてみたりして、その後で、

「っはあ……果たして、この学校でツツコミ入れ合ったりできる関係築けるかなあ……」

とかって呟いてみたりして。新しい環境に対する不安がそうさせたのかもしれない。

さて、町いちばんの高い場所にある屋上から、登ってきた坂の途中にある向日葵みたい在一定方向を向いて並んでいる風車並木やら、麓の商店街やら、湖周辺の住宅街やら、湖に浮かぶ二つの浮島だと

か、この町を風の町たらしめている直線的な裂け目だとかを見た後、良い景色だなあと思ったものの、容赦なく襲ってきた強風によって目がしばしばしちゃったりして涙出そうになったりしたんだ。

そんな時に校内放送で、

『本日転校してきた戸部達矢くん、紅野明日香さん。（このあすか）登校してしましたら、至急職員室まで来てください』

なんて言われたもんだから、

初日から遅刻で初日から呼び出しくらうとか、何かの主人公か俺は。なんて考え、さらに、これで見ず知らずのパンくわえた女の子と衝突したりしたら完璧な朝だな、とかって考えたのだが、まさにその時って感じで頭の上から女の子が降ってきて、俺の頭頂部を思い切り踏みつけやがったのだ。

「きゃ」

とか声を漏らしながら。

「はうあっ！」

突然の頭頂部への一撃に、俺はうつ伏せに倒れ、額をコンクリに強打した。

「あああ、ごめんなさい。まさか下に人が居るとは思わなくて」

「いててて。な、何が起きた？」

俺はぶつけた額を押さえながら立ち上がり、前を見たのだが、涙で掠れた視界に制服姿の女子が居た。どうやら、その女子が少し高い所から降って来たらしい。おそらく、給水塔のある屋根部分からジャンプしたのだろう。

ちなみに、パンはくわえていなかった。

「にしても、しよっぱなから呼び出しか。参ったな」

その女子は、風に短い髪をなびかせながら言った。

「……………」

立ち上がり、じっと見つめてみると、そこそこ可愛いかった。

いや、風に吹かれているから可愛く見えたのかもしれないな。風に吹かれている女子は二割り増しくらいで可愛いに見えるからな。

そして女子はこう言った。

「何見てんのよ。ていうか、あんた誰？」

「俺は、今日転入してきた戸部達矢だ」

「へえ、じゃあ今呼び出しくらった不良？ やだこわい。近付かないでよ」

「お前も今、『呼び出しか』とか言ってたじゃねえか。お前も転入生なのか？」

「ん、うん。そうだけどね。紅野明日香っての」

「紅野明日香、か」

どつかで聞いたことあるような、ないような。

「呼び出しなんてかつたるいわ！。あたしは逃げるけど、あんたどうする？」

俺は紅野明日香の言葉に対して大変驚いた。

教師陣からの呼び出しから逃げるだと、そんな思想を展開させるほどの豪の者なのか、この女。俺は、不良とはいえプチが付くほどの可愛い不良。だから、今までの人生で呼び出しにはちゃんと応じてきたぞ。すっぱかしたことなど一度も無い。もしや、この学校には、コイツみたいな突き抜けた不良が、うじゃうじゃなのか。これからの学校生活が不安で仕方ないぞ！

そんな思考をめぐらせた後、ある結論に至る。

まあ、こんな不良とは関わりを持たないに限る。プチ不良は、あくまでプチ不良。実は教師の指示から大きく外れることはないのだ。というわけで、俺は一人で職員室へ向かうことにした。

「じゃあな」

「あ……っと、ちょっと、ま、待ちなさいよ！」

背中の方から紅野明日香の声がしたが、聴こえないフリをして、俺は屋上を後にした。

ここまでは、ちょっと額が痛いになってくらいで、大した問題はなかった。もっと痛いことになったのはその後だ。

職員室はどこだろうかと歩き回ったのだが、本当に職員室の場所

がわからなかった。

焦った俺は現実逃避をしようと考え至り、廊下の窓を開け、少し強めの風に吹かれながら眼下にある大きな風車を見つめつつ途方に暮れていたのだが、しばらくそうしていると、視界の端に、何か動く物体が見えた。

その物体がある方、廊下の角の方を注視してみると、それは長い廊下を猛ダッシュしてくる制服女子だった。

何故猛ダッシュしているのか不明だったが、とりあえず声を掛けてみようと思った。

「あ、あの」

しかし、

「どけえええ！」

その女子は猛スピードで近付いてきて、

「あの、職員室は何処——」

言い掛けた俺の体を弾き飛ばした！

車に撥ねられたみたいな衝撃！

「さるぼぼお！」

民芸品風の叫び声を上げながら、俺は宙を舞った。

両手両足を前に突き出しながら廊下を飛んだ。

そして、ドサリと床に落ちる。

痛いっ！

「ソーリー！」

背の高い女の、反省の色を感じられない謝罪だけが、耳に残り、視界から消えた。

これが、初日に遅刻した罰なのだろうか。

なるほど、いきなりこんな罰をかましてくるとは、さすが牢獄と言われるだけのことはある。

何で俺は、こんな町に来ちまったんだろうなあ。

いやまあ、遅刻とサボりを繰り返したからだったのは、わかっているのだが。

上井草まつりの章「1 - 2

と、俺が落下の衝撃による痛みに悶えていたその時、ガラリと近くの扉が開いた。

「ん、戸部達矢か？」

声がして、男が出てきた。どうやら教師のようだ。のたくたと起き上がり、姿勢を正して、返事する。

「はい」

そして訊くのだ。

「先生とお見受けしますが、職員室が何処にあるか、教えて下さいませんか！？」

「はあ、確かに教師だが……職員室は、ここだぞ」

教師は、頭上にあるプレートを指差した。

見上げてみると、そこには『職員室』の文字。

うえーい、転入早々はずかしーい！

「というか、お前、裸足じゃないか。笠原には会わなかったのか？」

笠原？ 誰だろうか。

もしか、さっき俺を撥ね飛ばした女のことだろうか。

「いえ、えっと、それは背の高い女子ですか？」

「そこまで高くないな。162か3くらいだ」

「じゃあ、わかりませんね」

「まあ……いいか。じゃあちよつとここで待ってる」

教師は言っと、職員室奥でガサゴソした後、少し奥にあるデスクから教科書の束を手に取り、それを片腕に抱えながら戻って来た。もう片方の手にはスリッパ。

「まずはこれを履け」

スリッパを渡される。

履く。

「あ、どうも……」

「じゃあこれから教室に行くからな」

「はい」

廊下を歩き出した。

俺は、教師から半歩遅れて歩く。

「戸部くん」

「何ですか？」

「笠原という子がクラスに居るから、上履きを受け取るように」

「はあ」

「結構人見知りする子だからな、あんまり脅かさないでやれ」

「はあ」

「他に何か質問は？」

生返事ばかりしていたためだろうか、教師は苦笑した。

「あ、じゃあ一つ、いいですか？」

「何だ」

「さっき、廊下で背の高い女子に撥ね飛ばされたんですが、あれは

……」

「背が高く、他人を弾き飛ばす……となると、アイツしかおらん
な……うん。それは、アイツだ」

一人で頷いて、完結していた。

「……………」

「さ、着いたぞ。ここが、今日からお前が過ごす、教室だ」

着いたらしい。

引き戸の上部に取り付けられたプレートにあるのは『三年二組』
の文字。

ちなみに、廊下は水を打ったように静まり返っている。

普通、誰かが転入するとなったら、ざわざわして大騒ぎで、期待に胸躍らせたりするものじゃないのか。なのに、まるで何かに怯えるみたいな空気を感じる。暗い雰囲気のクラスだったら嫌だな。

俺は賑やかな方が好きだからな。

「おっと、もうこんな時間だな。俺のすぐ後に続いて一緒に入ってくる。」

教師は、時計を確認しながら言った。

「あ、はい」

教師が引き戸を開けた。教室が、一瞬だけざわついて、すぐに水を打ったような静けさに戻った。俺が教室に足を踏み入れたからだろうか。

「お前ら、席つけー席ー」

俺と教師が歩く音が妙によく響く。

で、静寂。

「さて、今日は、転校生が、来てます」

黒板に俺の名を刻みながら教師は言った。

が、まだシーンとしている。黒板をチョークで叩く音もよく響く。

「じゃ、戸部くん。自己紹介をお願い」

教師は、チョークで白く汚れた手を叩きながら言った。

「戸部達矢です」

至って真面目な挨拶から入ったが、さて、ツカミは大事だ。どうボケようか……。

「はい拍手ー」

教師は手を叩きながらそう言った！

「——ってそりゃないっ！」

これからって時にっ！

相変わらず教室は静かだが、とにかく面白いことを言わなくては。何だ、どうした。時間が無いんだ。そしてお前が遅刻して来たから時間なくなっただろうが」

おおっ、返す言葉が無い……。

「でも一言くらい」

「じゃあ、一言だけな」

さて、気を取り直して、もう一度自己紹介をしよう。

「コホン。戸部達矢です——」

「はい終わりー」

ひどい、この教師ひどい！

「これからっ！これから言うところっ！」

「何だよ、時間ないって言ったる、さっさとしろ」

「はい、すみません……」

やべえ……なんかすぐえ蔑みの目を向けられているような気がする。蔑みって言うと言いすぎだろうが、何ていうか、白い目？

クラス中から不興を買ってるのは間違いないだろう……。

挽回しなくては！

「じゃ、テイク3な。はい、どうぞ」

そして、俺は言った。

「俺、昔さあ、テコの原理をチコの原理だと思ってたんだ。似てるよね——ってチコの原理って何だよ！」

「……………」

……」

北極った！

皆が寒さに震えている！

皆が俺の目を見ようとしない！

挽回を……あったかいネタを。

そうだ、そうさ！

人間はスベってからが勝負！

得意の裏声を披露する作戦っ！

「あたし、最近お肌が気になるのよね。やっぱ、30代に入ると、『角質』との『確執』が表面化してしまうのかしら。それを『隠しっ』つも確実に老いが襲って、もう正面からじゃ若さに太刀打ちできないわ……あーあ。美の『隠し通』路とかがあればいいのにな」

「……………」

……」

南極化！

極寒！

温暖化はやはりウソだった！

「気は済んだか？」

「はい。調子こいてすみませんでした……」

皆が白い目で見てくる。もう登校拒否したい。転入したばっかだ
けど。

「さ、それじゃあ授業を始めろぞ。お前の席は一番後ろに空いてる
席だ」

見ると、最後方には空席が二つあった。窓際の席と、その隣の席。
「二つ空いてますけど」

「好きなほうに座れ。ほら、教科書」

教科書の束を手渡されたので、受け取る。

好きなほうに座れ、か。ま、当然、窓際の方だな。

俺は静かな教室の中を歩き、着席した。

自己紹介に失敗した。

上井草まつりの章「1 - 3

チャイムが鳴った。

授業が終了し、休み時間になったのだ。

ちなみに、授業内容に関しては聞かないで頂こう。さっぱり理解できなかったから。おかしいよな、ちゃんと手元に教科書あるのに。と、その時だった。

「ちよつといいかしら」

知らないキャラ登場。

「誰やねん」

自己紹介の失敗を引きずり、関西っぽく言った。

ちなみに、関西弁など喋れないので発音が怪しい。

「戸部達矢くん。私は、伊勢崎志夏。このクラスの級長なの。よろしくね」

髪の短い美女であつた。

ていうか、関西弁に関してはスルーである。級長すらスルー体質とは、いやはや、このクラスには優しさと笑いが足りない。

「はあ、どうも。何て呼べばいい？」

「志夏、でいいわ」

「そうか。それで、志夏、何か用かい？」

「ん？ ああ、うん。用件というかね、まあ、何て言うか、この学校は、少し、何と言うか、おかしな生徒が多いから、ね」
なるほど。

転校生がイジメの標的になったりしないように見守ろうというわけか。級長らしく面倒見が良いらしい。

「それに、戸部くんは少し、孤立してしまいそうだから、ね？ わかる？」

なるほど。

転校生が孤立してしまわないように話しかけてくれているという

わけか。級長らしい。彼女は級長らしいが、俺としては、みじめだ。と、その時、俺のことらしい囁きが耳に入った。クラスメイトのヒソヒソ話である。

「不良っただけで飛ばされてくるなんて、よっぽどの不良なのね」

「見るよあの目付き。人殺してそんな感じがビンビンしやがる」

「おいおい女子ども、あんまりじろじろ見てると危ねえぞ、何されるかわかったもんじゃねえ」

「あ、そ、そっか。皆、目を合わせないようにしよう」

「そうだな、それが良い」

ひどい子たち。泣きそう。

「ごめんね、うちのクラスの連中、みんな性格悪くって」

笑顔で言うことが。

「あ、あともう一人、規格外の不良っというか、要注意人物が居るから、その子にだけは逆らっちゃダメよ。死ぬから」

えっと、死ぬって、どんなレベルの不良だ、それ。

「どこに居るんだ？」

訊くと、志夏は教室を見渡して言った。

「んーと、まだ来てないわ」

「ほう、遅刻か。不良だな」

「根は良い子なんだけど、ちょっと、性格に難があるというか……素直じゃないというか……」

「とにかく、困ったことがあったら、何でも私に相談してね」

「おう、わざわざサンクス」

「あ、それと、まだ初日だから笑いが取れないのは仕方ないわよ。それじゃあね」

伊勢崎志夏は言うつと、颯爽と教室を出て、廊下に出て行った。

励ましが、心に染み入る。

俺は、窓の外を見た。

キィキィと音を立てて、大きな風車が回転してる。

まあ、何とか、登校拒否はしないで済みそう、かな。

授業中。

俺は窓際の席に座り、窓の外の風景を見ていた。

巨大な風車が、時計回りに回転しているように見えた。

キィキィという摩擦音を立てながら。

と、その時――

「くおら、窓際最後尾！」

声がした。

「え？」

振り返ろうとした時、

ベコオ！

「コメカミツ！」

思わず叫んだ。直撃した部位の名称を。

「転入初日で呆けるとは何事だ」

「すみません……」

教師はツカツカと向かってきて、俺の足の近くに落ちた白チヨークを拾い上げると、戻っていった。

「……………」

ああ、静か過ぎる……。

今のは、もっと笑われたりする賑やかな場面のはずだ。

何だってこのクラスは、何かに怯えているかのように生活しているんだ。

と、その時、ガラツと扉が開いて

「げえ……もう授業中か！」

背の高い女だった。

って、あいつは……。

今朝俺を撥ね飛ばした背の高い女！

大遅刻してきやがった。

朝、俺をぶっ飛ばしたのだから、ずっと学校に居たはずだ。なの

に、こんな時間に登校ということは、どこかで暇を潰していたに違いない。

不良だ。不良以外の何者でもない！

もしか、あれが志夏の言っていた要注意人物ってやつか？

「遅いぞ、上井草まつり！」

上井草まつりという名らしい。

「ソーリーサー！」

左手で敬礼していた。だが、何だろう、反省の色が感じられない。

「はあ……いいから席つけ、席」

上井草まつりという女は、「へーい」とかってふざけた返事をし
て、廊下側の席に座った。

廊下側にあった縦に並んだ二つの空席のうちの後ろの席。

そして、その後は一応真面目に授業を受けているようだった。

休み時間になった。

俺は、授業中と同じように、窓の外に見える回転風車を眺めていた。

規則的な回転は、何となく飽きない。単調なので、眠くはなるが、で、眠くなってしまったので机に突っ伏して、まどろみかけたその時、声が聴こえてきた。

「なに、志夏、何か用？」

まあ、とりあえず眠いのもう一度、まどろもうと試みる。

「上井草さん。また遅刻？ 毎度のことながら呆れさせられるわ」
級長らしく、注意していた。

どうやら相手は、朝、俺を撥ね飛ばした不良女のようなうた。

「やつはあ、ごめん志夏。次から気をつける」

「毎回その言葉聞いている気がする。でも、まあいいわ。それよりも今日転入生が来たわよ。挨拶したら？」

俺の話。

目が覚めてしてしまったではないか。だが、志夏の話によるとあの女は要注意人物。あまり関わり合いにならない方が良くかもしれない。そこで俺は、ためき寝入り作戦を選択した。

「ほう、どれどれ？ お、あの窓際最後尾で机に突っ伏してる子だね」

その言葉の後に、足音と、大きな気配を感じた。

そして大きく息を吸い込む音が聴こえたと思ったら、

「ヘイ！」

耳元で大声エツ？

俺はビクッと体を震わせた後に勢いよく起き上がった。後頭部に何かがぶつかった。

あうあ、耳が、耳がキーンっていつてるう。

「いったたた……」

見上げると、ぼやけた視界の中で、美人が鼻を押さえて悶えてた。美女が台無しだった。

「あ、すまん。大丈夫か？」

どうやら先刻の後頭部へのダメージは、上井草まつりの顔面への頭突きとなつたようだった。

「てめえ、いきなり頭突きかよ！」

何たる言葉遣い！

台無し美人！

「だから、謝つてるだろうが」

俺は左耳を抑えながら言った。鼓膜とか破れて……ないようだ。左耳抑えててもちゃんと音拾えるみたいだからな。右鼓膜の危機は去った。

女は、いい笑顔で、

「ま、いいか。あたしはこのクラスの風紀委員。上井草まつり。よろしく！」

「風紀委員？　なのに遅刻なのか？　ダメじゃないか」

「いきなり初対面の人間にダメとか言うな。このダメ人間」

矛盾してる。初対面の俺にダメって言ってる。

「ていうか、初対面で耳元で大声はやめておけ」

「あたしは頭突きされた。痛かった」

「お前が大声出さなければ何の問題も無い出会いだったんだ」

「屁理屈を」

どこらへんで屁理屈をこねたと言うんだ。極めて真つ当なことを言つたぞ、俺は。

「まあいい。俺は戸部達矢だ」

自己紹介した。

「よろしく、達矢」

いきなり呼び捨てかい。

「ああ、よろしく、まつり」

俺も呼び捨てで返した。

「ところで、キミ、どこかで見たことあるんだけど……」

「まあ、そうだろうな。朝、職員室の前で会っただろうが」
すると上井草まつりは思いついた顔で、

「……ああ、ちよつと肩がぶつかつちやつた人だ」

ええと……ちよつと？　ぶつかつちやつた？

俺は宙を舞うくらい吹っ飛んだんだが、それが「ちよつと」って言えるのだろうか。それに、ぶつかつたって言うよりは、撥ね飛ばしたというのが正しいだろう。

しかし、俺が複雑な表情をしているのを気にする様子もなく、上井草まつりは、

「ようし！　とにかく、キミは我が三年二組の仲間だ！　大丈夫。

おかしいことをしなければすぐに馴染めるわよ！」

良い笑顔で、言っていた。

何だろう、こんな変な風紀委員が居る場所に、馴染める気がしないんだが。

上井草まつりの章「1 - 5

チャイムが鳴った。放課後になったのだ。

教師が既に帰りのホームルームを終わらせて職員室に去り、チャイムが鳴ったら帰って良いと言いついて残っていた。

「ふあ……あ」

俺は大きく欠伸をし、そして思い出した。

「あ、そういや、笠原って子に会わないとな」

転入の挨拶失敗のショックですっかり忘れていた。

教師に上履きを彼女から受け取れと言われていたんだっただ。まだ学校に居るだろうか。

志夏にでも訊いてみるか。

「つて、いねえし……」

見当たらなかった。

じゃあ、上井草まつりにでも。

「つて、これもいねえし」

どうしようか。ここはひとつ、掃除してるクラスメイトにでも訊ねてみるか。

「おい——」

「ひいいい!!」

男は逃げてった。

ええと、何だこれ。

めげずに箒持った女子に話しかけてみる。

「ちよつと訊きたいんだが……」

「きゃあああ!」

女も箒を放り出して悲鳴を上げながら逃げた。

えー……これ、イジメじゃない? 俺、イジメられてない?

何で、話しかける人に悲鳴上げて距離を取られなきゃならんの。刃物持って裸で暴れてるわけでもねえのに。

「笠原って子、知りませんかー？」

俺は、少し大きな声で言ってみた。すると、クラスメイトたちはヒソヒソと、

「笠原って、みどりちゃんのことよね」

「みどりサンに何する気なんだ」

「サイテー。鬼畜……」

「みどりは今どうしてる？ 狙われてることを教えてやらないと」

「もう帰ったよ。大丈夫」

それを耳にした時、思わず俺は叫んだ。

「てめえら、いい加減にしやがれ！ 良いから、笠原って子の居場所吐けってんだよ！」

「ひ、ひいいい！ みどりちゃんなら、坂を下った商店街にいますう！」

「笠原商店ってお店に居ると思いますっ！」

ふむ、笠原商店か。

「そうか、ありがとう」

俺は努めて爽やかに言っていると、教室を出た。

向かう先は、笠原商店。

「お前ら、何で教えちまったんだよ！ みどりに何かあったらどうする気なんだ！」

「ごめん」

「ごめんなさい……」

俺って、一体どういう目で見られてるんだ。

まるで、腫れ物に触るみたいに扱われて……。

泣いても、良いですか……？

悲しい気持ちになりながら廊下を歩き、階段を下り、昇降口を出て、中庭に出た。中庭を越えて、門を出ると、急勾配の下り坂。

顔を、そこそこの強風が襲う。目がしばしばする。涙出そう。すごい出そう。だが、男はそう簡単に泣いてはいけないのだ。大昔から、そう決まっているのだ。

周囲にあるのは、下校する生徒の姿と、草原と、風車たち。
背中を向けて回転する風車並木が、沈みかけの太陽の光を受けて
オレンジ色に光っていた。

上井草まつりの章「1 - 6

で、昇降口に放置されっぱなしだったスニーカーを履いて急な坂を下る。

風車並木を越えて、少し降ると、坂が緩やかになる。
そこにあるのが商店街。

事前に調べた情報によると、電車もバスも走っていないこの街だ。この麓の商店街が最も多くの商店が密集した場所らしい。わかりやすく言えば、この街で最も栄えている場所。目的地の『笠原商店』つてのも、多く軒を連ねる店の一つだろう。

それにしても、今日は多くの出会いがあった。

まあ転入して来たんだから当然だが。

屋上で俺を踏みつけた紅野明日香。

廊下で俺を撥ね飛ばした上井草まつり。

優しいそんな級長、伊勢崎志夏。

三人を覚えるだけで俺の容量の少ない脳みそは今にも悲鳴を上げようとしている。

嘆かわしい事だ。かわいそうな俺の脳みそ。

と、そんな事を考えている間に、目的地に到着。

色あせた看板に大きな文字で『笠原商店』と書いてある。

引き戸をガラガラッと開けると、視界には、文房具とか、お菓子とか、生活消耗品とか、飲み物等、幅広いジャンルの商品が並べられていた。CDやゲーム機とかまである。所謂、何でも屋みたいな店なのかな。都会でいうところのコンビニ、みたいな。

そして、

「あ、戸部達矢くん」

俺の名を知ってる人が立っていた。俺と同じ位の年齢の女子で、制服の上にアイボリーのエプロンを着けていた。どうやら、店員さんのようだ。

「えっと、もしかして、同じクラスの笠原さん？」

「はい。笠原みどりです」

どうやら、彼女が俺に上履きをくれるはずだった女子、笠原みどりということらしい。しかしその時、俺の脳みそは四人目の特定女子の出現にキィキィと悲鳴を上げていた。

で、笠原みどり。そしてこの店は笠原商店。つまりそれは、

「看板娘というやつか！」

俺は興奮気味に言った。

「えっと……そういうことになるかな……」

「憶えやすい属性が付いていると助かる」

「へ？」

「ああ、いや。こつちの話だ。それで、受け取りに来たんだが」

「上履きね。はい、これ」

まるで用意されていたかのように、一瞬で差し出してきた。

「お、おお。サンキュ」

「あと、その靴」

「ああ、なかなかお目が高い。これはお気に入りでだからな。渡さんぞ」

素敵スニーカーを自慢した。

「……学校指定の革靴以外、履いちゃダメっていう規則があるんだけど」

「何だと！」

あんな坂道を、毎朝革靴で往復しろってのか！

拷問に近いぞ！

「ちよっと待っててね」

言って、笠原みどりは店の奥で何やらガサゴソした後戻ってきて、

「はい、これ」

手渡してきた。

「サイズ大丈夫？ 履いて確認してみて」

俺は、言われた通りに確認する。

ピツタシだった。

「大丈夫そうね」

「何から何まで、ありがとな」

「どういたしまして。でも、上履きも革靴も、お金は受け取ってるし、仕事だから……」

「そうか、しっかりしてるんだな」

「……………」

笠原みどりは、目を閉じ、首をぶんぶん横に振った。そして、泣きそうな声で言うのだ。

「全然っ……全然だよっ！」

「え……………」

ちよつとびつくりした。

「あつ、ごめんなさい…………他に、何か買って行きますか？」

みどりがそう言ったので、俺はふざけて言ってみる。

「みどりちゃんをテイクアウトしたいんだが」

「売り物じゃないです！」

断られた。

「…………最低だと思います」

軽蔑された。

「ご、ごめんごめん。冗談」

「許されない冗談です」

こわい。泣いてもいいですか。

「ゆ、ゆるして！」

俺はそう言つて、ガラッと引き戸を開け、逃げるように店を出た。
おこられた…………。

で、寮に帰り、何をするでもなくゴロゴロして転校一日目を振り返りながら目を閉じた。

まず、屋上に行ったら人が降ってきた。蹴られた。

次に、廊下で女子に撥ねられた。

転校の挨拶でスベった。

級長が、優しかった。

クラスの皆が、冷たかった。

笠原みどりに、おこられた。

……散々すぎるだろ、これ。

まあ、大丈夫。大丈夫だ。大丈夫。何の問題もない。

明日から、明日からは楽しい日々になるに違いない。違いないんだ！

目が覚めたのは、午前五時半。早朝だった。

遅刻にならないギリギリの時間が八時半、学校までの所要時間が三十分。なので、これは超早起きだ。やはり、日が沈むのが早いと街が眠るのも早い。そうなると俺の寝る時間も早まるというものだ。昨日は転校初日だというのに、散々だったということもある。

まず、ありえないような話だが、屋上に行ったら人が降ってきた。女だった。その子に踏まれるようにして蹴られた。次に、これも変な話だが、廊下で女子に撥ねられた。そして大きかったのは転校の挨拶でスベったことだ。その中での救いは級長が、優しくかったことくらいで、それ以外のクラスの皆が、冷たかった。最後には笠原商店に行つて笠原みどりに、おこられるという、散々すぎる日だった。そして笠原商店を出た後に、部屋に戻つて、娯楽とか何も無いので、所在無くゴロゴロしているうちに意識を失っていた。布団も出さずに眠ってしまったので、眠ったのは六畳敷かれた畳の上。そして起きて、今は部屋に備え付けられたバスルームでシャワーを浴びていた。

まあ、大丈夫。大丈夫だ。大丈夫。何の問題も無い。

今日から、今日からは楽しい日々になるに違いないんだ！

「よし」

俺はお湯を止めて、風呂場を後にする。

部屋に出て、開いていたカーテンから外を見る。少し明るくなってきた世界。

風車の町。

坂を駆け上つていく風が、もう風車を回している。というか、一日中、風車が回っているんだったな。一日一度きり、少しだけ風が弱まる時間帯があつて、その時に飛行機が離着陸したり、船が停まつたりして、人や物資が出入りする。

俺も、一昨日の夜にその人や物の出入りに乗っかって、この街に
来た。この街と外を結ぶ唯一の公的な交通機関である船を利用して
街の東側にある隙間の崖。

ランドルト環——視力検査とかでよく見るC字のアレのこと——
みたいな地形の隙間に接岸して、すぐに下船。急かされながら街へ
と続く道を歩いた。この時、誰かが吹き飛ばされないように、下船
した二十人くらいで手を繋ぎながら進むという、妙なシチュエーシ
ョンがあつたりする。

この時、妙な団結が生まれたり、生まれなかったり。
で、その道は、両側の崖がどんどん迫ってくるみたいな感じで進
むほど狭くなつていって、少し怖かった。外側に向かって少しずつ
道幅が広くなっている形で、その街に入る者には圧倒的な圧迫感を
与える仕様だ。

そして、圧迫感だけではなく、強風も襲ってきた。
船に同乗し、街の入口で別れた気の良さそうなおっちゃんの話だ
と、風が弱まった状態であの風らしい。それはもう、何かに掴まっ
ていないとあっさりと吹っ飛ばされそうなほどの風。強風でなびい
た俺の短い髪に引っ張られた毛根が悲鳴を上げるくらいの風だった。
風速は、何メートルくらいだろ。だいたい秒速三十メートルくら
いだろうか。

よくわからんが、とにかく直立姿勢を保てないほどの尋常ならざ
る風だった。

そうだな、屋上の女と出会った時の屋上で吹いていた風よりも二
割増くらいの強さだ。

俺がウサギだったら、耳で飛ばたいて空を飛べそうな感じのな。

——って俺ウサギじゃねえし、つかウサギでも飛べるかつ。

自分でツツコミを入れて虚しくなった。

そっぴや、屋上で会った女は昨日、教室に来なかったな。どうし
たんだろうか。

朝食。

食堂はガヤガヤと喧騒に包まれている。寮の全ての人間が朝食を食べに来ているのだ。

長いテーブルが規則的に並べられていて、調味料も並んでいる。大人数での賑やかな朝食……なのだが、一昨日引っ越して来たばかりの俺には仲の良い友達とか居るはずもないので、一人での朝食だ。

寮長のおっちゃんの話では、「この寮に暮らすならば、必ず朝食を摂らなければならないという絶対のルールがある」のだそうだ。

元々、俺は朝食は摂る派なので、全く困らない……というか、黙ってても朝食が出てくる環境なんて、前の学校に居た時よりもむしろ素晴らしい。自分で作ったり買ったりしなくて良いなんて、そんな贅沢して良いの、って感じた。

肩幅くらいの盆に載ったバランスの良いジャパニーズブレックフアーストがまぶしい。

キラキラしてる。

ごはん、ワカメ入りみそスープ、魚の干物、冷奴、刻まれたキャベツたち。そしてイチゴが、ごとりと二つ。

「嗚呼、この街は、天国だぜ……」

牢獄やら監獄だと言った前の学校の連中に反論したいぜ。

確かに、物資が乏しかったり、不自由なことはあるが、もうこの朝ごはんだけで、この街の評価急上昇。昨日は初日だったから、たまたまの素敵朝ごはんかと疑ったが、二日続けば、もう本物。きつとバランス良好な朝餉が毎日振舞われるのだらう。

素敵だ。素敵以外の何者でもない。最高だ。

ただ、何故か、俺は他の寮生たちに避けられているような気がしてならないんだが、どうだろう。食堂全体で見れば、そこそこ混ん

でいるのに、俺の座っているテーブル周辺だけ、寂しい。周りに誰も居ない。

まるで、ミステリーサークルの中に一人置き去りにされた宇宙人のようだ。

たとえば、ずっと誰とも仲良くなれないまま、この街で日々を送ることを考えれば……なるほど、それは牢獄だ。

俺は立ち上がり、適当な誰かに話しかけることを決意した。少しでも気さくな人間であることをアピールして、一刻も早く馴染み、溶け込まなければ！

人間社会に溶け込むのは宇宙人にとっては、実に初歩的なこと。

——って、俺は宇宙人じゃねえだろ！

「あのっ……」

俺は少し歩き、一番近くに居た寮生に話しかけようとした。
すると！

ササササッ！

あからさまに避けられたぞ……。

何故だ。

「あ、おい、その——」

「ヒィ——！」

サササササッ！

ええ？

何これ。俺が宇宙人であることが見破られ——って、だから宇宙人じゃねえよ。

「……………」

どうしよう、寂しい。

何で俺避けられてる？ そんな悪いことしたかな？

普通、転校生とかには、皆もつと優しく話しかけたりしてくれるはずじゃないのか。

何なんだ、この現象は。頭の上にクエスチョンマークが浮いてるぜ！

俺は席に戻り、残された朝ごはんを一人で食べ終わると、

「ごちそうさま……」

ぼそりと呟き、俺は、食べ終えた食器を片付けようとトレイを持つて席を立った。

と、その時、一瞬、食堂が静まり返る。

何なんだ、一体！ 俺が何をしたっ！

あー、何だか学校へ行く気が無くなって来た。

さて、気を取り直して、今日も登校。

今日も今日とて風が強い。空飛んで行きてえ。

「はあ」

急な坂道手前の、緩やかな坂道に並ぶ商店街から、坂を見上げて思わず溜息。

昨日は、ついつい前の学校の時の習慣があふれ出してしまい、十五分前に寮を出たのだった。それじゃあ当然間に合わない。学校まで三十分はかかる。

坂道ダッシュなんて拷問的な登校をする気はさらさら無い俺は、時間に余裕を持って出ることしよう。遅刻魔でサボリ魔だった俺は生まれ変わるのだ。更生して、この街から元の街に戻って平和に暮らすんだ。そのためには一日一日の積み重ねが大切なのは、もはや火を見るより明らか。初日はいきなり遅刻をしてしまったが、あれは故意ではないのだ。

とにかく早々に教師陣に更生をアピールして、仲の良い友達でいっぱいなの前の学校に戻りたい。朝ごはんが出てくるシステムだけテイクアウトできたら言うことないんだけどな。

と、その時だった。

「あ、達矢くん」

「ん？」

名前を呼ばれたので、声のした方へ振り向くと、

「やつほー」

女子が手を振っていた。

「えっと、級長だ」

視界の中心に居る女の子は、こくりと頷いた。

そう。伊勢崎志夏。そこそこ美人な級長さんだ。

「おはよう」

俺はとりあえず朝の挨拶。

「おはよ。よかった。憶えててくれて」

歩きながら、話す。

「ときに、志夏は、何で級長なんかやってるんだ？」

「級長だけじゃないわよ」

「え？」

「私、女子寮の寮長もやってるのよ」

何だと。

普通、女子寮の寮長つてのは、美人でグラマラスなお姉さんではないのか！

男子たる俺の夢が崩れてしまうぞ。

「どうしたの？ 意外そうな顔して」

「いや、ちよつとな」

「ちなみに、生徒会長もやってるわ」

「それ働きすぎだろう。そんなにあの学校好きか？」

「学校、というかね、この町がね。好きよ」

「そうなのか」

俺は正直なところ、あまり好きになれないでいるぞ。皆、優しくないし、俺を避けるし。

「ところで達矢くん」

「何だ？」

「寮とか学校には、もう慣れた？」

「劇的な環境の変化に一日で適応できるような奴がいるなら、そいつは生身で宇宙空間を飛び回って小惑星でキャッチボールくらいは

できるだろうな」

「つまり、問題を抱えているのねっ」

級長センサーにビビビと来たらしい。ピンと背筋を伸ばして立ち止まり、俺を指差した。そして同時に通り過ぎる強風。短めの髪が揺れて何だか格好良い瞬間だ。

「まあ、そうだな……問題というか……」

「何？　いくらでも相談に乗るわよ？」

「と、とりあえず、歩きながら話そうぜ。遅刻しちまう」

「あ、うん」

二人、並んで歩き出す。

白い三枚羽の風車の建ち並ぶ坂道を。

「それで、何？　問題って」

「実はな」

「うんうん」

「何故か、俺は皆に避けられているみたいなんだ」

「ああ、まあ、そうねえ」

「そうねえ、って、何か知ってるのか？」

「まあ普通に考えれば、転校初日にいきなり呼び出しくらって、ウチの風紀委員と対等に話をしているの見たら、そりゃ皆怖がって近づけないわね」

「え。ってことは……」

そういうことか。俺はとんでもない不良だと思われていたのか！

「昨日の朝、放送で呼び出された後、何言われてたの？」

「いや、単純に遅刻して屋上にいたら校内放送で呼び出されて、すぐに教室に向かって」

「それだけ？」

「ああ。それだけだ。本当に、それだけ」

「なあ、志夏」

「何？」

「どうすれば、皆が俺を避けなくなりますか？」

「とりあえず、何か面白いことでも言っように努めたら？」

級長の言葉が一番キツイんですけど……。

俺は常に面白いことを言おうと頭を働かせる男だぞ！ それを！
あれか……あの、転入の挨拶がまずかったのか！

「俺、面白くないですか？」

「面白くないわね。とつくに飽きた」

そんな、わずか一日でも俺の言っ事に飽きられただと！ 悔しいッ！

上井草まつりの章「2・3」

さて、所変わって、教室。

今日も屋上の女・紅野明日香は来ていない。まあそんなことはどうだって良いのだ。

級長の伊勢崎志夏は教室前で「がんばってね」という言葉を残して廊下を颯爽と歩き去って行った。朝のホームルームの前に職員室に寄る用事があるんだそうだ。

で、級長のことは置いておいてだ。

俺の目下の目的はというと、いかに面白いことを言うかということなわけで。どういうことかといえば、俺は飽きられるくらいに古めかしい笑いの持ち主だと思われているらしく、更に不良であることも手伝って、誰も俺に近付いてくれない。

俺に近付くことはすなわち、サムい人間とみなされるに等しく、更に不良と仲良くする事でもある。いきなりの遅刻と、ひどい自己紹介が悔やまれる。

そろそろ、クラスを笑わせて溶け込むキツカケつてのを模索したいところなのだが……。

面白いことというキーワードで必死に脳内検索をかけてみたが、そういうことを考えている時は、えてして何も思い浮かばないものなのだ。

そもそも、俺はツツコミが居て輝くタイプのはずだ。そうだ。そうに違いない。それでもなければ転校挨拶とはいえ、あんなスベリ方をするわけがないんだ。

となれば、話は早い。

優秀なツツコミを見つけようではないか。

俺が目をつけているのは……笠原みどり。

笠原商店の看板娘である。

彼女は一見おっとりしていて、引っ込み思案に見えるが、実は鋭

いッコミを持っている気がする。俺のッコミ女子センサーが反応しているんだ。

と、その時、みどりの方を見ていたところ、上井草まつりという風紀委員の女がみどりの近くに立った。

みどりが挨拶する。

「あ、おはよう、まつりちゃん」

すると、上井草まつりは、

「モイスト！ モイスト！」

謎の奇声を発しながら、整えられた笠原みどりのしっとりツヤツヤ髪を両手ではっさばっさと乱暴に何度も捲り上げていた。挨拶もせずに！

「モイスト！ モイスト！」

ばっさばっさ！

な、なるほど……突き抜けるほど問題児だ。

「や、やめてよまつりちゃん。痛い、いたいってば」
嫌がっている。当然だ。

「モイスト！ モイスト！」

ばっさ、ばっさ。

しかし、クラスの皆は、見て見ぬフリだ。ひどいことだぜ。こっちは、俺が動くしかない。笠原はッコミ役候補でもあるしな。

この、まつりとかいう女を懲らしめてやらねばなるまい。
接近すると、良い香りがした。みどりの髪の匂いだ。

そして俺は、まつりの背後から、まつりの両腕を掴んだ。

「モイスト！ モイ——」

ガシ、と。

「おい」できるだけ強そうな声を出す俺。

「へ？」横顔をこちらへ向けるまつり。

「やめろ。嫌がってるじゃないか」

その瞬間——教室に尋常じゃないざわめき。悲鳴交じりの。

「はぁ……？」

俺は、まつりの手を掴み、そして思い切り引つ張った。が、びくともしないだ。

「何のつもりだ、キミ」

「みどりの髪をばっさばっさするのをやめろって言ってるんだ」
俺はそう言った。

「達矢……だつたっけ？」

「そうだ。戸部達矢だ。上井草まつり」

「突然うしろから腕掴むなんて汚いわね」

確かに、そうかもしれない。だが、手は放さない。

「とにかく、みどりをイジメるな」

「は？ 別にイジメてなんてないよね、みどり」

「えっと、その……」

俯くみどり。かわいそうに、イジメられててもそうと言い出せないんだな、暴力がおそろしくて。

「痛がつてただろうが。それに気付かず攻撃してたら、イジメなんだよ！」

「何だい、偉そうに」

「とにかく、笠原みどりには俺が目をつけたんだ。だから、変なことするな」

すると、上井草まつりは顔を険しい感じに崩し、

「……は？ どういう意味？ みどりを手に入れてどうする気なの？」

「パートナーにする」

ツッコミの、な。

教室が、ざわつとした。

「あ、あの……二人とも……やめ——」

みどりは何かを言い掛けたが、

「みどりは黙ってる」「みどりは黙っててくれ」

まつりと俺は、同時に言った。

「あう……」

黙った。

「とりあえず——」

まつりがそう言った次の瞬間！

視界が揺れた。

つて、おう？

俺今、まつりに蹴り飛ばされて、宙を舞って——

ガタガタガシャーンという音がした。吹っ飛んだ俺が机の列を乱した音。

「なっ、何だ今は……」

「女の手を後ろから掴んで動きを封じたとか勘違い、それで勝ったつもり？」

どうやら吹っ飛ばされたらしい。

怪力なのは理解したし、好戦的な女だというのも理解した。こいつに手加減は必要ないということも理解した。必要とあらば、みどりを守るために、何とかこのまつりとかいう女を懲らしめねばならないかもしれない。

時に、男と女を越えた「悪」という特殊性別が存在することがあって、その場合は追い出すために暴力もやむなしだ。

ええと、ほら、座禅で煩惱を抜うためにバチーンって棒で叩かれることがあるのと同じように。

そう、喝を入れてやると考えてもらえば良い。

「良い度胸ね」

「そうだな。弱いものイジメに興じる女よりは、度胸があるつもりだぜ」

「覚悟なさい」

「何をだ」

「風紀委員の恐ろしさ、思い知らせてあげる」

「へえ、楽しみだな」

そして、

「こいつ！」

「いくぜええ！」

俺は拳を握って突進した。

「……………」

一瞬だった。一瞬のうちに、なんか数十発は殴られた気がする。
チャイムの中、俺は意識を失った。

俺が目を覚ましたのは放課後だった。

しかも、保健室。隣にいたのは笠原みどり。

「あの、みどりさん」

「保健の先生なら、もう帰っちゃったって」

「いや、そういうことじゃなく……」

「じゃあ何よ？」

「いや、その、ごめん」

「何で謝るの？」

「だって、負けちまったからさ……」

「バカみたい」

何だってえ……。

「まつりちゃんに勝てるわけないでしょ」

「で、でも、お前がひどいことされてるの、見ていられなくて」

すると、みどりは、一つ溜息を吐いて、

「あのね、まつりちゃんは、少し脆いところがあるの」

とか言った。

「え？」

どこがだ。あんなに強い奴はついぞ見たことないぞ。

「力が、じゃなくて、心が……ね。昔は、今なんて比較にならないくらいに荒れてた」

「そ、そうなのか」

今よりもっと荒れてたって、どんなレベルだ。

「それは、学校を支配するほどに」

「マンガみてーだな」

「教師すら、まつりちゃんには逆らえなくて、学校が無法地帯と化しちゃってたの」

「それで、何がどうなって今の上井草まつりになったんだ……？」

見たところ、今はそこまでの不良には見えなかったが」

「幼馴染同盟を発動させたの」

「何だ、それ」

「幼馴染同盟っていうのは、同じ位の時期に商店街で生まれて、一緒に遊んだ六人の仲間たちのことで、サナって子をリーダーに、あたし、マナカ、カオリ、マリナ。そしてマツリ。あの頃は、皆仲良しで、幸せだった。でも、サナが引越しちゃって、それをきっかけに、どんどんマツリが荒れていったの。一人だけあたしたちから離れて、遊ばなくなった」

「へえ」

そんな過去があったのか。

「それどころか、マツリは学校にも来なくなって……そのうちに、残った幼馴染四人も一緒に遊ばなくなっちゃったの」

「まあ、そうだな。二人抜けたら、集団としては全然違うものになっちゃうもんな」

「うん。誰も、リーダーの代わりにはなれなくてね、引張っている人がいなかった」

「まつりとか、リーダーの素質ありそうだけどな」

俺が言ったところ、みどりは言った。

「節穴だよ」

「え？ 何て？」

「戸部くんの目がひどい節穴。まつりちゃんは、リーダーには絶対なれない性格だもん」

「そうなのか……」

「なったとしても、無意識に横暴しちゃうからすぐに反乱が起きて殴って、その度に傷ついて学校来なくなっちゃうの」

「そりゃまた難儀な……」

「うん。弱すぎなの。だから、暴れる。それで……あたしたちは幼馴染四人で集まった。手当たり次第に他人を傷つけるマツリを、何とかしようとした」

「何とかって、どうやって」

「それはね——」

「それは？」

「『他の人を殴りたくなったら、あたしたちを殴って』って言ったの」

「半端ないっすね、幼馴染同盟」

「だって、本気で何とかしたかったから……」

「俺には真似できねえな」

「知ってる？ その頃は、この学校が更生施設って役割も持ってた、ただの風の強い田舎村の学校だったんだよ」

「そうなのか？」

「うん。だから、マツリみたいに暴力的な子も少なかったし、喧嘩する相手もいなくて、ストレスが溜まったんだろうね。学校を征服してたのもその頃のことだったかな。うん。それで、マツリはある日ね、男子とつままないこと、本当につままないことが原因で喧嘩して、本気で暴れてね。あたしたちに言われた通りに、本当に、幼馴染の一人に暴力を振るって、その幼馴染の一人、マナカに大怪我させちゃって……それでさすがに大反省して、自分の家に引き籠もったの」

「大変だあ……」

「そうなの。大変なの」

「それで、どうなった？」

「えっと、これは、あんまり外から来た人に言っちゃいけないことなんだけどね」

「ああ、誰にも言わないから」

「そう言う人に限ってペラペラ喋るよね」

「否めない。結構喋っちゃって怒られたことがある。」

「だが、どうせこの街に、話ができる友達なんていないし、これから先できるとも思えないしな。何とかなるだろ。」

「大丈夫。俺は言わない男だ。そこまで深刻な話なら、節度は守る」

ぜ」

「そう、じゃあ、言うよ？」

「ああ」

「えっと、どこまで話したっけ」

「幼馴染に怪我させて引き籠もったってところ」

笠原みどりは、軽い調子で言った。

「ああ、うん。それでね、手首切っちゃって」

手首……？

「うっわ……」

これは確かに、他人には喋れない。

「まあ、色々あったからね。怪我させた責任が取りたかったのかもね。それで、事件を重く見た大人たちが、何とかマツリがこの街で暮らしていけるように、この街に、問題を抱えた生徒を更生、療養させるために受け入れることにしたの」

「なるほど、つまり、この学校は、上井草まつりのための学校ってわけだな」

「そう……なるのかな。うん。まつりちゃんは信じられないほど不器用だから、ストレスとかの発散方法が、わからない。本当はわかつてるのかもだけど、上手に表現できない。そこで、問題児を集めて、風紀委員という立場を与えて、まつりちゃんの暴力を半ば容認したの。それで、たまにイライラした時に、あたしとか、違うクラスのカオリとかに軽度の可愛い暴力行為に及んでコミュニケーションとって、バランスとれるくらいにはなったわ」

「なるほど。それで髪の毛バサバサされてたわけか」

「風紀委員なんて役職は存在しないんだけど、そうでもしないと、まつりちゃんのこと、誰も抑えられないから。大人でさえ……」

みどりは、諦めたようにそう言った。

「問題児を抱える街の外の学校の側としても、更生させる組織があれば、問題児はそこに投げ込めば良いから楽で、利害が一致したわけだな」

みどりは頷き、

「そういうこと。でも、それじゃあまつりちゃんの根本的な解決にならないのよね」

「でも、じゃあ、みどりはどうすれば良いと思うんだ？」

すると、みどりは一つ溜息を吐いて、

「問題は、まつりちゃんよりも圧倒的に優れた人がいないことなのよ」

それがみどりの意見らしい。

「いつまでも、イライラをぶつける相手ばかりを探しても仕方ないの。それはモラトリアムの逃避でしかないから。それを、皆、わかってないのよね。誰か尊敬できる人が、まつりちゃんの近くに居ないといけないの。自分よりも圧倒的に優れた誰かに、守ってもらいたいよ。でも、あたしたちじゃ、そういう存在には、なり得ないから」

「まつりって、かなり強いだろ。体にすげえバネあるし、よく鍛えてる。あれ以上に強い奴なんて、探すの難しいぞ」

「そうね。でも、力だけじゃなくてね、心も強い人をね。贅沢だよね、まつりちゃん」

「だな。とんでもない奴だな上井草まつりは」

「うん……」

「みどりは……」

「え？」

「みどりは、嫌か？ 髪の毛をバサバサされたりするの」

「本音を言つとね、もうね……………すつつつ

ごい嫌！」

「ずいぶん溜めたな……」

「だって髪だよ！ あたし、髪の毛にはかなり神経使ってるのにバサバサって、何アレ！ ひどいよね！」

いきなり大声で早口でまくし立ててきた。俺は少々たじろぎながら、

「そ、そうか。そうだな」

とか言っしかない。

「でも、まつりちゃん、モイストさせないと、わざとみたいに暴れるし……」

「モイストってのは、あれか。髪の毛をバッサバッサ捲り上げて周囲を回る暴力的奇行のことか？」

「痛いんだよ？ あれ」

「ああ、痛そうだったな」

と、その時、みどりは何か思い出した様子で、頬を赤らめながら、
「あ、そうだ。ところで、さっき言ってた、あの……パートナーがどうのって話だけど……」

ああ、さっきまつりと殴り合い——とはいえ一方的だったが——になる前にチヨロつと言った話か。

ツツコミとしてコンビを組んでくれないかという誘いのことだ。

「考えてくれるか？」

「そ、そんな、今すぐ結婚だなんて……」

「結婚？ 何のことだ？」

「え」

キョトンとした。

「あれは、結婚じゃなくて、俺とコンビを組んで芸人にならないかという誘いだぞ」

「……………は？」

「俺の予測では、お前のツツコミスキルはなかなかのものだ。俺と一緒に日本一のエンターティナーを目指さないか？」

「……………えっと……パートナーって……ツツコミ……あれ……」
「返事は今すぐでなくても良い、じっくり考え——」

「ばっかっ！」

バシン！

平手打ちをいただいた。

「良いツツコミだ！」

俺は笑いながら言った。

「このっ……漫才なんて誰があ！」

バシン！

頭を叩かれた。

「エクセレンツ！」

素晴らしいという意味だ。思わず親指を立てる程に。

「なんか、なんか……色んなこと話して損した！」

みどりは言うど、地面を強く蹴って、保健室を出て行ってしまった。

あの反応……どうやらコンビを組んではくれないらしい。

何とまあ、何もかも上手くいかないなあ……。

っつーか、ほっぺた痛え。

さほど痛い箇所は無くなり、俺は保健室を後にした。我ながら驚異の回復力だった。

そして学校を出て、坂を下る。暗い歩道を一人歩く。

俺は、みどりのまつりに対する言葉を思い出していた。

『少し、脆いところがあるの』

『弱すぎなの』

『不器用』

『手首切っちゃって』

『ストレスの発散方法がわからない』

で、みどり自身はモイストは嫌……か。

どうするべきだろう。

話を聞いてしまった以上、何らかの形で責任を取るべきなのかもしれない。

うーむ……そうだな……。俺が……。

みどりがモイストされそうになったら、俺が、みどりの代わりになろう。

俺がまつりのストレスのはけ口になれば万事解決だ。

みどりはモイストされず、まつりもストレスを爆発させることもない。

俺が痛い思いをしそうなのが難点だが……。

そうだな、よし、それでいこう。そして、これでもかっくらいい恩を売って、みどりをツツコミに迎え、世界中を笑いの渦に包むのだ！

上井草まつりの章「3 - 1

朝、俺は寮の、自分の部屋に居た。自分の部屋で、あるモノを作っていた。

「さて、それでは行くか！」

俺は、早速行動に移すことにした。何をするかと言えば……簡単
に言えば卑怯なことである。

昨日正面から向かって行って悟ったよ。

「あれはバケモノだ、勝てるわけない」

スキのない構え。一つ二つの打撃の重さ。急所を的確に狙う動作の正確さ。何よりも、速さ。一万回やり合っても勝てるわけがない。
ライオンに捕食されるウサギみたいな感じ。

しかし、俺はウサギではない。

知恵を巡らせてライオンを狩ることさえできる人間なのだ。

既に上井草まつりが不器用であるという情報も入手済み。

となれば、彼女を負かすためには女の子らしい繊細で細かな勝負を挑むしかない。

そして、今、準備が完了した。

「ふふふ……完璧だぜ……」

俺はあるものを手に取り、不敵に笑った。

朝、ホームルーム前。

「まつり」

俺は、上井草まつりに話しかけた。

「ああ？ 何だ、負け犬か」

「ふ、まだ一敗しただけだ。シーズンは長いんだよ。プロ野球だって140試合以上あるだろう。その初戦を落としたチームが優勝したケースがいくつあるか」

まあ、いっぱいあるだろう。

「要するに、何の用なわけ？」

「昨日は種目が悪かった」

「はあ？」

そう、殴り合いで勝ち目は無いのだ。

「じゃあ何させようっての？」

そして俺は、今朝から準備していたブツを取り出す。

「あやとりだ」

「あやとり……」

「英語で言つと、キャッツクレイドル！」

「まあ、良いけど、どうやって勝負するのよ」

その、まつりの言葉に、はっとした。

あやとりのヒモを二人分作ることに夢中で勝負の方法を考えていなかった。

「……………じゃあ、先に何か複雑なのを作った方が勝ち！ お前が負けたらみどりにちよっかいを出さない、良いな？」

まつりは不器用とのことだからな。

「はあ」

と、まつりは気の無い返事をしたところで、俺はスタートの合図。

「よいいドン！」

さて、どうする、確か、色々あったよな。

ハシゴとか……ってやり方知らないんだけど、どうしよう……。

「はい、東京タワー」

とまつり。

「はやっ！　そしてできてるっ！」

俺は、まだ指に紐を掛けたばかりなのに！

ていうか、今思い出したけど、俺もかなり不器用だった！

「そんなバカな！　貴様、不器用なはずでは！」

「はあ？」

「そ、そうか、友達がいなくて、一人遊びには長けているというこ

とかっ！」

「何が言いたいんだキミは！」

俺は、まつりのあやとり作品に二度ほどチョップをかましながらか、
「こんなんナシだ。ちよいさー、ちよいさー」

「何がしたいんだお前はあー！」

ばっこーん！

そして、顔面を殴られ、俺の体は宙を舞った。

後、床にうつ伏せに倒れる。だが、殴られるのはもう二度目。俺は打たれ強さには自信があるんだ。簡単には壊れない骨格を持った奇跡の男でもある。一度俺を気絶させた攻撃には耐性がつくのだ！故に、もう上井草まつりの攻撃で気絶することはない。

より苦しいことになりかねない気もするが。

とにかく、そう、俺の肉体は主人公でありながら脇役じみているというわけだ！

不死身の俺は立ち上がって言う。

「あやとりでの勝負のはずが、貴様は俺を殴った。反則負けで良いな？」

「良いわけあるかあー！」

バコン！

蹴り飛ばされた。痛かった。

チャイムが鳴った。休み時間になったのだ。

俺は、授業中に教師の話そっちのけで考えた次の対決方法を携え、席を立った。

あやとり勝負の様子から考えるに、上井草まつりはかなりの負けず嫌いだと推測される。

となれば、やはり勝負を挑むという選択は正しいと思う。正しいはずだ。

ついでに、勝てばみどりにモイストしないという約束を取り付けることも出来るだろうから、まさに一石二鳥。

「まつり」

俺はまた、まつりに話しかける。

「またお前か」

顔をしかめられた。

「賭けをしようじゃないか」

「どんなだ」

俺は、二枚のトランプを取り出した。

「ここに、二枚のカードがある。何の変哲も無いトランプだ。絵柄は、スペードのエースとジョーカー。ジョーカーを引けばお前の負け。お前が見事スペードのエースを引き当てればお前の勝ちだ！」

言つて、まつりの机の上に二枚のカードを置いた。

「さあ、どっちを取るっ!？」

「……どっちもジョーカーだろ」

見破られただと!

「そ、そそそ、そんなことはない」

「……………」

ぺらぺらっ。

まつりさんの長い指が、二枚のカードを同時に捲った。

二枚ともジョーカーなのは言うまでもない。

「OH……これは、どうしたことだ」
わざとらしく言った。

「イカサマすんなぁー！」

どかーん！

殴られ、またしても宙を舞った。

昼の休み時間になった。

いやはや、まさか知恵まで兼ね備えているとは恐れ入った。

さすがに二回もぶっ飛ばされて、体が痛い。痛い、俺は死なない。丈夫だからな。

いくらまつりが規格外のパワーを所持していても、規格外の丈夫さを持つ俺を病院送りにすることはできない。まつりが最強の矛を持つているとしたら、俺は最強の盾を持っているということでもある。そう、それは確信した。つまりは、俺は何も恐れる必要は無いということだ。

「やい、まつり」

俺はまた、まつりに話しかける。

「何だよ」

俺は、どこからか調達したリング二つをまつりの前にごとりと置いた。

「料理対決だ！」

「はあ？」

「このリング一個。先に全ての皮をむいた方が勝ち。はじめっ！」
俺は言った。そして、果物ナイフを取り出し、皮をむきはじめる。もちろん、まつりにはナイフがない。これでまつりは皮をむくことができない！

さあ、どうする……上井草まつり！

「……………」

すると、まつりは無言でリンゴを掴み上げ……そして――
バチン！

握りつぶした！

果汁、舞う。

俺の全身、リンゴ汁まみれになる。

うっそお……。

えっと、握力いくつ？

「ははは……甘い匂いするな」

「食い物を粗末にするなあー！」

ばごーん！

「はぐあー！」

一瞬でナイフを奪われリンゴを握りつぶした手でぶっ飛ばされた。
いや、ちよつとまで……食い物を粗末にしたのは、お前だろう……
俺は食べる気マンマンだったっての……。

「ったく……刃物持ち込むの禁止だったの」

何やら風紀委員みたいなことを言うまつり。

俺はゆらりと立ち上がり、

「お前……リンゴをムダにして――」

と言い掛けて、

「何か文句あるかあー！」

どごーん！

飛んだ。

「スタッフが美味しくいただきましたああー！」

がしゃーん！

机に突っ込んだ。やれやれ……三連敗だぜ。

と、そこへ、

「戸部くん……もうやめなよ」

みどりが来た。そして弱気なことを言っている。

「そつだ、みどり。まつりの弱点って知らないか？」

「聴こえてんだよ、阿呆があー！」

ばーん。

「ぎゃあああ！」

またぶっ飛ばされた。

ドサツ。

床に落ちたが、立ち上がる。

「ふっ、効かぬっ！」

ふらつきながら、俺は言った。

「何なの……もう……」

言って、教室の外へと出て行こうとする。

「おい！ どこ行くんだー！」

しかし返事が無い。

教室の外に出て、姿が見えなくなった。

「まつりー！ トイレかぁー！」

すると、ダダダダッと戻ってきて、

「死ねええええ！」

ずーん！

「ポヴッ」

謎の奇声を上げて、俺は吹っ飛んだ。

「トイレ行って何が悪いかなぁ！」

まつりは叫び、そして、去った。

くっ……打撃に耐性がついて意識が途切れない分、痛みが苦痛だぜ……。

「大丈夫？ 戸部くん」

みどりが心配してきた。

「まあな。死んではないぞ」

「それは見ればわかるよ。ピクピクしてるもん。陸に上がった金魚みたいに」

ピチピチ跳ねてない金魚は瀕死じゃないっすか。

「まあ、大丈夫だ」

俺は言って、けろっとして立ち上がった。どういう仕組みか不明

だが、回復スピードも上がってきたぜ。

「それにしても丈夫だよな。あれだけまつりちゃんに殴られてるのに、骨も折れてないみたいだし……」

「そうさ。丈夫さだけは取り得なんだ。骨密度とかは色んな世界最高を集めている酔狂な雑誌に載るくらいかもしれないぜ」

根拠は無いし、そんなデータは無いが。

「というか、実は俺の大半がカルシウムで構成されている可能性もある」

「戸部くんは、そういうのにツツコミを入れて欲しいわけ？」

「欲を言えば、そうだ」

すると……

「サンゴ礁かよっ」

ぽすん。手の甲で叩かれた。

ツツコミだ。感動のみどりからの初ツツコミだあ！

「っていうか珊瑚礁ってそうなの？ カルシウムなの？」

「たぶん」

そうなのか。

「真珠かよっ」ぽすん。

「真珠も？」

「たぶん」

へえ……。

「貝殻とかかよっ」ぽすん。

「貝殻もそうなのか？」

「たぶん」

「なんか、だいたい海のものだな」

「じゃあ……牛乳かよ」ぽすん。

「おお、牛乳はカルシウム豊富だと評判なものな」

と、その時――

「みどりに何やらせてんだあー！」

ばこーん！

俺の体は床を離れ、宙を舞った。

そして、プロペラのごとく回転し、びたーんと仰向けに床に落ちる。

どしゃつと。

「でも、牛乳が必ずしも体に良いとは限らないですよ。……ってちよつと、戸部くん、聞いてる？」

「おらあ、みどりが聞けって言っただろ！」

言っで、倒れた俺の脇腹を蹴ったまつり。

「はぼお！」

なにこの不良。なおも蹴りは止まない。

ていうか、いたい、いたいっ、超痛いんですけど！

しかもトイレ行った上履きだろ、それ。踏むようにして蹴るなよ！ きたないよ！

「大事なものは、牛乳じゃなくて、牛乳を含めたバランスの良い食事と、運動とか、あと日光とかなんだけど」

「しねっ、しねっ」ばこん、ばこん。

「こまかく言えばそれはビタミン………吸収率が………マグネシウム………体質的に適合するかどうか………」

途切れ途切れに聴こえるみどりの声。

ばこん、ばこん。

その間、ずっと蹴られてる俺。

「そもそも骨を強くするためにはカルシウムだけではどうにもならないっていうか、本当のこと言うと牛乳にそこまで多くカルシウム入ってない………って戸部くん………？」

「ぐはあ………げふう………」

「ちょ、ちよつと、まつりちゃん、やりすぎだつて。やりすぎ………見せられないことになってるう！」

「いましね、すぐしねえ！」

びし、ばし。

連発しちゃいけない言葉を発しながら、俺を蹴飛ばし続けるまつ

り。

「まつりちゃんやめて、やめてっばー！」

やばいー。しぬー……。

俺の視界は、暗転した。

上井草まつりの章「3 - 3」

俺は、がばつと起きた。

周囲を見渡すと、また保健室だった。キレイな髪をした女子が見えた。

「戸部くん……何で生きてるの……」

みどりだった。

「第一声がそれですか、みどりさん」

俺も、何故生きているのか不思議なんだぜ。

まあ、あれだ。神様のおかげだとしても言っておこう。

「普通、まつりちゃんにあんなに蹴られたら少なくとも集中治療室行きだよ？」

「ああ、今までで最大級に痛かった」

超痛かった。いくら丈夫でも、あのまつりレベルの攻撃を何発ももらつと気を失うようだ。

「でも、その割には無傷って……戸部くん、何者なの？」

「実は、宇宙人なんだ」

「へえ」

「……………」

「……………」

あの、「へえ」だけっすか……ツツコミは……。

「そ、それで、今は、何時間目だ？ 放課後か？」

俺は訊いた。

「うつん。まだ昼休み中」

「我ながら驚異の回復力だな」

「だけど、見てられないよ。一方的じゃないの……」

「いや、そんなことはない。互角だった」

「どこがだ」ぽすん。

手の甲で叩いてきた。ツツコミだ！ 少し弱いが、良いツツコミ

だ！

ていうか、女の子のツツコミなら何でもうれしいっ！

俺は感激してみどりの手を取りつつ、

「やってくれる気になったのか、ツツコミ！」

みどりは手を振り解いて引っ込めつつ、

「いや、そういうわけじゃないけどさ」

まあ、そうだとは思ったが。

「まあ、殴られてでもまつりに向かっていくのは、俺がやりたいからやってるだけだ。髪の毛ばっさばっさされるのが嫌なんだろ」

「それは、そうだけど……」

「ま、とにかく大丈夫だから、心配するな」

すると、みどりは呟くように、

「ありがとう」

「ところで、みどり」

「何」

「まつりの弱点って何？」

「うーん、何だろう。まつりちゃんの苦手なことは戸部くんの方が苦手な気がする……」

「それでも良い。とにかく何か無いか？」

「あると言えばあるけど……」

「何だ？」

「何でそんなにキラキラした目で……」

「だって、勝ちたいだろうが！」

「そんな、思い切り言われても……」

「いいから、教えてくれ」

するとみどりは観念したように溜息を一つ吐いて、

「ある意味、野球は苦手と言えるのかな……あとコーヒートをブラックで飲めないって」

と言った。野球と、コーヒーか。

「野球は俺もできねえからパスだ」

「じゃあ、コーヒーだけになるかな……」
「よし。コーヒーだな……」

上井草まつりの章「3 - 4

午後の授業。

昼休みの間に、校内の自動販売機で『超濃いブラック』という安直なネーミングの地元ブランドっぽい缶コーヒーを買っておいだ。そして他のお茶とかも大量に買った。次の休み時間には、この飲料たちを使つての対決になるだろう。そして、それで俺が勝つだろう。何せコーヒーは苦手らしいお子ちゃまらしいからな。ちなみに、俺もコーヒーブラックで飲めないんだがな。まつりにコーヒーを飲ませたら、どうなるだろう。急に性格が変わつて、しおらしくなったりしたら嬉しい限りだが、まあそんな現実味の無い現象は起こらないだろうな。

と、そんなことを考えていた時――

ガラガララッ！

授業中だというのに堂々と引き戸が開けられた。

そして入ってきたのは……青白い肌、細い腕。華奢な体つき。

明らかに軟弱そうな男子がそこにいた。

……誰だ？

「す、すみません、遅れました。風間史紘です」

「ああ、風間か。久しぶりだな」

「はい」

あいつ、遅刻を容認されているだと。もう諦められているのか、それとも札付きの不良なのか。とてもそうは見えないが、人は見かけによらないって言うしな。

まつりだって美人なのに壮絶で狂暴だし。

風間史紘という男は、今まで空席だった場所に座った。俺の隣ではなく、上井草まつりの前の席。そして、背後のまつりと少し話していた。

まつりと、仲いいのかな……。

で、授業後。また話しかける。

「おい、まつり」

「今度は何？」

迷惑そうな口調が返ってきた。

「まあまあ、俺はさつき、お茶を買って来たんだ。しかし、ただお茶を飲むのではつまらない」

「何言ってるの？」

「そこで、だ」

「利き茶対決というじゃないか！」

「……………なにそれ」

「知らないのか？ 利き茶というのは、耳の穴にお茶を入れてお茶の声を聞くと云う世界的なスポーツだ」

嘘である。

「し、知ってるわよ、そんなの。中国発祥なのよね」

おっと、予想外なところで知識のなさを露呈してきた。しかも中国発祥とか、完全にあてずっぽうだろう。

と、その時、

「まつり様、ちょっと……………」

先刻遅刻してきた弱そうな男が、まつりの耳元に近寄り、何かを耳打ちした。まつりの子分が何かなのだろうか。

「達矢、お前……………ぶつとばされたいの？」

警告された。殴られる前に説明する。

「そう、さつきも言った通り利き茶というのは、お茶の味を飲み分けるスキルのことを言う」

「たとえば？」

「静岡茶とか、狭山茶とか、鹿児島茶とか、宇治茶とか、茨城茶とか」

「ああ日本のお茶か。ならいいけど」

ふ、やはりコーヒを出されることを心配しているようだ。可哀想だがその予感的中することになるぜ。ふへへ。

「いいか、これは対決だ。受けるだろ？」

対決、と聞いて、まつりの表情が変わった。

なんと云うか、漢らしい顔だ。

「いいわ。どうするの？」

「よし、乗って来た」

「え？ 何？」

おっと危ない。心の声を口に出してしまった。気をつけなくては。俺は誤魔化しつつ言う。

「まずは、目隠しをするんだ」

「何で？」

「お茶の銘柄を当てるのに、目が見えてしまつてはフェアじゃないだろう」

フェアかそうでないか。これも、まつりを乗せるには便利な言葉だろう。

「そうだな。わかった」

「ほら乗って来た」

「ああ？ 何が乗って来たつて？」

おっと危ない、またしても心の声が。気をつけねば。

「いやあ、乗ってきたんだよ俺の気分がな。対決を前にハイになつてきてしまったらしい。ちょっとアドレナリンが出ててな」

「あっそ」

俺はちよい長めの手ぬぐいをまつりに手渡した。

「まあ、どうでもいいけど……」

そして、まつりは目を閉じて、その手ぬぐいを顔にまいて目隠しした。

その時、俺は思わず「……はっ」と声を出す。

しまった！ 今、まつりは無防備じゃないか！

何故俺はこのタイミングで油性ペンを持っていないんだ！

額や頬にラクガキし放題だと言っのに！

「おい、それでどうするんだー？」

「ああ、そうだったな。今お茶を注ぐから待っている」

俺は紙コップを取り出し、

『超濃いブラック』

そう書かれた缶に入っただす黒い液体を紙コップに注ぐ。

ちゃぽちゃぽちゃぽ……なみなみと。

ふへへ、準備完了だぜ。

「おい」

「今できた。渡すから一気に飲めよ」

俺は、そつとまつりの右手に紙コップを手渡した。まつりはそれを受け取った。

「それ、一気に、一気に」

ブラックなコーヒーが入った紙コップを口元に持っていく。

「……………ん？」

喉を鳴らした。そして、次の瞬間！

バシャア！

「ウワアアア！」

俺の制服は昼休みのリンゴ汁まみれに続いてコーヒーまみれになった。突然の出来事に驚き、俺は尻餅をつく。

「お前なあ！ 何で日本茶と言っておいてコーヒー飲まそうとしてんだあ！」

目隠しを取り外したまつりが叫んだ。

俺はコーヒーまみれになりながら、目を逸らしつつ強気の棒読みで、

「あつれー？ しまったー。緑茶と間違えちゃったー。気付かなかつたー」

するとまつりは疑いの色を込めた鋭い視線で俺を見下ろしつつ、

「ていうか、何であたしがコーヒー嫌いなこと知ってるわけ……？」

俺はようやく立ち上がって、

「ふ、コーヒーが嫌いなのか、お子様め」

まつりは小さく「ふ」とバカにしたような息を吐き、『超濃いブラック』なコーヒーが残っていた缶に口をつけ、そして、ごくごくと飲み干した。そして手の甲でゴシゴシと口元をぬぐう。

あれえ！ 飲めないはずじゃ！

俺は思わず事態を静観していたみどりに話しかける。

「みどり！ 何故だ！ まつりはコーヒー飲めないはずじゃあ——」

「え？ ちょ、ちょっと……」みどりの声。

「ははあん。みどりと手を組んでたわけだ」

しまった、口を滑らせてしまった！

「みどり！ 逃げろ、モイストされるぞ！」

しかし、そう言った時にはもう、上井草まつりは一陣の風となり俺の横を通り抜けていった。

「モイスト！ モイスト！」

ダメだ、遅かった。

「くっ、逃げ遅れたか……」

みどりは捕まってしまった。

「ひゃああああ」

笠原みどりの嫌がる声と、笠原みどりの髪からの良い匂いが教室に撒き散らされていく。

そんなタイミングで、風間史紘が、話しかけてきた。

「助けなくていいんですか？」

俺は答える。

「ダメだ、手遅れだ……もう彼女は助からない」

「モイスト！ モイスト！」

ばっさばっさされている。

「いたい、いたい、いたたた。やめ、やめてえっ！ いやあ——」

教室に響く悲鳴。

そんな中で、おとなしそうな男、風間史紘は、

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね」

「お、そっぴやそうか。俺は転校してきた戸部達矢だ。戸棚の戸に部活の部、達人の達に鎬矢の矢で戸部達矢」

「僕は風間史紘。風見鶏の風に、間引きの間、史実の史に……糸つて書いて広いみたいな字で風間史紘です」

最後の字のイメージが湧かなかったが、悪い奴じゃないことは何となくわかった。俺と風間史紘は、互いの自己紹介を終えて微笑み合った。

「モイスト！ モイスト！」

「うえーん」

ばっさばっさ。

女の子の髪の毛の、甘い匂いに、すこしクラクラした。

上井草まつりの章「3・5」

六時限目。

これが、本日最後の授業。国語の時間が終われば、放課後となる。なるのだが、とりあえず、その国語の授業風景は、異様なものだった。

国語教師が、生徒に音読をさせる。そんな当り前の授業内容が、常識が、この学校このクラスでは通用しないらしい。というか、上井草まつりが変な女なんじゃないかという疑惑でいっぱいになる光景だった。

「では、次の行から、風間。読んでみる」
「はい！」

ここまでは、何の問題も無かったのだが、
「いまはもう自っ……分は、罪人どっこ……ろではなっく……狂人でし……た」

読みはじめて、途切れ途切れに、苦しそうに声を出す史紘。明らかにおかしかった。

そこで、教科書から目を離し、彼の方に目をやった時、俺は目を疑ったよ。

「いいえ、断じて自分は狂ってなどいなかったのです。うっ……一瞬間といえども、狂ったことはないんです。けれども、ああっつく……狂人は、たいてい自分のう……ことをそう言うものだそうで……っす……」

何かの病気が、いや、そうじゃない。原因は背後の席の女にある。つまり、上井草まつりが原因。

「つまり、この病院にいれたものは気……違い、いれられなかったものはノー……おうマルということになるっ……ようです」

風間史紘は、シャーペン先の先でプスプスと背中を刺されていて、とても痛そうだった。それは、衝撃的光景。俺は開いた口が塞がら

なかった。

上井草まつりは、ペン先で風間の背中を刺しながら、彼の体が刺すたびに弓なりに弾けるのが楽しいらしく、クスクス笑いながらプスプス刺していた。

「神に問う。……無抵抗は罪なりや!」

それはもう、太宰治の『人間失格』の音読というよりは、風間史紘の魂の叫びだった。

そんな背中を見て、まつりは笑う。

「つふつはは……」

何が面白いんだ……。

シャープペンで他人の背中を刺してクスクス笑う人間って、どうなんだ。

人格を全力で疑いたいぞ。それこそ人間失格の烙印を押してやりたいくらいだ。だが、あいつはああいう変な奴で、それはもう仕方のないことだ。だが、だが、それにしても、あそこまでいくと、さすがに行きすぎだろう。

そこでチャイムが鳴った。

で、さらにもう一度チャイムが鳴って、教師が来て、ホームルームをして、放課後になった。掃除のために、机は全て後ろに下げられる。まつりは、すぐに教室を出て行った。そして俺も、

「さて、帰るか——」

などと言いながら帰ろうとした。が、

「待ってください、戸部くん!」

む、みどりが話しかけてきたぞ。

「あー、さっきは、ごめんな。モイストさせてしまった」

「いいです。期待してないですからっ」

怒ってた。

「それで、何か用か?」

するとみどりは、箒を差し出して、

「とりあえず、これ」

と言つて来た。

「何だ、これは」

「ほうき」

「そりゃ見ればわかる」

「箒は掃除をする道具です」

遠まわしに言つて来た。掃除をしろ——と。

「俺、掃除当番なの？」

「はい。窓際後方班が掃除です。一人欠員が出てるので、美化委員のあたしが、えっと、補充要員として……」

「なるほど」

ていうか、美化委員だったのか、みどり。

「それと、帰りに用があるから」

「帰りに用……。それは、一緒に帰りましょってことで良いのか？」

「うん」

「女子と下校だと……」

何だそのトキメキシチュエーションは。

「とりあえず、掃除しよ、戸部くん」

「おう」

で、みどりと一緒に掃除する。

俺は、みどりに質問する。

「……あのさ、一つ訊きたいんだけど……」

「何ですか？」

訊き返してきた。

「風間史紘とまつりって……何なの？」

「何でそんなこと訊くんですか？」

また、訊き返してきた。

「そりゃまあ、だって授業中もおかしかったじゃねえか。シャープペンで背中刺されてさ」

すると、みどりは、

「彼は、まつりさんの下僕なの」

変なことを言った。

「はあ？」

下僕だと？

「転校してきてすぐに、彼、イジメられたの。ほら、この学校は、不良多いでしょ？ それも古臭い感じの悪い人たちが」

「ああ、世紀末っぽい奴らとか、髪型が鋭利な奴らとかだな」

「それで、ほら、風間くんって、少しイジメられオーラ出てるじゃない？」

「まあ、わからないでもないな」

「案の定、激しいイジメに遭ってね」

「それで、まつりが助けたってわけか」

「そうね。そうなるかな」

「何かスツキリしない物言いだな。まだ何か問題でもあったのか？」

「うーん……『フミーンをイジメていいのは、あたしだけよ』って言って、彼をイジメてた不良どもを全員病院送りにしたんだけど」

「まつりらしいな」

「でも、その後まつりちゃんによる不良たちよりも更に激しいイジメが始まったの」

「悪化したと。それもまつりらしいな」

「うん。そうなんだけど、でもなんか風間くんは喜んでるみたいだから……おかしな人だよな。二人とも」

「ああ、かなりおかしいな」

「でも、戸部くんも他人のこと言えないな」

そう言って、笠原みどりは笑った。

で、掃除が終わって、「一緒に、帰ろ」と言っただみどりは、微笑んだ。商店街の看板娘らしい素敵スマイル。

そんなわけで、俺とみどりは風車並木の坂道を下る。

「……………」

周囲には見晴らしの良い草原。前を向けば、湖と、裂け目と、その向こうの海が見えていた。

「……………」

「……………」

学校を出てから、みどりはずっと無言だった。

無言というものは、人を圧倒的に不安にさせるぜ。しかし、俺も引越して来たばかり。あまり会話のタネも無いわけだ。せつかく二人きりで帰ってるのにまつりの話をするのも何だか嫌だしな。あとは……「ツツコミやらないか」って言ったら下り坂ダッシュで逃げられそうだしな。というわけで話題が無い。

だが無理矢理にでも声を出さないと、段階的に不安が大きくなっていってしまう。

手遅れになる前に、俺は晴天に向けて手を伸ばし、

「あああ……………」

と、わざとらしい欠伸をした。

「……………」

無視である。

「……………」

向かい風の中を二人、無言で坂を下っていった。

「……あたしね、お礼が言いたかったの」

商店街も終わりに差し掛かった時、唐突にみどりはそう言った。

「お礼？」

「そう。お礼。戸部くんね」

「そりやまた何でだ？ お礼を言われるようなことをした記憶が無いんだが」

「まつりちゃんと仲良くしてくれて、ありがとう」

「へ？」

「前も言ったと思うけど……まつりちゃんって、ああいう子でしょ？ 何て言うか、友達が出来にくい子っていうか、対等な立場で話ができる人が少なくて、いつからか、あたしじゃあ、まつりちゃんの助けになれなくて、支えられなくて、だから、戸部くんが来てくれて、まつりちゃん、楽しそうで、あたしは嬉しい」

それは、本心からの、自然な笑顔で、営業スマイルとは違った、友人を想う幼馴染の顔なのだろうか。

でも、まつりが楽しそうって言うが、あれって楽しそうなのか？ いつも俺にイラついてて、顔をしかめたり歪めたりしてるぞ。

いや、しかし、幼馴染がこう言ってるんだ。楽しんでいるのかもしない。

笠原みどりは立ち止まって、

「だから、ありがとう」

腰を折った。

「あ、ああ……」

その時にはもう、坂もすっかり緩やかになっていた。

商店街の端の方。笠原商店の店の前で、俺に「ありがとう」と言う笠原みどり。

「そんな、俺も、まつりと居るのはそれなりに楽しいし、お前と話

すのだつて、結構好きなんだぜ」

「え、そ、そんな。あたしと話したつて、全然っ、楽しくないつて
いうか……」

「そんなことはないぞ。お前のツツコミスキルはなかなかのものだ」

「え、そうかな……」

「ああ、そうさ」

そして俺は、女の子にツツコミを入れてもらいたがる男なのさ。

「……そっか、うれしいな」

「お世辞ではないぞ」

「うん、ありがとう」

笠原みどりは、営業スマイルで笑うと、

「じゃあ、あたしの家、ここだから」指差して言つて、その手を振り、「またね」と言つて俺とすれ違う。

「ああ、また来週」

そして振り返つて、

「うん。今日は、帰り道付き合わせちゃつて、ごめんね
と言つた。」

みどりの手が、店の引き戸を開けて、閉めた。

「ただいまー」

戸の向こう側から声がした。

「ただいま……か」

いつか、俺も「ただいま」を言う日が来るだろうか。

幕間「02」モイスト発祥の話

教室。

みどり「どう？ この髪。しっとりでしょ？」

女子「私もあれ欲しかったんだけど、売り切れてたんだよね」

みどり「あたしのお店にも少しだけ回ってきたから、お父ちゃんに頼んどつつといてもらったんだ」

ガラッ。

まつり「おはよう、諸君！ すまん、遅刻してしまった！」

みどり「まつりちゃん、見てみて！ うちの店に入った新商品！

昨日発売して即完売したんだよ！」

まつり「何だそれ、シャンプー？」

みどり「シャンプーみたいなものだけど、ちょっと違うの。これを髪に塗るとね、しっとりツヤツヤの髪が手に入るんだよ」

みどりはその新商品を手に持って見せびらかし、空いた手で自分の髪を撫でた。

まつりは、みどりの手にあった物体を奪い取り、書いてある文字を読んだ。

まつり「……モイスターソース……？」

みどり「そう、モイスターソース！ 都会でもなかなか手に入らない貴重品な——」

ばさあ！

まつりが、みどりの髪をたくし上げた。

みどり「きゃあ！ 何すんのよ、まつりちゃん」

まつり「なんか自慢しててむかつくんだよ！」

みどり「な、何よ……いいでしょ、このくらい。あたしのお小遣いで買ったんだから」

まつり「しっとりツヤツヤ髪なんか手に入れやがって、このお！」
ばさっ！

また、みどりの髪の毛の束がふわりと舞った。

みどり「やめてよう、乱れちゃうでしょ」

まつり「何がモイスターソースだ！」

ばさっ。

まつり「何がモイスターだ！」

ばさっ。

みどり「やあ！ もう！」

まつり「モイスト！ モイスト！」

みどり「い、いたっ！ いたたた！ 痛いってば！」

まつり「モイスト！ モイスト！」

みどり「ああん、もうやだあ」

泣いた。

まつり「あはっ、楽しいかも、これ」

みどり「うう……」

まつり「モイスト！ モイスト！」

この時、モイストというイヤガラセが誕生した。

もう、四日目になったんだな。

そう思いながら、俺は窓の外を眺めていた。

相変わらず、風車が回って風の音がする。綺麗な街だった。

潮風が影響大なのか、それとも水道の質がひどいのか不明だが、髪がちよつとパリパリになるのは難点だが、三日過ごしてみても、随分この街を気に入ってきている自分がいて、これからの生活も楽しみだ。

知り合いも結構増えたしな。

ツツコミ候補の笠原みどり。女番長の上井草まつり。級長の伊勢崎志夏。昨日知り合った男子の風間史紘は、まだちよつとよくわからないが。

それと、初日に出会った屋上の女——確か紅野明日香とかいう女——はどうしたのだろうか。

まあ、良いか。そんなことよりも笠原みどりと上井草まつりと過ごした日々の方が鮮烈だしな。

「たった四日って、気がしねえなあ……」

もう皆と、随分長く一緒に居るイメージがある。強烈に。

「今日は、どうしようかな」

特に予定が無い。

以前住んでいた街に居た頃には、休日になると友人と遊び歩いたりしていたのだが、ここでは、そもそも友人というものが居ない。

ゆえに、誰かと遊びに行ったりできない。

「散歩でも行くか」

うむ、そうだな。まだ、この街のことをそれほど知っているわけでもないし、散歩をすることにしよう。

俺は、黒い無地の長袖シャツに袖を通した。

で、朝食の後に散歩に出た。
空を見ると風に整形された雲たちがいくつも浮いていて、それも綺麗だ、とか思った。

目的地を決めずにブラブラしていると、風の強い開けた場所に辿り着いた。

湖だった。

裂け目の手前にして、学校から続く下り坂の終点。

円形と三角形の二つの浮島のある湖。

で、そんな湖に何か用事があるわけではなかったのだが、何故か俺はこの場所に来なければならぬような気がしていた。

だがそこに誰か知り合いが居るわけでもなく、視界にあるのは知らないオッサンが一人で釣りをしているという光景だけだった。

釣りか……何か釣れるのだろうか。

まあ、どうでもいいか。釣りのオッサンなんて。この街には、まだ見るべき場所が多くあるんだ。とりあえず踵を返して別の場所に行こうと思ったのだが、相手から話しかけられたので会話することになった。

まあ、オッサンというには少し若くて、名前も若いイメージを抱かせるもので、若山さんという名だった。自分でヤングマウンテンとか言ってたし。んで、俺の名前聞いた途端に「ベタベタツヤツヤで油みてーだな」とか失礼なことを言ってきた。

俺はさっさと帰ろうとしたのだが、無理矢理に引き止められて座らされ、タバコくわえた若山さんがエリートだった話と、俺が遅刻とサボりでこの町に来ちまったのが運悪いつて話と、会社やめていつて話と、自分が大型ショッピングセンターの店長で絶賛サボり中で不良だろつて話をしてきた。

どうしたもんかなあと思いながらテキトーな返事を続けていると、突然真顔になって、

「知ってるか？ この街の、抜け出し方。おれなりに考えてみたん

だ。この街の脱出方法をさ」

なんて言ってきた。

俺は考えもしなかったな。脱出なんて。更生する気満々だったから。というか今だって更生する気にいるぞ。優良な人間になりたいと。それが当然の感情だと思った。

でも、逃げる。

その選択肢も、あるのかもしれない。

「いいか、この街は山に囲まれている。その険しさたるや、想像を絶するほどだ。高圧電流が流れるフェンスがあるなんて噂もある。ただ、そんなフェンスが無かったとしても、とても越えられる山ではないがな。かといって、海から抜け出すには、あの裂け目を通るしかない。だが裂け目は常に強風が吹き荒れているし、観測の名目で監視されている。と、なれば、残る方法は何だと思う？」

若山さんの問いに、俺は答える。

「空か、地下」

「その通りだ。風車を回転させた風は、山肌を駆け上り上昇気流となる。その流れに乗ることができれば、街の外へと飛び出せる。ちょい危険だがな」

そして若山さんは続けて、

「地下にはトンネルが……おっと、これは社内秘だった。地下にトンネルがあつて、街の外と繋がっているなんてのはな」

「社内秘……思いつき言ってますけど」

「はっ、しまった。つい不良なことをしちまったぜ。おれとしたことが！」

何なんだ、この人。

「こうなれば、お前は、おれの店でバイトするしかない」

「は？」

「おれがサボりたいから、仕事を押し付けることのできる誰かを探していたのさ。できるだろ、電化製品の修理くらい」

「いやいやいや、嫌ですよ、そんなの！ ていうか、できないです

！」

「……はあ……やっぱダメか……そうだよな……あーあ、面倒だな、仕事」

若山は諦めたような口調で言った。

「でも、本当なんですか？」

「何がだ」

「地下にトンネルがあって、街の外に……」

すると若山は、周囲をキョロキョロ見渡して、

誰も居ない事を確認、後、小声で、

「本当だ。品物をこの街に運び入れるために、店の南側にある地下のトンネルを利用してるんだ。内緒だぞ」

と言った。そして続けて言うのだ。

「これ、他の人間に喋ったら、ちよつと大変なことになるからな」

それを何で初対面の俺にペラペラ喋ってたんだ、この人は！

俺に精神的負担を掛けるのが目的なのか！

何なんだ、この人は！

「おっと……そろそろ雨でも降って来そうだな。戻るとするか……」

我が店に」

若山は言つと、

「よつこらしよ……と」

オッサンのように言つて、立ち上がり、

「んじゃ、またな。アブラハム」

「達矢です！」

俺も立ち上がりながら叫ぶように言った。

「どっちでもいいじゃねえか、名前なんて」

不良だ。名前って大事だろう。

「まあ、そうだな。またな、達矢。バイトする気になったら、いつ

でもウチの店に来ていいぞ」

「しないですよ」

「まあまあ、やる気になったらで良いからな。じゃあな」

言って、手を振ると、南の方角へと歩き去った。

「……………」

空を見上げると、確かに空を暗雲が覆い、今にも雨が降り出しそうだった。

俺は、どうしようかとアレコレ考え、

「よし、学校へ行こう」

何でかは知らんが、そうしなければならぬ気がする。

俺の服装は黒っぽい服。制服じゃない。だが、まああの学校は、あまり校則とかに厳しくないから大丈夫だろう。普通に考えれば、雨も降ってきそうな天候だし学校に行くなんてのは考えられないが、予定調和みたいなものには反抗したいではないか。

何というか「普通」に考えればこうだとか、ああだとかってのは、可能性を狭めることだぜ。固定された思考は袋小路を生んで、それが人生の袋小路になって非生産的な生物になってしまうなんて可能性もあるんだ！

それは退化である。

矮小な意識に捕らわれてはいけない。もっと客観的に物事を見なければな。

つまり「何となく学校に行くのはありえない」という感覚を否定して、固定行動からの脱却を図ろうというわけだ。

何か、途中から自分で言っていて意味がわからなくなった。

とにかく、この坂を登って学校へ行こう。

いつもより弱い風の中を少し歩いて、笠原商店の前に来た。

そうだな。雨降りそうだから、ついでに傘も買えるかもしれん。

寄っついていこう。

ガラスと引き戸を開けると、新聞を広げながら店番をしている中年の男の姿があった。

みどりの父親、だな。

「いらつしやい」

みどりの父は言った。

俺は「こんにちはー」などと言いながら店内を見渡す。みどりは店内にはいないようだった。

で、店内を物色していると、面白いものを見つけた。

いや、まあ大したものではない。ただのイタズラ道具だ。

プラスチック製のゴキ。リ。略して「ピージー」

P l a s t i c G o k i * r i

頭文字を取って、「ピージー」と呼ぼう。

隠語略語にすれば、おぞましさも半減するというものだ。そして、ゴ。ブリのくせにおぞましくないということは、それはもうゴキ。リではない。

ピージー。あくまでピージーである。

にしても、細かく描写する気も失せるほどにモザイク必至のリアルさだ。細部まで精巧に作られている。足の毛とかリアルすぎる思わず顔をしかめたくなるほど。

んで、とりあえずそれを購入しておこう。

女の子の服の中とかに入れてビックリさせたい。

我ながら最低だと思うが、そのくらいのスパイシーさは常に求められているとは思わないかね？

思われているだろう。間違いない。間違いないことだ。

ピージーを手にとった。

あとは……傘だな。

当然のように傘が無いからな、傘も欲しい所だ。

「おじさん。傘ないっすかー？」

「あるよー。こっちおいでー」

「はい」

呼ばれたので、右手にピージーを持ったまま笠原父の待つカウンターへと向かった。

「ビニル傘しかないけど、これ」

緑っぽい色のビニル傘を手渡してきた。

「ありがとうございます」

「……で、他に何か買うのかい？」

そして俺は、満を持してピージーをカウンターに差し出した。

「これを……」

「！」

笠原父は、驚きの表情をした後、低く、渋い声を出して、こう言った。

「……ほう……これを、何に使うと言っのかね」

俺は答える。

「悪戯に……」

「ちなみに訊くが、ウチの娘を知っているかね」

「はあ、みどりさんですね。クラスで一緒です」

「まさかとは思っが……ウチの娘に使う気ではないだろうね……」

「断じて、そのような気はありません」

「どうだろうな。チャンスがあればみどりちゃんの背中にでも入れちゃおうかな。」

我ながら、我ながら極悪である。

「ならば、良し。ええと、傘と、コレ（ピージー）で、700円」
まあ、そんなもんだろう。

「袋に入れるかい？ このオモチャ（ピージーのこと）」

「あ、いえ、そのままが良いです」

俺は品物を手に取った。

「そうかい」

「それでは……」

俺はそう言い残して店を後にする。

ガラッ。

「ありがとうございますー」

ピシャン。

俺が店を出た時、急に雨が降ってきた。

やっぱり笠原商店に寄って正解だったぜ。我ながら素晴らしい機転である。

雨の中、歩いて、歩いて、また歩いて、学校に着いた。風は弱かった。どうやら一日一度の風の弱まる時間帯だったようだ。

さて、どこに行くか。

いや、まあ、特に目指す場所も無いしな。ぶらぶらするとしよう俺は律儀に下駄箱で靴を履き替え、ビニル傘を全く使われていないような錆びた傘立てに置いて、校内へと入った。

行くアテもなくブラブラしていると、職員室前に出た。

休日に制服も着ないで校内に侵入するというのは、当然校則違反だ。だが、バレなければ何の問題も無い。ここは、ギリギリのスリルを味わいたくなるぜ。もしも職員室に教師が居れば叱られるのは必至。

抜き足差し足千鳥足。

——って千鳥足は違うだろっ、よっばらいかよっ。

ふう……つつい自分でツツコミを入れるために立ち止まってしまったぜ。

しかも職員室の扉の前で。

この瞬間に教師とかが出てきたらやばいな。なにせ授業ない日に私服登校だからな。

と、その時だった。

ダダダダダダッ！

聞き覚えのある足音がした。

長い廊下を猛ダッシュしてくる制服女子の姿が見えた。
現れたのは、上井草まつり！

「どけええええええ！」

まつりは風を纏い、猛スピードで近付いてきて……近付いてきてえ！？

「お、おい……ちよつと――」

ドムンッ！

言い掛けた俺の体を弾き飛ばした！

トラックに撥ねられたみたいな衝撃！

「ろぶすたああ！」

エビ風の叫び声を上げながら、俺は宙を舞った。

両手両足を前に突き出しながら廊下を飛んだ。

そして、ドサリと床に落ちる。

超痛いっ！

「ソーリー！」

反省の色が感じられない謝罪。

なんか、前にもこういうこと、あった気がする。転校初日あたりに。だが、今の俺はあの時の俺とは違うのだ。ただまつりが視界から消えるのを待っただけの男ではなくなった！

そう。度重なるまつりからの暴力によってレベルアップしているのだ！

すぐに立ち上がって、「まちやがれええ！」と言って、まつりの背中を追った。

ダダダダッ、としばらく走って追いかけて、

「まてっつーの！」

追いついた、そして、腕を掴んだ。ガシツと。

「なっ、何だよ……」

と、まつりは言って、攻撃的な目を向けた。

「俺を撥ね飛ばしておいて、何だよは無いだろっが」

「謝っただろ」

「あんな誠意のない『ソーリー』を謝罪とは言えない」

「放せ！」

「……………」

俺はぱつと彼女の手を放した。

まつりは、腕組をした。

「お前、何で休みなのに学校きてんだ？ ストーカー？」

「人聞きの悪いことを言うな。お前こそ制服まで着込んで学校に何か変なもん仕掛けてんじゃないだろうな。爆発物とか」

「はあ、そんなことするわけねえだろ……」

「まあ、そうだな。お前なら素手で学校破壊するもんな」

「あたしは何者だあー！」

「どかーん！」

「ふっ、効かん」

頭から流血してるけど。まあ、十五秒もあれば止まる。

「で、何か用？」

「俺と勝負しろ」

「休みの日までやんのかよ」

「何？ 逃げるといのか？」

「やるけどもさ」

「そうか、では体育館へ移動だ」

「体育館で何やるんだよ」

「それは行ってから決める！」

「はいはい、何でも来なさい」

溜息混じりに、まっぴりは言った。

ドサツ。負けた。

そんな風に、俺は無様な醜態を晒していった。
早食い――。

「食い物を粗末にするなあ！」
負けた。

トランプ――。

「くう、またしても紙一重で負けた」
ババ抜きで十連敗。

カルタ――。

「読み手とプレイヤーの一人二役すんなあ！」
ばこーん！

「ぶれいんぐまねーじゃああああ！」
ドサツ。負けた。

プロ野球選手背番号当てクイズ――。

「『！』↑この番号の選手は誰？」

「それ選手じゃなくてマスコットじゃろがぁ！」
ばこーん！

「ばれたあああ！」
ズザザザ――。

俺の体は体育館の床をスライディングした。負けた。
タロット占い対決――。

負けた。

料理対決――。

「食い物を粗末にするなあ！」

「スタッフが美味しく頂くのに！」

「んなもんどこに居るんだよ！」

習字――。

負けた。

絵画対決――。

負けた。

パソコン組み立て対決――。

「電気屋の娘なめんなあー！」

どごーん！

「はぐあー！」

ドサツ。負けた。

時々理不尽にぶつ飛ばされながら。

やがて日が暮れていることに気付いた。

「何連敗だ？」

ほの寂しい胸を張って、腕組をして威圧的に言ってきた。そこで俺は答える。

「はあ、はあ……ふっ、数えるのも飽きたぜ」

息を切らしながら。俺は、疲れていた。

「格好つけて言う事かあ！」
ばこーん！

また殴り飛ばされ、ドサツと体育館の床に落ちる。

嗚呼、俺は今日、何回殴り飛ばされただろう。

さすがの俺も体中が軋nder。

その時、まつりは珍しく真面目な口調で言った。

「……お前さ、何でこんなにあたしに突っかかってくるんだ？」

「いつになく真面目だな」

「あたしはふざけてない。いつもふざけてるのはお前だけだ」
否めない。

「で、何でなんだ」

「みどりをツツコミにしたいから」

「……………は？」

「というのは半分冗談で、お前がみどりにモイストさせないためだな」

「ああ、痛そうだな、あれ」

クスクス笑いながら言った。

やってる張本人が笑って言ってるんだが。

他人事だが、少しむかつくな。
そこで俺は言ってやる。

「みどりにモイストしないと誓え」

「じゃあ、達矢が風紀委員補佐になれ。ならないと殺す」
殺すってお前。物騒すぎだろ。

こいつのことだから、その風紀委員補佐つてのは風紀委員のまづりに絶対服従の原則があるんだろうな。

「それは――」

「口答えはいい。なるの？　ならないの？　なるの？　なれよ」
最後は命令口調じゃねえか。

いやしかしここは、あくまで逆らおう。

そう、女子に屈するわけにはいかない。今の俺は矜持に満ち溢れているのだ。

「ならない」

俺は答えた。

「じゃあ死ねえええ！」

どごーーん！

「ぐはあ！」

ドサッ。

「てめえ！　とんでもない怪力で殴りおって！　プロペラのようにして回転しながら吹っ飛んでいつてやろうか！」

「何で偉そうなんだあ！」

ばこーーん！

ドサッ。

「お前に弱点はないのかー！」

「ああ？」

超こわい顔でにらまれた……。

「そんな恐ろしい顔をしてくれやがって！　ゴキ。リに出遭ってしまった大人しくて可哀想な子猫ちゃんのように怯えてやろうか」

「ご、ごき。り……」

まつりは足元に向けた視線をグラグラさせた。

「ほう……」

ピンときたぜ。

こいつ、さてはゴキ。リが苦手だな……？

俺は、都合よく持っていたプラスチック製のゴキ。リのカタチをしたおもちゃを取り出し、親指で発射した。笠原商店で手に入れたアレである。

プラスチックゴキ。リ、略してピージーは、一旦体育館の天井に向かつて生き生きと舞い上がり、直後、
ぽとり。

まつりの肩の上に奇跡の着地を果たした。

「ん？」

肩に違和感を感じたのか、軽く喉を鳴らし、肩の異物をバシッと手の甲で払う。

茶色いピージーが体育館の床の上にボテッと着地した。

彼女は、そこに視線を落とす。そして、

「っっえ……」

固まった。フリーズした。

「どうした、まつり」

するとまつりは、震えた手でそれを指差し、かすれたような声でこう言った。

「おい、達矢。その虫……」

「虫は無視！」

「殺すぞっ！」

「まずいつ、大声を出したら走りだすぞこいつは！」
「はっ——」

慌てて口元をおさえた。

やべえ、なんか普段と違いすぎてギャップありすぎて超可愛く思えてくる。

プラスチックゴキ。リにビビってる。

「まつり、どうする。敵は強大なようだ……」
芝居がかったセリフを言ってみる。

「そ、そうだね……」
ビビっていた。

「どうした、いつもの気迫でやつつけないのか？」

「だ、だって、武器とかないし？」

「俺の上履きを貸してやろうか？」

「どうせニセモノのゴキ。リだしな。汚くはないだろう。」

「やだよ、お前の上履きなんて手に持ちたくない。汚い」という意味だ。割と新品だぞ。

「じゃあ、話し合いというのはどうだ？」

「話し合い？」

「ゴキ。リつてのは頭の良い虫だ。当然、人語を解する」
たぶん、解さないとと思うけどな。

「丁重にお願いすればどこかへ行ってくれるかもしれん」

「そ、そうか。よし」

そしてまつりは、ピージーに話し掛けはじめた。

「ご、ごき。り殿、お話があります！」

まずはゴキ。リに向かって両足を揃えて敬礼した。そして優しく語り掛ける。

「おい、ごき。り……ここは、キミが入ってきてはいけなところなのだぞ。不法侵入は、風紀委員が、罰するんだぞ」

「……………」

しかしピージーは黙っている。

「どうしよう達矢！ 無視だよ！」

「そりゃ虫だからな」

まつりはムツとして、再びピージーと対峙する。

「こ、ここに居るのは、お前のためにもならない。ここには食糧も無いからな。お前の望むものは何も無いのだぞ。おい、きいてるのか、おい……おうい……」

声がどんどん小さくなつてく。

「まつり」

「何だよう！」

「ひよつとしたら、少し距離が遠いのかもしれん。もっと近付かないと声が届かないんじゃないか？」

「えええつ？」

「やべえ……おもしれえ……」。

「ほら、近付かないと」

「わ、わかつてる」

おそる、おそる。一歩、一歩。すり足で進む。

そこで、

「わっ！」

「うあああああ！」

ばこん！

痛いっ。脅かしたら、ぶん殴られた。

「お前、お前、脅かすなあ……」

ドキドキしているようだ。

ふっ、十分楽しんだ。そろそろ種明かしといこうか。俺はピージ―に近付き、そして、その触覚を掴んで拾い上げた。そしてまつりの方を見た。

遠く遥か向こうにいるまつり。

いつの間にあんな遠くへ……」。

「……………すてろっ、はやくすてろっ！」

すげー遠くで命令してる。

超遠い。四十メートルくらいの距離だ。

そして、俺は言うのだ。

「おい、まつりー。実はコレ、にせものなんだ。俺が用意したオモチャのゴキ○リ」

と、次の瞬間――

目の前にまつりの拳があった。あの一瞬であれほどの遠くからっ？

瞬間移動の超能力でも持つてるのかコイツは！

「この……すつとこどっこいがああ！」

ドゴーーーーーン！

「フェスティバール！」

お祭り風の叫び声を上げて、俺は宙を舞った。

そして、体育館の冷たい床の上に落ちる寸前に、蹴り上げられた。何だ、このコンボ。まるで俺でリフティングするかのようだ。

「しね！ しね！ ころすころす！」

ばこーーーーん！ ずooooooooん！ どooooooooん！

「かはあ！」

あまりにも一方的な暴力。たまに体育館の壁とかにぶつかって跳ね返ったりする。まるで俺でスカッシュしてるみたいだ。

「ばか！ あほ！ まぬけ！」

ばこーーーーん！ どごーん！ ずooooooooん！

「この、このお！ おたんこなすー！」

その罵声、小学生のごとし。

「くたばれえええ！」

どooooooooん！

体育館中を俺の体は飛び交って、まつりが肩で息をするほどに疲れた頃、ようやく暴力から解放された。

超痛い。

最後の方は、もうやられ声を発することさえできなかった。

だが、俺は丈夫だからすぐに回復する。

「はあ……はあ……次やったら、マジで殺すからね」

珍しく肩で息しながら言って、体育館の床を蹴って駆けた。

ぶっ飛ばされながら空中で考えていたことなんだが、これは、やつぱり謝らなくてはな。

駆け足で追いかけて、廊下を走り、下駄箱で追いついた。

「おい、まつりー」

すると、まつりは立ち止まり、

「何で生きてるんだあ！」

「ばーん！」

殴られ、宙を舞う。

「げふう！」

ドサリと廊下に落ちた。

すぐ殴るんだもんな。でも、相変わらず痛いけれど、もう慣れてしまったぜ。

俺はすぐに立ち上がって、話しかける。

「手、痛くないか？」

「痛いわよ！」

「ごめんな、ゴキ。リのこと」

「許さない。死ね」

口を開けばすぐ暴言である。

俺とまつりは、上履きから下履きに履き替えた。

そして、まつりは、昇降口の傘立てに一本だけ残っていた俺の緑っぽいビニル傘を手取る。全く躊躇うことなく。そして、バサツと開いた。これまた躊躇わず。

「まてまてまてい！」

「何よ」

「それは俺の傘。俺の傘だぞ！ さっき笠原商店で買ったやつだ」

「学校に置いてあったんだからあたしのだ！」

どんな論理だ、このジャイ。ン崩れめ！

「こ、こら、待て」

しかしまつりは俺の無視して土砂降りの外へ出る。まだ風は弱いまだ。

中庭を歩く。激しい雨に打たれて、俺はすぐにずぶ濡れになった。俺は無理矢理傘の中に入った。

「入ってくんな！ そして死ね！」

何言ってるんだ！ 俺の傘だぞ！

「返せ、返せ。ちよいさー、ちよいさー」

俺は手を何度か伸ばし、傘を奪い返そうとした。が、

「あたしの傘にさわるなあああ！」

どごーん！

「あいやー！」

俺はいつものように拳に吹っ飛ばされ、水たまりにバシャーンと落ちて泥まみれになった。

っていうか、お前の傘じゃねえよ！

俺は、めげずに立ち上がり話しかける。

「なあ、まつり」

「うるさい、死ね」

「怒ってる？」

「……………」

怒っているらしい。

ちよつと煽ってみようかな。

「いやー、しかし、まさかお前が、ゴキ。リにビビるとは思わなかったな」

「死ぬ？」

「い、いえ、死にたくないっす」

こわい。殺気がやばい。シャレにならないくらいこわいぜ……。

殺伐オーラがシュワシュワいつてる。

本気で殺される気がするので、もう言わないことにしよう。
で、門を出て土砂降りの坂を下る。

「なあ、まつり。傘入れて——」

「ダメだつってんだろ！」
ばこつ。

軽く殴られた。

「なあ、まつり。お前は、どうしてそう、暴力的なんだ」

俺でなければ耐えられないほどに。

「っ、それは……………」

「暴力でストレス発散してるのか？」

「みどりに聞いたの？ 色々」

「そうだな……色々聞いた。あ、だからってみどりにモイストするなよ？」

「……………」

こいつ、やる気だ。

みどりに会ったら即モイストする気だ。

口の端が不気味に吊り上って、何か企んでる感がひしひしと伝わってきた。

「……………」

しばらく歩くと、風車並木の急な坂が終わって商店街に出た。

「モイストはするなよ」

念を押す。

「……………」

返事が無い。

やはりモイストする気なのだろうか。

「お前がモイストを強行するってんなら、俺にだって考えがあるからなっ！」

「……じゃあ、あたしの家ここだから。バイバイ」

「え？」

上井草まつりは俺の宣言を無視するように言って手を振ると、傘を差したまま店の引き戸を開けた。透明な引き戸に白い字で縦書きされた文字は、

『上井草電器店』

まつりは戸に手を掛けたまま振り返って、

「バイバイってあたしが言ってるんだけど？」

挨拶を強要してきた。

「あ、ああ。じゃあな」

「うん」

フツと笑って店の中に消えた。

ここが、まつりの家か。みどりの家の三軒離れてるくらいか。

店なのかわからないくらい寂れてるから今までスルーしてたけど、
そっぴや商店街の娘だとか言ってたっけ。

「ふう……」

俺は溜息を一つ吐いて、寮に向かって歩き出した。

雨足が強くなったけど、ここまで濡れていたらもう関係ないな。

おのれ、上井草まつりめ。

さて、寮の玄関にはバスタオルが用意されていて、そこで全身を
雑に拭いて、靴と靴下を脱いで絞った。水がザバーっと出て玄関の
土足可領域に水たまりを作った。で、ついでに服も脱いでパンツ一
枚になり、服を絞る。水たまりは川になった。

で、そんな寮の床が濡れないように中途半端な気を利かせた行為
の後、俺は部屋に戻ってシャワーを浴びた。そして今、部屋で寝っ
転がって天井を見つめているところだ。

横暴な上井草まつりに対する憤りを噛み締めながら。

何であいつは、ああも粗暴なのだろうか。もうね、本当どうしよ
うもない奴だな、あの女は。

だけど、嫌いじゃないんだよな。どうしてか。

そっぴえば、次の登校日……つまり明後日か。

明後日の朝は、みどりがモイストされないように、みどりを迎え
に行かないとな。何と言っても、俺がまつりに近付いたのは、みど
りにモイストさせないためだから……。

「……………」

ちよつと待てよ。

本当に？ 本当に、そうだろうか。

俺は、みどりのためにまつりに近付いたんだっけ？

みどりをツツコミにしてコンピを組むためだ、と言って来た気は
する。だが、だが俺は本当にそう思っているか？

みどりのため？

自分のためじゃないのか？

俺自身が、まつりの近くに居たいから。

ということは、だ。俺は、まつりのことが、好き……なんじゃないか？

「……………」

好き。好きって何だろうな。

好き。好き、好き。ああ、わけわからん。

好きなわけじゃないか。でも、うーん。

寝よう！

こうなれば寝るしかない。

俺は押入れの上の段から布団を引っ張り出して敷き、布団の中でのた打ち回った。

そして、いつの間にか眠った。

上井草まつりの章「5 - 1

転校五日目の早朝に、俺は目覚めた。

まつりのことを夢に見ちまったぜ。そんで夢の中でまで、まつりにボコボコにされていた。

で、それはどうでもいいとして、今日も休日。授業は無い。

雨は弱まりながらも昨日から降り続いていたようで、少し肌寒さを感じる目覚めだった。

休日二日間の天気が崩れるってのは、何となく損した気分になるが、まあ、この街に来て最初の連休だからな。ゆっくりできてむしろ良いかもしれん。

と、その時だった。

ぐるぐると腹が鳴って、空腹を告げた。

「あー。そういや昨日メシ食わずに寝たから腹減ったぜ」

何故か独り言を繰り返しつつ、空いた小腹を満たすために階下へと向かう。手の中で小銭をジャラジャラ鳴らしながら。

食堂の前には、カップ麺等のジャンクフードが常備された棚がある。

寮生なら代金を置けば食べて良いという、無人野菜販売所のようなシステムになっている。

朝食まで待つても良いのだが、今の俺は飢えに飢えている。それに、たまにはカップ麺のお世話にならないといけないような気がするのだ。

理屈ではない。

これはもう、俺という人間に後天的に組み込まれた本能的な行動なのだ。それは本能じゃないというツツコミはいらない。

で、螺旋状になりたくてなり切れていないような階段を下ったところで、俺の足は止まった。

男子寮の寮長であるおっちゃんと、女子が何かを話していたから

だ。

こんな早朝に、何だろうか。

禁断の恋とかだったりしたら邪魔しちゃ悪いな。

ん？　っていうか、あの女子は……。

「おかしいです。そんなもの、あるわけない」

級長の伊勢崎志夏だった。何故彼女が男子寮に居るのだろうか。

寮長のおっちゃんは、志夏の言葉に頷いて、

「そう思う。この街に長く暮らす者なら、当然その裏に何かがあることは感じるはずだ」

「でも……それじゃあどうして避難勧告なんて……」

「街の南側の地下にあるんだそうだ」

「でも、あそこにはショッピングセンターのトンネルが掘られたばかりで、詳細な調査の末に掘ったって話だったじゃないですか……」

で、俺はそんな二人の立ち話に割って入ってみることにする。ちようど進行方向に彼女らが居たということもある。

「何かあったんですか？」

驚いて振り返る二人。

志夏は少しか表情を曇らせつつ、

「達矢くん。もしかして、今の話、聞いてた？」

「すまん。少し聞いた。聞かれちゃまずい話だったか？」

「まあでも、いずれわかることだから、聞かれてまずいって程ではないけど」

「けど、何だよ。っていうか、何で志夏が寮長さんと話してるんだ？」

「私、女子寮の方の寮長をやってるから。こうして重要なことを寮長同士で話し合うこともあるの。言ってなかったっけ？」

「ああ、そういえばそうだったか」

「深谷さん。これ、言って良いと思います？」

志夏は、男子寮長のおっちゃんの方を見て訊いた。ほう、おっちゃんの名前、深谷っていう名だったのか。

「仕方ないんじゃない？」

おっちゃんは答えて頷いた。

それを見て、志夏も頷き、話し出す。

「実はね……」

「どうした」

「国から、避難勧告があつたの」

えっと、国からつていうと、政府からつてことか？

「へえ、そりやまたどうして」

「この街に、不発弾が眠っているのが発見されたから、街に居る全ての人間は一週間以内に街の外へと避難するようにつて」

「不発弾？」

「もつとも、そんなものがあるはずなくて、だからわけがわからないの」

「じゃあ、何で避難勧告なんて」

「だから、それがわからないから不安なのよ」

「……………」

「とにかく、不発弾なんて埋まってないから、慌てないでね」

「おう」

志夏は怒つたような顔で強く言う。

「どういつつもりか知らないけど、政府の思い通りになんかさせないんだから」

俺は何となく言葉を返し辛くて黙るしかできなかった。

志夏は右手を挙げながら、

「それじゃあ、私は先生たちにも避難勧告のこと話しに行くから、またね」

と言に残すと、玄関の方へと歩いていった。

「あ、ああ、またな」

寮長は、「あ、わたしも朝食の準備をしないと……それじゃあね、戸部くん」とか言つて食堂へと消えた。

そして、周囲には誰も居なくなつた。

その時だった。ぐるぐるとまたしても俺の腹の音。

「そうだな、カップ麺だカップ麺」

俺は食堂手前の棚の横に備え付けられた小銭入れに必要な金額を入れ、赤いパッケージのカップ麺を手取る。

そして、開封。

近くの台に備え付けてある電気湯沸かしポッドからお湯を注ぎ入れ、台の上に置いてあった割り箸で蓋を押さえつつ、自分の部屋へと向かった。

階段とかがあるので、慎重に。

で、五分後、俺は久しぶりにカップ麺のお世話になった。

これで、朝食までの間に飢えて死ぬことはないだろう。食わなくても死ななかっただろうというツツコミはいらない。

で、朝食、後、部屋でダラダラ。

昼になり、降っていた小雨も上がり、空が晴れた。

それにしても、さっきの志夏の話は突然だったな。

不発弾で『かざぐるまシティ』全域に避難勧告が出てるなんてのは、なかなか信じがたいこと。街の南……というつもりが言っていたショッピングセンターの辺りだろう。何だか気になるので、ちよつと行ってみるか。

俺は立ち上がり、螺旋になりきれしていない階段を下りて、靴を履いて外に出た。

寮から街の南側に行くには、湖畔の歩道を使うのが最も近い。

近いのだが、最短移動距離の短さが移動時間の決定的な短縮にならないことを身をもって知ることになった。

「さて……湖か……」

視界にあるのは、強めの風を受けて時計回りに回転する風車の背中と、縦に伸びる大きな裂け目。裂け目はその向こうの海と空を切り取る長方形の窓のようだった。

まあ、キレイといえばキレイだが、自然の風景っぽくはない。作られた風景って感じた。

自然が作った不自然な風景ってのも、存在することはあるだろうから何とも言えんが。

で、湖畔に目を落とすと……見覚えのある人の姿があった。またしても釣りをしている。

そして釣竿片手に振り返ったその男は言った。

「よう、アブラハムじゃねえか」

そして、若山さんは釣竿を地面に置いた。

「戸部達矢ですよ」

いつまでそのネタを引っ張る気だ。

トベタツヤで、ベタベタツヤツヤだから転じてアブラで、ちょっと変えてアブラハムということらしい。

「湖に来るなんて、珍しいな、アブラハム」

「昨日も会ったじゃないですか。あとアブラハムじゃないです」

「じゃあ、オイルハム」

「どんなハムだ」

「ハムが気に入らんか。じゃあオイル公」

「俺の名前の原型なくなってるんじゃないっすか」

「うーん……そうだな。面倒だから達矢でいいか。そう呼ぶことにしよう。それでいいか？ 達矢」

「そこに行き着くまでに随分かかりましたね……」

「まあ、細かいことはどうでも良いんだ」

「はあ」

「ところで、聞いてるか？ 避難勧告の話」

「はい、南に不発弾って話で……街全域に……」

「ほう、耳ざとい奴だ。で、どう思う？」

「どう思う……って言うത്？」

「避難勧告だよ。明らかにおかしいだろうが」

志夏も同様のことを言っていたな。

「と、言いますと？」

「良いマスト？ どこだ？」

若山は周囲をキョロキョロ見渡し、そして言うのだ。

「マストなんて何処にも無えじゃねえか」

この人と話していると、何だか疲れるんだが。

「……それで、おかしいって何がですか」

「そうだな……。本当に不発弾があるのなら、人命救助・リスク回避の観点から、住民を問答無用で即刻立ち退かせるべきだ」

確かに。

「それに、本当に不発弾があるならば、何故一週間後までの立ち退きなんだ？ どう考えても即刻立ち退かせるべきだろう。費用をい

くら掛けてでも。もしモタモタしている間に爆発しちまったら、政府はどう責任を取るんだ」

言われてみれば、そうかもしれない。

「まるで、そうだな。何かに逃げる期間を与えるための宣告みたいな、そんな感じだ」

なんだそれ。俺が頭の悪いせいかもしれないが、言いたいことがよくわからない。だが、政府の発表の何かがおかしいということは理解できた。

そして俺の中に、政府や国つてのに対する不信感……というか違和感みたいなものが生まれた。

国、政府……現在、かつての民主主義政権が崩れてしまっていて、この国は何処のどいつだかイマイチわからない臨時政府が治めている。

「どうして、そんなおかしい避難勧告が出たんですかね」

「さあな。詳しい事はただの店長であるおれにはわからない」

ああ、そういえばこの人、ショッピングセンターの店長だと言ってたな。

「店長なのに、こんな所で油売ってて良いんですか？」

「アブラハムに油を売る……か」

「クソ意味わかんないっすけど」

思わず汚い言葉が出るほどに。

「ま、昨日も言ったが、おれはアイドルじゃないんでね。おれ一人が抜け出しても売り上げに影響は出ないさ」

若山は言っと、慣れない手つきでポケットから煙草とライターを取り出し、口にくわえて火を点けた。そして大きく煙草の煙を吸って、

「がはっ、ごほっ、げほっ！ けほ……」

咳き込んでいた。

「大丈夫ですか？」

「煙草も、けっこう強敵だぜ……」

「そうっすか」

「よし。じゃあ……おれはそろそろ店に戻るとするか」

言って、「よっころしょ」と声を漏らした後、釣り道具を手に取った。

「若山さん」

「何だ」

「ここって、魚釣れるんですか？」

「たぶん、釣れないぜ」

「そうっすか……」

もし釣れるんだったら、暇潰しに釣りでもしようと思ったんだがな。

「それじゃあな」

「あ、はい」

「あ、それと達矢。言い忘れたが……」

「何すか」

「くれぐれも、昨日教えたトンネルには近付くなよ。下手すれば……死ぬからな」

「はあ。今のところそんな予定はないっすけど」

「なら良い」

頷きながら言った。

「ところでうちの店でバイトしない？」

「しません」

「まあ、やる気になったらで良いからな。じゃあな」

昨日と同じようなことを言って、軽く手を振ると、南の方角へと歩き去った。

空を見上げると、昨日と違って気持ちのいい晴天で、俺は大きく天に向かって伸びをした。

「さて……やることなくなっただな……」

若山さんに南側には行くなとクギを刺されてしまった。

上井草まつりの章「5・3」

で、暇潰しにやって来たのは、またしても学校。

今日も休日私服登校である。俺がまつりを探して歩いていると…

…。

——いた。

発見。制服姿の上井草まつり。理科室の前をウロウロしていた。

「よう、まつり」

「げっ——」

小さく声を漏らして、ダダダッ、と逃げ出しゃがった。

「ちよっと待てえ！ 顔を見た途端に逃げ出すってのはどういふことだ！」

ダダダダッ、と俺は追いかけた。

で、しばし追い掛け回した末に教室で捕まえる。

「よう、達矢」

まつりは、涼しい顔で挨拶してきた。

「お、おう……おはよう」

「そういや、お前のせいで腕と足が痛い」

「そりゃ、昨日あんだけ俺に殴る蹴るの暴行を加えればな」

「はっはっは」

いや、笑い事じゃ済まないレベルなんだがな。俺じゃなかったら死んでるぞ。

「それで、今日は何の用だ」

「特に用は無い」

「何で用もないのに休日の学校に来るんだよ」

「その言葉、そっくりまつりに返してやる」

「あたしは——……（ごによごによ）」

言い掛けて、ごによごによ煮え切らない様子だった。まつりらしからぬ歯切れの悪さだ。

「お前は何か用があるってことだな」

「……………まあね。風紀委員だし」

そういうことにしといてやるか。明らかにパトロールって雰囲気ではなかったけど、俺はそういうった気付きに蓋をしてやれる優しい男なのだ。

で、まつりは言う。

「とにかく、理由がないのに休日の学校に来てはいけない」

「何で」

「あたしが今、そう定めたから」

何とまあ、俺のせいでまた新たな学園法が生まれてしまったぞ。しかし、まあ、抜け道はある。

「理由があれば良いんだな？」

「そうね」

「じゃあ、お前に会いに来たってことで良いか？」

「なっ…………っ」

赤くなりやがった。意外だ。

「お前……………もしかして恋愛とか苦手？」

「あたしを、からかった？」

半分以上本気だ。この真剣な目を見てくれればわかると思うが。

「からかったんだな！ バカにしやがって！」

「ちょ、ちよつと待て、今のでそんなに怒ることないだろうって——」

「死ねえええ！」

ドゴーーーーン！

「いたいさあー」

沖縄風の声を上げて宙を舞った。

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「やれやれ。痛いぜ」

「……………お前、嫌な奴だな」

散々殴ったり暴言吐いたりした上でシリアスにしみじみと人格を否定してきた。ひどい奴だ。

「どこが嫌な奴なものか。俺のようなイイ奴はそうそういないぜ」

「何か、お前、あたしの思い通りにならない」

「人と人の関わりって、それが当り前だろ」

「殺すよ？」

「おい、脈絡なさすぎんぞ……」

「あたし、怒ってるんだけど」

「俺に對して？」

するとまつりは頷きながら、

「そうよ」

「何で」

「自分の胸にきいてみな」

「おい、何でなんだ、俺の胸」

俺は自分の胸にきいた。返事は無い。

「ふざけんなっ！ 殺すぞ！」

「だが、お前の胸に聞くのはもつと無理だな。あるんだかないんだかも不明な、ほの寂しい胸だからな。はっは」

「このお！」

ビビーン！

外人女性の名前みたいな殴られ音がして、俺の体は宙を舞った。

そしてドサリと床に落ちる。

「けふうあ！」

「殴るぞ！」

もう殴ってる。

「死ね！」

ああ、死にそうだ、今にも。打ち所が悪かったら死ぬぞ、まじで。だが、それでも俺はスツと立ち上がった。

頭から何かドクドク赤いのが出てるけど、こんなものは五秒もあれば止まるぜ。どうやらこの町に来てからの俺は特異体質になっちまったようだからな。

「あたし、お前なんか嫌いだ」

「俺はお前の事嫌いじゃないぞ」

「このっ……」

俺は殴られると思つて身構えた。

「……………あれ？」

殴られなかった。だが腕組で顔をしかめていて、それ以上ないほどのイライラを表現している。今にも暴力を振るわれそうで半径一メートル以内に近付きたくない。

そういや、ふと気になったんだが、まつりは避難勧告のことを知っているのだろうか。

「そういえば、まつり」

「ああ？ 何だよっ！」

威圧的な声。まるで不良。まさに不良。だが、もう声くらいでは俺は怯まない。俺は言つた。

「避難勧告の話、知ってるか？」

「何それ」

キョトンとした。知らないようだった。

「なんか、南の方に不発弾があるって話だぞ」

「不発……弾？」

「そう。だから、街の住人は一週間以内に避難しなくてはならないそうだ」

「そんな」

「ウソじゃないぞ。志夏に訊いてみる」

「訊いて来る！」

「あ、ああ」

「じゃあね！」

まつりは言つと、走り去つた。

「じゃあなー！」

彼女の背中に向けて言つた。

「……………」

案外、正常な反応するんだな。

「……帰るか……」
俺は寮に帰るため、廊下を歩き出した。

朝食の後、すぐに寮を出た。みどりを迎えに行くためだ。

一昨日のことを思い出していたきたい。雨の帰り道で、俺の傘を奪ったまつりはみどりにモイストする気だった。そういう雰囲気バリバリだった。だから、みどりを守るために、俺はみどりと一緒に登校しなければならない。

ということで、笠原商店の前に着いた。

色あせた看板に『笠原商店』という文字。

ふと視線を落とすと、半分だけ開けられたシャッターを、全開にしようとしている中年の男がいた。

つまり、笠原みどりの父がいた。

「あの、おはようございます」

「おはよう……と、君は、傘とゴキ。リの子じゃないか」
嫌な憶え方をされていた。

「戸部達矢です」

「あ、君がみどりの言っていた転校生の戸部くんか」

「おや、みどりのやつ……親に俺のこと話してんのか。どの程度話してるんだろうかと少し気になったが、まあそんなことよりもさっさとみどりと合流せねば。」

「みどりさん、います?」

「もう、学校に行っただぞ。五分前くらいに」

「何だと!」

「あ、じゃあいいです。ありがとうございます。失礼します」

「お、おう……」

「それではっ!」

俺は慌てつつ言っつて、駆け出した。

みどりが危ないっ。まつりという異常者に捕まってモイストされてしまう。それは、よくないことだ。モイストさせるわけにはいか

ない。髪は女の子の命つ。特に素晴らしいキューティクルを持った
みどりにとつては！

で、教室に着いた。

「モイスト！ モイスト！」

「痛いよう、痛いよう」

くっ、遅かったか……。

「この御喋り娘っ、制裁だ、制裁だ！」

ばっさばっさ。

「ごめん、ごめんって」

「モイスト！ モイスト！」

すでにモイストされまくっていた。

「秘密を守れない奴は、大人になれないのよう！」

ばっさばっさ。

すぐ暴力に訴える奴も大人になってもらっては困るけどな。

俺の姿を確認したみどりは、涙目で、

「あっ、た、助けて……」

助けを求めてきた。助けたい。助けよう。助けなくては。

「おう、達矢。おはよう」

まつりはモイストを続けつつも平然と挨拶。

「おはよう、じゃねえよ。モイストするなって言っただろ！」

「じゃあ風紀委員補佐になれって言っただろ」

「誰がなるか！」

「じゃあ誰がモイストやめるか！」

ばっさばっさ！

「いーたーいー」

いつもより激しいモイストだ。これ見よがしに激しくやっている。

「これは、力づくで止めるしかない」

そう、こいつは口で言っただけわかるような奴ではないのだ。

昔の人はこんな言葉を遺している。

目には目を。歯には歯を。

ならば……モイストにはモイストを——！

俺は、ゆつくりとみどりにモイストするまつりに接近した。
そして、

「もいすと！ もいすと！」

俺はまつりの首までの髪をばさりと弾き上げてモイストした。
ばさつばさつ。

「きゃあ！」

なっ。きゃあ……だと……。

そんな女らしい悲鳴を上げるとは予想外。そして、予想外にモイストは楽しかった。

「もいすと！ もいすと！」

ばさつ、ばさつ。

「ひう……」

もうみどりにモイストしているどころではなくなったまつりは、俺に髪を触られる度に体を震わせていた。まるで、大きな音に怯えている時みたいに。

「もいすと！ もいすと！」

ばさつ、ばさつ。

楽しいっ。そして良い匂いする。

「やめっ、やめろっ」

とまつり。

まつりは髪がそんなに長くないので、首筋を撫でて、髪のを拾い上げ、ばさつとする。

もう一度、首筋を撫でて、髪のをばさつ。

「もいすと！ もいすと——」

と、その時——

グイ。

指の間にまつりの髪束が引っ掛かってしまった。そのまま髪を引っ張る形になる。

「痛いっ、痛いっ！」

「あ、ご、ごめん」

我に返って手を放す。

「このっ」

振り返ったまつりの目に、涙が溜まっていた。

涙か…… って、涙だと？

「ど、どどど、どうした、まつり」

思わずたじろぐ俺。一步、後ずさった。

「どうしたも……」

「え」

「どうしたもこうしたもあるかああ！」

どっこー……ん！

「アッパァアアア！」

思わず喰らったパンチ名を叫びながら俺の体は天井へ向かい、
どこん。

天井に突き刺さった。今までで一番重い一撃。

やっべ、何も見えねえ。天井裏、真っ暗。

っーか、今、まつりが泣いてたか？

あのまつりが。

殴られる瞬間に涙が飛び散ってたように見えたんだが……。

そして下のほうから、こんな声がした。

「死ねっ！ 変態！」

おいおいモイストは変態行為だとしても言うのか。だったら長年モ
イストを繰り返して来たお前の方が変態だろうが！

朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴った。

上井草まつりの章「6・2

授業が始まった。簡単そうな授業だが、今の俺は、そんな授業にすらついていけない。

なぜなら……天井に突き刺さったままだからだ。

誰も抜いてくれないんだが、どうしたものか……。

「これを、上井草、読んでみる」

教師の声がした。

下では授業が繰り広げられている。

「ゼスイズザペン！」

もろ訛ってる。超力タコト。

「そう、『This is the pen.』意味は？」

「ここは刑務所です」

何だそれは。これはペンです、で良いだろ。バカじゃないのか、まつり。

「正解」

うっそ……。

「ところで、さっきから気になってたんだが、この天井から生える下半身は誰のだ」

すると級長、志夏の声。

「戸部達矢くんです」

「何で刺さってるんだ」

そんな教師の問いに、志夏は呆れたように、

「上井草さんに飛ばされました」

「そうか。じゃあ仕方ないな」

「ってオイイ！ 仕方ないって何だ！ 抜いてくれよ。何でずっと刺さりっぱなしなんだよ！」

俺は叫んだ。

「……ふう」

志夏の声がして。
ズボッ。ドサッ。

俺は久々に教室の空気を吸った。志夏が足を引っ張って引き抜いてくれたらしい。

「ありがとな、志夏」

「どういたしまして」

教室には、まつりの姿もあった。

「おぼえておけよ、まつり」

俺は怒りに満ちていたので、にらみつけながら言ったのだが、
「ああ？」

にらみ返された。こわい。

「おい戸部くん。とりあえず席につけ」

「は、はい」

俺は、教師に言われた通りにした。

チャイムが鳴って、授業が終わった。休み時間の開始である。

「戸部くん」

そして、休み時間になってすぐにみどりが駆け寄ってきた。

俺は立ち上がった。

「よう、エクスカリバーじゃねえか」

「聖剣かよっ」ぽすん。

意味のわからないボケに、お約束のツツコミを入れてくれた。

このやり取り自体、意味がわからないが。

「って、そんなことよりも、大丈夫？ 天井に刺さって生きてるとか、戸部くんおかしいよ」

「俺じゃなくてまつりがおかしいって言ってくれ」

「戸部くん……さつきさ……まつりちゃんさ……」

「ん？ まつりがどうした」

「戸部くんのこと『殺す殺す』ってブツブツ言ってたから気をつけ
てね」

「大丈夫だ。あいつに俺は殺せない」

なぜなら今の俺は規格外に丈夫だからだ。

たぶん、西洋風のソードに刺されても生きていられるし、和風のカタナに斬られても生きていられるだろう。

「ところで、みどり。もしかして、さつきさ……」

「何ですか」

「まつり、泣いてたか？」

「……………はい」

他人にひどいことをしておいて、自分がされると泣くとか、
どんだけ面倒な女だよ。

「わけわかめライスだぜ」

「どんなわかめですか」ぽすん。

手の甲で撫でるように叩かれるのがもう快樂。みどりのツッコミは可愛い。でもたまに少しズレてるかもしれない。どっちかと言うと、どんなライスなのかが気になるところだろう。

けどまあ、何ていうかな……とにかく、ツッコミになってくれなくとも、まつりにモイストされないようにしてやりたいな。と思った。

「みどり」

「はい？」

「俺は、まつりに勝つぞ」

「はあ……」

「俺が風紀委員になってやっても良い。それどころか、生徒会長になって風紀委員という権利を剥奪し、排除しても良い」

「え……あつ、政権交代かよっ」ぽすん。

思いついた顔で、みどりはツッコミを入れてきた。

いや、ボケじゃなくてマジで言ってるんだがな。

「みどり、お前をモイストの恐怖から救ってやる！」

「まあ、それはうれしいけど。でも、あんまり、やりすぎないようにね」

「おう」

そしてみどりは軽く手を振り、去って行った。

昼休みになった。

俺は、授業中ずっと、まつりの弱点について考えていた。

今までの戦いや生活の中で、まつりの弱点らしい弱点を探っていると、意外なものが浮上する。それは……セクハラ。そう、セクシヤルなハラスメント行為である。まつりはセクハラが苦手……いや、セクハラというよりも、男と女という概念に対する苦手意識があるんじゃないかと思う。

ほの寂しい胸のことをちよろつと言ったら激しく怒られたこと。

そして、昨日、ちよつとジョーク交じりに恋愛オーラを飛ばしてみたら過敏に怒ったこと。

上記二つの怒りは、普段の怒りよりも激しかった。大したことないのにすごく怒るってことは、それが弱点ってことだ。コンプレックスって言っても良いくらいの。

そして、弱点を突くというのは兵法の基本！

勝つためには手段を選ばない男を自負する、この戸部達矢を敵に回した時のおそろしさを見せてやる。

俺はツカツカと教室内を歩き、まつりの席へ。

そして席に座って風間史紘のつむじを後ろからギュウギュウ押ししているまつりを見下ろした。

「何だよ。謝りに来たのか？」

俺を天井に突き刺すくらいにぶっ飛ばしておいて、なお謝れと言うのか。ふざけたことを言わないで欲しいぜ。

「謝る？ そんなわけないだろ」

「じゃあ何の用だ。あたしは今、フミーンのつむじを押すのに忙しいんだ。くだらない用事だったらぶっ殺すぞ」

あら汚い言葉遣い。美人台無し。

で、まあ、実はくだらない用事なのだった。いや、用事ですらな

いか。

「何だよ」

「いや、お前の胸が、小さいなって思っで。ちよつと大きくする努力したが良いんじゃないかってアドバイスしに來たんだよ」

セクハラした。決してマネをしてはいけない最悪行為である。まして貧相な乳をした子に対しては特に言っではいけない優しくない行為である。

「……………」

クラス中が、張りつめた。教室が、水を打ったように静まり返る。無音。

しばらく無音空間が広がった後、ようやく音がしたと思ったら、それは、まつりが椅子から立ち上がった音だった。

——ガタンツ。

「死ぬ？」

疑問形。

やばい、こわい。冷や汗が止まらない。なんだこの殺気は。

しかし、ダメージは与えたはずなんだ。普段、誰も恐ろしがってセクハラをすることが無かったはずだ。とすれば、当然、セクハラに対する免疫など無いはずだ。まつりはきつと「ごめんなさい、もうモイストしません」と負けを認めるはず……。

だがしかし、

「あの、ごめんなさい、もう胸のことは言いません」

俺が謝ることになった。その恐ろしい眼光に負けた形だ。

「謝っても、遅い」

「ひっ」

悲鳴。俺の悲鳴。

「南半球まで、とんでけええええ！」

ばこーーーーーん！

「ばぶうーーーーー！」

乳幼児のような声を発しながら、俺は宙を舞い、

ドゴン！

そして、教室天井に二つ目の穴を開けた。

「あたしは、着やせするんだ」

それは嘘だろう。この貧乳娘が。

「えいつ」

ズボツ、ドサツ。

志夏が抜いてくれた。

「度々ありがとうな、志夏」

「達矢くん、バカでしょ？」

「よくわかったな。俺がバカだと」

「誰の目にも明らかなんだけど」

「はっはっは、それにしても残念だな、まつり。南半球までは飛んで行けなかったぞ」

「ああ？」

本気で、怒っていた。

「……ごめんなさい」

目を逸らして、謝った。

次の時間は、自習だった。

いやあ、それにしても、恐ろしかった……。

あの目は本気だった。本気で殺す気だっただろう。しかし本気で怒ったということは、嫌がっているということでもある。あるはずだ。とすれば、セクハラは有効。これは間違いないだろう。そして、今の俺は打たれ強い。ゆえに、持久戦で挑めば、まつりは必ず音を上げるはずだ。

俺の見たところ聞いたところによれば、まつりの精神力はさほど強くない。いずれ負けを認めさせる時が来るだろう。

ふふふ、楽しみだぜ。

さて、先述の通り、今は自習時間。

教室内で、まつりを探してみると、級長の伊勢崎志夏と何かを立ち話していた。

風車がどうか、避難がどうか言ってるが、今の俺にはそんなことよりもやらねばならないことがある。

コソコソとまつりの死角から接近する。

「それが、上井草さんの意見？」

志夏が言った。

「意見っていうか、命令よ」

まつりが答える。

「ん？ あ、上井草さん、うしろ」

ふっ、志夏が俺に気付いたか。

だがもう遅いっ。俺の手は既にまつりのスカートの裾を掴んでいる。

「なっ——」

まつりのそんな声が聴こえたが、

「せやあ！」

ばっさー！

スカートめくりした。

またしても凍りつく教室。

一瞬、スカートの奥にある下着が見えた。紫色だった。スカートが元の場所に帰ろうとする世界の中で、俺は言っただけだ。

「いやはや、まつりさん……紫はないなあ」

「……………このっ」

俺は殴られるのに備えて身構えたが、

あれ？ おかしい。

殴られなかった。おかしい。絶対殴られるはずなのに。

まつりは拳を握り締めながら、

「……………っ。二度と……二度とするなよ……………」

言っただけ、拳を収めた。そして何事も無かったかのように志夏と話し出した。

「それで、志夏。さっきの話だけど」

「ええ、それで……………」

何だか様子が変わった。だが、とりあえず、とりあえずだ。やるなと言われてやりたくなくなってしまうのは人として仕方の無い衝動で、まして俺はそういう衝動が強い子なのだ。俺の中のプチ不良が、「もう一回、もう一回」とコールし続けている。なお、俺の中に「やめろんだ」と言う優等生的人格は居ない！

「それえ！」

俺は、再びまつりのスカートをめくった。

再犯。

次の瞬間――。

視界が白くなって真っ暗になって、星が舞った。

何が起こったのか。たぶん、殴られたか蹴られたかしたんだと思う。

ざわつく教室の音が耳に入る。

「するなって言っただろ！」

回復した視界で、目の前の女は泣いていた。

あのまつりが。涙。

俺の後頭部は、掃除用具入れのロッカーにめり込んでいて、身動きが取れなかった。

「何なの！ お前、何で、こういうこと……」

泣いてる。涙声。おかしい。変だ。こんなはずでは。

「あ、あの、まつり……？」

「しねっ！」

その言葉を耳にしたとき、胸が痛んだ。

まつりは俺に背を向けて、前の扉から教室を出て行った。

廊下を走る足音が、どんどん小さくなっていった。

「まさか、泣くとは……」

その時、視界にみどりが現れた。

「……………」

現れたつきり、黙っている。黙って俺を責めるような目を向けている。

「……………ごめん、みどり」

謝った。掃除用具入れのロッカーにめりこみながら。

するとみどりは、俺の胸倉を掴んでグイッとロッカーから外すと、俺を思いつきりバチンと引っ叩いた。

痛い。

今までのどんな攻撃よりも。

「あ、あの……」

俺は慌てて取り繕おうとするが、みどりは無言を返す。俺はみどりから視線を外して床を見つめながら、

「ごめん……………」

「こんなことなら……………」

「え」

「こんなことなら、モイストされてた方が全然よかった！」

「そんな……………」

そんなことないだろうと言いかけて、そんなことあったことに気

付く。俺が一人で勝手に空回りして変なことになって、結局まつりを泣かせてしまった。

「女の子泣かして楽しいの？」

楽しいはずがない。でも、

「で、でも、まつりは、女っていうか――」

「女の子だよ！ 言っただでしょ！ 弱すぎだって、まつりちゃんは弱すぎだって！ ちゃんと言っただでしょ！」

「そういえば」

言われた気もする。

「そういえばじゃないでしょ！」

「ごめん……」

みどりに胸倉を掴まれたまま、謝罪の言葉しか、思い浮かばなかった。

「あたしに謝ってどうすんのっ！」

「俺……ひどいことした」

「今頃気付いたのっ！ このバカッ！」

そうだ。まつりは、まつりだって、女の子だった。背は高くて胸は小さいけど、女だ。

「俺、謝らなくちゃ、謝りに、行かなくちゃ」

「早く行きなさいよ！」

「お、おう……」

しかし、俺はそのままでは駆け出すことができない。俺はみどりに向かって言う。

「あの、手、放してくれないと……」

「あっ、ごめん」

胸倉を掴んでいたみどりの手が、ぱつと外れた。

「いや、ごめんっ！」

俺は言って、教室を駆け出た。クラスメイトやみどり、そして凹んだロッカーを残して。

「まつりちゃんは、たぶん家にいるからっ」

背後から、笠原みどりの声がした。

「おうっ！」

応える。

廊下に出る。

走る。全力。

転びそうになりながら。

見えないまつりの背中を追った。

階段を数段飛ばしで駆け下りて、上履きのまま中庭へ。門を抜け出て、急な下り坂を一人駆け下りる。転げ落ちるみたいなスピードで。

まつりの背中が見えたのは、坂の途中の、まつりの家、上井草電器店の前だった。

「まつりイイ！」

俺は叫んだ。遠くで、目が合った。まつりは慌てて中に入って、引き戸を閉めた。

「まつり！」

辿り着いた。でも、まつりの姿はもう見えない。

扉を開けようとしてみる。しかし、施錠されていた。何度ガタガタと引っ張ってみても、全く開く気配も見せない。叩き割ってやろうかとも考えたが、そこまでするのは気が引けた。

俺は、少し後ずさって、車道の色あせた白線のあたりに立った。

そこから、二階の窓が見える。まつりの部屋かどうかはわからない。

違うかもしれない。でも、それならまつりが家のどこに居ようが聴こえるような声を出せばいいだけの話だ。

俺は大きく息を吸い、叫ぶ。

「まつりいー！ きこえるかあー！」

「うるせー、しね！」

二階の窓の向こうからだった。どうやら、そこがまつりの部屋のようで、そこまで叫び続ける必要がないことを悟って少しだけ安心。

「ごめんな、まつり」

「許さない。あと名前呼ぶな、しね」

超おこってる。でも、何だか子供みたいだ。

「窓、開けてくれよー」

「……………」

するとガラリと窓が開いた。でも、顔を見せてくれない。

まあ、良いか。

「俺な、本当に反省してるから」

「うるさい」

その割には窓開けっ放しだ。うるさく思ってるとは思えない。

「今日のことに關しては本当に悪いと思ってる。お前も女の子だつてこと、ちょっと忘れてた」

「だまれっ！」

「ごめん」

「うるさいっ」

子供みたいだな、本当に。そんなことを思い、俺は声を出さないようにして少しだけ笑った。

「おい、今あたしのこと笑っただろ」
鋭いつ。

「ああ、正直に言っと、笑った。おかしくてな」

「何で」

「何か、子供みたいでな」

「……お前だつて子供みたいじゃねえか」

「まあ、そうだな」

スカートめくりとか、我ながら子供っぽい。

一陣の風が過ぎ去るくらいの、少しの沈黙の後、

「……達矢あ」

まつりの声が響いた。

「何だ」

「どうしてお前は、あたしに付きまとうんだ？」

何でだろうな。まつりと接していて感じることはといえば、大半は恐怖だ。それに、優・劣。主・従。上・下。強・弱。暴・力。考えれば考えるほどに嫌いな概念ばかりが散見している。

それでもまつりと一緒に居たいって思えるのは、それはやっぱり、本当にまつりのことが好きだからなんじゃないかって思うんだよ。

人の思考や理念なんてのは、たいがいアテにならないものだから何とも言えないが。

って、あれ？

何か俺、とんでもないことを考えてないか？

まつりが好きだとか何だとか。

いやいや、そんなわけがないだろ。

まつりは暴力的で独善的で。バ力で。だけど、憎めなくて、いとおしくて。

結構可愛いところもあつて、要するに……さ。

要するに、それは、それは、さ。

「好きだからだ！」

俺は言つた。大声で。

「しねっ！」

「うえええ、そりやねえだろ」

「またからかう気なんだろ！ 昨日もそんなようなこと言つてたじゃないか！ ふざけた調子で！」

「ああ、あれはかなり真面目に言つてるんだ」

「なっ——」

「それから、俺はホラ、好きな女の子に悪戯するタイプのガキっぽい男なんだよ」

「ありえない」

「何が」

「あたしを好きだつてのがありえないって言つてんの！」

「ありえちまつたんだから仕方ねえだろ！」

「だって、こんな……」

「そりゃ最初は気に入らなかつたよ。お前は暴力的で、時々理不尽で、いじめっ子だ。他人の背中をシャープペンの先端でつつくような奴は初めて見た。どうしようもない奴だよ。お前は。だけど――」

「……」
「だけど好きなんだ！ 本当に！ お前と一緒にバカなことするの
が、たまらなく楽しい時間なんだよ！ それを失うことが、考えら
れないくらいに！ 意味わかるか？ お前が好きだって言ってるん
だぞ。お前にぶっ飛ばされるのだって、もはや快樂なんだ。それに

――」

その時だった。二階の窓から何かが出てきた。

それで、上から何かが降ってきた。

大きな、何か。

それは、まつり。まつりが、涙と一緒に降ってきていた。

「まつりっ！」

俺は彼女を抱きしめようと、両の手を広げた。が、

「しねええええい！」

「何iiiiiiii！」

どooooooooん！

まつりは俺の顔面に飛び蹴りをかました。

俺の体は吹き飛び、坂を転がり、道の真ん中に大の字を描く。

痛い。

でも、まつりが出てきた。出てきてくれた。よかった。

「殴られるのが快樂だつて？ この変態がつ！」

短い髪を整えつつ、涙声で、坂の上から悪態をついた。

可愛いじゃねえか。

俺は「おう」とか言って応える。仰向けに寝転がったまま。

「涙が、止まらないんだけど。どうしてくれるの」

「何に対する涙だかわからないことには、俺には止めようがないな」

「あたしにも、わかんない」

「じゃあ、俺のこと好きなんじゃねーの？」

「ほんと、しねって思うよ」

「口が悪いな、お前は」

「許さない。スカートめくられた。仕返しする」

鼻をずずつとすすりながら、俺の胸倉を掴み、無理矢理座らせた。

二人、アスファルトに座って向き合った。

そして、まつりは抱きついてきた。俺のワイシャツの胸の辺りで涙を拭う。

「あたし、お前のこと嫌いだった」

「そうか、シヨックだな」

「でも、嫌いじゃなくなった」

「それはあれだ。最初から俺のこと好きだったんだろ」

「そんなわけねえだろ、しねよ……」

俺はずつと、まつりのことが好きだったかもしれない。

出会った時から、こんな上井草まつりのことが。

「よし、学校戻ろうぜ。みどりが心配してるぜ」

「うん」

「もうみどりにモイストするなよ」

「うん」

「他の奴らも傷つけるなよ」

「うん」

「俺だけを殴れ。な？」

「蹴ってもいい？」

「当り前だ」

「……なんか……お前、おかしい」

言いながら俺の胸から離れると、吹っ切れたように笑った。泣きながら。でも、今まで見たことの無い笑顔で。

上井草まつりの章「7・1

寮の部屋で目覚めた俺は、仰向けに寝転がった姿勢のまま天井を見つめつつ、昨日のことを思い出し、憂鬱な気分に浸っていた。

夢だったら良いと思ったのだが、夢じゃないんだな、これが。

どうやら、俺はまつりと結婚するらしい。

「いや……ねえだろ……」

そりゃ好きだとは言ったよ。でも、いきなり結婚とか言い出すなんて思わなかった。正直ありえん。いやはや、予想のはるか斜め上を飛び越えていく女である。

「憂鬱だぜ」

思わず額に手の甲を当てつつ呟くほどに。

その時だった。

「憂鬱って、どうして？」

ぎょっとした。

「何だとう！」

がばつと起き上がると、畳の上に座るいつもの制服姿な上井草まつりがっ！

貴様っ、何故ここにっ！

「おはよう」

「おう、おはよう——っておはようじゃねえよ！」

「？」

「『？』でもねえよ！」

「どうしたんだ、達矢」

「どうもこうもあるか！　ここは男子寮だぞ！」

「だから？」

「女人禁制だ」

「じゃあそれナシ。今日からナシ」

「はあああ？」

「風紀委員の名のもとに女人、解・禁！」

「まさか、お前……」

「うん。ここに住——」

「ダメだ」

「あたしのこと好きだって言ったくせに！」

「何だこの面倒くさい女は！」

「何だつてえ！」

「どごーん！」

叫びながら宙を舞う。

「しまったああ。つい思ったことが口に出てしまったああ！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「いいかい、まつり。俺たちはまだ学生だ。結婚なんて気が早いとは思わんかね」

「浮気する気満々かこの野郎おお！」

「ばごーん！」

「誤解だぜーん！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「いいか、まつり。もっと自分を大切にするんだ！」

「青春ドラマかああ！」

「ずごーん！」

「いたーい！」

ドサツ。気を失ったフリをする。

「おい、起きろ。まだ話は終わってない」

げしっ。蹴られた。

人間として異常すぎるだろ。何だよこいつ。

「何なんですか……」

思わず敬語を漏らしつつ起き上がる。

「一緒に住むって言っても、どうせ少しの間だけなんだから」

「はい……？ どゆこと？」

「後で話すわよ。とりあえず、朝ごはんよ」

「はい……」

俺はまっすぐに手を引かれて、部屋を後にした。

上井草まつりの章「7・2」

寮を出てすぐに商店街に差し掛かった。

通学路をまつりと二人で歩く。何故か腕組を強要してきた。

だがこれは「殺すよ？」と脅迫されての愛の無い腕組である。泣きたい気分ではいっぱいだ。

それにしても……さっきの朝食はひどかった。

美味しくなかった。

人の多い食堂だったのに、俺とまつりが食堂に入った途端に急にガラガラになって、お通夜みたいに静まり返った。そんな中で食事をするのが、まず一つ目の美味しくないポイント。そして、食事中にぶん殴られたのが二つ目の美味しくないポイント。最後に、メインディッシュの焼き鮭を奪われたのが三つ目の美味しくないポイント。俺が毎朝楽しみにしているステキ朝ごはんタイムが台無しだった。

しかも朝食後には、生着替えをまじまじと見つめられ、拳句、その時言った言葉が「キズだらけの汚い体ね」だった時には、もうモイストしてやろうかと思ったよ。

誰のせいでキズだらけになってるかを考えて喋れと言いたい。

いや、大半俺のせいなんだけど。俺が変なことしたり言ったりしなけりゃまつりにぶっ飛ばされることもないわけだからな。

で、通学路。

みどりの家の前を通る。

心なしか、まつりが俺の腕を抱きしめる力が強まった気がした。

それはもう、肘が曲がってはいけない方向に曲がるくらいに。

「いたたたた！」

「おー、ソーリーサー」

言って、一瞬離れて敬礼し、また腕に抱きついてきた。

そういえば、朝にまつりが言っていたアレは、どういう意味なん

だろうな。

『一緒に住むって言っても、どうせ少しの間だけなんだから』
すぐに出て行くって意味だろうか。訊いてみるか。

「なあ、まつり」

「何だよバカ野郎」

いきなり暴言かよ。何この情緒不安定娘。まあでも、もはや気に
するべきことでもないか。慣れたし。

「なあ、まつり。質問していいか？」

「セクハラしたら殺すぞ」

そんなことを言われたらセクハラしたくなるだろうが！

「ねえねえまつりちゃん。昨日のことだけど、何でパンツ紫色だったの？」

「しねええええ！」

「ばこーーん！」

「ヴァイオレット！」

紫色を意識した言葉を叫びながら、俺は空を飛んだ。

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「違うんだ。今のナシだ」

「そう。じゃあ何？」

さらっとしてる。これはある意味長所だな。うん。

で、本題だ。

「今朝言っただけ——」

「浮気をするかしないかって話ね」

「ちがうよ」

「違うのかあ！」

「どかーーん！」

「ないわあー！」

俺は吹き飛びながら叫んだ。

ドサツ。で、立ち上がる。

「さすがに今のは何で殴られたんだか——」

「口答えするなあ！」

ずごーん！

ドサッ。立ち上がる。

「頼むから会話をしてくれ」

「拳で語つとるんじゃないやああ！」

どごーん！

「この鬼嫁がああ……」

「誰が鬼だああ！」

ばこーん！

ドサッ。

いかん……これは体が……もたない……。

ゆっくりと立ち上がる。そして言う。

「別れよう」

「誰が別れるかあ！」

まつりは言うど、ジャンプして、落ち際に俺に蹴りを見舞った。

「カカトオ？」

ゴスン！

顔面にカカト。

ここに来て新技っ！ 痛いっ！

「別れないと言え！」

「ワカレマセン」

言わされた。

「ようし、それでは、本題に入ろうか」

「もう何を訊きたかったんだか忘れたよ」

「倦怠期かこの野郎おお！」

どかーん！

「もうゆるしてー」

ドサッ。

朝から大変だった。

んで教室。

「やあどうもどうも」

ガタガタガタと音を立てて、机をくつつけてきた。

「あたしの席、今日からココだから」

「……あのな……勝手に席替えしてるなよ」

まつりが隣の空席に座ろうとしていた。

「あたしのこと好きだって言ったくせに！」

「さすがに、嫌いになるかもしれん」

まあ、ならないけど。

「嫌いになるなあ！」

どかーん！

「うえーい、いたーい」

ドサッ。

難儀すぎるだろこいつ。

「嫌いにならないから、とりあえず殴るのをよせ」

「そうか。じゃあ好きだと言え」

「好きだ」

「恥ずかしいだろうがあ！」

どかーん！

ドサッ。

「もうっ、教室で皆見てるってのに」

やべえ、さすがに殴りてえ……。

そんなタイミングでチャイムが鳴った。

「あ、授業ね。教科書みせてあげる」

「いや、教科書持つてるから」

しかし、目の前の女は、いたいけな俺をにらみつけて低い声で、
「殺すぞ」

「はい、見せてください……」

「よろしい。もう忘れ物しないように」
言って、微笑んだ。

誰か……誰か助けてっ！ この女、こわいよっ！

さて、授業は自習だった。

自習が多いのがこの学校の特徴。何せ教師の数が少ないからな。で、それを良いことに、隣の席の女は眠っている。二人で一緒の教科書を見るというシチュエーションに憧れていたらしいのだが、その実現はとりあえず見送られ、今はリズムカルに寝息を立てている。安心して切った顔がむかつく。

俺ばかりがまつりのせいで不安と恐怖に苛まれているというのに。不公平だ。なので、ここはひとつ。悪戯の一つでもしてストレス解消といこうではないか。

ふへへ。悪そうな笑いも出てしまうというもの。

しかし、セクハラしてマジ泣きされるのはボコボコにされるよりも苦しいからな。可愛いレベルの悪戯に留めておくべきだろう。

というわけで、俺が長年に渡って考えてきたとっておきの悪戯があるんだが、それを敢行することにしよう。

とっておきの悪戯……それはっ――

セーラー服のエリを立てるッ！

「……………」

俺は無言で作業を遂行した。

――完了！

所要時間0・2秒の早業。しかもまつりに気付かれていない。

ふははは。休み時間が楽しみだぜ。知らぬ間に自分の制服のエリが立てられていることを知ったとき、どう顔を歪ませるかなっ！

ククク。ダークな笑いが止まらないぜ。

で、悪戯完了はいいとして……ちょっと誰かに相談したい気分なんだが、どうしようか。

頼りになる相談相手といえば、そうだな……みどりか、志夏か……。

いずれにせよ、教室中央部に行く必要性があるな。

俺は、くーくーむにやむにやと寝息を立てるまつりの背後を音を立てないように移動し、教室中央部のみどりの席の横にあった空席に着いた。教室内で談笑している生徒の席だろう。借りて座ることにした。

みどりは、漢字練習をしているようだ。超真面目である。

ちなみに、みどりの向こう側には、机に突っ伏して眠る志夏の姿があった。ううむ珍しいな。志夏が寝てるなんて。まあ、それよりも今はみどりに相談だ。

「へいへい、みどり、みどり」

「え？」

振り向いてくれた。

「今、暇か？」

「勉強中ですけど、何か大事な話ですか？」

「ああ。まつりと俺とのことだ」

すると、みどりはペンを机にコトリと置いて、両足をそろえてこちらに向き直った。

「まつりちゃん、楽しそうですね」

「それなんだよ。あいつばっかり楽しそうで、俺は全然楽しくないんだ」

「それは、困りましたね」

「うつわ、完全に他人事だよ、今の言い方っ」

「それは、だって、他人ですし」

「なんか、今日のみどりは冷たいな」

「でも……」

「あいつ、暴力的過ぎるんだよ。みどりは幼馴染だろ。あいつをおとなしくさせる魔法の合言葉とか無いの？」

しかし笠原みどりはピシヤリと言いつつ切った。

「何言っても無駄です」

「あと、今朝さ、いきなり起きたらあいつ、眠ってた俺の横に居ただぜ。なんつーか、おそろしいよ!」

「のろけかよっ」ぽすん。

ツッコミいれてきた。

「のろけじゃねえよっ!」

いらついた俺は力いっぱい、言った。バシンと手の平で机を叩きながら。

「……ご、ごめんなさい」

「あ、いや、ごめん。ツッコミが、なんか的外れだったからな、いや、的外れなツッコミはそれはそれでとても愉快なものなんだが、今の俺は……」

「はい、わかってます。今の戸部くんは、まつりちゃんをパートナーにしている、まつりちゃんがツッコミ担当なんですね」

「わかってないじゃないか」

「え……」

「はつきり言わせてもらうが、まつりはツッコミではない!」

「え? あたしは、あれが理想形だと思うんですけど」

「あんなもんは、ツッコミではない!」

「まつりちゃんのは……ツッコミじゃない……?」

「ああ。あいつのあれをツッコミと認めてしまったら、世界が笑えないことになる可能性がある。ありゃただの暴力だ」

「そうなんだ」

「正直……俺が何で生きてるのか不思議で仕方ないよ……」

「確かに」

「殴られた回数を覚え切れないほど殴られるって一体どういう状況なんだ? 俺は一体どんな罪を背負っていると言っんだ! 本当に世界は平等なのか? 否。それは否。この世界には平等なんてものは存在しないのだ。平等は停滞であり、世界は停滞を望んでいないわけ——」

「ちよつ……帰って来てください、戸部くん」

「——はっ。危ないところだった。少しまつりに蹴られた時の頭の打ち所が悪かったようだ。暴走しかけていた」

「きよ、今日の戸部くんはよく喋りますね」

「ああ、だって、まつりとはな、会話が成立しないんだ」

「ああ、はい」

みどりはうんうんと大きく頷いてみせた。

「話をしようとする、まず一発か二発は拳が飛んでくるんだ」

「それは、ひどいですね……」

「まつりのことは好きだ」

「そうですね。好きじゃないのに、まつりちゃんと一緒に居られるのはDMの変態さんくらいです」

「ああ。まつりがDSの大変態だからな」

「わかりますっ」

頷いていた。

「そこで、だ。みどりに普段の話し相手になって欲しいんだ。このままでは俺は肉体的にも精神的にもキツすぎる。せめて精神的苦痛を和らげるために協力して欲しい。頼むっ！」

「はあ……話し相手……」

「そう、優しく、優しいツッコミをくれるのが嬉しい。あれは癒しだ。癒し。突き抜けるほどのもやしだ」

「——もやしって」ぽすん。

手の甲で優しく叩かれた。

「そう。それだ！ やはりみどりをパートナーにしたいっ！」

「でも、まつりちゃんと結婚してるんじゃない……」

「あれはまつりが勝手に言ってるだけだ。強引にコトを進めようとしているんだ。婚姻届を出したわけでもない……というか俺たちまだ結婚できる年齢でもない学生だぞ。っていうか、それ以前に結婚と漫才のパートナー関係ないだろっ」

ぽすん。

俺は思わず、みどりと同じような優しい系ツッコミをしてしまった。

つまり……みどりの胸を手の甲で叩いてしまった。起伏の乏しいその胸を。

「ひゃあ。む、胸に触らないでくださいっ」

ほの寂しい胸をガードしていた。

やっちまったと思い、少々寒気が走り抜けて行ったが、まつりは眠っているので気付かなかったようだ。もしも現場を見られていたら、俺はまた天井に突き刺さっていたに違いないからな。

「あ、すまん。つい勢いでな……」

「でも、まつりちゃんに怒られないかな……」

「大丈夫。バレなきゃ平気だよ」

「はあ。なら別に良いですけど……」

と、その時、みどりの奥で志夏がむくりと起き上がった。

「あ、志夏。起きたか。聞いてくれよ。まつりの奴がさ——」

俺は、志夏にも愚痴を言おうとしたのだが、その時、どこからか声がした。

「まつりがドSの大変態だからな」

何だ、これは。

「やはりみどりをパートナーにしたいっ！」

俺の聲がするぞ。

「ひゃあ。む、胸に触らないでくださいっ」

今度はみどりの声がする。

発信源は、志夏が手に持つてるペン型のボイスレコーダーだった。

「ちょ、ちよつと待て、志夏。それは何だ？」

志夏は笑顔で答える。

「録音機。ヤバそうなところを、録音してみた」

「いやいやいや……何してんの」

ヤバイなんてもんじゃないでしょそれ。

「後で上井草さんに聞かせていい？」

「ダメに決まってるんだろ！」

「えー」

えー、じゃねえよ。死ぬだろ、間違いなく。撲殺エンドとか誰も望んでないよ。望まれてないはずだよ。世の中つてのは常にハッピーエンドを求めているはず！

「とりあえず、消去してくれ」俺は言った。

「そ、そうだよ。消してよっ」みどりも言った。

「どうしよっかなー」

志夏のキャラが安定しない！ とことんキャラが安定しない子っ！ 恐ろしい子っ！

「あの、みどりさんにも迷惑がかかるんで、マジでカンベンしてください」

「それはないと思うわ。矛先は全部達矢くんに向かうでしょうね」

「俺を殺す気か」

「あはは、死なないわよ、大丈夫」

けらけら笑いながら言いやがった。

「級長ともあるう人が、そんな盗聴まがいのことして良いのか」

「大勢が居る教室の中心で堂々と喋ってることを録音してただけよ。盗聴なんて人聞きの悪い。プライベートな場所以外で発する言葉には、責任を持つべき。オーケー？」

「あの、オーケーなので、消してくれ、頼む」

「こっこの、どうかな……」

言いながら志夏は俺の消去要請を無視してボイスレコーダーをいじった。

『まつりと俺との——』『婚姻届』

俺の声が二つ響いた。

『——もやしって』

今度はみどりの声。

志夏はフフフと笑いを漏らしつつ、

「『燃やして』って聴こえなくもない。どう、これ。なんかお昼の

ドラマっぽくない？」

やめてくれ頼むからっ！

『でも、まつりちゃんに怒られないかな……』 みどりの声。

『大丈夫。バレなきゃ平気だよ』 俺の声。

『お昼のドラマそのものじゃない？』 嬉しそうに言う志夏。

『なんか、今日のみどりは冷たいな』 俺の声。

『ひゃあ』 みどりの声。

『色々できるわね』

『もう許してくれ……』

俺は心からお願いした。

みどりも「消してよう、消してよう」と眠り続けるまつりの様子をチラチラと窺いながら慌てている。

「まあ、ほんの冗談よ」

言って、志夏はボイスレコーダーを鞆の中にしまった。

「志夏……心臓に悪いことすんな！」

「心臓に悪い系の会話をしたから、つい」

「つい、じゃねえよ！」

「はいはい、ごめんね。ところで、上井草さんと達矢くんは、本当に結婚するの？」

「今のところ、俺にその気がないです」

「まあ、そうよね。若いからね」

「でも好きなんだよね。戸部くん」

「はい、大好きです」

「のろけかよっ」 ぽすん。

みどりのツツコミが発動した。

「ああ……優しいツツコミ最高っ！」

「……えっと……大丈夫？」

ダメかもしれないっ！

昼休みになった。

それでようやく起きたまつり。セーラー服のエリが立っていた。

「おい、昼ご飯食べるぞ」

「構わないが、その前にトイレでも行って鏡見て来い。よだれ垂れててだらしな過ぎ」

本当はよだれなんて垂れてないけどな。

「ん、ああ。鏡な。鏡ならある」

言って、スカートのポケットから小さな鏡を取り出すまつり。

げえ、しまった。予定が狂ったぞ。

まつりがトイレに行って鏡を見た時にようやく気付いて、俺はまつりがトイレ行ってる隙に逃げ出す予定だったのだが。

「……何であたし、エリ立ってるの？」

「お、俺じゃないぞ」

「他に誰がやんのよ」

「俺です、ごめんなさい」

「まあ、良いか。別にこんくらい」

エリを正しながら言った。

おお、寝ている間に心が広くなったのだろうか。ここで豆知識を披露する風に語ってみよう。

「セーラー服のエリにはな、意味があるんだ」

「どんな」

「それを立てることによって、なんかステキな感じるだろ……」
終わりである。

「……言いたいことはそれだけか？」

「そうだ。細かいことは知らない。セーラー服のエリを立てているお前が可愛い。俺にはそれで十分なんだ」

「とりあえず死ねえええ！」

どごーん！

「なんでー」

ドサツ。しかしすぐに立ち上がる。

「何でお前は、エリを立てることで船乗りが甲板上で聞き取りにくい音を集めるためだって説を言わないの！　その他にも諸説あるでしょー！」

まつりは言った。だが俺は言うのだ。

「そんなことのために、俺はエリを立てない！」

「アホかああ！」

ばごーーん！

「いたいー」

ドサツ。立ち上がる。

「俺は、どちらかと言えば、エリを立てたまつりの方が好きだ」

「そ、そう……ありがと……とか言うつと思ったかあああ！」

ずごーーん！

「あいやー」

ドサツ。立ち上がる。

「お前、俺を殴りたいだけだろ……」

「うん」

「うんって……」

「だって愛だし」

「屈折しすぎっ！」

「光だって屈折するだろうがあああ！」

どかーーん！

「意味わからーん」

ドサツ。立ち上がる。

「ツンデレって苦労しない？」

「いつデレたあああ！」

どごーーん！

「ツンギレでしたああ！」

ドサツ。立ち上がる。

「ほら、まつり。バカなことやっていないで昼飯を食いに行くぞっ」
言いながら俺はまつりの背後に回り、いそいそとまつりのセーラ
ー服のエリを立てた。

「バカはお前だああ！」

「ばーーーーん！」

「もう許してー」

「さて、じゃあ皆でご飯を食べよう」

「はい」

そして、まつりはヨロヨロと立ち上がりながら返事した俺に言っ
た。

「お前、ちょっと行って買って来いよ！」

「パシリっ？」

「なんか美味しいやつ買って来い」

「抽象的っ！」

「早く行けよ」

「横暴っ！」

「ゴチャゴチャ言っていないでさっさと行けええ！」

どかーーーーん！

俺は宙を舞い、その勢いで廊下に出た。

ピシャン！

そしてまつりの手で引き戸が閉じられる。

「いつてらっしやい」

扉の向こうから、暴力女の声がした。

さて、はっきり言って、この学校の昼飯は争奪戦である。少し遅れると、人気のあるメニューには次々と『SOLD OUT』の文字が躍り、売り切れたメニューの有無をおばちゃんに訊ねれば「おといきやがれっ！」と罵られる。そう、それはまさに戦場。しかし、すでに戦場は閑散としていた。戦は終わっていたのだ。

そもそも、校則という縛りが極薄なこの学校において、昼休みに昼飯を購入するというのがそもその愚なのだ。午前の授業中に昼食を済ませる不良が大半で、昼休みに昼食を買いに行く真面目な生徒は飢えるという、どうかと思う仕組みになってるのだ。

当然、食堂の食券売り場は全メニュー売り切れ。そして、併設されたパン屋に残っていたのは、ただパンの味がする以外に何の味もない食パンくらいのものだ。

「仕方ないよな。無かったんだから」

俺は不味いと評判の食パンを一斤買って教室へ戻った。

教室に戻ると、窓際の席に、皆が居た。

まつり。みどり。志夏。風間史紘……の四人。

「ただいま」

「おふおいつ！」

遅い、と言いたいのだろう。口に食べ物を入れてもぐもぐしたまま、まつりは言った。俺に買いに行かせておいて、自分は何か食ってやがる。

「お前が遅いせいで、ついついみどりとフミーンの弁当食っちゃっただろ。謝れよ！」

「ごめんなさい」

逆らっても意味がないので素直に謝る。

「あたしに謝ってどうすんのよ！ みどりとフミーンに謝れ！」
この女。

「ごめんなさい、二人とも」

「はぁ……」「まぁ……」

二人は呟いた。

「で、何を買って来たんだ」

「これ、味のない食パン」

「うわ、まずいやつじゃん」

「これしか残ってなかったんだ。俺だって走ったさ。まつりのために。でも、着いた時にはもう戦いは終わってた……。あとのまつりだったんだ！」

「ダジャレかこの野郎おおお！」

どかー！ーん！

「ダジャレだいきー！ーん！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

何か色んなところから血が噴き出したりしてるが、まぁこんなものは二秒で止まる。今の俺は神の加護を受けているかのように不死身だから。

「だが、まつり。さすがに痛い」

「うるさい。罰として昼飯抜きだ！ 何か食ったらぶっ殺すからな！」

物騒すぎっ！ 何この子っ！

上井草まつりの章「7・7」

で、数分後。

俺は空腹に耐えながら窓の外の風車を見ていた。

ぐるぐるってまわってる。目が回って倒れそう。そして、ぐるぐるってお腹が悲しそうに鳴いている。空腹で倒れそう。

向かいに座るまつりに背を向けながら、ふてくされたようにして変わらずそこにある風車観察を続けている俺。背後では、隣同士に座る志夏とまつりが、何やら深刻そうな話を軽いトーンで喋っていた。

「避難勧告の話だけど……」

志夏が言って、まつりがこう返す。

「ああ、それね。そろそろ避難しないとまずいかな」

返された言葉に志夏が答える。

「そうねえ、でも一気に移動は難しいと思うわ」

「あたしたち生徒の受け入れ先の学校は見つかったの？」

「候補地はいくつかあるんだけど……」

「見せて。ファイルとかあるんでしょ？」

「うん。極秘書類だから気をつけて扱ってね」

「へいへい」

そして、パラパラと紙をめくる音がした。

「ふむふむ。フミーン。どこが良い？」

「え？ 僕ですか。僕は、できればこの街に残りたいですけど」

「それは、難しいと思うわ」と志夏。

「みどり、どこが良いと思う？」とまつり。

「へ？ 何が？」

「ほら、不発弾で避難しなきゃいけないでしょ。それで、どこにするかって」

「不発弾なんて……本当にあるの……？」

「ないわ」志夏が口を挟んだ。

「じゃあ、どうして避難するの？」

「政府からそういう指示があるからよ」

「長いものに、巻かれるの？」

「ったく、みどりはどうしてそう、変なトコ頑固なの」

「だって」

「あ、上井草さん。ここなんかどうかしら。手のつけられない不良グループが暴れまわってる学校らしいわよ」

「良いわね。そこにしようか」

「でも、こっちは手のつけられない教師たちが色々悪いことしてるらしいわ」

「そこも良いわね」

「でも、やっぱり、普通の学校は受け入れてくれないわね、私たちの学校、評判がアレだから」

志夏は、笑顔のままでそう言った。少し自嘲気味にも見えた。

「まあ、いいよ。とにかく、その二つの学校にチェックつけとこう。ペンある？」

「ええ。はい、これ」

「……………」

カチツとボールペンをノックするような音がした。

「あ、上井草さん。それペンじゃなかったあ！ 級長すっかりつえつと、こいつ本当に志夏なのか。こんな変な子だったっけ？」

「え？ じゃあ、これ何？」

と、まつりが訊いた、その時だった。

『まつりがドSの大変態だからな』

声が、流れ出した。

『やはりみどりをパートナーにしたいっ！』俺の声。

『ひゃあ。む、胸に触らないでくださいっ』みどりの声。

なんとということでしょう……。

『まつりと俺との——』俺。

『婚姻届』俺。

『——もやしって』みどり。

ピンチ……冷や汗が止まらない！

『でも、まつりちゃんに怒られないかな……』みどり。

『大丈夫。バレなきゃ平気だよ』俺。

『なんか、今日のみどりは冷たいな』俺。

『ひゃあ』みどりの声。

さっきのペン型ボイスレコーダー。まさかとは思うけど、志夏、わざとか？

俺は恐怖で振り返ることができないまま、掠れた声を出すしかない。

「……ち、違う……。誤解だ」

「まだ何も言っていないんだけど」

平らかな声が逆におそろしい。

棒読みで志夏が言う。

「ごめん。達矢さんと笠原さんの秘密の会話がバレってしまったわ！」

「おいこらあ——」

俺はそう言いながら、振り返った。

「——ひいつ」

振り返ったところで、少しの悲鳴と共に言葉を失った。

「たーっーやあ……」

こわいつ！

目が、やばいつ！ 殺気がやばいつ！

何もかもやばいごめんなさい！

死ぬっ！ 狩られるっ！

「誤解なんだって、誤解！ なあ、みどり！」

みどりの方を見たところ、みどりに何やら耳打ちしている志夏の姿が見えた。そして、みどりは志夏の言葉に数回頷いて、言うのだ。

「あたしは嫌だって言ったんだけど……戸部くんが無理矢理……」

「おいしいいいい！」

「フフフ」

笑ってるう？ 志夏さん笑ってるうっ！

「おい、風間っ、何とか言ってくれ！ 誤解だってことを伝えてくれ」

「無理言わないで下さい。状況証拠が揃いすぎています。間違いないく、クロです」

「み、みどり……」

「緑じゃなくなつてクロだつて風間くんも言つてゐるだろつ」

ツツコミ動作と共にツツコミ調で言ってきた。

何を他人事みたい。

そして、

「しねえ ええええええええええええ！」

どー——ん！

そして俺は、宙を舞った。

「四面楚歌 あああつ あああ！」

叫びながら、ドゴン、と天井に三つ目の穴を開けた。

「この浮気モンがあ！ あたしのこと好きだって言うたくせにっ！ バカッ！ しねっ！」

ああ、俺、好きになる人を間違えたかもしれない。

放課後。

二人で帰ることになった。

「……………」

無言のまつり。昼休みのこともあり、機嫌が悪そうだ。

だが、いつも機嫌が悪いっぽい顔つきしてるので、なんかもうどっちでも良いよ。

ちなみに、記憶によれば、まつりは掃除当番だったはずだが、どうせまた風紀委員だからという魔法のような言い訳を唱えてサボったのだろう。

まったく、不良である。とんでもない不良である。救いようのない不良娘である。ごめんなさい、嘘です殴らないで下さい。

「何かよからぬことを考えてるだろおお！」

「ばこーんーん！」

「心が読まれたあー！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

なんか、ぶん殴られるのが当り前みたいになりつつあるんだけど、何この異常な状況。頭を抱えたい。

で、立ち上がった俺に、まつりは言う。

「ああ、そういえば、さっきの話だけど」

さっきの話というと、俺の浮気疑惑の話かつ！

「そんなものを蒸し返してまた殴る気かあ！」

「違うわああ！」

「どかーんーん！」

「結局なぐられたー！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「浮気の話じゃないなら、何の話だ」

俺は訊いた。

「前に達矢が教えてくれた避難勧告のこと」

「ああ……街の南側に不発弾が埋まってるっていう話か」
頷きながら、「そう」と言つまつり。

「それがどうした」

「さっき話きてなかったのかああ！」

「ばこーん！」

「いたーい」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「そう。あたしたちは避難勧告にに応じて、この街から出て行く」

「何事もなかったかのように話を続けるな。俺は痛かったぞ」

「どう思う？」

「何がだ」

「あたしの話をきけええええ！」

どごーん！

「もうやめてー」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「ほう、避難勧告に応じるのか。それは大きな決断だったんじゃないのか」

「そうだね、あたしとかみどりみたいに、この街で生まれ、育った人にとっては、大きな問題」

「ていうか、そういう大きな問題を、お前とか志夏とかが決定して良いのか？」

「だって、あたし、実質この街の長だし」

「番長だもんな」

「そういう意味じゃなあああい！」

どかーん！

「じゃあどつという意味だああ！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「実はね、おじいちゃんが村長なの。だけど最近ね、ウチのおじいちゃんの調子が悪くて、代行としてあたしが村長ってことになって

るの。と言つても、村長らしいことなんて何もできなくて、志夏に任せっ切りなただけだね」

「まつりが村長で、志夏は村長の意思を尊重したわけだな」

「ダジャレは死ねえええええ！」

「どかー！ーん！」

「ごめんなさい！」

「ドサツ。すぐに立ち上がる。」

「で、何の話だっけ」

「もうそろそろ、潮時かなって思ってたし、ちょうどいい機会だと思つてね」

「……何の話？」

「だから、街の皆でこの街を出ようって話」

「潮時っていうのは」

「あたしだって、それなりに無理してるってことよ」

何を言ってるんだか、ちょっとわからんのだが、それを気にせずまつりは言う。

「たとえば、ほら、以前達矢が無理矢理コーヒー飲まそうとしたことあつたでしょ？」

「そんなことあつたっけ？」

「憶えてるよ、バカ野郎！」

「すまん」

珍しく殴られなかった。

「コーヒーはね、今でも苦手なの。苦手ではあるんだけど、飲めなくはない。昔は飲めなかったんだけどね」

「つまり、何が言いたいんだ？」

「ものわかり悪いなあ。だから、あたしだって、成長してるんだつてば。体も、心だって。皆してあたしを甘やかすからな！。たまに嫌になるよ」

晴天を仰ぎながら、彼女は言った。

「強くて弱い自分ではないといけないうって思った。そうしないと、

皆がどっかに行っちゃうような気がして、それが怖いし。今までの生活の中で、習慣として身につけてしまった暴力的な行動が固定されてるみたいで、抜け出せなかった。でも、達矢のおかげで、抜け出した」

笑いながら、言った。

「抜け出せてねえよ！」

「あはははは！」

笑ってるっ。悪い子っ。でも可愛い。

「何かを変えたかった。あたしは、変わる気がする。この街を出て、別の学校に行つて。その時、やっと大きな悩みを解決したいんだ」

「今は解決できないのか？」

「たぶん、できない。まだ……ね」

「お前の悩みつて、案外根が深そうだな」

「うん。町を出るまでは、変わり切れない気がするから……（こによこによこによ）」

言いにくそうに、こによこによしてる。いつもと違うまつりも可愛い。

「まあ、何にしても、お前が決めたことになら、俺は何でも協力するぞ」

「マジ？」

「ああ」

「言つたね？」

「言つた」

「じゃあ、あたしの計画を話すから、よく聴いてね」

「計画？」

「そう。名付けて……」

そして、大きく息を吸つて、まつりは言った。

「おやすみなさい計画！」

「ガキっぽいネーミングだな」

「くたばれええええ！」

どごーん！

「ぐんなーいつ！」

俺は夜の挨拶風の叫び声を上げて宙を舞った。

ドサツ。すぐに起き上がる。

「やあ、素晴らしいね、まつりサン、どんな計画なんだい？　すばらしいネーミングだね」

「簡単に言つと、風車を解体する」

「え？」

俺は近くにある風車を見上げた。五十メートル以上の高さがある風車を。

「これを、解体？」

「そう。全部。全部解体。風車を止めると、この街は電気がなくなる。完全に真つ暗な街になるでしょ」

そうなのか。

「だが、それに、何の意味があるんだ？」

「言ったでしょ。おやすみなさい計画つて」

「お前、その計画名気に入ってんの？」

「悪いかあああ！」

どごーん！

「ごめんなさい」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「それで、何で『おやすみなさい計画』なんだ？」

「街が、眠るの」

「はあ」

「この街には、真夜中でも街灯とかがあつて、完全な『夜』が無いから、一日だけでもそういう日があったらいいなって思ったの。思わない？　思つてしょ？　思つよね」

「ああ、思つ」

そう答えざるをえない。否定したら絶対に殴られるから。

それにしても……街を眠らして「おやすみなさい計画」か。何だか可愛いな。だが、

「しかし、こんなでかい風車を解体するってのは、大変なもんだぞ。可能なのか？」

「まあ、目的は街の電気を全て消すことだから、必ずしも解体する必要は無いんだけどね。でも、たぶん、解体が必要になると思う」

「三枚羽根の一枚でも何キロあると思ってるんだ」

「まあ、30メートルくらい？」

「重さだよ！」

「長さじゃねえよ！」

「ああ、何トンだろ」

「トンっ？」

「いざとなったら、達矢が手で解体してくれるはず」

「無理無理無理！ できることとできないことがあるだろ」

「最初から無理って決め付けるな！」

「トン単位の物体を生身で安全に解体できる奴は人間じゃない！」

「まあ、冗談だけど」

「よかった」

ほっとした。こいつの冗談は、時々冗談に聞こえないからな。

「でもさ、何にしてもこの町の風車は、ずっと動き続けてきたんだ。そろそろ休みたいって、思ってるんじゃないかな」

「まつりがそう言っんなら、そうだろうな」

そして、きつと本来の目的は、「風車を止めて休ませてあげたい」という方が。

「とにかく、やるわよ。おやすみなさい計画」

「本気なんだな」

「本気よ。手伝ってくれる人もいるし」

「お前に手を貸す人間なんて、どこにいるんだ？」

「……………」

じつと見据えてきた。

「やっぱり俺？」

「しゃがみこんでみたが、視線は俺を追ってきて、
「当り前だろうが」

「好きになる子を間違えたあ！」

「何い？」

「いえ、何でも……」

「死ぬか手伝うか、どっちがいい？」

「脅迫！ それ脅迫！ それ犯罪！」

「あたしのこと好きだって言ったくせに！」

「ああもう！ わかったよ！ 手伝えばいいんだろ！」

するとまつりは片膝をつく俺に斜め上から見下ろすような視線を俺に向けつつ、腕組をしてほの寂しい胸を張って、

「ふん、わかればいいのよ」

おやすみなさい計画が、始動した。

朝、目覚めると、寝るときの服装まで制服姿のまつりはまだ布団の中で眠っていた。

横向きに、左腕を下にして、体を丸めて。

正確に言えば、布団から多少はみ出してしまっているが、それがまつりらしくて微笑ましくもある。ちなみに彼女が着ている制服はパジャマ用の制服なのだそう。同じ服を何着も持っているらしく、制服以外は絶対に着ないと言っていた。不思議な女である。

ああ、それと当然だが俺が寝てたのは畳の上である。と言っても全く眠れなかったが。

つまり本当に俺の部屋にまつりが住んでるという異常な状況。

俺はドキドキして全く眠れない夜を過ごした。一緒の布団になど寝られるわけがない。しかも、眠ってるまつりは可愛いから反則だ。出会ったときは見た目通りに美人系かと思ったが、知っていけば案外可愛い系で、思っていたよりもずっと暴力的で異常者だった。ただ、それでも「好きだ」という事実は、もしかすると俺が結構な変態であることの裏づけになってしまうのではないか。それを危惧しながらも、ずっと寝顔を眺めていた。

「はぁ……可愛いな、しかし……」

黙って眠ってりや本気で美しく、且つ可愛いんだがな。

昨晚、眠る前にまつりが笑顔で言った「おやすみなさい」が妙に印象的で、頭の中に残っている。本当に嬉しそうに言ったんだ。幸せそうに。

「おやすみなさい計画ねえ……」

風車を解体する計画か。正直、無理だろうと思う。大掛かりな機材も無く、かなりの危険が伴うから。それでもまつりが「やる」と言ったらやらねばならない。

上井草まつりが黒いと言えば白猫も黒くなるのだ。上井草まつり

が授業中止して野球すると言えば授業だって中止なのだ。まつり自体が権力で、まつりに逆らうことのできる人間など、この街には存在しないだろう。

だが。だがしかし。

みどり曰く、まつりは精神的に脆いんだそうだ。手首を切ったこともあるらしい。

氣候が、まだそれほど暑くなくて風も強いのでいつも長袖制服を着ているから、その傷跡を見たことはない。

「くー、くー」

まつりは、寝息を立てている。

手首。ちょっと、見てみようか。いや、でも隠してる可能性も。

とはいえ……なんか気になるよな。モヤモヤするっていうか。

俺はまつりのことが好きで、そんな事実があつたくらいで嫌いになるくらいならぶつ飛ばされまくった時点で嫌いになつてゐる。だから、どんなに壮絶な過去があつても、どんなに壮絶な傷があつても嫌いにはならない。絶対に。その辺は大いに自信があるが、問題はまつりの気持ちだ。

まつりが俺に過去の自分の傷を見せてもいいくらいに俺を好きでいてくれているのか。

これは、はつきり言って自信が無い。

しかし……まつりと一緒に居る以上は、いつかは絶対に向き合わなくてはならないことだろう。こっさり盗み見るっていうのは男らしくないかもしれんが、気になつてしまったんだ。この衝動を抑えるのは難しい。

どうするか。

しばらく考え込み、決めた。

「そうだよな。それしかないよな、やっぱ」

朝から傷跡なんて見ても楽しい気分にならないし。

ましてまつりに内緒で盗み見るなんて畏れ多いことできるわけがない！

迷う事はない。

——エリ立で一択だろ！

俺は、体を丸めて眠るまつりの背中についてるパジャマ用制服のエリを素早い動作で立ててみせた。

ぴきーん！

エリ立て完了！

やっべえ、写真撮りてえ……。

エリ立つてるときのまつりちゃん可愛い！ しかも寝顔っ！

何という、いとおしさ！

抱きしめたくなった！

「んっ……」

しかし抱きしめたい思いが衝動になる前に、まつりが起きた。エリを立てたまま起き上がり、座ったまま大きく伸びをした。

「ん…… っうう…… おはよう、達矢」

「おはよう。まつり。今日も可愛いね」

「しねっ」

ええええ？

「可愛いくないね」

「何だと？」

いやいやいや、そりゃ可愛いって言って「死ね」とか返ってきたら可愛くないだろう！

「まあ良いや。顔洗ってくる」

「ほっ」

俺は安堵の息を吐いた。朝から殴られるのは嫌だからな。

が、まつりが洗面所に消えた二秒後、

「なんであたしのエリが立ってんだああ！」

ぼこーん。

俺は宙を舞った。

「エリ立てサイコー！」

ドサッ。

爽やかな朝だった。

朝食の最中に、まつりは言った。

「今日から風車の解体作業を始めるわよ」

「そうか、頑張れよ」

「何他人事みたいにして言ってるんだ。お前がやるんだよ」

手伝うとかじゃなくて、俺に危険な作業をやらせる気らしい。

「なあ、まつり。風車を解体する以外の選択肢は無いのか？」

「まあ、コンピュータ関連……電化製品関連に詳しい人が居れば話は別だけど、そんな人いないから」

「あれ？ まつりのじいちゃんは協力してくれないのか？ 電気屋やってるんだろ」

「そうだなあ。まあ、お客なんて全然来ないし、じいちゃんちよつとボケ気味だから」

「そうなのか」

「日常生活には支障ないんだけど、少しね」

まつりはそう言った後、ハッと何かを思い出したような顔した後、顔の前で手を振りつつ、

「あ、いや、違うわ。それ以前に昨日のうちに避難させちゃったんだ」

もう避難が始まっているらしい。

「親は？」

「両親とも、ずいぶん前に家を出てった。どこに居るんだかも不明」

「そうなのか……」

「おい、暗くなるな」

「そうは言ってもな。つまり、だ。お前一人取り残されたっていうか、捨てられたんだろ？」

「はつきり言いすぎだあー！」
「ばこっ！」

グーで軽く殴られた。

ちなみに、常人なら二メートル吹っ飛んでいくくらいの打撃だが、俺だから椅子に座ったまま受けられるのだ。つくづく異常な女が目の前にいて、つくづく異常な自分の体がある。非現実的すぎて何だか悲しい。

「捨てられたショックで、暴力を振るうようになってしまったわけだな」

「あたしがいつ暴力振るった！」

「ばこっ！」

痛いっ。

「今、今振るった！」

するとまつりは、自分の拳を見つめた後、俺の顔を見て珍しく申し訳無さそうな顔をした。

「まあ、今のは暴力って程でもなかったがな」

「フォローしてみた。」

「……で、達矢。何の話だったっけ？」

殴られるとすぐに会話が途切れるのが彼女と一緒に居る時の面倒なポイントだぜ。直前まで話していた内容すら忘れてしまうことがある。会話より、殴るのメインなんじゃないかと思うこともあるほどだ。

「風車を解体せずに止める方法」

俺は言った。

「ああ、そうか。えーとね……風車によって発電された電気は、地下のケーブルを通して街の隅々にまで送られるの」

「ほうほう」

「実は電力会社に電気を送電したりしてるから、風車を止めると国に大打撃だったりするんだけど、避難勧告とか、なんか腹立つから電気止めてやろうと思って」

それが、おやすみなさい計画の裏の目的なのだろうか。

「一種のテロみたいなもんじゃないか」

「……確かに」

「だが、それはさすがにヤバイと思うぜ。何より、この町の外の民衆にも迷惑が掛かるってことだろう」

「……あ、ホントだ」

「いや、もしかして、気付いてなかった？」

「ちよつと、周りが見えなくなってたかも」

「お前、周り見えてたことあんの？」

「ないけど」

「だよな」

そして興奮気味に、まつりは言った。

「でも、じゃあ、おやすみなさい計画はどうなるの！」

ごはんつぶ、飛び散る。

「待て待て、落ち着け。ごはんつぶ飛ばすな」

「だって！」

「要するに、電力会社に電気を供給しながら、街を真っ暗にすれば良いということだな」

「そうね……風車を止めちゃダメだから、風車さん達を休ませてあげることはいけないけど、仕方ないか……」

風車さん……だと。何か可愛いんだが……。

そこで、俺の可愛い子センサーが反応した！

「お前さ、もしかして、この街にある風車一つ一つに名前つけてたりしない？」

すると上井草まつりは沈黙した。やはり、名付けているらしい。

「教室から見える一番でかい風車は何て名前なの？」

「……のむら」

「シブイ名前っすね」

俺は毎日のように、のむらの回転を眺めていたわけか。

「そんなことよりっ！ どうすればいいのよ！」

まあ、そうだな……。

「コンピュータの設定を変えて、街に電力を送らないようにすれば

良いんじゃないか？」

普通に考えればそうなるだろう。

「でも、達矢さ。コンピュータ詳しいの？」

「まず間違いなく、まつりの方が詳しいだろうな」

「あたしだって、全然だよ」

「だが、コンピュータに詳しい人間に心当たりが無いことも無い」

「ほう、要するにあるんだな達矢。どうすればいいんだ？」

急にウキウキし始めた。

「これ食ったら、その人に会いに行こうか」

「じゃあ早く食えっ！」

「ちなみに学校はサボるぞ」

「ん？ ああ平気平気。志夏に言ってるし、それに今日の午前から避難開始だから授業もう無いよ」

「……初耳だぞ」

「どの道、お前はあたしの手伝いじゃん？ だから別に言う必要ないと思っ」

「そうですか……」

何でも、勝手に決めるんだな。

で、朝食後。

俺たちは湖に来ていた。

「あの人がそうなの？」

と、まつりが訊いた。

「ああ」

「ふーん」

思った通り、そこには釣りをしている男がいて俺たち二人の接近に気付いて、振り返ると、釣り道具を置いて立ち上がった。

「若山さん」

俺は右手を振りながら近付く。

「おう、アブラハムじゃないか」

「それ、やめたんじゃないかったですか？」

「いや、すまん。ついクセでな」

「どんなクセですか」

「はっはは。それで、何か用か、こんな所で」

そして、俺は言う。

「実は……若山さんに手伝って欲しいことがあって」

「そうか。それは、後ろのお嬢ちゃんと関係することなのかな。仲間とか」

「なっ、何言ってるんですかつ」

「顔赤いぞ。達矢はいちいち冗談を真に受ける奴だな」

からかわれたらしい。

「そうですよ。冗談きついです」

と、その時、俺の肩に後ろから手が置かれた。思わず青ざめる俺。

「どういう、意味？」

まつりのおそろしい声が、耳元で。

「あ、えっと、いやぁ……」

「結婚するって言ったくせにいい！」

どごーん！

「言ったのお前だけー」

ばしゃーん！

俺は宙を舞い、湖に落ちた。しかしすぐに陸に戻る。

「まつり」

「何よ」

「痛い」

「知ってんだよ！ そんなこと！」

そんないつもとさして変わらないやりとりを見た若山が苦笑いを浮かべつつ言う。

「……あー、その、お前らが異常な関係なのはよくわかったが、何の用だ」

「ほら、まつり、説明してやれ」

「何だい偉そうにいいい！」

どごーん！

サッカーボールのごとく蹴られた。俺は空を飛び、湖の丸い方の小島にドサツと落ちた。痛い。

「それですね……えっと、若山さん、でしたっけ？」

「ああ。若山だ。お嬢ちゃん」

何事も無かったかのように会話してるし。何なの、あの暴力娘。

「実は、この町への電力の供給をストップしたいんです」

「そりやまたどうして」

「おやすみなさい計画です」

それで伝わるものか。

「なるほど……風車を止めずに国へ電力を供給しつつ町への電気をカット。町全体を眠らせるために、おれの力が必要なわけだな」

何故か通じた！

さすがエリート！ 若山さんエリート！

「それで、コンピュータを扱える頭の良い人を探しているのです」

「頭の良い人だと？」

気になる単語らしい。

そういや、若山さんと出会った時、自分が能力の高い人間であることを力説してたしな。

「というわけで協力してください。しないとは言わせません」

「お安い御用だ」

「本当に？　じゃあ付いて来てよ。時間が無いから！」

交渉成立らしい。平和的に済んでよかった。

「達矢もさつさと来なさい！　何でそんな所にいんの？　バカじゃないの？」

お前が蹴り飛ばしたんだろうがっ。

「へいへい」

俺は言いながら、湖を泳いで陸に戻った。

「遅いつ」

「尻に敷かれてんだな、達矢」

若山さんは言って、笑っていた。

商店街を抜けて、風車並木の急な上り坂を歩く。

「はぁ、はぁ。お嬢ちゃん、どこに行くんだい？」

苦しそうな若山の声。

「お嬢ちゃんって、やめてください。上井草まつりです」

「上井草さんか。どこかで聞いたことある名前だな」

「そりゃ、有名人だもんな」

俺が言ったところ、

「どつという意味だぁー！」

どかーん！

「特に意味は込めてないのにー！」

ドサツ。すぐに立ち上がる。

「痛いぜ」

若山さんは、若干ひいていた。

「ぜえ、ぜえ……」

そして疲れていた。

「で、どこに向かっているって？ おれもトシだからな、そろそろ疲

れちまったぞ、この登山」

「学校に行くんです」と、まつり。

「学校……？ 何で」と俺。

「学校の地下に、発電施設があるからでしょうが」

その言葉に対して、若山が興味深そうに、

「ほう……そんな所に……」

「そうなのか」

「全員避難の期限は三日。その間に何とかして欲しいの」

「まぁ、おれはエリートだからな。一日あれば十分だろ」

自信があるようだった。

で、学校。

花壇のような所に、地下へと続く円いマンホールっぽい扉があった。

その先にはコンクリート製の急な階段があつて、闇が広がっている。

「こんな所に、地下への入口が隠されていたとはっ」

「別に隠されてないでしょ。花壇のところに思いつきし『立入禁止イ!』って書いてあつたじゃないの」

俺はその光景を思い出して少し笑いを交えながら、

「へたくそな字だな。誰の字だ？」

「あたし」

「ダイナミックな字だな。躍動感がある。誰の字だ？」

「今さら褒めても遅いっつの」
「ばこつ。」

「痛いっ」

「ふははっ」

若山は殴られる俺を見て笑っていた。

そして三人、地下に入る。

「暗いな。電気は？」

「今、点けるわ」

そしてパチツと音がして、バチバチつと音がして、蛍光灯が点いた。

「こいつぁ……すごいじゃねえか」

視界には、大型の機械があつて、横に並んだ三つのディスプレイとその前に固定して取り付けられたキーボード。立派なコンソール。全体的に少し古くて、大量の埃をかぶっていた。

「あたしのじいちゃんが風力発電システムの責任者だったらいいんだけどね。昨日のうちに避難させちゃったから、頼れるのは若山さんしかないの」

「おいおいまつり。俺がいるじゃないか」
「はいはい」

溜息混じりに受け流されたぞ。

「それで若山さん。何か必要なものある？ あれば取ってくるけど」
「ちよつと待ってくれ……」

言いながら、若山はコンソールの前に立ち、キーボードをチャカチャカと操作した。

するとディスプレイに文字列が表示される。

「何とかなりそうだ」

「そう。よかった」

「ほう、知らないOSだな」

「OSって、何すか」
と俺。

「オペレーティングシステム」
とまつり。

「だから、それが何かと訊いているんだが……」

「綱引きの時の掛け声だ」と若山。

「それはギャグっすよね」

「達矢うるさい。出てけ」

「ひどいっ」

「だいたい、OSの意味くらい自分で調べろ！」
なんか、おこられた。と、その時だった。

「——むむっ！」

若山が声を出した。

「どうしました？」

「パスワードの入力を求められた」

「一つ目は、558837564」

「オーケー」

若山は言って、チャカチャカとキーボードを打つ。

「ゴーゴーフアイヤーミナゴロシって憶える」

「殺伐としたパスワードだな」

「達矢。うるさいって言うてるでしょ、さつきから。若山さんの邪魔だよ」

「じゃあ、何か手伝うことはないか？ 手伝いたいんだ」

「お前は戦力外だから、もう帰って良いよ」

「そりゃない！ さつきから冷たい！ あと、何で若山さんと仲良さそうにしてるんだよう！」

「何？ 妬いてんの？」

「やいて——えっと、やいてないですよ……」

超妬いてた。

とその時。

「むむっ！」

と若山。

「二つ目のパスワード？」

「そのようだ」

「それは確か……」

で、まつりは再び数字列を口にした。

「オーケー」

そしてキーボードを打つ。

「ヤキウチ、ヤキウチ、ウチコワシって憶える」

「ひでえ憶え方だな、オイ……」

「達矢……」

「わ、わかったよ。黙ればいいんだろ」

「いや、なんかもう、存在が邪魔」

「出て行けと？」

「そう」

「いや、だが、まつりを男と二人きりにするわけには……」

「妬くなつての」

と、その時、キーボードの音が止まり、若山さんが声を出した。
「あー、アブラハム」

「達矢です！」

「おっと、そうだった。達矢」

「何ですか！」

「おれは、女性を襲ったりするような男ではないぞ。エリートだからな」

エリートだから女性を襲わないという理屈は通らないんじゃないか。男はだいたい女の子好きだろう。それに、むしろエリートの方が性犯罪に走るイメージがある。偏見だけど。

「それに、おれが襲っても間違いなく返り討ちで病院送りだと思うが？」

「確かに……」

まつりに殴られて平気なのは俺くらいのものだ。

「ほら、わかつたろ？ たまに様子見に来てくれるだけで良いからさ、出てってくれ。気が散るだろ」

「……わかつたよ」

そして俺は、渋谷地下の風車制御室を後にした。

で、日々の習慣なのか、制御室を追い出された俺の足は自然と教室に向いた。引き戸を開けて閉め、窓際の自分の席に座る。

「……………」

しかし、教室に来たは良いが、何もやることがないな。

「いや待てよ。そーいや、昨日寝てないんだった」

俺は机に伏して、寝ることにして、目を閉じた。

起きた。まだ昼間だった。

窓の外を見る。回転を続ける大きな風車が見えた。三枚の大きな羽根がぐるぐる。

まつりが付けた名は「のむら」らしい。ぐるぐる。

風車は、それが当り前であるかのように回転していた。

俺はガラッと窓を開ける。すると、強い風が入ってきて、カーテンを激しく揺らした。

少々の喉の渴きを感じつつも、俺は風車に向かって話しかけた。ちよいとかすれ気味の声で、

「のむらー、元気かー」

風車のむらは、キィキィと音を立てた。

おそらく「元気ですぜ」ということだろうと判断して、俺は二度ほど頷いて見せる。

「何バカなことやってんだ、俺は……」

なんだか、まつりの拳が恋しい。ぶっ飛ばされたい。そんな風に思った後に、大きく首を振った。

「何考えてんだ、俺！ 大丈夫か！」

ドMな思考を嘆きたい。

「はあ……」

溜息。

まつりは大丈夫だろうか。俺がいなくて寂しくないかな。まつり。一人でいると、どうしてもまつりのことばかり考えてしまう。

顔が浮かんでは消えたりして、これは恋。そう、恋。恋以外の何者でもないね。だけど、

「結婚かぁ、本当に結婚することになんのかなぁ……」
何だかモヤモヤしたものも、胸の中にある。

「はあ……」

二度目の溜息を吐いた時、

「マリツジブルー？」

背後から声がした。振り返ると、伊勢崎志夏の姿があった。

「よう、志夏。どうした？」

「誰か居るかなって思って」

「そうか」

「こんな所でサボってて平気？ 上井草さんに怒られない？」

「いや、むしろ邪魔者扱いされて追い出された」

「え？ 風車を解体するんじゃないの？」

「いや、それは国民の皆様に迷惑がかかるからな。やめさせた」

「そう」

「で、代わりに、この街への電力の供給だけをストップするって話だ」

「なるほどね。それで風車の制御室に行ったってことか」

「まあ、そういうことだな」

「それで、どう？ はかどってる？」

「よくわからんけど、たぶんな。行って見てくればわかる。俺はあの空間では確かに役に立てない」と

「そうなんだ。でも見に行くのは遠慮しておくわ。地下は苦手なだよ」

「そうか」

「そうなの」

「ところで。志夏の方こそ、忙しいんじゃないのか？」

と、その時だった。ぐるぐるーっと志夏のお腹が鳴いた。そして、志夏は自分のお腹を指差して、「ね？」とか言って笑った。ゴハン休憩といったところだろう。

「そういや俺も、腹減ったし喉も渴いた」

「お昼の時間だからね。一緒に食べない？」

「でも、一人分を二人で分けるとなると――」

「大丈夫。二人分持って来たから」

「そ、そうか。じゃあ頂こうかな」

「ええ。遠慮したら殺すぞ」

え、殺す……だと？

「えっと、志夏さん？ 今何て……？」

「上井草さんの真似。似てた？」

ああ、なんだ。モノマネか。

「いや、あいつはもっとこわいからな。志夏には全く殺気が足りないぜ」

「そうね。で、ハイ、これ」

志夏は言って、弁当箱を差し出して来た。

「お、おう」

受け取る。

「志夏が作ったのか？」

「いや、笠原さん」

俺はその名を聞いて、「ほう、そうか」とか言いながら頷いた。

笠原みどりの弁当なら、美味しい気がするな。イメージ的に。

弁当箱を開けてみた。

彩り豊かなステキ弁当。

これは、さすが。みどりらしいな。

「今頃、上井草さんにもお弁当を届けに行ってるはずよ」

「そうか、大変そうだな」

「そうね…… 大変だろうね」

「じゃ、いただきます」

俺は言って箸を取り、まずは玉子焼きに箸をつけた。

「……………」

無言でじっと見つめる志夏。

もぐもぐ……。

これは……。

もぐもぐ……。

予想外に……。

そして何とか飲み込む。

「どう？ 味は」

「志夏、聞き忘れたんだけどさ、みどりって、料理上手なの？」

「要するに、そういう味なのね」

「いやあ、見かけによらずひどい味だった。」

「これを美味しいなどと言ったら、弁当料理という文化に対する冒瀆になるぞ」

「ね。気持ちはうれしいんだけど、ね。ちょっとね。見た目は綺麗なのにね」

「拷問道具に使えるぞ、これ」

「あ、笠原さんが聞いたら泣いちゃうわよ？」

「いやいや、こんなもん食わされた俺が泣きそうだよ」

俺は箸を置いた。

「笠原さん、短気な上井草さんに悪戯されていないといいけど……」

弁当が不味すぎてか。あり得る話だ。だが、

「それは、大丈夫だろ。まつりが『もうモイストしない』って言うてたからな」

「へえ、信じてるんだ」

「ああ。好きだからな」

本当に。本当に。いつの間にか、こんなにも好きになってた。

「ところで……」

と志夏は言つて、スカートのポケットをゴソゴソとまさぐり、何かを取り出した。

「な、なにに！ それは……」

憎きペン型のボイスレコーダー！

『これを美味しいなどと言ったら、弁当料理という文化に対する冒瀆になるぞ』俺の声！

『拷問道具に使えるぞ、これ』俺。

『あ、笠原さんが聞いたら泣いちゃうわよ？』志夏。

『いやいや、こんなもん食わされた俺が泣きそつだよ』俺。
ばつちり録音されていた。

「どう？」

「どうもこうも、何で録音してるんすか」

やめてくれ、頼むから。

「いや、笠原さんがね、お弁当の感想が欲しいって言ってたから、
そこで私が録音しとくわって言ってあげたのよ」

「過ぎるくらいなお節介っすね」

「結果的に余計になっちゃったわね。これじゃあ、ちょっと可哀想」

「よし、わかった志夏。そういうことなら、俺がみどり用に素敵ヴ
オイスを録音してやろうではないか！」

そうすれば、みどりが悲しまないで済む。善行だぜ。

「達矢くん。要するに、嘘を吐くってことね！」

「まあ、そうだが、それが優しさというものだ」

「そうかしら。本当のことを教えてあげた方が良いこともあるんじゃない？」

「いいか、志夏。俺はな……女の子を悲しませたくないんだよ」

「つまり、笠原さんのためってこと？」

「まあな」

「はいはい。じゃあ録音してあげるから、はい、どうぞ」

志夏は言って、ペン型のソレを俺に向けた。

俺はゲフンと咳払いをした後、

「美味しかったぞ、みどり」

「……それだけ？」

「ああ。『美味しい』という一言が、どれだけ作った人を安心させるか。それはとてもとても重要で美しい言葉なのだよ」

「ふーん。でも、嘘じゃん」

「まあな」

俺は苦笑しながら言った。だが、その時！

カツーン、と何かが落ちる音がした。まるでプラスチックの塊が、

床や廊下に落ちたような。

「……………」

音に反応して振り返ると、床に落ちた弁当箱が見えた。目を床から少し上げてみると、細い足、長めのスカート、長袖グリーン系のカーデイガンに、肩ほどまでのそこそこ長い髪。笠原みどりの姿がそこにあつた。

「あ……………」

俺は声を漏らすしかない。

「戸部くん、今の話……………」

「み、みどり。どこから聞いていた？」

「さっき級長がマイクを向けた時」

「じゃ、じゃあ……………」

美味しいという嘘を吐いている一部始終を見られているじゃねえか！

「うつ、うつ……………ひどいよ、戸部くん……………」

泣いてる。

そして志夏が、

「達矢くん最低っ！」

「おい、お前ええ！」

最近の志夏さん極悪なんだけど！

「美味しくないなら、美味しくないって、はつきり言ってよう……………」

俺は最大級に慌てふためき、

「あ、その、あの……………」

とかつて何とか弁解しようとするが言葉が上手く出て来ない。そんな頭悪い自分が嫌い。

「わかってるもん。自分の料理が美味しいなんて思っていないもん！でも、笑いながら、カゲであたしのお弁当の不味さを雄弁に語らなくても良いじゃん。うつ……………」

手の平で、涙を拭い、ずずつと鼻をすすった。

そこへ、更に、追い討ちをかける女が一人。

『これを美味しいなどと言ったら、弁当料理という文化に対する冒瀆になるぞ』俺の声。

『拷問道具に使えるぞ、これ』俺。

『あ、笠原さんが聞いたら泣いちゃうわよ?』志夏の声。

『いやいや、こんなもん食わされた俺が泣きそうだよ』俺の声。

ボイスレコーダーから発せられる無慈悲な声。

それ、ほぼ、俺の声。

「ひ、ひどい。こんな……こんなの……」

志夏は深刻そうに溜息を吐いた後、

「最低の男ね……」

「いや待て。誤解だ。誤解じゃないけど誤解なんだ! ああ、どうすれば、どうすればわかってもらえる?」

と、まさにその時だった。

「みどり、何で泣いてるの?」

愛しのまつりさんの声がした!

そして視界に姿を現した!

俺ピンチ!

何故だかわからないけどそんな気がする!

ピンチ! 俺ピンチ! 大ピンチ!

「うあああん、まつりちゃん」

泣きながらまつりにしがみつく笠原みどりと、キッと俺をにらみつける上井草まつり。

——死ぬ。

そう思った。

「ヤケ食いしてやるうううう!」

みどりはまつりの平たい胸に顔をうずめた後、すぐに離れ、泣きながら廊下を走り去って行った。

俺、まつり、志夏。

残された三人の間に、静寂が流れる。

「……………」

そして、その静寂を破ったのは、あの憎きペン型ボイスレコーダーだった。俺とまつりは、その機械から発せられる声に耳を傾ける。

『マリツジブルー？』志夏の声。

『まあな』俺の声。

『上井草さんに怒られない？』志夏。

『ところで、上井草さんと達矢くんは、本当に結婚するの？』志夏。
『今のところ、俺にその気がないです』俺。

『やはりみどりをパートナーにしたいっ！』俺。

『上井草さんに怒られない？』志夏。

『いいか、志夏。俺はな……女の子を悲しませたくないんだよ』俺。

『達矢くん。要するに、嘘を吐くってことね！』志夏。

『まあ、そうだが、それが優しさというものだ』俺。

『つまり、笠原さんのためってこと？』志夏。

『ああ。好きだからな』俺。

以前録音されたものも混ぜてきた。

よくも短時間でここまで作り込めたものだ。まるで以前から周到に準備をしていたかのようだぜ。

『じゃ、いただきます』俺の声。

『うつ、うつ……ひどいよ、戸部くん……』みどりの声。

『美味しかったぞ、みどり』

志夏のボイスレコーダー最低だな。

最低で最悪だ。アホすぎる。何この展開。大して悪いこととしてないのに、冷や汗が止まらないんだが。

ああもう。何この修羅場。俺死ぬんじゃないの？

『達矢』

まつりが口を開く。

『何でしょうか！』

『何か、申し開きの言葉はあるか？』

『全て誤解っす！』

『志夏、どうなの？』

「どうかな。達矢くんの気持ちは、達矢くんしかわからないよ」

この女ア……。

「おい達矢、本当に、みどりのことが好きなの？」

「いや、俺が好きなのは、お前だよ、まつり」

「……………」

無言で不信の目を向けられている。

だが、何でどうしてこうなってしまったのかサッパリだ。俺はずつとまつりのことが好きで、まつりのことばかり考えるくらいに大好きだってのに。

「ちよつと冷たくしたくらいで浮気しやがって」

「待て、違う。違うぞまつり」

「違う？ 何が」

「いいか。事実を説明するぞ？ しつかり聞けよ？」

「言ってみろ」

「さっきのボイスレコーダーの会話は、半分以上が捏造されたものだ。うまいこと切り貼りしてそれっぽく聞こえる様に作り込まれたフィクションなんだよ」

「どこが？ どういう風に？」

「俺は、みどりと結婚したいわけではないし、みどりと、その、関係を持ったわけでもない。嘘は無い。本当だ」

「さっき『女の子を悲しませたくない』って言ってたよな、達矢。今の言葉も嘘なんじゃないのか？ あたしを悲しませないための……」

……

「お前は女の子ではない」

「ああ？」

「いや待て違う、女の子らしくないとかそういう意味じゃないぞ。誤解するなよ？ 俺にとって、上井草まつりは女の子という枠を超越した存在で、かけがえの無い存在なんだ。何ていうか、失うことなんて考えられないくらいの人で、大好きなんだ。誰よりも」

すると、まつりは言った。

「じゃあ、結婚すると言え」
そうきたか。

はつきり言つて、結婚なんてかなり気が早いとは思つ。まだ互いのことの多くを知らないのに、いきなり結婚なんて。いや、しかしこのままでは、まつりが離れて行ってしまうんじゃないか。そういう雰囲気もある。

結婚しないと答えたら、バイバイと言つて二度と会えなくなるかもしれない。そんなの嫌だ。絶対に。

この場を切り抜けるためには、言つしかない。言つしかないか。
「そうだな。結婚しよう」

俺は言つた。

「ん？ もう一回言つて」

「まつりさん。結婚してください」

再び口にした。結婚してくれという、言葉を。

「……………」

ものすごい長く感じられるような、冷たい沈黙の後、まつりは言つた。

割と信じられない言葉だつた。

「録音した？ 志夏」

「バツチリ」

生徒会長は親指をグツと立てていた。

「え？ え？」

戸惑う俺。

「約束だからな！」

「えっ？」

「お前から言い出したんだからな。結婚して欲しいって。全く仕方の無い奴だな、達矢は。あ、約束破ったら、風車のブレードで切断してやるからな！」

なんかよくわからないが、許してもらえたらしい。ニコニコ笑っている。よかった。

「なるほど、達矢ストライクというわけだな。バードストライクじゃないくて」

俺は頷きながら言った。

そして、まつりは腕組をして、ほの寂しい胸を張りながらも申し訳なさそうに目を逸らして、

「まあ……えっと、信じて良いんだよね」
とか呟くように言った。

「何をだ」

「あたしのこと、好きだったこと……」

不安そうにしている。何とも可愛いじゃないか。そんなまつりに、俺は、真っ直ぐまつりの目を見て言ってるのだ。

「何を今さら。当り前だろう」

するとまつりは、恥ずかしかったのだろうか、早口で、「じゃ、じゃ、じゃああたしは、地下の風車制御施設に戻るからっ！」と言った後、俺の胸の辺りを指差して、「あと、みどりにはちゃんと謝っておきなさいよ。お店にいると思うからっ」

そして、風を起すくらいに勢いよく振り返り、俺に背を向けると、教室を出て、廊下を颯爽と駆けて行った。

まつりの背中を見送った後、俺は呟く。

「奇跡だな」

「何が？」

「殴られなかったし、暴言もほとんど無かった」

「……………それが奇跡って……異常過ぎるでしょう……………」
「そうだな」

俺は志夏の顔を眺めつつ、格好つけてフツと笑った。

さて、みどりに謝るために、笠原商店に来た。

「誠意を見せねばな。うむ」

一人会話をした後、引き戸をガラツと開けた。

「……………」

みどりの姿があつた。店のカウンターに座りながらスナック菓子をボリボリとヤケ食いしていた。

「みどり……………」

「どうせあたしは、料理センス無いですよ」

まだ泣いてた。

「ごめん、みどり。はつきり言う。お前の作った弁当は不味かつた」
「ひどいっ！ 何でそういうこと言うのよ！」

パンツ、とカウンターを叩きながら立ち上がって言った。スナック菓子が跳ねた。

どうしろって言うんだろうか。

「でも、さっき言ってたが、美味かつたって嘘を吐いてもダメなん
だろ？」

「だから嘘を吐くなら吐き通してくれればよかったのに！ あたし
にバレないように！」

「つまり、何も言わずに食べていれば良かったと？」

「美味しいって言ってもらいたいに決まってるでしょ！」

やべえ、メチャクチャだぜ。

「ごめん」

とりあえず謝った。

「あたしこそごめんね！ 料理に対する冒瀆しちゃってごめんね！
拷問道具で、ごめんね！ 下手の横好きでごめんね！」

「いや、ほら、みどりは、料理なんてできなくてもツツコミができる
じゃないか！」

「そんなスキルいらないっ！」

否めない。料理の方が重要スキルだと俺も思う。

「許してくれ、みどり。お前に許してもらえないと、たぶんまつりが怒るから」

するとみどりは、「……………はあ」と大きなためいきを一つ吐いた。そして手に持っていたスナック菓子の袋をガサガサと音を立てて丸めてゴミ箱に投げ入れた。

「まつりちゃんの名前出されたら……………どうしようもないよ」

「許してくれるか」

「いいよっ、もう。どっか行ってよっ。まつりちゃんのところにも行きなよ。許すよっ」

「ああ、そうするよ。ごめんな」

俺は言い残し、笠原商店を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6926w/>

風車は力強く回転を繰り返し規格外の強風は坂を駆け抜けてゆく

2011年11月26日18時49分発行